

鉄血もグリフィンも争
われない平和な世界を死
に損ないが満喫するだ
け

葉桜さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて鉄血工造に所属していたグリフィンのとある人物。

偶然の連続と悲惨な運命の魔の手により、かつての友人の手によって戦死する。

彼の最後に願ったことは、「お互いが争わなかった未来を見ること」。そんな見れるはずも無い幻想を抱いて死んだ筈だった。

目を覚ませば、そこは見覚えのある場所。

見覚えのある人物。

伝えられた真実は「両者の平和」。

これは死に損なつたとある人物や人形たちが、グリフィンと鉄血が争わない平和な世

界を平和に満喫するだけの物語。

ほのぼののして、おかしくて笑いあつて、それでもシリアスで。そんなグリフィンと鉄血が織り成すお話。

この小説はグリフィンと鉄血が平和な小説が増えないかなと思つたり、このこ可愛いから書きたいと思つたというような邪な感情で書かれているほのぼのギャグ系小説です。

オリジナル要素、オリジナル展開をてんこ盛りに含んだ上、平行世界転移、他作品ネタを入れるなどといった要素をトッピングしています。また、平和な世界線等、何番煎じだと思われるネタも多くあります。そのことに留意した上で、この小説を読んでくださると作者はものすごく喜びます。もしも誤字などありましたらご報告お願いします。文章力皆無、キャラの把握ミス、キャラ崩壊等も含む可能性があります。用法用量を守つてお読みください。

最後に、更新不定期です。

更新速度はモチベーションとネタと体の調子次第です。

申し訳ありません。

感想、評価等貰えたらモチベが急上昇します。

よければあげてやってください。

7 / 8 追記

ここに出てくるオリジナル主人公やオリジナル指揮官、この次元の人形たちはフリー素材として使っていただけでも構いません。事後報告とかでもいいので使用しましたと報告いただければ作者は狂喜乱舞して感謝します。

目次

Extra file

資料閲覧：キャラクター紹介 | 1

Prologue

R・I・P. | 8

意識復帰 | 20

消失記録 | 36

再会対面 | 51

理論展開 | 64

雇用契約 | 78

本編

温和日常Ⅰ：AR小隊とハイエンドた

ちが遊ぶだけ | 92

温和日常Ⅱ：404小隊とはぐれダ

イナゲート | 104

温和日常ⅢⅠⅠⅠ：錬金術師さんの

ちよつとした悩み | 119

温和日常Ⅳ：情報屋侵入者 | 136

温和日常Ⅴ：夜空の下の記憶語り

157

温和日常Ⅵ：ウオッカもジャックダ

ニエルも同じようなもの | 173

温和日常ⅦⅠⅠⅠ：末妹たちの家族談義

| 194

温和日常ⅦⅡⅡⅡ：天災技術屋人形

209

- 温和日常IX：病弱な少女の聖者 227
- 温和日常X：兵器であること、人間であること 248
- 救命行動I：作戦概要 — Missi
on Briefing — 269
- 救命行動II：開けられた風穴 — P
ierce Bullet — 281
- 救命行動III：救命作戦 — Ope
ration Life Save — 299
- 救命行動IV：救命者 — The L
ifesaver — 323
- 救命行動V：救う事、殺す事 — Sav
e and Kill — 347
- 救命行動VI：大切な友人 — Tru
e Friend — 381
- 温和日常XI：夢想家と案山子 402
- 温和日常XII：自分達だけの“秘密” 423
- 温和日常XIII：代理人の双子 440
- 温和日常XIV：苦労人の後輩たち 469
- 温和日常XV：プライド高い系女子 〓

状況訓練 I V : 混迷の雑音	637	n d a t a	780
608 状況訓練 I I I : 三つ巴相打つ		心傷潜航 E X : 夢想	unknow
586 状況訓練 I I : 精鋭達の仮想戦場		心傷潜航 I V : 悲嘆	grief
状況訓練 I : 訓練準備	568	message	732
くなりたい!	552	心傷潜行 I I I : 遺言	Dying
温和日常 X V I I I : 量産型だつて強		心傷潜航 I I : 始まり	begin
525 温和日常 X V I I : 情報屋誘拐事件		心傷潜航 I : 投影	project
	505	re	673
温和日常 X V I : 腐れ縁はどこまでも		心傷潜航 O : 悪夢	nightmare
ポンコツ	487	状況訓練 V : 異常	

心傷潛航V：奇跡 | memory

r
e
c
o
v
e
r
y |

803

Extra file

資料閲覧：キャラクター紹介

ここではオリジナルキャラクターたちの詳細を紹介します。フリー素材として彼らを出したい時の参考にしてください。

本編の更新状況に合わせてプロフィールは更新されていきます。

名前：リオン・アツシユフィールド

年齢：20代前半

性別：男

所属：グリフィン& amp ;クルーガー社（元・鉄血工造）

概要：

【第1資料】

この作品での主人公となる青年。

元・鉄血工造所属の修理やメンテナンス専門技術者。

現在はグリフィン・鉄血共通の技術屋となっている。

通称、整備士・整備者。

若くして人形の整備技術を磨き専門に扱える程にまでなった。

見た目は鉄血ハイエンドたちと似たような特徴で、基本的に白黒。肌はすごく白い。目は青い。

髪は白に近い銀で中途半端に長くてちよつと質が悪そう。顔は意外と整っている。

人形のことを第一に考える人物で、自分の事は後回しにするタイプ。大好物は誰かの笑顔と自称している。

口調は結構荒い。年相応の口調。

でも普通に良い奴。

腕の良い技術屋だけに色々な人形と交友があり、何かとつけて自分の部屋を占領される。

本来目指す自分の姿はクールな仕事人……

だったはずなのだが、今ではただの穏やかな気のいい人になってしまっている現状を嘆いている。

本来はドールズフロントライン本編の歴史を辿る世界線に居たが、死亡がトリガーとなりパラレルワールドに転移してしまった。

【第2資料】

この世界に転移する前では元鉄血なのにも関わらず、グリフィンと共に鉄血と完全敵対していた。

家族同然だった鉄血の人形達や、仲間となったグリフィンの人形達の殺し合いによる死を多数目撃するようになってから、何処か擦れた発言などをするようになったと同時に、悪夢を見るようになったらしい。

人形至上主義者であり、人間と言う種に対して何処か呆れというような、嫌悪を感じさせる旨の発言をしばしばこぼすことがある。個人を嫌うことは無いが、人間というものへの全体を嫌っている節があり、その真意は本人でさえ不明。

【第3資料】

救命作戦では自分の身を鑑みずに人形達の救出を最優先にした行動をとることが多い。彼にとつて、人形の命を繋ぐ事とはは自分の存在価値である為にそういった性質が現れているのかもしれない。スケアクロウ曰く、“自分の死の恐怖が霞むほど他人の死を目の当たりにしてしまったから”と考えられている様だ。

【第4資料】

過去に対して身体に影響するほどまでの精神的な傷を負っているらしき報告が上

がっている。

状況訓練終盤時の襲撃にて、完全に錯乱。現在は療養中だが、悪夢を見る頻度が上がったらしい。

UMP40とUMP45が関係しているらしいが……

当時の見た目はヘアバンドをつけていたらしく、また見た目も少し今よりもやんちゃに見えたらしい。

当時は口調も今以上に荒く、まだ少年らしいところが度々見られる様子。しかし、今と比べたらかなり違うが……

その原因は、彼が元々居た世界で起きた『蝶事件』において、UMP45によるUMP40の破壊を防げなかったことに起因する。

事件前に特別交流を持っていた友人が裏切り者であると同時に、妹のために破壊される事をずっと前から決めていた彼女の思いを汲んでやれなかった事を酷く後悔していた。

今までは奇跡的に彼の緊急修理を受けた者は皆完全な破壊を免れていたが、40だけは救えなかった。

その事について45を責めない辺り、完全な自責の念が支配している事により余計に悪化している。

その為、その事件のフラッシュバックを起こし錯乱したものと見られる。
(心傷潜航終了時点)

名前：クラウス・ヒルシュフェルト

年齢：20代前半

性別：男

所属：グリフィン& amp ;クルーガー社

概要：

【第1資料】

本来のストーリーの主人公。

ドールズフロントライン本編での指揮官にあたる。

元々の世界ではリオンと知り合いであり、友人だった。

副官はWA2000がほとんどだが、たまに変わる。

非常にゆるいノリの指揮官で、指揮官としての自覚がないとクルーガーに言われたり
ヘリアンに叱られたりしやすい。

あまりにガチゆるすぎて他の人形が充てられることも時々。指揮官としての余裕か、
それとも本当に抜けているだけかは定かではない

超がつくほどおおらか。

ほとんどの状況において怒ったり怒鳴ったりすることがない。たとえそれが自分の危機（色々な意味）であつたとしても。

時折何も考えていないように見せかけておきながら、意外な戦略や意外な閃きをすることもあつた。アホのように見せかけた意外な頭脳派。戦闘能力もあるらしいが……

髪色は黒に近い青色。目は普通にブラウン。

余裕のイケメン。色々な人形から好かれている。

【第2資料】

指揮官としての職務は全うしており、群を見て必要とあらば個を切り捨てるような冷徹な指示を出すことも出来る……らしいが、本人の性質上、上からの監視がない場合は基本的に人命最優先で動くなど、人の良さが伺える。

しかし、仲間間に手を出した者に対して殲滅させることを宣言するなど、過剰な程の行動もちらほら見えるが……？

有事となれば仲間に対しても強硬手段に出るなど、指揮官としては優秀な類。しかし、それ故に緊急時は反感を買うことも多く本人自身も仕方ないと思つているため、意外と切り捨てるタイプ……かもしれない。

(狀況訓練終了時点)

R. I. P. P r o l o g u e

とある戦場の一角。

ボロボロになった男が荒れた都市跡に一人。

大小幾つものコンクリートの欠片、むき出しになった鉄骨。

かつて栄えていたであろう痕跡の残る場所。

特有の鼻を劈く硝煙の匂い。

幾つも散らばる葉莖。

空は陰り、立てる音さえかき消す激しい雨が一帯を覆って。

たった一人の人間は走り、走り、走り。

時に止まってどこかに背を預けて休憩しては、また走り。

ただただどこへ向かうでもなく走り続けた。

見つきりそうになる度に撃って、撃って、撃って。

撃ち壊す度に、潰されそうなほどの苦しみに襲われて。

終わりが見えないままに撃ち続けた。

酷く息が上がっている。

身体も悲鳴を上げているが、それを無理やり自分自身で抑え込む。身体だけでない。彼の精神も悲鳴をあげていた。

破壊の音が、自信が引き金を引く感覚が、上がっていく煙が。自分が行う全てが、自分を苦しめていく。

彼がポケットから取り出したのは、過去の名残。

自分の顔写真、ID。

そこに書かれている文字は

『鉄血工造』

そのたった4文字が示す意味が、彼を苦しめる原因だ。

それでも、そうするしかなかった。

そうでなければいけないかった。

血が滲みそうな程、唇を噛んだ。

爪が肉を裂きそうな程、拳を握りしめた。

今濡れている顔でさえ、涙か雨粒か分からない。

震える手のまま、握っている物から弾倉を取り出す。

「……えるか！ 応答を……ろと言っ……る！」

ノイズ混じりで聴こえる女性の怒号。

荒れた中、激しい雨で余計に音は聞こえない。

しばし聞こえずにそのまま物陰で座り込んでいたが、怒号が止む気配はない。だんだん特徴も、声の音も大きくなる。

それどころか、他の人物の声さえ聞こえてくる。

丁寧ながらも焦りの籠った声があれば、幼さそうに焦る声もある。最初ほどの威圧感はないが、しっかりとした声色で呼びかけられてもいたようである。

ようやく気づいたのか、それともやっと出る気になったのか。大きくため息をつく。右手に握っていたそれを置いて無線機に手をかけた。

「聞こえ……か、聞こえ……応答をお……します……！」

「……掛けてくるなって……ハア……言っただろうが……ハア……お前らの位置……バ
レちまうぞ」

呆れ気味に男は答えた。

絶え絶えの息のまま、ぶつきらぼうに返答を返して。

その内心は面倒臭いと呆れているのか、それとも、本当に心配しているのか。その真意は彼にしかわからない。

大勢の駆動音が近づいてくる。

まだ息も落ち着いてさえいないが……

「今どーいるの！すぐー出に行くかーえて！」

「やめろ……何のために……黙って来たと……思ってたんだ……」

お前らを巻き込まないためだと続ける。

自分の代わりなどいくらでもいる。

だから、自らわざとこうして動いているのだと。

指揮官など、いくらでも有能な者がいる。

自分は、真実を知らなくてはならないと。

だから……

「指揮官あいつに、悪いなつて言つといてくれ……」

「おい！待て、話は……」

無線機は音を発さなくなる。

ふう……とやつと一息ついて空を仰ぐ。

らしくないことを言つたと少し頬を緩めた。

だが、今そう言っておかなければ、終わった後に地獄を見ることになりそうだったし
なと小さくぼやく。

これから迎えるであろう結末を思い浮かべ、怖くなる。体が震えて、怯えて、動かな
くなりそうになる。

だが、このまま終われるわけがない。

今はこうしなければいけない。

怯えることなど、許されはしないのだと。

男は自分に言い聞かせるように心で唱えた。

未だ落ち着かないまま深呼吸をして、取り出していたそれを投げ捨てる。そのまままた、彼は走り出すのだ。

雨粒が、足音と物音をかき消して。

鉄の雨が降り注ぐ。

今日は雨どころか、銃弾時々爆発という天気と。

ただでさえ荒れ果てた廃墟たちがさらに音を立てて崩れていく。破壊の音は未だに止まず。

それでもしぶとく逃げ回っている。

ネズミと形容するにはすこし大きいだろう。

それでも、大きなネズミは諦めずに走り続けた。

陰った空に、光が指すその時まで……

「……ああ、随分なお出迎えだ」

大きな広場に出た時、その逃避行が終わりを告げた。

辺りには彼の“敵”でもあり、そして“仲間”でもある者たちの大群が、その正面を囲んでいた。

後ろを確認してみても大量の追っ手たち。

つまりをいえば、もはや詰^{チエックメイト}みだつた。

人形たちの大群から、やがて浮遊した一人の人形が現れた。

「生き残っていたのですね……○○○」

目の前にいるのは、彼がよく関わった、1番初めに話した人形。顔の下半分はガスマスクによって隠れてはいるが、その可憐な容姿はよく分かる。

黒い髪をツインテールにした少女のような容貌。

その周りには、浮遊したビットたち。

今や、昔のような雰囲気ではなくなった。

「……ああ。しぶとく、生きながらえさせてもらったよ」

顔は確かに笑っている。

だが彼の目は、光など灯っていなかった。

知っていた。分かっていた。

彼女は、もはや自分のことさえもわからないと。

右手に持っていた銃を構える。

「この状況で銃を向けたところで、君に勝ち目はないです」

「そりゃそうだ。……でも、こうするしかないんだよ」

震える声でそう言う。

構えた時点で殺されてもおかしくないはずなのに。

焦らされている。弄ばれている。

目の前の案山子は、微動だにせずそのまま彼を見つめる。

引き金に手をかけた。

あの時なら、これが適当なエアガンで、彼女は首を傾げて何をしているのか聞いていただろう。彼だって、冗談だよと笑っていただろう。進んだ時は、もう戻らないと知っている。

そのまま、狙いを定めて。

その引き金にかけた指に力を込めた。

銃声。

確かに響いた火薬の音。

しかし、それが彼女に当たることはなかった。

彼は、チャンスをつかみ損ねた。

自分のした事の精算を、し損ねた。

「ああ……なんでこんな時に、締まらねえんだろうなあ……」

「……今更、怖気付きましたか？」

そんな問いに、彼は答えた。

元々怖気付いている、と。

勇気のある人物でもなければ、特筆したスキルを持っていたわけでもなかったと語る。そんな人間が、怖気付かずに向かっていけるわけがなく。

それでも、かつての友人を止めたかったから。

だからここにやってきたと、情けない声で語った。

「……やっぱり、俺には撃てねえよ……」

「撃てなければ、死ぬだけですか？」

その言葉を聞いてさえも、彼に銃を握る力はもうなかった。

静かに涙を流す彼は、かき消されそうな声で話した。

泥にまみれ、雨に打たれ、涙に濡れ。

格好も何もあつたものじゃないけれど。

「……もしも、あの事件」がなければ……俺らは……今まで通りだったのかね……？」

それは私の計算では分かりませんと彼女は答える。

当たり前だ。一番の被害者たちが、分かるわけがない。

彼女は無情に、彼の問いには答えなかつた。

周りを一瞥し、周りの人形たちに合図を出そうとしている。

もう、この結末は変わらない。

そう、変わるはずなどなかつた。

……殺すなら、構わずやってくれ……そう言つて。

「……お望みのままに、楽にしてあげますわ」

彼女の記憶領域にエラーが発生する。

その一言が引き金かどうかは分からない。

しかし、どこか懐かしい気がするその記憶に免じて、その願いを叶えると宣言した。

他の人形達ならもつと苦しめたり、さらに弄んだりするだろう。けれど、今回だけは特別に。その指揮者は、全ての人形に彼を撃つように命令を下した。

「叶うんだったら……みんなが……平和にできた未来が……見たかったもんだ……」

弱々しく笑い、見ることもない幻想を抱いて目を瞑る。

もう目を覚ますことは無いだろう。

やれることはきつとやれた。

それでも届かなかった。

自分の無力さを嘆いた。

自分の愚かさを呪った。

向こうの無線に、無数の銃声と貫く鈍い音が響いた。

その表情は苦しむ暇もなかったのだろう。

目を瞑って、眠るようだった。

意識復帰

安らかに目を瞑る一人の男。

口には乾いた血が着いている。

もう黒く、パリパリになってしまっていることから時間が経っているのだろうと推測できる。

白い布の上に、転がされる形で寝ている。

この部屋は特にこれと言った飾り気がない。あるのはパイプ組みの白いベッドや、人の心拍数を図るような機械、様々なコード。床や壁にデザインが施されているところとは特にはない。さらに言えば、音だつて余り入らない。

今ある音といえば、何人か分の微かな吐息の音と、検査機械が放つ電子音だけ。そんな静かで殺風景な部屋の中に、二人分の影。

「……容態は安定しているようですね。応急処置が遅ければ、今頃は死んでいたかもしれません」

「私たちの管轄地域で早めに見つけられたのが幸いでしたわ」

2人のモノクロの人形が、その男を見て話す。

片や、メイド服のようなものを着た……と言うよりは、メイド服その物を来た給仕人のような人物。鉄血の趣味かどうかは彼も彼女らも分からない。もう片や、顔の下半分をガスマスクで覆っているのが特徴の指揮者のような佇まいをした人物だった。2人は、彼を見ながら続けて話をしている。

「それにしても、なぜグリフィン所属の人物が私達の管轄地域で瀕死になっていたのでしょうか……?」

指揮者の方が先に口を開いた。

どうやら、彼女たちは彼がグリフィン所属の人物であるということ突き止めたらしい。見れば、傍に置まれている装備には『GRIFON & amp; KRUYGER』と書かれているエンブレムがついていた。それを見たら確かにグリフィン所属だということはずぐに分かる。

だが、本来ならばそれでもおかしくないはずなのだ。

鉄血とグリフィン。敵対する2つの勢力。

それなのに、なぜ彼は保護されているのか……

「現場には銃を撃った痕跡は皆無、他の人物が該当する時間に居たかどうかさえ怪しい状況です。整理してみたとしても、摩訶不思議というものですね」

本来ならば、別勢力の管轄内の場所で負傷したとなったら大問題のはずだ。だが今回に関しては問題になるならないの前に、本人の傷跡以外に誰かが彼を撃ったという証拠が何も無いことが問題になっている。

傷を見る限りでは、確かに鉄血の人形たちが装備している武器によって負傷しているはずだが、その場所にいた人形がいはいはおろか、信号が途絶えた人形さえいないらしい。

指揮者と給仕人の2人がうーんと頭を抱えているところに、ようやく本題の人物が。

「……………何で……………俺……………目が覚めて……………」

閉じていた目がゆっくりと開いた。

まだ微睡みの中にいるのか、それともまだ意識が朦朧とするほどの状態で目覚めてしまったのか。

焦点の合わない目のまま、その身体を起こそうとする。

もちろん、上手く動くはずはない。ボロボロになった身体では、自由に動くことすらままならなかった。

「お目覚めになりましたか」

目の前には2人。

先程の給仕人のような格好をした人形が、彼に声をかけた。もう1人。指揮者のような人形はまだ口を出さずにいるつもりだったらしいが……

「……っ!?!」

急に彼は動転し始める。

その挙動と発言から、かなりの敵愾心とまでは行かないが、警戒心があることはすぐ

に見て取れる。

いや、違うだろうか。

警戒しながらも、なんとか自分を落ち着けようとしている様子も少し。彼は、必死に自分の焦りを抑えようとしている。そんな様子の男を給仕人が何とか宥める。

「落ち着いてください。我々は貴方を傷つける意思はありません」

男はキョトンとした表情をして、なんとか落ち着くことに成功した……そう思ったが、今度は泣き始めそうになっている。今度は何かと普通の人なら思うだろうが、給仕人も指揮者も動揺する素振りはなかった。

そんな中男は、震える声で言葉を放った。

「なあ……お前、エージェント 代理人だよな……？」

代理人と呼ばれた人物はその発言にはさすがに動揺した。

なぜ、彼女の名前を知っているのか。

彼女は、彼に“会ったことなどない”筈なのに。

余計に疑念が生まれる代理人。

男は続けてこういう。

「俺だ、覚えていないのか……？ それとも、やっぱりあれで……」

男は覚えていないのかと問うが、覚えてはいるはずがない。会ったこともない人物のことをどう覚えようというのか。

名前が知られている時点で怪しいと言うのに、さらに怪しさが増す。“あれ”に関しても覚えがない。

意味のわからない事の連発で、処理に困っている代理人。

さらに男は、もう片方にも目を向けた。

しかし、その目は先程以上に涙を流しそうで、怯えていながらも、その姿を目に入れずにはいられなかった。

「……スケアクロウ稲草人……？ なあ……お前なんだよな……？」

今にも縋りそうな声。

容貌にすぐわれない、弱々しい声。

自分の意識が途切れた直前と同じような、情けない声。

はい、私がスケアクロウですと丁寧に戻す。

もちろん、彼女も彼を知らない。

そのよそよそしい態度を見て、ようやく彼はどこかに気づいた。

「……やっぱり覚えてない、のか？」

「はい。正確に言えば、会ったこともない。ですが」

その答えに、彼は酷く落胆した。

一筋の希望が見えたかと思った。

しかし、その代償は今までの時間の全てが消されたということだった。自分が、そこにいた時の記憶も、すべて……

虚しかった。

わかってはいたが、その喪失感は重くのしかかった。

あの事件。それできつと彼女らはその記憶を失ったのだろう。そうでしか、有り得な

い。

1度、落ち着く必要がある。

彼は深呼吸を挟んだ。

吸って、吐いて。

傷口が痛み、顔を顰める。

それでも、その痛みがなんとか冷静に引き戻してくれた。

戻った意識で、もう一度0から考え直す。

何かを聞かなくては、今の状況がわからない。

まず、なぜ彼女らに敵意が無いかよりも……

彼はわざわざ危険な橋を渡るようにスケアクロウに問いかけた。

既に起きたはずの事実の確認になってしまいが。

「……お前は、俺を殺した筈じゃなかったのか？」

あの廃墟郡の中で繰り広げた逃亡劇。

彼が必死になって逃げ、それでも執拗に追いかけていたあのワンシーン。その鉄血の人形たちを率いて自分を追いつめ、最期の幕を引いたのは彼女本人の司令によるもの

だったはずだ。

そうしたと言わなければ、色々おかしいが……

そう思つての問いだった。

「……う？なぜですか？貴方はグリフィンの人物、共同で動いている組織に所属している人物に対して攻撃を仕掛ける理由がありませんわ」

……は？

彼は素つ頓狂な声を出した。

耳を疑う単語。

ありえない言葉。

一言も出るとは思つていなかった回答。

一瞬、彼の思考回路はフリーズした。

「……悪い、もう一度」

「ですから、貴方はグリフィンの人物、仲間関係にある人物を攻撃する理由が無いと申し上げたのですけれど……」

おかしい。

明らかに自分の知っている話と違う。

いや、それどころか自分が辿ってきた道とさえ矛盾すると混乱した。彼は、確かに彼女らと殺し合いを続けてきたはずだ。彼だけではなく、スケアクロウと代理人から出てきた『グリフィン』……ここに所属する人形……戦術人形たちだって、彼女らと戦ってきた筈なのに。

頭を抱える男。

一息置いて、彼はもう一度口を開いた。

「……状況がわからない。俺の知っている記憶と違う。ここはどこなんだ？何時なんだ？一体何があつたんだ？」

落ち着いたような素振りだったが、その発言は全くと言って落ち着いていない。完全に混乱している。

頭に整理がついていない。

落ち着いて、と代理人が彼を押しさえるように言った。

……彼は、時間を置いてやっと冷静になった。

悪い、と短く謝罪の意を述べて上半身だけ起こした状態で話を聞く体制になる。

ようやく本題に入れますねと言われ、彼はさらに申し訳ない気持ちが強くなった。

仕切り直しだ。

「あなたがどうしてここにいるか、それを聞きたかったのでしたね」

「ああ……なんで死なずにここにいるのか、だな」

「それは私がお話しましょう」

代理人が変わって、スケアクロウが。

彼がここに運ばれてきた経緯を話す。

曰く、スケアクロウが厄介事の帰路に通っていた都市跡に酷い撃たれようだった彼を見つけたとのこと。その時はまだ血も乾いておらず、すぐに処置すれば助かると思ったらしい。

もちろん、グリフィンの方にも連絡を入れたと。

回収して直ぐに傷の処置に移り、それが終わり次第この部屋に運び込まれた。

正直なところ、確証はなかったらしい。
しかし助かるのならば……そう思っていたと。

「……そうだったのか……」

「結果、助かったようで何よりです」

そのマスク越しで少しはわからないけれど、彼には分かった。彼がかつて見た、人らしい表情。安心したかのように彼女が微笑んでいた。

ああ、前のような表情が見られるなんて……

やはり、夢でも見ているのかと彼は思ってしまった。

「何か質問はありますか」

彼は少し考える素振りを見せ、自分にとって聞くべきこと……または、この状況を整理するために必要な情報を聞いておく必要があると考えていた。

ありえないグリフィンと鉄血の協力関係。

その裏付けになることを聞いてみれば、真実が分かるかもしれない。そう思い、聞こ

うと思った矢先だった。

鳴り響く電子音。

失礼、と代理人が手のひらを見せて端末を取り出す。

なにか操作したかと思えば、そのままそれを耳に当てて話し始める。相手は……話し方からするにグリフィンだろうか？ または……いや、あの時の黒幕が話し相手なんて言うわけはないかとまた一人で走って考え込む。

少しすると、代理人が耳から端末を離してこちらに渡してきた。

「失礼ですが、お相手の方が変わって欲しいそうです。出てあげてください」

俺がか？

そう言わんばかりに彼は自分を指さす。

そんな反応に代理人は動じずただ頷いた。

その端末を受け取り、自分の耳に当てた。

「はい、ただいま変わりました……」

「突然出て頂き感謝する。グリフィン&クルーガー社のヘリアンだ」

聞き覚えのある女性の声だ。

彼の死ぬ前の上司……そして彼がグリフィンでよく話した指揮官あいつの上司でもあつた人物だ。

この流れだと、きつとまた知らないのだろう。

行き遅れの未婚者といじつてやれば思い出すかとも思つたが、今のあまりにもおかしすぎる状況では通る気がしない。

だから彼はそのまま沈黙を貫くことにした。

君が例のグリフィンの救出された人物か？

そう問われた。もちろん、はいと言う他ないだろう。

死にかけのところを助けられたのは、体から伝わる激しい痛みからしても確かだろう。

嘘はつけない。

彼は静かに、はいと返事を返した。

その他にも、どこに所属していたか、どのようなことに従事していたか、どの人形と関わっていたかなど、様々なことを聞かれた。

きっと自分の記録が残っているはず。

そう思っていた。

だが……

「残念ながら、君に伝えることがある」

「残念……？俺に伝えること、ですか？」

彼は首を傾げてそのままの状態だった。

次の言葉が、紡がれる。

『リオン・アッシュフィールド』、君の名前はグリフィン所属者のリストに載っていない」

彼は、手に持っていた端末を手放しかけた。

消失記録

『リオン・アツシユフィールド』、君の名前はグリフィン所属者のリストに載っていない」

彼は、手にしていた端末を手放しかけた。

様々な原因が一气にかかる。

ヘリアンは確かに自分の名前を知っているもおかしくはない。だが、問題はそこではない。

グリフィンの所属者リストに彼……”リオン・アツシユフィールド”の文字が全く載っていないという事実がのしかかった。さらに言えば、所属していないということ、これまでに会ったことさえないとなっているのかもしれない。

そう考えると、なぜヘリアンが自分の名前を知っているかどうか余計に怪しく見えてくる。

何もかもが、自分の記憶と食い違う。

落ち着きかけていた平靜が、また崩れ始める。

どうということだよ、と項垂れて小声で呟く。

自分はグリフィンのIDカードだつて所持している。

それにもかかわらず、自分の名前が出てこないというのは明らかにおかしいはずだつた。

そうだ、今はグリフィンと鉄血は友好関係だつた筈だ。

なら、鉄血に残つた記録があるはずだと彼が言おうとしたその時、また割り込んで言葉が放たれた。

「おそらく君は、鉄血工造のデータなら……そう考えたと思うが」

この言われ方は、だいたいもうその先を聞かなくても分かる。彼は自分の考えていた事を言い当てられたことよりも、その先にある返答が確実になつたであろうことにまた項垂れる。

「そちら側にも、君の記録は残っていない」

「つまり言いたいことはこうだろ？ 『どちらにせよ、お前は所属しているはずがない』
……つてな」

溜息混じりで頭を抱えてぶつきらぼうに返す。

本来はそんなことがあり得るはずがないと何度も自分の頭の中で繰り返しているが、未だに整理がつかない。

……俺はどうなるんだ？

そんな嫌な思考が容量を取り始める。

ここで生きながらえたとして、グリフィンにも鉄血にも自分が居た記録はない。その後この世界で生き残ることが出来るのか？ 自分にあるのは、人形たちのコンディションを整えるための技術だけだ。戦いの技術は並より上程度か、それとも並か。そんな状態で放り出されたら折角拾った命が台無しだ。

「なんで記録に残ってない男が、鉄血に所属しているかもしれないって考えたんだよ」

苛立ち混じりで当てつけのように吐き捨てる。

確かに元々グリフィンの一部には元鉄血工造ということは知れているが、ヘリアンはこの事実を知らないはずだ。

吐き捨てたセリフに、ヘリアンは返す。

そこにいる2人が、君のIDカードを見つけてそのデータを送ってきたと。チラリと二人の方向を見る。

「勝手な行動、申し訳ございません。ですが、所属ははっきりしていた方が良いかと思いまして」

「所属が確実と証明しない以上、何かしらの疑いをかけられることもあると判断しての行動です……ですが、本人の許可を得ずに調べたのは確かに失礼でした」

2人はどうにも申し訳なさそうに謝罪してくる。

本人たちが気を使ってくれたのは非常に良くわかる。

そんな状態の人に怒れるほど鬼ではない。

大丈夫だ、ありがたいの意を込めて軽く手のひらを見せる。

しかし、その後は沈黙が続く。

「……なあ、ヘリアンさんよ」

リオンは口を開いた。

この沈黙を断ち切るかのように。

もうこの際、後の事はどうでもいいと。

その時になれば考えられる。

今、自分の聞きたいことを聞くための絶好のチャンスがやってきた。グリフィンと鉄血、両陣営の人物がいるこの状況が、自分の置かれている状況を確かめる問いをするには最適だった。

「この際、俺の記録に関しては捨ておこう。俺から1つ2つ聞きたい事がある」

ヘリアンは言ってみろ、と返す。

まず1つ。

一番最初に聞きたいことは……

「今は西暦何年だ？」

「？今は2062年だが……」

正しい。

彼が死んだ筈だったあの状況が生まれた時も、同じ2062年。

本来の死亡した年ならば、時間的に歪みは生じていないはずなのだが……と頭の中で組み立てて行く。

そして、今が2062年ならば、自分の記憶の中で必ず起きた筈の忌々しい『あの事件』が……

恐る恐る、その恐怖の記憶の引き出しに手をかける。

自分の全てが狂ってしまったあの記憶の名を。

2061年。

鉄血工造にテロリスト共が侵入したことがきっかけによる、防衛システムの発動。それに伴う管理AI『エリザ』『エルダーブレイン』の起動。

そして……鉄血工造製戦術人形たちのプログラムに異常が発生し、その場にいる人間全てを殺戮した史上最悪の事件。

「……2061年、『蝶事件』と呼ばれる事件……聞き覚えは？」

代理人とスケアクロウは、彼がその単語を放つ時だけ、やけに重苦しく、恐ろしく暗い声を出していると感じて。

スケアクロウは彼の顔を少し覗き込もうとしている。

ふよふよ浮きながら、その顔を確認できないかと模索しているが……そんなことを代理人が見過ごすわけもなく。

今は真面目な時です。と彼女を抑える。

抑えられた案山子は、何も言わずに頷き何もしなくなつた。

しかし、彼は気づくべきだった。

その単語は、彼女たちも知っているはずなのだが。

「……いや、聞き覚えがない。2061年にあつた事と言えば、グリフィンと鉄血が友好関係になり始めた年だが……」

ただでさえ先程の単語が出るまでボケた顔をしていたのに、さらにボケた顔に変わる。なんとも形容し難い表情。

顎は若干しやくれているし、口は歪んでいるわ、眉間にシワが凄くよつている。簡単に言うならば、完全な変顔だ。

傍から見ていた2人は一見して表情を変えていないが、代理人はすごい顔をしていると内心思っており、スケアクロウの方は顔が半分隠れているおかげでなんとかわからない状態になっている。

ちらつと彼が2人に顔を向けると、その表情は先程のものに戻っていた。

一番重要な情報。

何となく、分かってきてはいる。

それを受け入れられるかどうかは、全くの別問題だが。

ひとつ分かるのは、その事実を受け入れ難いのは確かだ。

しかし、彼に余裕が戻ってきている。

彼はふざけているように見えたが、その表情は先程まででは絶対に出なかっただろう。

『蝶事件が発生していない』

『グリフィンと鉄血が敵対していない』

その2つの事実によって彼は、安心したのだ。

自分が殺されることがない、それも安心したうちのひとつだ。しかし本当に安心したのは、自分が知る友人達が殺し合わなくて済んでいるということ。

彼が最期に願った、『お互いが争わない世界』がここにあるということに、とてつもなく安心している。

今のこの場所に関しての不安はもうなくなつた。

自分にとって一番くるのは、仲間と仲間グリフィンが殺し合うことが、何よりも自分に耐えられないことだつた。

しかし、この場所にはそれがない。

グリフィンと鉄血の友好関係も揺るぎないだろう。

何よりも、目の前の2人が自分を殺さないのが証拠だ。

残る疑問は、自分の記録がないということ。

しかしこれに関しては、もうどうしようもない。

しかし、やっておくべきことはやっておかなければ。ふう、と一息ついて、もう一度真面目な表情に戻る。

「……ヘリアンさん、こっちからもう一つ、今度は伝えたいことがある」

そう一言伝えて、深呼吸する。

頭がおかしいなんて言われそうだが、言わなければ理解もされない。ありのままを伝えるべきだろう。

頭を少し掻きながら。

「……ここで起きている歴史は、俺の記憶と全く食い違っている」

端末の向こう側からは『は?』という声は聞こえるし、視界に入る2人からも?マークが浮かんでいる。

しかし、これは紛れもない事実だ。

それ以上の伝えようがない。

彼はヘリアンと、目の前にいる2人に対して自分が辿ってきた道のりを伝える。自分の知っている、彼の正史を。

グリフィンと鉄血が敵対関係であったこと。

自分の知っている人形たちが、苛烈に殺し合いをしていること。蝶事件がきっかけで鉄血工造製戦術人形が人間を攻撃対象とし、殺戮を始めたこと。その戦いの渦中で、自分はその前の指揮者に下された命令で死んでしまったということ。

全てを包み隠さず話した。

しかし、やはりここではありえないと帰ってきた。

聞くに、ここで相手をしているのは人権団体を自称するテロリスト共や、全ての始まりの元凶……『崩壊液』^{コラップス}によつて被爆した元人間^{バケモノ}の異形達、E・L・I・D・共の相手だけ。

さらに言えば、グリフィンと鉄血達は同じ戦術人形を扱う為に友好関係となった。戦術人形の普及とともに、暴走しかけている人間たちの制圧の為や、増え続けているE・L・I・D・の処理のためにさらなる改良が必要ということでお互いに了承したらしい。

本来、蝶事件が起こったその日に、グリフィンと鉄血が友好関係になったらしい。全く持つて真逆だ。

彼はその日を呪うほどに嫌っていた。

しかし皮肉にも、ここではきつと祝うはずの日だった。

ようやく伝えたいことがまとまり、なんとか話すことが出来た。その顔は酷く疲弊しきっており、傍から見てもその様子は分かった。まあ、色々ありすぎて混乱しているのだろうとヘリアンの方も気を使ってくれたらしい。

彼女曰く、本来ならクルーガーと話をするべきなのだが彼は他の業務で忙しく直接来ることは出来ないらしい。

しかしこちら側も、今の怪我の状態では動くこともままならない。

どうした物かと考えるが、後の事は自分ではどうにもならない。取り敢えず、代理人に変わると言つて代理人に端末を渡した。

彼女が話しているあいだ、もう片方が彼に声をかけた。

「……貴方の記憶では、私が貴方を？」

申し訳なさそうな顔で彼女が問いかけた。

彼はああと軽く返事をするが、その顔を見るや否や、柔らかく微笑んだ。

気にしていないと言わないばかりに、彼は優しく。

「大丈夫。お前が悪いわけじゃないから。むしろ、今は俺の命の恩人だ」

ありがとう、と優しく呟いた。

彼女の目に映るその姿。

自分たちと同じモノクロ調に見えるその容姿。

白く、中途半端に長い髪。

目は青色で、どことなく深い色。

意外と穏やかな顔立ち。

彼女はその姿に見覚えさえなかったが、何となく。

彼の温かみがあるような気がした。

「貴方を混乱させてしまったと考えると、どうしても申し訳なく思ってしまった」

今は敵意がないんだし、気にしなくてもいい。

そう彼は語りかける。

最初に脅えたのは確かにそうだ。

死んだ原因が目の前にいたのは誰だって怖がる。

でも、今日の前にいるのは、自分を助けてくれた人。

同じ見た目で、同じ話し方で、おそらく同じ性格でもある。死んだはずの人間が、またこんな光景を見られること自体が奇跡だと心で思っていた彼には、その程度のことな些細に見えた。

ありがとう、と彼女もまた小さく返す。

2回目のはじめまして。

と言うには、少ししんみり過ぎただろうか。

なんとも言えない空気の中、代理人が再び戻ってきた。

「暫くは、鉄血工造の医務室……ここで療養に徹してくださいとの事です。時間を見てクルーガー社長が来てくれるようです。それまでは所属の戦術人形を派遣するそうなので、彼女らにヘリアンさんに伝えた事と同じことを伝えてください」

……これで、暫く身の安全は確保された。

自分が願ったとはいえ、とんでもないことが起きたものだ。

しかし……こんな平和な世界に飛んできたのだ。

今まで家族と呼んできた者たちが殺し合わない、最高に平和な世界。思わず、頬が緩んでしまうほどに。

死に損ないだが、せいぜい満喫させてもらおうとしようか……

彼はそう心の中で呟き、再び微睡みに沈んだ。

再会対面

鉄血工造、医務室。

無機質な部屋にあるひとつの白いベッド。

掛け布団は少し膨らんでおり、時々もぞもぞと蠢いている。耳を澄ませば、静かな寝息の音。

規則正しく立てられる寝息が、眠っているという事実を伝えてくれる。繋がれていたコードは律儀にまとめられており、その駆動音も今はしていない。

外を見ればもう日は高く昇っている。外は雲一つ掛からない程に青く、今の彼が見たなら『腹が立つほどに快晴』と言うだろう。

窓から射す陽のおかげか、あまりに暖かい。

お昼寝をするにはもってこいだろう。

しかし、そんな時間になってるにもかかわらず、そこにいる人物は目を覚まそうとし

ない。

普段ならばそれで構わないのだが、今回はそうなると困る用事があるのだ。そんなことは知らんばかりにふかふかの布団に身を埋めて心地よさそうに寝転んでいる。分かるところだが、この完全にダメになっている人物は昨日あそこまで取り乱して2つの勢力を掻き乱したあの男なのだ。

「起きてください。もうお昼になりますよ」

ふよふよと浮いて部屋に入ってくる1人の人形。

彼が昨日話していた、ガスマスクが特徴的な人物。

入るや否や、眠っているであろう人物を起こしにかかる。

それでも狸寝入りか、ベッドから出てくる気配はない。

傷が痛むから揺さぶることは出来ない。

けれど、軽くぼんぼんと起こそうとしても起きる気がない。

困った人ですと頬に指を当てて考えるスケアクロウ。

どうしたら彼は起きてくれるか。

そろそろ、所定の時間になってしまう。

そんな所に、1体……いや、1匹と言った方がいいだろうか。

小型で、四足歩行をしている本当に小さい機体が背中に昼食を乗せてやってきた。そんなに飛び跳ねていたらこぼれるのではと思ったが、不思議なことに全くだった。

いつもありがとうとスケアクロウが返すと、そこにいる働き蟻……ダイナゲートちゃんはまたびよんびよんと跳ねた。

まるで喜んでいるようで、少し微笑ましい。

そうだと言わんばかりに彼女は手を叩く。

ダイナゲートを手招きして録音マイクの傍でヒソヒソと耳打ちをする。何を企んでいるのやら。

大丈夫ですか？と彼女が聞いてみると、大丈夫と答えるように首（胴体？）を上下に振った。

1匹が軽い足取りでベッドへ登る。

小さいからか少し落ちそうになって後ろ足をバタバタさせかけていたが、なんとか登れたようだ。

そんな調子で彼が頭を預けている場所まで来ると……

前足で彼の頭を叩き始めた。

ぺしぺし、げしげし。

可愛らしいが、やっている事が酷い。

傍から見ているスケアクロウはまたまた笑いをこらえているようだ。ガスマスクで何とか見えないが。

なかなか起きようとしないので、今度は器用に前足を両方使って彼の頬を引っ張る。

「痛ででええ！ひっはふはあ（引っ張るな）！」

起きたことを確認したダイナゲートはスケアクロウの元へ戻っていく。良い働きですとそこにいる小さい子を褒め称える。我ながら良い考えでしたと内心でどや顔をしている事だろう。当のやられた本人は叩かれたり引っ張られたりしたところを擦りながら酷い起こし方だと不平を漏らす。

そんな中で、彼女が視界に入るとすぐさまいつもの表情に戻って一言。

「……おはようさん、スケアクロウ」

「ええ、おはようございます……もう昼ですが」

どうにも不思議だ。

この前はあれほど取り乱していたはずなのに、少しの時間が経っただけでこの変わりようだ。

確かに彼にとって訳の分からないことの連続だったはず。そこで混乱するのもわかる。

だが、普通こんなに早く冷静になれるものだろうか？

少し頭が整理できたからか、いつもの調子に戻ったのか？

こここのスケアクロウは、元の彼を知らない。

だから彼が見せる穏やかな表情が妙に引っかかる。

悪い気はしないようではあるが。

「で、なんで俺を起こしたのさ」

寝癖を手で梳かしながら、自分が起こされた理由を聞いた。ついこの前まで、この場所療養に徹してくれと言われたばかりだ。それなのに起こされては、療養も何も無いと彼は内心想っていた。何だかんだと言っではいるが、もう体の痛みは鎮痛薬や適切な

処置によってだいぶ楽になっている。

何かしらの補助は必要だが、動けはする。

だがやはり、眠っているところを起こされたのはあまり良いものではない。しかもその犬のワンツーパーンチ付きだ。

駄洒落ではない、駄洒落ではないと何故か頭の中で言い聞かせた。

「AR小隊の皆さんが来ています……あなたに用事があるそうですよ」

「M4とM16が?……まあ、そういうことなら。杖借りるわ」

AR小隊。彼が目覚めた次の日に訪れたグリフィン所属のエリート部隊。自分の知っている記憶では、161abの特製品で、他の人形とは一味違う戦闘力や思考力を持つ……今はエリート部隊というのは形骸化しているようで、そうそう出撃することは無いらしい。

クルーガーの言っていたグリフィン所属の戦術人形とは彼女らのことだった。主に言伝はM4A1とM16A1が伝えてくれるため、こちらとしても非常に助かっている。

ただ思うことと言えば、やはり彼女たちも彼のことを覚えていなかった。いや、彼女らも“知らなかった”。

まるで自分だけが隔離されているようで、孤独感が積み重なっていた。それも何とか、療養中に鉄血の人形たちやM4A1、M16A1との交流があったからか多少はマシになっていた。

そんな彼女らが訪問してくるのは珍しくないが、いつもなら代理人がまだ寝ていると伝えれば時間を改めてくれるのだが……

今日は代理人が出払っているようだ。

スケアクロウだから起こされたのだろうか？

そういう訳でもなさそうで。

普段なら来ないはずの2人も来るということは、多分何かあるのだろう。そう思い杖を取った。

「すみません、お眠りのところを……」

申し訳なさそうに謝る大人しい少女。

彼女もまた、戦術人形だ。

目の前に映る4人の戦術人形たち。

そのリーダーである、彼女がM4A1だ。

少し気弱そうではあるが、その中身にどのようなポテンシャルが秘められているかわからない。

彼の第一印象としては、可愛らしくはあるが少々不安になるらしい。いや、不安になったの間違えだろう。死ぬ前も話したことはあるし、こちらでも何度か話しているため、一応面識はある。

彼は彼女のことも知っていた。

しかし例に漏れず、彼女は彼を知らなかった。

「いや、大丈夫。用事があつてきたんだろ？」

柔らかに微笑んで返す。

口調に反した優しい声色と、穏やかな表情で彼女は少し緊張が解れたようだ。釣られて優しい笑みを零す。

「おっと、私の妹に色目を使うのは控えてくれよ?」

「使つてねえよ、これが普段だ」

冗談を笑って放つ、所謂イケメンの人物。

片方に眼帯をつけたのが特徴的な彼女が、M4A1の姉M16A1。ここで初めて会った時も、死ぬ前に会った時も彼女はこんな調子だ。正直に言うところの方が関わりやすく、こちらもしても助かると彼は思っているが……

事ある毎にいじってくるのは頂けない。

彼は残りの2人に目を向けた。

「2人は……」
「こつち」
「じゃ初対面だな」

「ええ、私たちは初見ですね」

「初めましての人でしょ〜？じゃあ、私たちはまず自己紹介からだね！」

こちら側では今の今まで会わなかった、残りのAR小隊のメンバー。AR―15とM4 SOPMOD 11。

彼女たちもまた、彼が死ぬ前に共に仕事をした仲間であり、グリフィンの中では割と仲が良かった方だ。

AR―15は最初、非常に彼のことを警戒していたが。

逆にSOPMODはそこまで警戒することも無くよく懐いていた。毎度毎度良くくつついてくるものだから、どうしていいか分からなくてM4やAR―15、M16に助けを求めたのは良い思い出だ。

軽くお互いに、既に1度行った自己紹介をした。

意外にもすんなり進んだ。

もう少し混乱されるかと思ったが、自分の記憶関連の話をしても特に疑うことはなくそういう事なのかと理解してくれたらしい。

だが、彼にはまだ疑問があった。

もう1人、死ぬ以前さえ見た事のない人形が1人いるのだ。全体的な黄色が目を引き。フード付きの上着に、腰に下げた拡声器。赤と黄色のオッドアイ。

彼女だけは、彼が知らなかった。

「……俺の記憶にない子だ……なあ、M4。彼女は？」

そう言つて彼は彼女の正体をM4に聞いた。

見覚えのない人形。もう驚きさえしないが、気になりはするらしい。

「あの人もAR小隊のメンバーです……あの、自己紹介をしてあげてください」
「分かりました、M4」

その声に反応して、気になる彼女が前に出てきた。

スタイルが良く、顔も良い。魅力的に見える。

前に見た4人がそうでも無いという訳では無い。

前の4人は見慣れてしまったというのが正しいだろう。

彼とて男だ。美しいと思つてしまうのは仕方がない。

「コルト9mmサブマシンガンです。今はAR小隊の一員として活動させて頂いていま

す。皆からは……RO635と呼ばれています」

「RO635……初めまして、だな。俺の事は話に聞いてるだろう？」

ええ、話には聞いていますと彼女は答えた。

本当の初めまして……先ほど彼が口に出したように、彼自身が知らない人形だった。

ここに来て初めての出会い。

記憶の中にある人物ではなく、本当に真新しい人物。

まずまず、自分の置かれている状況がわからない。

しかし、せつかくこの場所を楽しむと決めたのだ。

深いことは考えずに、彼女とも仲良くしよう。

宜しくと片手を差し出す。ROの方も、微笑んでその手を握り返してくれた。随分な子がAR小隊に入っていたものだ。

新しい出会いもそうだが、本題に戻ろう。

「それで、要件ってのは？」

「それなのですが、今とある方が来てまして」

M4が入って下さいと言うと、そこには……

「初めまして、異邦の技術屋さん」

「……お前……！」

自分がよく知っている顔が、自分の目の前にあった。

あの時、確かに彼が謝罪を伝えた相手。

指揮官が、ここにもいたなんて。

理論展開

「初めまして、異邦の技術屋さん」

最期に謝罪の言葉を送った相手。

グリフィンの部隊を指揮する優秀な人物。

あのAR部隊も、彼が指揮していた。

そう、よく知っている指揮官だ。

「……お前……！」

「その口ぶりからするに、やっぱり俺の事も分かるみたいだね。……肝心の俺は、例に漏れず君のことがわからないけれどね」

話し方も、見た目も何も変わっていない。

間違いない。自分が知っている指揮官と同じだ。

一番最初は先輩面をかましていた気がする。

だが、話すにつれて気のいい仲間が変わった友人。

俺の数少ない、普通の人間の友人。

何となく分かつてはいたが、やはり自分がイレギュラーのようだ。この考えに至るのも何回目だろうか。

未だに納得が行っていない証拠だ。

「……まあ、そうだよな」

「そう落ち込まないでくれ。今日はこんな悪い話をするためだけに来た訳じゃないからね」

落胆する彼を見かねて少しばかりのフォローを入れる。

そういう気遣いができる当たりは、やはり変わっていないと彼は思う。故に良い指揮官だった。

AR小隊のメンバーだけでない、グリフィン内の人形達には非常に人気だった。それこそ、少し妬いてしまう位には。

M4が指揮官に近づいて何かを話し始める。

AR-15は時間を確認し始め、M16とSOPは先に行っているといい外へ出て行ってしまった。

話し終わった指揮官が改めて此方を向く。

「とりあえず、ここで大事な話をするのも何だから……ちよつと着いてきて。ある所に行くからさ」

もちろん、君を助けたスケアクロウちゃんもね。と一言付け足して。話し方からするに、彼が倒れていた問題についてを追及するつもりだろう。

行き先が刑務所だけは勘弁してくれよとぼやきながら、スケアクロウを手招きして行く、と外へ出る。

何とか未だに自力だけでは立てない体を支えながら久々に外の空気を吸う。ついでさっきの比喩ではないが、久しぶりに娑婆の空気を吸ったようだった。

外には大きな車が止めてあり、乗つてと指揮官が親指で後ろを指す。遠慮なくドアを

開けて、車両に乗り込んだ。

さすがに1小隊分を運んだ拳銃プラスで2人乗り込むのだ、小さい車両ではスペースが足りないからか、ある程度の大きさを持った車で来たらしい。所謂、ミニバンというやつだろう。

「悪いね、本当はもう少ししっかりしたものを持つてくるべきだと思ったんだが、市街地で物騒な車を乗りまわすわけにも行かなくてさ」

そうやって軽く謝る指揮官。

せっかく足まで用意してくれたのだ、感謝はすれどそこを悪く言える立場ではない。助手席にはM4が、中間の列にM16、AR15、SOPが座っている。最後列ではRO635とスケアクロウに挟まれる形で彼……リオンが座っていた。挟まれる形というのはどうにも落ち着かない。

指揮官は未だ生きているラジオの音楽に合わせて鼻歌を歌いながら運転をしている。助手席のM4はそれを微笑ましそうに見ていた。周りに暖かい空気が漂っている気がした。

M16とSOPは暖かい空気に充てられたか、車の中だというのに眠ってしまった。

寄りかかられているARR-15はやれやれと言いたそうだったが、何も言わずにそっとしてあげているようだ。

前のメンバーはこの前と変わりがなく、むしろ良い方向で変わっていた。

あの時は殺伐としていたからか、今のように平和的で暖かな雰囲気など微塵もなかった。

そんなはずなのに、ここではこんなに穏やかであることが、少し嬉しく感じていた。

元々は鉄血側の人間で、IOP社とは対立していたはずなのだが。そんなことがどうでもよく思えた。

ROは彼に関する資料を確認している。はたから見たら本当に真面目な子なのだと彼は感心していた。もう片やスケアクロウは上の空で、車の窓越しに見える景色を見つめていた。時々話しかけられては、普通に会話を楽しんでいる。そんな中彼は当事者ということもあり、ずっと考えふけていた。

「あの、リオンさん。こちらのことに關してなのですが……」

RO635が話しかけてきた。

何だと軽く返事をしたあと、彼女が指を指していた場所を見る。そこには『記憶と事実・史実の差異について』と書かれていた。そうか、彼女は知らなかったんだなと思いつく。

彼女にも、皆に話した内容を伝えた。

また、その記憶の中に彼女が入っていないかったという内容もつけ加えて。

「その当初、私がいなかったのか……それとも、元々製造される予定もなかったのでしょうか？」

「あー、悪いがそこら辺については俺も分からない。グリフィンにはI・O・Pの研究員としてではなく、あくまで現地の修理者の感覚で雇われたんでね」

どういふことか分からなさそうにするROと、同じように聞いていたAR―15。M4と指揮官もその事について興味がありませんに聞き耳を立てているのがバックミラー越しに見えた。

これはあとから説明するつもりだったのだが、まあここで説明しても構わないだろうと話を始めた。

彼がグリフィンに入社できた理由から、鉄血を追われた理由まで。元々の発端は、彼が偶然負傷していたグリフィンの人形に対して応急処置を施したことだったらしい。

幸い、人形の整備技術や修理技術はあったためにその場で出来ることは難なくやってのけたそうだ。

しかし、本格的な治療はできないために何とかして救助を要請、グリフィンの支援部隊が何とかその人形を回収した……。

だがグリフィンの提携している相手は鉄血の競争相手、IOP社だった故に鉄血の機密を漏らしたという虚偽の報告を流され鉄血を追われたということだった。

その後、その救助の実績があつたからかクルーガー直々にヘッドハントされることになった。

現地へ赴き、傷付いた人形をいち早く助ける救助部隊の指揮官、及び治療の技術者として。

そのため、鉄血に居た頃とは違い他の人形の製造予定などは全く分からなかった。

故にその時に製造されていなかったRO635の存在を彼が知らなかった訳だ。

「そんな人形の医者が、今は逆に助けられちゃってまあ……」

「正直、俺も死んでるもんだとばかり思ってたよ」

溜息をつきながら答えた。

聞いていたM4はすごい……と驚きを隠せない様子で少し可愛かった。AR―15も確かに驚いてはいたが、それ以上にリスクがないかどうか不安になっていた。

ROも同じ様な感じで、生身の人間が戦場に出ることの危険性を考えて本当にそんな所があったのかと疑問に思っていた。

まあ、危ないことなんて分かりきった上だが。

「……にしても、記憶を保持したままとはいえその記憶は事実と違ってるか……同じ光景、同じ人物、同じ人形……見えるものは全く同じの筈なのに、中身は全然違うつて言うのは辛いよね」

「そりゃあな……一方的に覚えているだけって言うのは一番辛えよ」

当たり前だ。

忘れた側は何も覚えていないが故に、それが何だったかさえわからない。それを覚えていたことさえも忘れるのだから。

取り残された方は、喪失感に苛まれるのも当たり前だ。

また少し、彼の顔が曇った。

そんな中、指揮官がとんでもないことを口走り始めた。

「いやさ、俺思うんだ……君はもしかして、“別の世界線”から来た人じゃないかなって」

M4はうーんと唸っている。

ROはその意味は分かるが、そんなことが実際に起きるわけがないと口にした。どういう意味か。

そういう風に聞きたくなるような発言だったのだ。

リオンは全く理解ができていない。

つまり、どうということだ？

そう問いかけた。

「並行世界理論……所謂、パラレルワールドってやつさ。で、君が死んだ事をトリガーにこつちの方へ飛んできたっていう考えでね」

彼が言うには、世界がその歴史を辿る中で幾千幾万……いや、それ以上の分岐点での選択を我々は迫られてきた。分岐点によつて枝分かれした1つの世界がこの歴史を辿った今の世界だとするならば、その選択の際に別の選択肢を選んだ時の世界も果たしてあるのではないか……という考えの理論らしい。

彼に置き換えて1番わかりやすい分岐点を彼は挙げて見せた。

『蝶事件』だ。

リオンの中の記憶では『蝶事件』が起こつた”という歴史の元、グリフィンと鉄血の対立構造が生まれた。

しかしこちら側の歴史では『蝶事件』が起こらず”、逆にグリフィンと鉄血が友好

関係になった。

これはあくまで大きく切り分けた例えであり、さらに突き詰めていくなら枝分かれした世界は倍以上……いや、それこそ自分たちが認知できない程の数に登るだろうと説明された。

つまり、指揮官が考えるに彼らにとつてのパラレルワールドから次元転移……それこそリオンの死を引き金にして彼がこの世界線へ飛んで来たということだ。

「確かに、それなら記憶と史実が違っていたとしてもおかしくは無い……ですが、そんな事が有り得るのですか」

「並行世界理論……更にそこへ飛んできたとなれば基本的に証明はできません……跳躍した本人でさえその事を理解できない以上、それを裏づける確証がありませんから」

つい先程まで窓の外を見ていたスケアクロウも聞いていたらしい。いや、同じ車内だから聞いていて当然なのだが。

だが、彼女の言うことは最もだ。

AR―15も言ったように、これはあくまで机上の空論のようなもの。跳躍が成立したと言えど、それを証明できるものは何も無い。故にこれがただの理論や空想だと呼ばれる所以だ。

「……まあ、あくまで可能性の1つだからさ。でも有り得るのならこれくらいしかない
と思つてね」

言つてみただけと言う雰囲気を出す指揮官。

その笑い方には見覚えがあった。

何時もそうだ。その笑い方をする時は決まつて何かある。何を企んでいるかはわからないが、指揮官の性格が彼の記憶と同じならば……。

リオンは何も言うことは無かった。

「……AR―15、M16姉貴とSOPちゃんを起こしてくれる？そろそろ着くからさ。
あとROはその資料を少し整理してくれるとありがたいかな」

2人の人形は指揮官の指示に従い動き始める。

片や自分によりかかって眠る2人を優しく起こそうとしている。

片方は狸寝入り、もう片方は寝ぼけて抱きついている。

M4に助けを求めるような視線を送るが、残念ながら助手席のM4にはどうすることも出来なかった。

どこかの案山子さんにも見習って欲しいなど思いながらジト目で彼女の方を向いた。

当の本人は私に覚えはありませんとそっぽを向いている。

今度何かイタズラし返してやろうかと内心毒づいた。

もう片や調べていた資料を自分で分析し、優先度の高いものから見やすいように整理をしている。

よく考えたら自分は整理などは非常に苦手だった。……副官やら、時々来てくれる奴らにやって貰っていてばかりだったなど思い返しては、少し罪悪感が芽生えた。

彼は言わば被疑者のようなものだから協力しようと思ってもすることが出来ない。

やがて何とかAR-15は2人を起こせたらしい。

RO635も資料をまとめ終わった。

それに合わせるように回っていた車輪も動きを止めた。

「それじゃ、行くかうか」

目の前に写った景色……

それは、彼の生前のお勤め先^{我が家}だった。

雇用契約

嘗ての職場。

と言つても、辞めてからそこまで時間は経っていないのだが。中は彼の記憶通りで、あまり変わった気はしない。

ただ、所々鉄血の人形の量産型が働いているのを除けば。

周りを見れば切り裂き魔が雑用をやっていたり、竜騎兵が二足歩行機械を活用して荷物を運んでいたりしていた。人形たちも手伝いで来ているのだろうか？

「そんじゃあ、こつちだ」

案内がされるままについて行く2人。

一週間ほどの景色を懐かしみながら、目的地へと到着する。

M4が扉を開けようとするが、それを静止する指揮官。

自分が行くからと言わんばかりに彼女の方を向き、扉を開けた。

「失礼します、クルーガーさん。リオン・アッシュフィールド本人を連れて来ました」

そこには非常にガタイのいい男性が1人。

威圧感を感じさせる佇まいに、歴戦の気迫さえ思わせるほどの雰囲気を放っていた。もちろん、彼はこの人物を知っている。

鉄血を追われた後、自分を拾ってくれた恩人。

グリフィン& amp ;クルーガー社社長、ベレゾヴィッチ・クルーガー。

「ご苦労、助かった」

目の前にいる部下たちに労いの言葉をかける。

その時の声色は、強面な面構えからは想像もつかないような柔和さだった。いや、これがクルーガーという人物だ。

彼は、拾ってもらった時からその人柄の良さを知っていた。

心無しか、自分の知っているクルーガーよりも穏やかに見えた気がした。暖かい雰囲気自分に自分も充てられたのだろうかど頭を搔くリオン。

「済まないな、本来なら私が出向くべきだったのだが……こちらも急に提携先^{I.O.P}から呼び出しを受けてしまったな。しかしせっかく開けた時間を無駄にしたくはないためにこのような形を取らせていただいた」

まあ、それはそれなら仕方がないよなどと納得する。

元々クルーガーは真面目な人だ。

あまり理由も無しに急に予定を変えるような人物ではないことはよく分かっていると自負している。

クルーガーが彼を呼んだ理由は1つしかない。

「さて……指揮官に連れてきてもらったのは他でもない……君の記憶と、我々の記録の差異についてだ」

あの仕事の時の感覚を少しながら思い出す。

彼も一応は真面目な部類に入るため、いつものような軽い体制ではなく、しっかりと

した直立姿勢になる。

グリフィン所属と言っていた自分だが、この記録が本当にならないとなるならば起こる問題は山積みだ。前にも考えたが、この先がどうなるかが分からないということ……さらには言えば、グリフィン所属という事を偽装していたとしたら、まず自分は罪人扱い。刑務所送りならばまだマシ、最悪は殺される。

体が強張った気がした。

「あー、それなんです。がクルーガーさん」

「……………ここは正式な場所。呼び方はしっかりして欲しいものだ」

唐突に口を開いた指揮官。

あまりに抜けた話し方にクルーガーは少し呆れながら返した。この様子では、普段もこのような感じなのだろうか？

すみませんとあまり反省していないような回答で答えたかと思いきや、その次は非常に真剣な顔付きになった。

「俺が考えるに、彼が嘘を付いているという雰囲気はありません。彼の過去や、グリフィンに入るまでの経緯……グリフィン内での役職等矛盾はありません。持ち物等にも、どこかのスパイと思わしきものはなし。……騙しているにしては出来すぎます」

彼を擁護するかのような発言だった。

聞いた話を上手くまとめると矛盾も何も無く、代理人やスケアクロウが調べた倒れていた時の持ち物等にも怪しいものはなかったらしい。鉄血のIDカードはどうなんだ……?と正直なところ内心疑っていた。

「……スケアクロウ。彼の倒れていた時の状況を教えてほしい」

「分かりました。彼が倒れていた時は……」

スケアクロウは彼を拾い上げた時の状況を話し始める。

医務室に居た時も聞いたが、何の痕跡もない場所に一人で血を流して倒れていたらしい。その時はまだ気絶しているし、血も滴っていて倒れてからそんなに時間は経っていない。

ないようだった。

「医務室にて療養中も、怪しい行動は一切ありませんでした。私としては、彼が危険因子である確率は限りなく低いかと」

クルーガーは顎に手を当て考え込む。

何度かチラリと彼の顔を見ることもあった。

少しばかりの時間が経つと、指揮官の方へ顔を上げて言葉を発した。

「……やはり……君の言うことが一番近いかもしれないな」

「まあ、あり得るとしたらそれくらいですから。グリフィンのIDカードのフォーマットも全く同じ、恐らくこのカードを使っても一部の所は通りますよ」

待て、待ててくれ。何の話をしているんだ。

そう言つて混乱したかのように取り残された彼は言う。

自分たちだけで話を進められ、こちらとしては全く持つて何が何だかわからない。

クルーガーが何の話をして何に対して指揮官が返しているのか。この場に理解出来

ている人物はクルーガーと指揮官だけだろう。

指揮官が、悪いとまた軽く謝り口を開いた。

「……俺が来てからの会話、クルーガーさんは全部聞いてた。車の中の事とかも。だからあの理論」のことを話してたんだ」

は？と素つ頓狂な声を上げた。

つまり、自分は何も知らずに全てを吐いていたのか？

焦っていることも全て見え見えで、お前たちの手のひらで踊らされていたということなのか？

彼はそういう風に言いたくなかった。

いや、実際は完全に踊らされているのだが。

「ごめんね、君が嘘を言っていないと証明するにはクルーガーさんに話を聞かせる必要があった。でも、自然に出たものじゃないと信憑性は低いでしょ？だからわざわざ盗聴させてもらったんだ。さらに言えば……盗聴だけじゃない。レコーダーによる映像記

録もね」

自分の考えていた、つい先程の並行世界理論も含めて。

彼の狙いはこうだった。

車内等で何も伝えずに盗聴、記録を行うことで、クルーガーへの連絡の手間を省いた。それと同時に何も知らないリオンは自らの経歴を自然に言うことによつて信憑性を高め、かつ不審な行動をしないことを証明した。そして追い打ちにそこに辻褄が合う唯一の理論を用いた自分を考えを述べることによつてクルーガーを納得させようとしたらしい。

確かに理に叶っている。

聞かれているということ伝えてしまつては挙動不審になりかねず、そうなつてしまえば事実を話してしたとしても危ぶまれるのは当然だ。

さらにそれによつて可能性を絞り込んでいくことにより、より並行世界転移が起こつたということ信じやすくさせたのだ。

ついでに言えば、行動や発言からの人柄の分析も出来ないかと目論んでいたようだ

が。

指揮官からしたら、バックミラー越しに見える表情があまりに穏やかすぎて本当に戦場に向くような人間だったのかと疑いたくなつたらしい。話しているあいだも特に怪しい事はなく、一時的な信用には値する程だろうと判断できたとの事だった。

「……上記の理由より、グリフィン所属であつた可能性は十分にありません。もしそう出なかつたとしても、彼が敵対する勢力に属している可能性は限りなく低いと思われま
す」

「……分かつた。いいだろう」

クルーガーの言った、『いいだろう』の意味がわからない。

何に対していいだろうと言われたのか。

あまりに周りの人物が置いて行かれすぎていて何も言えなかつた。いや、詳しくいえば彼とスケアクロウドだけが分かつていなかった。AR小隊の皆は何かを知っているように黙っている。

「リオン・アツシユフィールド」

「……はい」

静寂。

重苦しくなる空気。

一瞬が一瞬に感じられない。

時間の流れが遅く感じる。

来るのだ。

自分に対する判決が。

これからを決する恐ろしい答えが。

「今君を連れてきた指揮官……クラウドス・ヒルシユフェルトの発言により君の処遇が決まった。……君は確かにグリフィン所属だったようだ。だが、ここでは君の記録は存在しない」

……初めからになってしまいが、もう一度我々と来てくれ。
リオン・アツシュフィールド。

「……本当ですか!？」

目を見開いて事実を確認する。

クルーガーは本当だと厳かな雰囲気似合わない微笑みを見せてくれた。指揮官……クラウスの方を見れば計画通りと言わんばかりのドヤ顔。AR小隊はよかったと言わんばかりの暖かい表情をこちらに向けてくれた。

スケアクロウの方は……相変わらずガスマスクで見えづらいはずなのだが、目に見えて笑顔で拍手をくれた。

ここまでされると非常に恥ずかしくなってくる。

少し彼は赤くなりながらも笑つてみせた。

担当としては臨時の指揮官や救護者らしく、普段は異常を訴える人形たちの検査や整備などがメインになるらしい。元々技術者であつた自分には適任だし、他にそういった仕事が出来る人材は今は少ないようだ。

歓喜のまま、その喜びを皆と分かちあつた。

何時しか、日は落ちていてしまったが。

案内されるままに空いた部屋へと入り、すぐさま微睡みに身を任せて。今日は疲れ
た。

明日からは、ようやくいつも通りだ。

その夜を越した後。

また昨日のように朝日が目に入る。

眩しいなと思いつながら、狸寝入りに入りそうになる。

が、もう今は怪我人と言えどこの社員だ。

まだ痛む体を起こして、ベッドから立ち上がる。

ハンガーにかかったYシャツを手に取り、さつさとボタンを止めていく。シャツをインするのはあまり好きではないからそのまま。ネクタイはさすがにしっかりと付ける。

余り締めすぎても苦しくなるだけなのだが。

「一週間ぶりだ、この格好。……まあ、すっかりした格好じゃないんだがな」

そんなふうにボヤキながら、そこにかかっている上着を掴んだ。普通の指揮官が着るようなものではなく、どちらかと言うと技術者が着るような作業服を指揮官の服装風にしたものだ。曰く、彼以外にも整備技術を持った指揮官が居たらしい。よってそんな特殊な服装がある。

そんな上着の袖に腕を通し、ボタンも閉めないままに身なりを整える。

「……さて、転勤先の初めての仕事だ。張り切って行きますか！」

晴れて、彼はグリフィンへと戻ってきた。

考えることもなかった、かつての仲間とともに。

本編

温和日常 I : AR小隊とハイエンドたちが遊ぶだけ

グリフィン・鉄血合同宿舎。

グリフィンの戦術人形たちと、鉄血の戦術人形たちが過ごす大きな建物。任務がない戦術人形たちが、人間と変わりのない平和な日常を過ごすための場所。

最近になって鉄血の戦術人形たちもここを利用するようになり、グリフィンの人形たちと鉄血の人形たちが交流するためのちようど良い場所となっていた。

とある場所を見れば世間話をしていたり、とある場所を見ればちよつと喧嘩をしたり。

そんな平和な日常が繰り広げられる場所だ。

そんな寮舎の1室……

「……おつとお、この船の駒は誰のだ？ 私の狙っていた領地にずけずけと入り込んで……」

「狙った目を出せないアンタが悪いんだろ？んじや、頂きますと……」

「次は私……あつ……」

「AR―15 選手、早くも多額の損失だ〜!!」

「これは……運が悪かったみたいですね」

「ヒヒヒ、俺だつてちゃんと考えてるのよ〜?」

半分屋上、半分屋内の最上階。

日が差し込み、空はいつものように青く澄み渡っている。広い窓からは屋上のスペースが見渡せ、そこから見える景色は荒廃した中でもどこか魅力を感じるようなものだった。

真ん中は吹き抜け、2階付き。

いわゆるペントハウスというところだ。

そんな一室に、グリフィンと鉄血の人形数人が集まっていた。ふかふかでダメになりそうなソファアーヤリラックスチェアが並ぶなか、真ん中のコーヒーターブルにボードを置いて遊んでいる。

部屋が広いからか、特に圧迫感を感じることは無いが……

「なんでお前らわざわざ俺の部屋に上がり込んで遊んでるんだよ！」

「ここ、俺の部屋です。と一言聞こえた。

ここしか空いてなかったからここに入ったんです、ええ。いつの間にかなぜ占領されているんだ！と言いたくもなるよう。

そう、ここはつい最近になってようやく使われた部屋。新しいメンバー、臨時指揮官および整備者となった人物の私室となった場所だった。というか、お前らは何をやっているんだ!？」

勢いのままつい口に出してしまふ。

そんな半ば混乱のままの問いにS O Pが答えた。

「○ノポリーだよ?。」

ボードゲームだった。

いやそういう事じゃない。

だからなぜ自分の部屋でやるのか。

お前らも自分の部屋あるでしょ!とちよつとお怒り気味だよ? いや、だってここプラ

イベートルーム！

俺の私室！

そういう風に猛反抗するリオン。

見渡せば、テーブルを囲む人数は9人。

比較的落ち着いていると言うより、大人しくしているM4A1。

ついさつき派手にやられたのか、項垂れているAR―15。

そんな状態をはしやいで解説するM4SOPMODII。

そんなこと知るかと言わんばかりに相手と火花を散らすM16A1。

はしやぎ過ぎないようにと抑えてくれるRO635。

AR小隊は総集合だ。

何がおかしいかと言われれば、この後だろう。

酷くやられたAR―15に同情の目を向けるスケアクロウ。

M16と真正面から火花を散らす結構男らしい口調をしている鉄血のハイエンド人

形、エクスキューション人形。

ゲームだと結構温まりやすく、煽られるとすぐに乗っかっていく。特にM16相手では。

ROと一緒にハイテンション組を止めようとしている3人組の中の良識派、ハンター狩人。

いや、スケアクロウがおかしいとも処刑人がおもしろいとも言わないが、いや、むしろ鉄血側の方が意外と良識的だが。この人形たち全体から見ると多分トップレベル。

スケアクロウ以外の2人はグリフィンに入ってから会った。根っこは大して変わっていないらしいが、やはり歴史が変わったからか大分穏やかになっている。

特にハンターはかなり常識人枠になっていることに驚きを隠せなかった。

彼は必死に記憶の中を探る。

もう1ヶ月程度経つが、A R小隊のメンバーとこのハイエンド3人組はこんなに仲が良かったか……?と。

別にここに来る前の記憶を探している訳では無い。

ここに来る前ならこんな光景がありえないどころか、ここで殺し合いが勃発しているはずだろう。

それが、今や争いの方法がこんなに平和的だ。

「すみません、本当は止めるべきだったのですが……」

「何故かこの部屋に行くと総意で向かってしまったものだから止められなかったんだ……」

「どうやら、ROとハンターは貴重な休みを邪魔しないように配慮してくれていたらしい。」

「ちよつとその優しさで泣きそうだが、やはり数の暴力には叶わない。」

「1番驚きなのはM4やスケアクロウもここに来たがっていたことだ。彼女らは普段あまり自分の意思を表に出さないことが多い。」

「そんな2人がここに来たい理由はよく分からない。いや、広い部屋でみんなが集まるといことは分かるのだが。」

「一番ここにいてはおかしい人物までいる。」

「……なんでお前までいるんだよ、クラウド指揮官さま」

「ん？ああ、たまには大事な部下たちとサバ……息抜きがしたくてね」

ぶつ飛ばすぞお前。とドスの効いた声で脅したのが良くわかる。まずこの指揮官、いつもは仕事をしているはずなのだ。なのになぜ仕事をほっぽり出してこつちへ来ているのか。

お前の執務室でやらせろよと文句を吐いた。

というか今サボリと言おうとしたな？

逃げようとしてたんだな？

A R小隊巻き込んでまですることかよ！とツツコミを内心で滅茶苦茶に入れていた。

だつてえく、なんて腑抜けた回答が帰ってきた。

お前いつも自分の部下の前でそんな態度をとっているのか……と呆れ半分ながら口に出してしまう。

本人は大して気にしている様子はない。

むしろ周りがいっものことだと言わんばかりの対応だった。

奴、1度ヘリアンに報告した方が良いのでは……？

そんな疑問さえ思う。

いや、俺がくたばる前の時からずっとそうだったが。

「お前、サボってきた訳じゃないだろうな……？」

「怖い！怖い！それだったら俺がROに絞られるから！」

必死すぎる。

でも彼の言うことはあながち間違っではない。

ROは真面目だ。指揮官ともあろうものが仕事をサボってくるものなら引きずってでも戻して仕事をさせるだろう。

追い打ちをかけるなら、ハンターもいる。

彼女も結構真面目な仕事人だ。

最悪威嚇射撃モノだろう。

「でもまあ、こういうのはみんなでやった方が楽しいだろ？なあ処刑人？」

「まあ、それはそうだ。大人数用に作られてるものなんだから、皆で騒いでやるのが一番だよな」

ついさつきまで互いに争っていたM16と処刑人がこちらに顔を向けてそう言う。

曰く、お前もやろうぜってことなのか。

期待の眼差しで皆がこっちへ見てくる。

「どうせなら、リオンさんも一緒にどうですか……？」

「貴方が入った方がもっと面白くなると思います」

M4とスケアクロウが一緒にどうかと誘ってくる。

ほかの面子もそれが言いたかったとばかりに猛ブツシュ。

SOPMODは子犬のような表情でお願いしてくるし。

やろうよやろうよ！とじやれついてくる。

可愛い。でもちよつとくつきすぎだと思えます。

そんな光景を見たスケアクロウは柔らかい微笑みが自然と出ていた。でも、ちよつと

だけ違う気もした。

「もう、SOPMOD。あまり無理強いはダメですよ」

「はい」

AR—15が宥めてSOPはやつと離れてくれた。

普通にお姉さんやってるなあ……と我が子を見るような目で見ていた。いや、今までじゃこんな光景は見れなかった以上、温かい目で見てしまうのも仕方が無いと思いたい。

まあ、みんなでやるのが楽しいなら、俺も混ぜてもらおうかな。そう答えると、皆が嬉しそうにさっさと終わらせて次へ行くぞと言わんばかりにゲームの進行が早まった。

遊びは終わりだとM16が執拗に攻めの体制に。

対する処刑人は今回運が悪いらしく、何度もM16にやられていた。イカサマだ！インチキ！インチキ！と猛抗議の声が聞こえた気がしたが、どうしようもない。

静かに手を合わせて黙祷を捧げた。

AR—15は妙に上手いかないらしく、何回も一回休みの刑をくらってゲームに殺されかけている。こういう物に熱中しないタイプだと思っていたが、意外にもかなり楽しんでるようだ。時々我に返ってはいつもの調子に戻ろうとするが、結局またこうなるらしい。もつと息抜きしてもいいんだぞ？

SOPMODは特に何を考えることも無くただ高い目をだして爆走することを目的にしているようだ。

いつの間にか他のメンバーを周回遅れにさせるレベル。楽しみ方が何か違う気がする。が、見ている分には面白い。

M4は計画的に、堅実に行くタイプらしく、上手く回避できるように仕向け、相手からも上手く巻き上げて着々と順位を上げていた。さすが隊長。

スケアクロウは、まさかの口プロレス。上手いこと分析して相手が有利になるように見せかけておいて自分が一番得をする交渉でのし上がっている。やだ、この案山子さん策士。

指揮官?…:特に何も言うことがなかった。

適度にボコボコにされ、適度に相手を貶める。

なんだかんだ言って正しいゲームの楽しみ方をしている。

皆が皆の楽しみ方ではしゃいでいる。

仕方がない。

俺もひとつ、遊びに付き合ってやるか。

人形たちのお願いを聞くのも、一緒に過ごすのも、俺の仕事だ。と言うよりは、俺の好きな事だ。

だから……聞いてやれなかった分、ここで聞いてやる。

そう思つて微笑んで、騒ぎの中に入った。

「お手柔らかにお願いします」

「そつちもな」

結果？

……俺は惨敗だった。

温和日常 I I : 4 0 4 小隊とはぐれダイナゲート

……検査完了。

総員、異常無し。

強制スリープモード解除。

順次プログラム起動……

「……OKだ。もう起きられるぞ」

周りにあるベッドに4人が眠っている。

双子の容姿をした2人の人形。片や右目に、片や左目に傷を持つ姉妹だ。傍から見ても、顔は非常に似通っている。モニターには、UMP45とUMP9と書かれている。

別のところを見れば、灰色とも薄い青とも取れるか長い髪の人形。目元に赤い涙のタトゥーが入っていて、非常にスタイルの良い人形が寝ている。彼女はHK416と書かれている。

もう1人、他の人形よりも明らかに色素が薄そうな人形。ほかの3人よりも明らかに

幼い容姿で、彼女に至っては起きる素振りすら見せない。G11という名前だ。

ここにいるのは本当は4人ではない。

もう1人形が眠っていた。

曰く、あの姉妹……今しがた起き上がった2人の人形、UMP45とUMP9の姉妹だそう。

だが、初めの俺からしたら全くそうは思えなかった。

傷はないし、特に顔が似通ってるというわけもなく。

一人称に至っても違う。

それでも彼女は姉妹と言い張る。

……当のUMP45が認めているからそうなのだろう。

まあ、俺はこの子を知っている。

グリフィンに入って、初めて失った相手。

その正体が、居るべきはずだった場所のスパイであって。

自分が、酷い後悔を残すほどの相手だった。

忌まわしい『蝶事件』。

そこで失った、一番最初の犠牲者。

UMP40だ。

「ふわあ〜……おはよー、45、9」

「うん、おはよう〜、40姉。45姉も早く早く！」

「待つてよ……なんで2人はそんなに早く立ち上げが終わるのよ……」

UMP姉妹が揃うことなど見た事がなかった。

ちなみに一応、上から40、45、9となっているらしい。

40は2人のことを非常に可愛い妹として溺愛している。

それこそ姉の方がダメになりそうな程だ。

だが、やはり1番上の姉だ。

時には45や9の拠り所になって、姉の一面を見せる時もあれば、時に激励して2人を焚き付ける等、流石は姉だと言えるような人物だ。

45は最近になって今のようになりすっかりした性格になったらしいが……ここでも昔は非常におどおどしていて自信が無い様だった。今は全くで、9を引っ張って言ったり

などもするが……40の前ではどうしても昔のように弱音を吐いてしまいがちになるらしい。それだけ姉が好きで、信頼できるのだろう。

9は末っ子と言うだけあって3人の中でも1番子供らしい性格をしている。姿は全く子供ではないのだが。でも45や40を献身的に支えたりしている所や、しっかりとした面もみせるために出来た妹だと思わされることが多い。

「検査は終わったわよ、さっさと起きなさいG11」

「……………すやあ……………」

残るもう2人。

こちらは姉妹と言うよりかは、親子の方が近い気がする。

いつも何かとつけて寝ようとするG11を無理やり引っ張り起こしたり、悪態をついたりする割には意外と面倒を見てやっているという印象が強い。

なんだかんだ言っても、ここに来る前でも416がG11を見捨てたりはしなかった事からも何だかんだで大切に思っていることが分かる。今も全然起きようとしないうるG11を起こそうとしている真つ最中だ。

「お・き・な・さ・い・！」

「いたい！痛いよ416……もつと優しく起こしてよ……」

まあ、方法は少し荒っぽいのだが。

そこは眠つたらなかなか起きないG11だから仕方がない。

いやいやそうに漸く起き上がった。

45が周りを見渡して全員起きたことを確認した。

うん、全員起きたわよとこちらを向いて伝えてくれた。

全員がこちらを向く……訳ではなく、代表してこちらに結果を聞きたいらしい。

「ああ。全員問題無しだ。損傷もほぼ無し、メンタルモデルも安定してる。プログラムのエラーやら何やらも全部OKだ」

この5人に対して、検査を行っていた。

その結果を彼女は聞きたかったというわけだ。

何せ、任務の帰りだ。

さらに言えば彼女らは普通の部隊ではない。

AR部隊と対を成す、裏のエリート部隊。

404 Not found。

通称404小隊。

やはり存在していたのだ。

しかし、やはり俺のいた頃の404小隊とは違うらしい。

本来、他の人形たちは404小隊のことを知らない。

同じ任務に向かったとしても、その部隊は404小隊に関する記憶を全て消去されてしまう。

いわゆる、人間の指揮官しか知らない『暗部』のような物だ。この場所でもそれは変わりはないのだが……

こちらのグリフィンでは情報操作が行われていない。

404小隊という表の部隊の名目で動いている。

しかしその裏は表向きにすることが出来ない破壊工作や、奇襲作戦、夜間作戦等を専門に行っている部隊だ。

皆が『404小隊』の事は知っているが、『404 not found』については何も知らない理由がこれになる。

表のAR小隊と、裏の404小隊。

ここのグリフィンの2大主力部隊だ。

で、丁度良く404小隊が任務を終えた所だ。

念の為、任務後は必ず損傷のチェックやメンタルモデル、プログラムに異常がないかどうかを検査する。

特にAR小隊と404小隊は念入りに行う。

主力だから、何か問題があったら面倒という事だ。

まあ、主力であろうが無かろうが、そう言ったことは必要不可欠だ。

「いつもありがとう、私達も助かってるわ」

「礼はいい。俺の仕事だし、詳しくやるのは俺の性分だからな」

45が隊長として、こちらに礼を言う。

別にお前たちが戦ってくれている分、こちらがメンテナンスやらなにやらに精を出すのは当たり前なの対価だ。

それに、そうしなければ申し訳が立たない。

人形に携わる者として当然だ。

……ところで。

ひとつ聞きたいことが。

「……なあ、9？」

「うん？どうしたのリオンさん」

なんで末妹さん、ダイナゲートわんちゃん抱えてんの？

あまりに自然でわからなかったけど検査中にも普通に抱えてた。まだ膝に乗っけるし。

当のダイナゲートは完全リラックス。

前足も後ろ足も伸ばしてスリープ中だ。

メインカメラも余裕で閉じている。

完全に実際の犬と変わりない。

「というかお前か！検査中に何か色々エラー吐いて対処面倒だったんだぞ！本人に問題なくて良かったけど！」

「私たちのへりに間違つて乗つてたのよ、そいつ」
「おかげであたい達、もー大混乱でさ」

416とUMP40がその経緯を話す。

「どうやら、任務に向かうへりに偶然迷い込んでしまったらしい。本来は別のへりに小物運んでいたみたいなのだが、何かしらのエラーで間違えてきてしまったのだろう。」

いち早く気づいたのは9だったらしく、今回の作戦ではダイナゲートが斥候スカウトのような役割を果たしてくれたおかげで非常に任務が楽になったそうだ。

それからか、404小隊のメンバーによく懐いてしまった。
特に9の膝の上で寝るのがお気に入りらしい。

その様子を見ていた416がまるでG11ね。と呟いて通称『ミニG11』とまで呼ばれるようになってしまった。

そんなダイナゲートだが、元は別の場所の子。

どうせなら……そんな目で9がこちらを見てくる。

「この子、404に引き抜けないかな……なんて……」

「私としても、この子がいてくれる助かるかな。任務の成功率が上がるし……何より可愛いからね」

9のお願いに便乗する形で45が言った。

確かに、話に聞く限りこいつはかなり優秀な働きをしていたようだ。サポートとして迎え入れればさらなる任務の円滑化が進むことは間違いないだろう。

話の中心にされてるダイナゲートは自分の話とは知らずに未だに寝こけている。

こりや私以上だね……と、小さくG11が言った気が。

そんなダイナゲートを優しく9が撫でている。

やめてくれ、この平和な空間は俺に効く。

そんな雰囲気だったが、416が口を開いた。

「元々は別の部隊の子よ、引き抜きなんてそうそう出来ないわ」

「……まあ、確かにね……プログラムもまた少し変える必要があるから、難しいんじゃないかな……」

部隊に勤める鉄血の量産人形たちは、自分の所属をはつきりとさせるためにプログラム内に所属部隊を識別するためのプログラムが入っている。

今回の件ではあくまで他の部隊のダイナゲートが迷い込んできただけであり、それを引き抜くとなると手間も掛かってしまうだけでなく穴埋めをしなくてはならないなどの面倒も起きてしまう。なかなか現実的ではないだろう。

「そこをなんとか！ほら……ここには私たちをメンテナンスできる天才さんがいるでしょ？」

「……あー、なるなる！そういうことかあ！」

「……なんで俺の方見るの？」

つまり、俺に交渉してきてくれと。

というか、プログラムの書き換えとかしてつてこと？

簡単に言わないでくれと言いたいようなことをサラツとお願いしますも言わないでそんな上目遣いで見ないでください……本当に、落ちる、落ちる！

ただでさえ人形の笑った顔や喜んでいる姿に弱い人間にそれは大ダメージを与える

からその表情は非常にいけない。

「……ダメ、かな？」

「お願い、あたいからも頼むよ！」

「私としても、お願い」

「……はあ。私からもお願いするわ。この子をこっちに来れるようにしてくれないかしら」

「……この空気じゃ、流石に止められないよね……手を尽くしてあげて欲しいな」

404 小隊総出の総攻撃。

りおんは だいだめーじを うけた。 ▼

……確かに、ダイナゲートがあとまでリラックスしているのも珍しい。今いる場所よりも、ここにいらっしゃる方がいいのかもしれない。……だから。いつの間にか目を覚ましていたダイナゲートの目の前にしゃがんだ。

「……お前は、どうしたいのかな」

聞いてみた。

機械といえど、この子にも思考回路がある。

柄に合わないような優しげな声で、そつと語りかけた。

当のダイナゲートは、それを聞くや否や9の膝から降りる。

えっ……？そんな声が聞こえた。

これは残念だが……そう言おうと思つた時だ。

ダイナゲートは皆の周りを駆け回り始めた。

びよんびよんと跳ね回つて、一人一人のところをぐるぐる。最終的には9の足元に戻つてきて、またいつものポジションに戻ってきた。……ああ。そういうことかと理解するに難くなかつた。

「……わーつたよ。その子の元の所属調べて交渉しとく。ただ、許可が得られるかどうかは確実じゃないからな」

少し表情が緩んでしまっただろうか。

平和的なこの光景には、さすがに勝てない。

しっかりと確實ではないという釘をさして、交渉してみるといふ約束を取り付けた。そういつた途端にみながいっせいに喜び始める。

きやつきやとはしやく奴もいれば、穏やかに喜んでゐる奴もいる。

……これが見たかつた。

どうやら、断らないで正解だつたな。

やはり、誰かの笑顔に勝るものは無い。

心無しか、ダイナゲートも喜んでゐるように見えた。

「……さーて、お仕事が増えましたよつと」

どうやら、迷い込んだダイナゲートは代理人の所の子だったらしい。代理人は、本人がそこがいいと思っっているならいいですよと意外な答えを返してくれた。

実は、ぶつちやけた話を言うとプログラムの何かしらのエラーで所属が404小隊となっていた。恐らく、エラーが起きた時点でデータが消失し、初めて目視した戦術人形たちが404小隊だったのだろう。その結果、対象の人形が所属している部隊をデータベースから調べだし自動的に書き込んだものなのだろう。自分的には手間が省けたが。

これじゃ、選択肢など無かったなと内心苦笑だった。

温和日常ⅠⅠⅠ：錬金術師さんのちよつとした悩み

グリフィン・鉄血共同寮舎最上階。

この前の息抜き集会があつた例の広い部屋。

今日は特に騒がしいわけでもなく、静かなプライベートの時間を満喫していた。

何せ、仕事が無いと思わせておきながら意外と仕事がある。実は修理以外にも人形たちの相談等に乗ることだってある。どうしたら強くなれるか、喜んでもらえるか。

逆に、自分の欠点をどうすればいいかなど……数えればキリがない。そんな人形たちの相談役ともなっている俺だった。

この前の騒ぎからは、何とか私室の平穏を守っている。

ソファアに座り込んでふんぞり返るような体制でぐだーつとだらけている。だっていつもが騒がしいんだもの。

まあ、それが一番俺が望んでいたものだが。

そんな静かな部屋の中、インターホンが鳴り響いた。

……律儀にインターホンを鳴らすとは珍しい。

カメラのモニターを確認すると、そこには2人の人形。

どちらも落ち着いたお姉さんという印象の2人がいた。

片や鉄血所屬、片やグリフィン所屬で、意外にも珍しい組み合わせでやってきたものだ。

「……今鍵開けるから、入っていいぞ」

そういつて扉の鍵を開ける。

……どうも、1人で落ち着ける時間は無いみたいだ。

「……すまない、唐突に押しかけてしまったな」

「本当にすみません、困っている所を放っては置けなくて……」

先程俺の部屋の前に現れた2人の人形。

鉄血のハイエンドのような……いや、ハイエンドそのものだが。そんなモノクロなカラーリングが特徴的な白く長い髪をしていて、鉄血達の中でも際立ってクールな印象を受ける人物……錬金術師だ。

もう片方はグリフィンの中でも名の知れている人物。その穏やかな物腰や魅力的な佇まいからは想像もつかないほどの実力者であると裏で囁かれているほどの人気者。スプリングフィールドだ。

この2人が一緒にいるとは珍しい。

本当に何があつたんだと思えるような状況だ。

さらに追い討ちにはいつものようなテンションじゃないのだ。アルケミストが妙に落ち込んでいる。

お前はそんな性格だったか……？

そんな風にさえ思う。

世界線が変わったと言えど、さすがにここまで大きくは変わらないだろ……と内心

思った。

「……アルケミストがそこまで落ち込んでるって、明日は崩壊液コーラップスの雨でも降るんじゃないか？」

「本人を目の前にして散々な言い様だな、首を斬らりたいか？」

いや全然。滅相もございません。

冗談だ冗談と引きつった笑いでなんとか誤魔化す。

まあ、こんな世界線な以上向こうも本気じゃないのだろうが、戦場でないところで武器持ち出されたらビビる。

普通にビビる。

だって怖いじゃん。

話を戻そう。

どうしてアルケミストはそこまで落ち込んでいるんだと直接的に聞いてみた。

回りくどく聞くのは性に合わない。

変に気を使うよりも、さっさと聞いてさっさと処置する。人形の修理と同じようなも

のだ。

普段はあまり弱音を吐かないコイツだ。

相当重い事があつたのだろう。

……そう、覚悟して聞くつもりだったのだが。

「……………最近、破壊者が私から距離を取っている気がしてな」
デストロイヤー

沈黙。

ただただ沈黙。

いや、どう答えていいんだこれと完全に言葉に詰まった。

隣にいるスプリングフィールドは完全に苦笑していた。

「……………まあ、とりあえず、事の経緯を聞かせてくれ」

アルケミスト曰く、最初に言った通りに最近デストロイヤーが彼女を頼ってくれなくなつてしまったらしい。

なんでそういう風に思ったのかを聞いてみると、色々なことに対してアルケミストが

手伝おうとすると、一人で出来ると突っぱねられてしまうようだ。

いつもの私生活に関してもそうだし、時々出る戦闘任務に関してもそうらしい。

言われてみれば、昔もアルケミストは姉のような感覚で皆の面倒を見ていたなと思いついた。特にデストロイヤーは良く懐いてくっついていたし、それを世話するアルケミストもどこか機嫌が良さそうだった。

それがここでも反映されてはいたが、ある日突然そうやってくっついたりしなくなつたし、自分を頼ってくれなくなつた……親離れならぬ、姉離れと言うやつだろうか？

「……確かに、突然よく後ろを付いてきていた子が急に離れると、寂しくなっちゃいますよね」

分かってくれるか……？と弱つた目をスプリングフィールドの方に向けるアルケミスト。

スプリングフィールドもここでは人形のような存在であり、その気持ちかわかる数少ない人形だった。

なぜ付いてきたか、それは自分にも分かるような感情での悩みだったから余計に放つ

ておけずに来てしまったらしい。2人の人形は固く握手を交した。

「スプリングフィールド……！」

「アルケミストさん……！」

ここに、人形姉同盟が生まれた。

……本当の姉妹はどちらも居ないのだが。

まあ、この光景も平和的で面白いからいいのだが。

で、なぜ俺に駆け込んだできたのかが分からない。

俺はそういう感覚が分かるようなわからないような微妙な立ち位置だからそういうのはちよつと……となる。

「お前なら、私達の事をよく見ているから分かるかと思つたんだ……と言うより、皆の中では困つたらお前のところに行くといいと言われてるぞ」

「グリフィンの子からもリオンさんの評判、結構いいんですよ？」

なんかもう、やっぱりとは思つたが。

相談役のような話が出回っているのか……

俺も万能ではない。

人の気持ちを読めるわけでもなければ、全てにおいての対処法を知っている訳でもない。

そんな俺になぜそんなにも相談が回ってくるのか。

理解出来なかつたが、まあ頼られた以上はしっかりと聞いてあげなくてはならない。何度も言うが、それも俺の役目のひとつだと思っっているからな。

「……デストロイヤーがねえ。確かに、アイツは子供っぽいし、お前たちに甘えているところもよく見る。……こりゃあ、あいつの行動をよく見てみる必要があるかもな」

デストロイヤーは恐らく、鉄血ハイエンド勢の中で最もメンタルの年齢が低い。故に妹扱いや、子供扱いをされることが多い。本人はそんなことないと抗議しているが、なんだかんだ言ってもその甘やかしを享受している。

何回か俺の方にも縋り付いてきたこともあった。

そんななんだかんだで受け入れているデストロイヤーが急に変わる理由……あまり思いつきはしないが。

当の本人の動きを見るのが一番だろう。

かと言つて、隠しカメラをつけるなんてしたら俺が犯罪者としてしよつぴかれてしま
う。

折角こんな平和な世界線に来たというのに手錠^{ワツバ}かけられて刑務所^{シヨ}行きだなんて死ん
でも御免だ。

となると……上手いこと動向を探つて偶然居合わせたという体で話してみるくらい
しかない。

「……まあ、アイツのことだ。そんな悪いことは思つてないだろ。明日、ちよいと調べて
みるよ」

その旨を伝えたら、アルケミストは静かにありがとうと礼を返してくれた。彼女らし
くもない。普段一番礼を言わなさそうな奴筆頭だと言うのに。まあ、意外に義理堅いや
つというのも元々知っていたが。

スプリングフィールドのほうもお願ひします、と丁寧^{テイジヤウ}に頭を下げる。ここまで頼まれ
ては、こちらも引くわけには行かない。

次の日。

あの後、デストロイヤーを見たという人物を手当たり次第に当たってみたが、全員が全員色々なところで見ているようだ。だが、比較的多く見られているのは射撃演習場だそう。

彼女がアルケミスから距離を置く理由を聞くためにも、射撃場へと向かった。

最近はあまり使うことの少ない射撃演習場。

人気の少ないこの場所に目立ちやすい格好の少女が佇み、時に手に持つ大きな得物を持つてして演習ドローンに対して非常に強い衝撃を与えては吹き飛ばしていた。

「……よう。最近にしちゃ珍しく訓練か？」

「わあ!? なーんだ、リオンさんかあ……」

驚いてビクリとする一人の幼い少女。

恐らく、鉄血一可愛いと呼ばれるであろう彼女がデストロイヤーだ。いつ見ても可愛いらしい人物ではあるが、一番の破壊力を持つ得物を使う、まさに破壊者の名に相応しい人形だ。

そんな彼女が情報通り、射撃演習場に来ているとは珍しい。

本来、彼女の役割は対人戦等ではなく、破壊工作がほとんどだ。それなのにも関わらずこんなところに来るとは、なにか理由があるのだろうか……だからこそ、ここに踏み込んだ。

「随分と頑張ってたんだな。……なんか、頑張るだけの理由が出来たか？」

「う……そういう訳じゃ、ないケド……」

なにか言えなさそうな雰囲気だ。

こりや当たりかもしれない。

もう少しだけ詰めてみるとしよう。

デストロイヤーはなんだかんだ言っただけで正直だ。嘘が上手い方ではない。

その証に既に俺が嘘だなど確信している。

「……言えないことなのか？……後ろめたいことでもないだろ」

そう言つて近くのベンチに腰掛ける。

グリフィンの職員とは思えないような態度だが、これがいつもだ。偉そうだなと思われているかもしれないが、そのくらいの余裕を見せた方がいい。

優しい声色で唆してみる。

ちよつと悪いことをしている気分になってきた。

「そのー……アルケミストに、頼つてばかりもいけないかなって思つて……それで、ちよつとはこういうこと頑張つた方がいいかなって……」

なるほど。やっぱり正直だ。

すぐに心の内を明けてくれた。

曰く、デストロイヤーはアルケミストにいつも頼つたり、甘えてばかりいるから悪く思つたようだ。

その結果、アルケミストへの恩を返せるように頑張つて訓練をしていたらしい。他のところで見かけたところも聞いてみたが、こういった戦闘訓練だけでなく、日常的なことも頑張つて覚えようとしていたようだ。

「……全く、健気なやつだな。お前は」

自然と手が手頃な頭の上に乗っかっていた。

ちよつと荒っぽく、わしやわしやと頭を撫でる。

やめてよー！と聞こえるが、ちよつと丁寧にするだけ。

だつて、あまりにもこの子がいい子なんだから。

むー、と頬を膨らませてツンとしてしまう。

全く、アルケミストがつい世話を焼いてしまうのもわかる気がする。

「どこかで聞いたの。頼りすぎると、その人がいなくなつてしまった時にどうするの？つて……だから……」

「……大丈夫だよ。お前にその意識があるなら、頼りがちなお前だつて変えられる。

……でもな、それははっきりと本人に言つてやれよ。アルケミスト、嫌われちゃったん

じゃないかって心配してたぞ」

本人が心配していた事をバラしてみる。

そんなことを聞いたデストロイヤーは、アルケミストを嫌いになるわけじゃないじゃん！と声を大にして言っていた。それはそうだ。自分の姉貴分が好きだからこそ、迷惑をかけないように頑張っていたのだ。

このことを聞いたら、アイツは喜ぶだろうな。
そう思った時だった。

「……デストロイヤー？」

「……あつ、アルケミスト……」

随分なタイミングなこと。

どうも、スプリングフィールドが協力してくれてここに居ることを教えてくれたらしい。
い。

途中からなにか心配がするなど思ったら、そういう事だったのか。

「……どこから聞いてたの？」

「お前が私に頼りすぎていると思つていふところからは聞いていたよ」

アルケミストは続ける。

私の事を思つてくれるのは嬉しい。

でも、急に距離を取られるのは辛いと。

それに……

「私は姉のような物だ。頼つても全然悪くは無い。妹の世話を焼くのも、姉の仕事だろう？」

その一言で、空気が変わった気がした。

詰まっていた空気が和らいだというか、温かい雰囲気に変つたというか。

当のアルケミストは、普段見せないような優しい顔をデストロイヤーに向けていた。その理由がわかつて安心したからなのか、それとも、彼女にそんなことを思わせてしまつていたのかという罪悪感か。

どちらにせよ、その表情はあまりにも平和的だった。

そんな言葉を聞いたデストロイヤーは、思わずアルケミストに飛びつく。

「ありがとう、アルケミスト……！」

全く。

ここの姉妹というのは、どうしてこうも微笑ましいのか。

良かったな、アルケミスト。

そう微笑みながら声をかけた。

そんな当の本人は、お前には感謝しなきゃならないないつものクールな表情に戻っていた。

「スプリングフィールドにも感謝しとけよ」

「ああ。彼女も色々手を尽くしてくれた。……グリフィンの人形たちは、随分と協力的で助かるな」

冷徹な鉄血の戦術人形は、グリフィンの温かみをその身をもって味わった事だろう。今まで以上に、その顔が穏やかになっていた。

その後、アルケミストとスプリングフィールドはセットでよく俺の部屋ウチにやって来る。

悩み相談とかではなく、かしましい妹分談議なのだ。

まあ、それはそれで楽しそうなので良いでしょう。

……何時になったら、俺の部屋は集会所から脱却できるんだ？

温和日常 I V : 情報屋侵入者

鉄血工造、建物内……

暗く陽の当たらない場所に、蠢く影が2つ。

「……例の物は持ってきた？」

「……ええ。勿論、ご要望通りにね」

「……ありがと、これは報酬よ」

「ありがとう……これで取引完了、ですわね」

グリフィン建物内、指揮官の部屋。

あの指揮官のものとは思えないほど整っている室内。よく整理されたデスクに、様々な装飾品。

それだけのものがあると言うのに乱雑さを感じさせないしっかりとしたレイアウト。ここに来る者は、上官の前だということを意識させられそうなほどの雰囲気を出している。

そんな中で、仕事をする1人の影と、息抜きに来た1人の影があった。

「……ねえ、リオンさんや」

「なんだい、クラウスさんや」

今、仕事中なんだけど……

そんな声が聞こえた気がした。

そんなことは事知らず机の上に座っている。

仮にも指揮官の前だと言うのに大丈夫かと言われそうだが、俺とあの指揮官の仲だから許されている。

積まれた資料の山を見てうわあ……と声が出るが、手伝うことはあまりない。何故か？この程度ならばつぱと終わらせてしまうのがこのバケモノ指揮官だからだ。

「そう言えば……最近妙な噂があるんだよね……」

「なんだそれ」

クラウス曰く、その噂では

グリフィン内にある情報をグリフィン・鉄血内だけで売買するという恐ろしい人物がいるらしい。

と言つても、最重要な機密情報ではなく部屋のキーから個人個人のプロフィールや好きな物、趣味、隠し事やら何から何までを教えてくれると言うらしい。もちろん、対価は必要だそうだが。

自分のプライベートを知られることもあるらしい。

さらに指揮官は続けた。

最近自分の部下という扱いになつている戦術人形たちが夜這いを仕掛けてきそうになつたり、いつの間にか待ち伏せをしていたり、妙なテンションになつていたりという変に恐ろしい未知の事象に鉢合っているようだ。

「9A—91が俺のベッドの中にいたり、TMPがいつの間にか俺の私室で日向ぼっこしていたり……なんというか、色々と思議なことが多すぎてね」

流石に彼は嘘はつかない。

だが、本当だとしたら色々危ない。

そんなことをする奴は早く止めなければ。

恐らく、指揮官が襲われる。

物理的ではなく、もつと別の意味でだ。

そんな指揮官の貞操を守るためにも、ある程度の調査をしなければならぬだろう。そういう風に2人で唸っているところに、一人の人形が入ってきた。

「入るわよ、指揮官」

高圧的な言葉使いで入ってきた人形……

自らを殺しのための道具と呼びながらも、人間のような一面をいつも見せる……いわゆる、ちよつとしたポンコツな人形。

自称エリートのツンデレこと、WA2000だ。

なぜ彼女がここにいるかと言うと……

「お、わーちゃん！ごめんね、今お客さんが来てるんだ」

指揮官は、わーちゃんと言う愛称で呼んでいる。

そんな呼び名で呼ばれたWA2000はわーちゃんって呼ぶな！と猛反抗している。眉間撃ち抜くわよ！という恐ろしいことも時々聞こえてくるのは何故だろうか。

相対する指揮官は、どこか楽しそうで嬉しそうだ。

まあ、俺もこの光景は見慣れた。

つつけんどんなWA2000をからかつてはその反応を楽しんでいるのが指揮官だ。悪い奴だなと思いつつも、当の本人も本気で嫌がつている訳ではなさそうなことから何も言わないでいることが多い。

そんなWA2000だが、追加の資料を持ってきたらしい。

ただでさえ多い仕事量にさらにプラスするのかと思っていたが、当のクラウド指揮官様は適当な話をしながらばばっと終わらせていく。

恐ろしい男だ。

「ありがとね、わーちゃん」

「べつ、別に……あんたが私を副官にしたからやってるだけであって……これは普通の仕事内容よ！勘違いしないでよね！」

笑顔で感謝を伝える指揮官。

そんな言葉についつい赤面してつつけんどんな態度を取ってしまうWA2000。甘い。……非常に甘ったるい。

コーヒーかなんかを飲んでいたらあからさまに苦さが消えるレベルだ。この2人、俺がいるという事を忘れているのではなからうか。未だ遠慮せずに指揮官は、自然に口説いているし、そんな指揮官の言葉を受けてまた赤面する。

……だんだんとここにるのが悪く思えてきた。

「……あつ、そうだ。……その、指揮官。これ、余ったから食べたければ食べていいわよ」

そうやって、WA2000はクッキーを机に置いた。

生地の中にはチョコが混ぜこまれており、オマケにチョコチップまで入っていた。

別にあんたの為に作った訳じゃないから、ただ余っただけよと素直じゃない声が聞こえる。

……たしかこれは、アイツの好物だったはずだ。

隣を見れば、もう完全に目を輝かせている。

食っていい？これ食っていいんだよね？と完全に腹を空かせた野生動物のような目

をしている。

俺でも流石にそれは引く。

「それじゃあ……遠慮なく頂きます」

そう言つて、クツキーを食うアレの顔はもうだらしないだらしない。確かに、美味しいのは分かるがそんな顔をしては行けないだろう。

ちらつと横目でWA2000を見て見たが、こちらの方も指揮官が見てないことをいいことに喜んでるのが目に見える。

……よくコイツの好みを知っていたなと感心する。

「これ凄い！俺の好きな味の確に抑えてるよ！ありがとうわーちゃん！」
「わーちゃん言うな！……まあ、その、喜んでるなら良かったわ」

なんというか、ここだけ空気が違う。

助けて。胃もたれ起こしそう。

と言うか、非常に邪魔者になっている気がして申し訳ない気持ちと何やらで滅茶苦茶

潰れそう。

とりあえず、なんとか出てみよう。

「……そろそろ何か仕事が入りそうだと思うから、俺はそろそろ退散するわ。例の噂の件は気になつたら調べてみるから」

「あら、そうか。まあ無理しない程度にね」

例の噂、という単語が出た時にわーちゃんがピクリとした気がする。俺は見逃さなかつたぞ。

……どうも唐突なやり取りと言ひ、急な行動といい。

こいつは何かある気がする。

謎の情報屋……色々な意味で恐ろしいやつだ。

必ず尻尾を掴んで正体を暴いてやろう。

そう思つて執務室から出た……

矢先だった。

「……あら？貴方は……整備者さんではありませんか」

「ん？ああ、侵入者か。珍しいな、お前がこっちの方に来るなんて」

そこに居たのは、普段はここで見ない人物。

演劇の様な言葉の言い回しをする、いかにも胡散臭いと呼ばれそうな人形最上位のハ
イエンド人形、イントルーダー。

俺が知らなかった、数少ない人物のうちの一つだ。

彼女に関しては俺はここに來てからの全くの初見。

中身がどんな物かも分からないため、正直なところ接し方が他の鉄血ハイエンドたち
とは勝手が違う。

さらに飄々とした態度だから扱いが難しいっただけだ。

「私がこちらへ來たのは偶然用事があったからでしてよ？」

「へえ？……まあ、そういう時もあるか」

彼女は偶然執務室の前を通りがかつたらしい。

……にしては随分と扉に近かった気がするが。

……考えすぎか。

今執務室にはWA2000と指揮官。

あの甘い空間を見た奴はあそこに入ろうとは思わないだろう。いや、邪魔できるわけがない。

「そちらこそ、妙な足取りで執務室から出てきましたが。何かあったのですか？」

「……いいや？ WA2000と指揮官が仲睦まじげだったんでね。邪魔者は退散したってことだ」

執務室から出てくる俺の姿が結構おかしかったらしい。

少し半笑いで言われた。

ちよつと腹立つぞ。

……でも、そんなにおかしい格好をしていただろうか。

まあ、多少げっそりはしていたかもしれないが。

「……どうやら、役に立ってくれたようですわね」

おい。

あからさまに小声で絶対に怪しい事言っただろ今。

ボロを出すのが早すぎる。

今のも聞き逃さなかったからな。

リオンさんは地獄耳なんだぞ。

ちっちゃい事でも齧り付くんだぞ。

「……どういふことだ、イントゥルーダー？」

なんでもありませんわと何事も無かったかのように返しているが、絶対に何かを隠している。

いや、何かと言ってもほぼ確信だが。

……確か彼女は、セキュリティのハッキング等に長けていて、情報戦に関しても得手だった筈だ。

一番重要なのは、情報に強いということ。

さらにハッキング等にも長けているとなれば……

「まーさかとは思うけどさあ……噂の正体はお前か？」

「な、何のことを言っているかわかりませんわ（棒読み）」

完全な棒読みだ。

あからさまにコレだ。

飄々な態度が早めに崩れてくれたのは助かったというところだが。

表情は変わらず薄ら笑いをうかべたままだが、確実に焦っている。……会ったばかりの頃の冷静なキレ者の一面はどこへ行ったのやら。それとも私生活ではスイッチを切りかえているのか？ そんなことはどうでもいい。

「……ちよーつと来てもらいましよつかね、大きなネズミさんや」

「私何も知りません！何も知りませんから離して下さいませ！本当ですよ？私無害なハッカーですのー！」

見苦しい言い訳だ。

と言うより、ハッカーは広義で言う悪い奴だ。

本当の意味は違うが、広く知れ渡った単語をここで使うのは悪かったな。

「……えっ?!ちよつ、イントウルダーさん?!」

「おろ、なんでリオンが引つ張つてきたのさ」

執務室にこのデカいネズミを連れて突きだした。

そりゃあプライベートの危機なんだ。

そうもする。

犯人は確実に彼女なのだ。

……あくまで持っているのは失言という名の言質であり、証拠と呼べるものはそれくらいしかないのだが。

WA2000は慌てふためき、指揮官はなぜここにイントウルダーがいるのかまだ理解できないまま思考停止していた。あまりにもわーちゃんの慌てようが異常だ。

これは……グルだな?

「……おそらく、こいつがその情報屋だ」

「え、っ、こんな近くにいるものなのかい!？」

口を尖らせるイントウルダー。

私は一切喋りませんと言わんばかりの態度だ。

もう容疑はかけられている、覚悟したまえ。

俺はイントウルダーがその情報屋だと思う根拠を述べた。彼女が性能的に電子戦特化であり、ハッキング等の情報に強い人形だということを主にして、ついさっきの失言の件も合わせながら説明した。

「ふむふむ……筋は通ってるんじゃないかな」

「で、ここにお客様が1人いらっしやる」

そう言って、WA2000の方を向く。

確実に目を逸らした。

もう当たりだ。

確実に当たりだ。

……真偽の程は？とイントウルダーに問うが、答えない。私は知りませんよと口笛を拭きながらごまかす。

今のお前、演出家じゃなくて道化師になってるからね。

「……そうだな、クラウドス、教えたはずのない情報とか思い当たる節とかはあるか？」
「うーん……あー！」

思いついたように指揮官が言った。

俺、お菓子の好みは誰にも教えてなかったんだ。

と。

わーちゃんがくれたのドンピシャで、しかも味も全く持ってど真ん中だったから驚いちやっただよねと気の抜けた顔で話した。ああ、これは完全にトドメ入ったなど確信した。

つまり、わーちゃんはイントウルダーから、指揮官の好みについてを仕入れた。普

段から仕事をしている指揮官への感謝か、それとも本人の指揮官への好意からかは分からない。

だが、結果として指揮官が喜ぶ結果になったから内心あんなに喜んでいた。ここまで俺が見ていた出来事の辻褄が合った。

「……弁明はあるか？ 侵入者さん」

「わ、私は良かれと思ってやったのよ？ だって、恋する乙女とかつて応援したくなるじゃない？ だから、少しでも力になろうと思って調べた訳で……」

……こいつも、悪意が無いタイプだった。

良かれと思ってやった事だと。

まあ、その弁明の仕方からしても悪気は本当に無いのだろう。……仕方が無いなど一息つく。

こちら側は後で問い詰めようと思った。

が、まだ問題はあった。

思い切りネタばらしをされたわーちゃんだ。

「……そ、その……これは……」
「わーちゃん」

いつにもない真剣な表情、真剣な声。

WA2000は恐怖に震えた。

また怒られてしまう。

指揮官に嫌われてしまうと恐れた。

指揮官に気にいられたいからやった事なのにと自分のやったことを後悔した。

「わざわざ回りくどいことせずに聞いてくれた方が嬉しかったのになく、ほら、そしたら俺に興味を持ってってくれるかなくとか、そういう方向でも自覚できて嬉しかったんだけど……」

……はずだったのだが。

どうやらこのほのぼの指揮官、全く持つて自分の情報を買われたことに関して怒っていない。触れてすらいない。

なぜそこまで寛容なのか。むしろ寛容すぎて怖い。

「そ、そんなこと面と向かって聞けるわけないでしょ！バカ指揮官！アホ！朴念仁！」
「ちよつと!? すつごいひどい言われようなんだけど!? そりやないよわーちゃん！」
「うるさい！ 私の気持ちなんてどーせわからないわよ！」

また始まった。

……正直な所、この話で仲が険悪になってしまったら後悔するにきれなかったんだが。

だが、指揮官が指揮官なだけになんとかさういうことは回避出来たらしい。ひとまずは安心だ。

……イントウルダーにはまだ問うことがあるが。

「まだ余罪の疑いはあるぞ。……指揮官の部屋に侵入した人形がいるんだとき。身に覚えは？」

そんな問いを投げかけられたイントウルダーだが……

「……？いえ、私が情報を渡したのはWA2000だけのはずよ」

全く動じず。

さっきの慌てようはどこへ行ったのだから。

聞いてみれば、部屋のキーは安全面の問題で嚴重に守られるべき情報だから、そんなところをハックしたりはしないとのこと。故に部屋の解除コードなども知らないし、それを渡した覚えもないと言っている。

……？

待てよ？

「……じゃあ、9A-91やTMPはどうやって指揮官の私室へ……？」

悪寒が走った。

イントルーダーも同じだ。

もつと恐ろしい何かに勘づいてしまった。

……この話は、黙っておこう。

これ以上は、何も追求しない。

何も問わない。

お互い、暗黙の了解だった。

その後、9A-91やTMPの件に関しては、指揮官のロツクのし忘れという件に気が付いてイントルーダーが猛抗議していたのは、また別の話だ。

温和日常V：夜空の下の記憶語り

グリフィン・鉄血合同宿舎。

もはや溜まり場と化している最上階。

今日は珍しく、いつもの喧騒がない。

それもそうだ。

もう日が沈み、月が雲から顔を出している頃だ。

さすがにこの時間まで人の部屋で騒ぎ立てるやつはいないと思うが……いや、AR小隊のバカ姉貴^Mや処刑人……アルケミス⁶トやスプリングフィールド^同はそうしかねない。

久々の静寂。

特にはしゃぐことも無く、バルコニーで夜風に当たっている。

欠けていない完全な月が外を照らす。

本当は、適度にこうであればいいんだがな。

そんな中、日中の様に1つ。

自分を呼ぶ電子音。

……今日は久々に気分がいい。

お出迎えしてやるとしようか。

「申し訳ありません、なかなかスリープモードに移行出来ないもので」

意外な客だった。

何時もは誰かしらに付いてくる人物が、珍しく1人でこの部屋へやってきた。この世界でも、初めての人物。

いつも通りふよふよと浮いたり、そのまま地に足をつけたり。どこことなく落ち着かな

い様子だ。

「いや、そういう時は誰だつてある。……昼間みたいにバカ騒ぎしなきゃ別に上がったつて構わない」

スケアクロウ。

鉄血ハイエンド勢の1人にして、自分に関する様々な関わりを持つ人形だ。普段はガスマスクを被っているようだが、今日は珍しくそのままの素顔を晒している。

彼女は隠すほど醜い顔では無いと思うが。

寧ろ、よく整った魅力的な容姿だ。

眠れないようだったから、眠る前の状態のままこちらへ訪れたのだろう。

たまには、荒廃した夜景でも見ながらお話ししましょうか。そんな1度は言ってみたいようなセリフを微笑みながら口ずさみ、2人でバルコニーへと移った。

「……こちらに来てから早1ヶ月、どうですか？元いた世界と比べて」
「……やっぱりここは平和だよ。この一週間の間の出来事だけでも十分実感できるほどにはな」

フェンスに背中を預け、天を仰ぎながらそう言った。みんながみんな、あの事件がないことをきつかけに穏やかになっている。

鉄血ハイエンド達に敵意が無くなったのは勿論、人形虐待に定評のあるSOPMODもその凶暴性は全く無くなっていった。

416はM16と殺し合いを行うほど互いに嫌っていたが、ここではただライバル視しているだけで、殺そうとするほどにまでは至っていない。そんな具体的な例があるのだから、ここが平和と思えない理由がない。

いや、むしろ自分がたどってきた歴史が、あまりに残酷すぎただけなのかもしれない。人間と人形が殺し合うだけではない。同じ人形同士が殺し合うなんて酷い有様だ。それこそ、その人形たちを間近で見えてきた俺からすれば、地獄絵図だ。とても苦しかった。

一緒に過ごした仲間が壊れていくところを見る度、俺の心にヒビが入る気がした。苦

しんでいくところを見る度、俺の精神が悲鳴をあげていた。

それでも、俺は愚かにも死を恐れた。

人形たちの幸せが自分の幸せであり、人形たちの願いが俺の願いだと、そう純粹に思っていた俺は馬鹿だったと思ひ知らされた。俺はやはり所詮ただの人間。恐怖には打ち勝てないと知った時、酷い無力感と虚無感に襲われた。

俺は、結局自分本位のエゴで動いていた。

人形達の為と言っておきながら、最後まで彼女らの為に生き、そして彼女らに殺される道を選べなかった。

スケアクロウは、心配そうな顔でこちらを向く。

……ああ。今の俺はきつと酷い顔をしている。

あまりに、生きていないような壊れた目をしているのかもしれない。

「……貴方の居た場所での私は、どんな人物でしたか」

スケアクロウは、思い出させるのを申し訳なさそうにしながらも俺の記憶の中の彼女の事を聞いてくる。

……変わってしまう前は、大して変わりがないよ。

そう答えた。

いつも何処か静かで丁寧で。

それの筈なのに、時々天然で、時々お茶目で。

愉快的奴だったよと答えた。

ただ、今のスケアクロウの方が、若干天然さが強いかなとも答えた。そんな答えを聞いた彼女はそんなことはありませんわと頬を膨らませてちよつと拗ねる。

……そうだ。静かで無表情だと思ったのに、意外と表情豊かでもあつたなと付け加えた。

そこに関して、今の方がもつと表情豊かだが。

もしかしたら、普段のガスマスクのせいで分からなかっただけであって、本当は俺が思う以上にもっと喜怒哀楽がハッキリしていたのかもしれない。

「……そう、ですか。……辛いことを聞きますが、変わってしまった後の私は……どんな酷いことになっていましたか」

曇った表情。

それでも、彼女は聞きたがっている。

なら、答えるしかないだろう。

せめてもの、昔の罪滅ぼしとして。

本当に、穏やかだったのが嘘の様に機械的になってしまった。自分の事も覚えていなかった。その姿を見た時、俺は疑った。本当にお前は、俺の知っているスケアクロウだったのか……？未だに俺は信じられない。

あんな冷徹な目をしたアイツが、本物だとは思いたくなかったよ。だんだんと、自分で傷跡を抉る感覚を覚えた。

「……それでも、私を止めようとしたのですか」

別の世界線の自分が、目の前にいる心優しい人物を撃ち抜いた。その事実の存在が、彼女の罪悪感を煽る。

死ぬと分かっていたのに、なぜそれでも止めようと思ったのか。彼女はそれを俺に質問した。

とんだ質問攻めだ。

「……」スケアクロウ「はな、向こうでも、こっちでも、一番最初に出会って、一番最初に話した奴なんだ。こっちに至っては、助けられさえしちまったしな」

だから、是が非でも止めたかったと答えた。

初めて、鉄血工造で整備をした相手……いきなりハイエンドの整備をするだなんて思ってもいなかった。

テストや電子戦適性を高める為の調整を施した後、メンテナンスをを行う。その時のメンテナンズ役に抜擢されたのが俺だった。

作業は難なく終わったさ。

俺以外に優秀な奴が集まっていたからな。

でも、俺はその結果が本当かどうか不安になって、ずっと経過を見守っていた。自分の腕が本当だったかどうか。間違っていないかどうか。俺は自信家でもなんでもない。逆に不安症だったんだ。だから、ずっと見守ってた。

アイツがしばらくしたら、ぱっちり目を開けた。そばで眠ってしまっている俺を見て、きつと首を傾げていたよ。起き上がったことを確認した俺は、メンテナンズに問題はなかったし、失敗もしていないと安心した。

でも、何を勘違いしたか、こう言ったんだ。

『…………初めて会う人形だと言うのに、心配してくれていたのですか』

…………なんてな。

別にその時、俺はアイツを心配していた訳じゃない。ただ、自分のやったことがとてもない事だったらどうしようとビビってただけだ。

でも、アイツは勘違いしてた。

正面から堂々と、微笑んで礼までしてな。

そこで、他愛もない話をしたよ。

いつからここに来たのか、どんな事が出来るのか。

そんな話から、どうでもいい話まで。

それから何かと、人形とのコミュニケーションが長所と思われるようになって、色々なハイエンドたちとも交流するようになった。当時にしては異質だったんだってさ。

人形相手に、人間と変わらず話が出来る相手は。

初めて、仲良くなった相手。

初めて、話せた相手。

アイツには、色々な初めてを受け取ったよ。

だから、酷く辛かった。

自分の敵として目の前に現れた時、どうしようもなく絶望した。

だから、ここで初めて会った時も酷く動揺した。

最初は戻ってくれたのかと思った。
でも、そうじゃなかった。

それでも、前のようなスケアクロウが居て、それがとてつもなく嬉しかった。勿論、他のハイエンドたちも同じだ。

「……俺な、今までずっと悪夢を見てたんだ。ここに来る前はさ」

スケアクロウは何も言わずに聞く。

その表情が、さらに不安と心配に満ちる。

……紛れもなくこれは事実だ。

眠る度に、悪夢を見る。

自分が一緒に過ごしたもののたちの悲鳴。

断末魔、破壊音。

鳴り響く無数の銃声が、ここまで恐ろしいものだとは思わなかった。いつも日常的に聞いていた音が、眠りの中で首を絞めてくる。

一緒に笑いあつた相手が、自分に銃を向ける夢。

酷い恐怖と、酷い絶望が俺を覆った。

まあ、こんな平和な場所に来てからは、段々とマシになってきている。それでも、止まることは無いんだが。

……ビビってるな、俺。

1人で語って、1人でビビって。

何をやっているんだろうなと呟いた。

そんな風に呟いた俺の手に、温かい感触がした。

冷たいようで、あたたかい。

隣を見れば、目を瞑った彼女がそつと手に触れていた。

「……大丈夫」

辛いなら、私たちは傍に居ますわ。

だから、1人で抱え込まないでください。

辛いなら、この場所のみんなが支えてくれますから。

そんな優しい声が、俺に響いた気がした。

「辛かった分、今度は君が報われなければ割に合いません」

その言い回し、俺の受け売りか？

そうやって冗談のように笑った。

いいえ？ どうでしょう？

そんな風に向こうも冗談のように笑う。

……本当に、どこからどこまでも……

ダメだ。

普段から調子に乗っている奴がこんなに真剣な顔をしちやあせつかくのイメージが台無しだ。

俺は常に、皆と騒ぐ皆にとつての馬鹿な友になれるように立ち回っている。そんな俺が、こんなに真面目にしんみりした顔になっちゃいけないな。

「悪い。せつかくの静かに話せる貴重な時間……辛気臭い話で潰しちまったな。俺のイ

ケてる顔が台無しだ」

「いえ……そのお人好しの裏に隠れた真実が見れたのは、私にとって十分な成果です。……たまには、弱い一面を見せることも大切ですよ」

本当はここまで話すつもりは無かったのだが。

辛いことを全部吐き出してしまった。

……ああ、もう。

本当にこいつと言うやつは。

いつでも、俺を狂わせやがる。

「貴方が向こうにいた頃からお世話になってる分、恩返しくらいさせて下さい……」
リオン”

……ありがとう、スケアクロウ。

その日、いつもでは感じない程に。

救われた気がした。

夜空の下の記憶語りというのも、時には悪くないのだろうか。

……そういえば今、君って……

あと、俺を呼び捨てにした……？

そんな風に聞いて振り向くが、スケアクロウはそっぽを向いて知らんぷりだ。……誤魔化しきれてないぞ。

私はそんなこと言ってませんー。気のせいですー。そんないつものスケアクロウらしからぬ緩い誤魔化しが聞こえてくる。……お前もちよつとは、素の姿を見せてくれていたのか。

そんなふうに思うと、少し嬉しくなる。

その日以降、ちよつとは前のように冗談を言い合えるような仲になれた気がした。

……スケアクロウがいつも以上に感情を見せてくれるのは嬉しいが、周りの微笑ましいものを見るような目が地味に気になるようになったのは、また別の話だ。

温和日常V I：ウオツカもジャツクダニエルも同じようなもの

グリフィン・鉄血合同宿舍。

もはや定番と化したいつもの部屋。

幾度となく人形たちという名の襲撃を受け、もうそろそろ落ち着ける時間が欲しいと何度ボヤいたことだろうか。

やっとこさ1人で今日こそぼーっと過ごすんだ……

そんな風にもはや祈りの領域まで達していた。

今日こそは、今日こそは。

こんな荒んだ世界に神はいないと思っではいるが、さすがに今だけはいると信じさせてくれ。

……我ながら自分勝手な信仰だ。

「助けてくれー！リオンツ！一大事だ！いや大惨事だ！」

……まあ、届く訳もない。

哀れな祈りだ。

突如、恐ろしい勢いで部屋に押しかけた処刑人。

あまりに息が絶え絶えで、明らかに憔悴している。

というか、顔色があまりに悪すぎる。

まるでこの世の地獄を見たかのような様相でこちらへと助けを求めに来た。あの処刑人が。

あのオラオラ系人形の処刑人がだ。

ほほ色々なことに対してビビることの無いアイツが、ここまで恐ろしくなるものなん

てあつただろうか……？

とにかく来てくれ、話はそれからだと腕を思い切り引つ張られる。滅茶苦茶痛い。千切れるか折れる。腕が壊れちゃう！

本当に何があつたんだ!?

俺の悲鳴は、届くことなく通路へと消えていった。

「うっわ酒臭ツ！何だこれ！」

思わず暴言のような一言も吐きたくなるような酷い酒臭さ。ありとあらゆるアルコールを混ぜて気化させたような酷いものだ。理解させようとしている自分の頭の中で何を言っているのか分からなくなるくらいには酷い。

顔を上げて部屋の状況を見ようと思うが、本能がそれを拒絶する。これは……見てはいけない。

恐ろしい何かの予感がする。

連れてこられた以上、見るしかない。

無理無理にでも顔を上げ、その光景を目に入れた。

「まくだ飲み足りねえなあ〜？酒をもつともつてこおーい！」

「……しきかん〜……へへ〜……わたししあわせ〜……」

「わたしはかんぺきなのおお!!しきかんのいちばんになるのはわたしなのよお……えむいちろくもそうおもうでしょお……?へんじしてよお”お”お”……」

何コレ。

ここは確か処刑人とハンターの部屋だ。

そんな所に3人も上がり込んだ上にペロンペロンに酔っ払ってこの有様である。

右から飲み足りないようなのに明らかに泥酔しているM16A1、ウオツカの瓶を持ったまま床で眠って寝言を言っているモシン・ナガン、そして当の本人にはあまり聞かれていないのに無理無理M16に絡んでいくHK416がいる。

もう一度言う。

416もいる。

記念されるべきではなかった禁酒令1人目のあの416だ。

本来酒を飲んではいけないと言われた416だ。

完全に呆れた目で処刑人の方を向く。

「どうしてこうなった？」

「違うんだよー。ただいつものようにM16に飲もうぜって誘っただけなんだよ！そしたらモシンナガンがそれを聞いてて、ウオツカ持ったままこっちに上がり込んできて、いつの間にかM16が416を連れてきてたんだよ！」

つまり処刑人はこう言いたいらしい。

こんなはずじゃなかった。と。

本当はいつも関わっているM16と一緒に飲もうと誘ったらしい。それ以外のメンバーは誘う予定もなかったと話す。だが、偶然にも酒好きなモシンナガンがそれを聞いていたので急遽乱入。そこまではまだ良かった……

このM16はあまりにも豪快すぎた。

あの酒乱で有名な416をここに連れてきてしまったのだ。来たすぐの時は処刑人とモシンナガンで何とか完全に酔わないようにコントロールするように手を尽くしていたらしいが……

「あのバカ、二人を煽って自ら滅茶苦茶飲ませるように仕向けやがったんだよ！」

これには呆れを通り越して何かを悟った感覚に陥った。自分が酒を飲めるのをいいことに、酔わないと楽しくないと言い始めた挙句煽って自ら飲ませるように仕向けたとの事だ。

それにモシンナガンが引つかかったのが一番の痛手だ。普段普通にしていれば部隊の良心とも言える彼女が、M16の煽りに乗ったおかげでストッパーが消えてしまったのだ。

これじゃあこんな大惨事にもなる。

……いや、これは俺にどう止めろと？

俺は生身の人の子、向こうは機械の人形よ？

物理的に沈めるとか無理だからな？

そう言つて処刑人の方を向くが、それでもなんとか頼むと言わんばかりの表情だ。

俺に何か出来ることあるのか？

酔い止めを持つてくるか？いや、それは別の酔いだ。

水を持つてくるか……？いや、それはそれで酒が水のようなもんだ！つて言いそうな気がするが……

出来そうなことからやるしかない。

「……悪い、俺少し用事思い出した」

「逃げようとするなよ!?!俺一人だけじゃこの状況はどうしようもないんだぞ!?!」

ダメだった。

1番の最善手、『にげる』が使えなかった。

こんな時に、あいつが居たらとボヤク処刑人。

あいつとは、彼女の相棒であるハンターのことだ。

不運な事に、ハンターは現在出張中である。彼女なら確かにこの状況でさえ胃薬1つあればなんとか鎮めてくれそうな気がするが……

今では無い物ねだりだ。

酒に溺れるこのポンコツ達をどうしようか……

そう考えていた。

が、魔の手は人形だけでなく……

「よおくりオンの旦那あゝ！お前も飲もうぜ〜？」

うわ、こつちにまで絡んできやがった。

と言うより、気づきやがった。

処刑人に対してはどこ行つてたんだよと聞きながらがつしり肩をホールドしている。
やべえ。

416は私のどこが足りないのなんて呂律が回らないセリフを言いながらいつの間にか俺の足元にしがみついているし。慰めて欲しいのか？そうなのか？

なんとというか、言つてる言葉の一言一言が聞いてて辛くなるからなんだ言つて頭をポンポンしてるんだが。

よしよし、まずは酒から離れようか。

相変わらずモシンナガンはウオツカの瓶抱えて寝てる。普段の彼女らしくもない。

「……おい、本当にどうするんだよこれ……手のつけようがないぞ」

「いや、それを俺に言われても困んだって……」

こちらはこちらで小さくもめている。
そんな中、飲んだくれ人形の1人が……

「ほら、遠慮せずにグイッといけよ！」

思い切りグラスにある酒を飲まされた。

俺が受け取ったわけじゃない。

無理無理押し込まれた。

うっわ無理。すごく無理。

気化して入ってくるこの感覚無理。

しかも酒が入ってしまった。

これはまずい。

非常にまずい。

「ぶはっ……ちよ……マジで……やばい、アルコール入った……俺帰る……」

「は？え、待ておいおい！ついさつきまでしれつと逃げようとしてたのが本気で堂々と帰る姿勢になってんだが!？」

そりやそうだ。

俺、リオンは酒に弱い。

下手にアルコールが入ったらどんなことをしでかすかわからないのだ。とりあえず帰りたい。

醜態晒す前に帰りたい。

お願いだから帰らせて。

本当にお願ひします。

そうは嘆くが肩はがっちりM16にホールドされてるし、足は416に捕まってる。しまいには寝ぼけたモシンナガンが上着を引っ張っている。もう阿鼻叫喚だ。

「とりあえずお前ら、頼むからもう飲むな！後でこの惨状見られる俺の身にもなつてくれ……！」

処刑人も哀れに見えてきた。

悲痛な叫びは全然届かない。

お酒キマっちゃってるから聞こえてない。

そんなアルコールまみれの部屋の中、一番の元凶が更なる火を酒に注いでしまった。

「……なんだ、もうウオツカしかないのか？こんなんじや満足できないぞ〜！」

うわ、遂にこいつ酒の種類にケチつけやがった。

それだけならまだ良かったのだが……

「何〜??誰よわたしのウオツカを馬鹿にしたのは〜!!」

なんとというタイミングで起きたんだお前。

元々寝てたのかすら怪しいくらいに過剰反応を起こしたモシンナガン。そんなウオツカを貶されたのが嫌だったのか。

というかM16の煽り癖が酷い。

お前なんかあったのか。

こつち来る前のお前はこんなのじゃなかったぞ。

「真に最強の酒はジャック・ダニエルに決まってるだろ？ほら、早く追加してくれよ！」

「なんですすつて〜？ウオツカは水と変わりない要領で飲めるんだからこつちこそ最強でしよ〜！」

「ウオツカもジャックダニエルも同じようなもんだろ！いい加減にしろよお前ら！」

処刑人。

お前は今とんでもないことをしたぞ。

言うなれば、燃料タンクに火炎放射をかましたようなものだぞ。止めるために水かけたのに間違えて油かけてるのと同じだぞ。

……もちろん、そんなものは聞き捨てならなかった2人。

「何だって？」

二人分の鬨気。

恐ろしいオーラ。

これは完全に地雷だった。

あえて言わないでおいたのに。

哀れ、処刑人。

お前の屍を超えて俺は逃げるよ……

「え、え、ちよ、お前ら……急に豹変するのは止そうぜ……？」

完全ににじりよった2人。

追い詰められた処刑人。

これはもう詰みだな。

さらにもつとやばいことが起きる。

「さつきからみんなうるさいのよ……！だまりなさいよお！」

416がついに暴れだした。

うるさいうるさいと叫びながら瓶を振り回している。
ついさつきまで1番騒いでたお前が言うな！

ちよつと瓶が掠めた。

もうさながらこの部屋は戦場だ。

余りにもひどすぎる。

たすけて指揮官。

……刹那、扉の開く音がした。

「……どういう状況ですか、これは……？」

「姉さん……？ こんなどころで何をしているのですか……？」

「わぁーお、乱れてるねー、416」

「もうばーりいな状態になってるねえ……」

すくわれた。

救いの手はここにあった。

英雄の4人。

部屋の状態を見て明らかに青筋が浮かぶ代理人。

姉の暴れた傷跡を見て呆れ返るM4A1。

416の惨状を見てゲラゲラ笑っているUMP45。

そして動じずに平和そうな目で見ている指揮官。

泣きそう。

「……処刑人。これはどういうことですか？」

「だ、代理人……！」

泣きそうになりながら俺に説明したことを説明する。

それを聞いていた代理人やM4、指揮官はうんうんと納得が行ったように頷く。

UMP45は暴れるだけ暴れて眠り始めた416をつんつんとちよつかいをかけては反応を楽しんでいるようだ。

「なるほど……では、その御三方はこちらで話を聞くとしましょう。……周辺から苦情が来ていますよ」

明らかに背中がゾツとするほどの恐怖。

恐ろしい威圧感を放つ代理人が助けてくれた。

ヒーローだけど、めちやくちや恐ろしく感じられる。

「そうだね……はしやき過ぎた罰つてことで、潔く受け入れてちょうだいな」

普段穏やかなだけに、今の指揮官が不自然に見える。

でも、苦笑いだからまだ彼としては情状酌量の余地ありだろうか。指揮官の審判だけが。

さすがに代理人の審判で有罪は免れないだろう。

M16は完全に酔いが覚めたように顔を青くしてビビっている。モシンナガンも置かれている状況がわかってきたのか、だんだんと涙目になっている。

416だけは全然起きない。45が頬をふにふにしたり、ぺちぺちしたり、あわよくばと胸を揉んだりしているが、全然起きる気配がない。隊長にセクハラされてるぞ。

「すみません、うちの姉が発端でご迷惑をお掛けしました」

丁寧に処刑人に謝りに来るM4。

本当に申し訳なく思っているようで、処刑人の方もちよつと困っているようだ。

「M4が謝る必要は無いだろ。ほら、当の本人がやらかしたことなんだし」

妹相手には少し甘くなりがちな処刑人。

あんな風に謝られてはそれは確かにフオローのひとつも入れたくなる。俺だってそうなる。

あ、やばい、頭がぼーつとしてきた。

「ごめん、そろそろおれたいさん……」

「ええ、すみませんリオンさん。こちらの御三方と、ついでに処刑人には厳しく言っておきますので」

「えっ」

何かを察してくれた代理人。

後の処理は任せてくれと言わんばかりの言葉に泣きそう。クラウスの方も、ちよつと注意が必要かなと少しだけ怒っていた。

ついてきた45は一通りセクハラを終えた後に自業自得だからねと我関せずの体制だった。茶々入れに来ただけかい。

あと、処刑人……頑張ってくれ。

今度胃薬に世話になるのはお前かもしれない。

やばい、そろそろ本当に気分がふわついてきた。

かえる。まじかえる。

自室に駆け込んで、さっさと寝よう。

俺の意外な弱点は知られたくない

「おやすみするから〜……」

「まだお昼だけどね。まあ……なにか察したわ。せいぜい誰かに見つからないようにね
」

45も察したらしい。

君たちのような察しのいい人形は助かる。

4人の意外な助力を受けながら、なんとか俺はあの地獄を抜け出すことが出来た
……。

今日は酒のせいで昼だと言うのにすごく眠い。

まだ休日だったのが救いだ。

今度からはきつとM16も自重するだろう……

そう信じて、ベッドに寝転び目を閉じた。

その後、約2名が震えながら禁酒をしていたところを何人かの人形が目撃したらしい

……

もう1人？元から禁酒令が出てるでしょうに。

温和日常V I I : 末妹たちの家族談義

グリフィン・鉄血合同宿舎。

もはや俺の私室かどうかもわからない部屋。

「私のお姉ちゃんたちが一番なのー!」

「45姉と40姉だつて負けてないよ!」

「鉄血のみんなお姉ちゃんが最強つて言つてるでしよー!」

3人の人形が激しく火花を散らしている。

かたやAR小隊の末妹。

かたや404小隊の末妹。

かたや鉄血ハイエンドの末妹。

話題は、「自身の姉」。

ここにいるのは全員一番下の妹。

さらに言えば、姉が大好きな人形筆頭だ。

妹達による姉自慢対決が、幕を開けていた。

「俺の部屋は多目的ホールじゃ無いんだぞ!？」

分かってはいたが、悲痛な叫びは虚空の彼方へ消えてった。

「M4お姉ちゃんはすごく礼儀正しいし、AR—15お姉ちゃんは仕事ができつちりと出来るでしょ? M16お姉ちゃんは……かっこいい!」

最初に自慢を始めたのはM4 SOP MOD II だった。

誰でも思いつきそうな良い所だが、それを口に出すのは良い事だ。M4が礼儀正しいのは合っているし、AR-15が書類仕事の腕がいいのも事実だ。M16は……仕事モードの時は確かに格好良い。

「ふふふ……甘いねSOPちゃん。45姉は仲間にブラックジョークをかましながら場を盛り上げることはできるし、臨機応変に色々なことが出来るのです！リーダーとしてもすごく頼りになってかつこい！あと、40姉の前では凄いしおらしくなっちゃうのが1番の魅力だよ！」

UMP9は完全にプレゼン口調だ。

何でもいいから45が大好きということアピールしたいんだ……あと、ブラックジョークに関しては物によるだろう……

でも、確かに色々な意味で45が優秀であることは間違いない。あと、40の前でそうなるのはしょうがない。俺は知っているんだ。

かなり熱く語っている。

シスコンとは言わないが、あまりに大好き過ぎやしないか。

続けて40のことに關してもマシンガントーク。

ダメだこの家族。

「あ、アルケミストはクールでかっこいいし、雑魚なんて蹴散らしちゃうくらい強いし、何より甘えさせてくれるし……他のみんなだつて個性いっぱいですごいんだからね！」

負けじと言うはこの前アルケミストがわしゃわしゃと頭を撫でたり抱きしめたりしていた溺愛の対象……デストロイヤーだ。彼女の姉自慢に至ってはもう幾度となく聞いている。ああ、また妹が大好きな姉のことを語っているとほっこりした気分になる。他にも代理人やスケアクロウのことなども話しているが、やはりアルケミストが一番のようだ。

SOPMODはむー、と頬を膨らませてうなっている。

どうしても自分の姉が1番という事実を思い知らせたいらしい。9はそんなこと知らない！とりあえず45姉を好きになれ！と言っているかのような意図を感じる。デストロイヤーも自分の姉が凄いことを知らせたいらしいが。上手く言えなかったり、先

に言われた要素だったりで上手くいつていないようだ。

こんな所を姉共がみたら多分まあまたやばい事になるだろう。45やM16やアルケミストが妹が可愛いと騒ぎ出す。

……最近、何かしら止める役しかしてない俺。

俺が胃薬の世話になる日も近いだろう。

いや、もうなっているな。

「ねえねえ、リオンさんは姉とか、お兄さんとかはいたの？」

9が純粹な目でこちらに質問してきた。

兄や姉か……

実はと言うと、自分の家族構成を覚えていない。

幼少期の記憶は一部欠落している。

そのせいで、家族がいたかどうかわからない。

自分が今ここにいるということは、両親はいるだろう。当たり前だ。だが、兄弟姉妹がいたかと聞かれれば、どう答えていいかわからない。

悪いが、覚えていない。
そう答えるしかなかった。

少し悪いことを聞いてしまったと思ったのか、9の表情が陰った。慌てて死んだとか、そういうことじゃないとフォローを入れた。若くして疎遠なだけだと言っておけば、とりあえずはこの場は凌げるだろう。

「でもでも、リオンさんは弟と言うよりお兄さんだと思ふなあ。だって、基本的に弟って思うような部分はないし、だけど頼りがいがあるとか、お兄さんっぽいでしょ？」

「確かに……私も間違えてお兄ちゃんって呼んじやった時あるけど、周りは全く持つてそれであつてるっていうカンジに見られてたし……」

SOPの発言から何故か話題が俺にすり変わる。

いや、発端は9か。

何故か自分たちの姉の話から俺が兄貴みたいだという話に完全に置き変わっている。

なんで？

ちなみにデストロイヤーの言っていたことは本当だ。たまたま一緒にいた時に間違えている。誰も疑問に思わなかったというのが一番笑ってしまう所だ。

「……リオン兄さん？」

「なんだ9、俺を兄と呼んでも何も出ないぞ」

9が悪戯っぽく俺を兄と呼んできた。

俺が呼ばせている訳では無い。

決して呼ばせている訳では無い。

「甘えたら弱そうだよね」

「確かに……身内に弱そう」

「家族にはデレデレな感じがするよね」

この妹共散々言いやがって……

俺だって厳しくできるやい。

誰があまあまの溺愛兄貴だって？

ちよつとだけ不満そうに顔を顰めてみせた。

「そんなに怒ったような顔しないでよ、お兄ちゃん？」

「やめて、そんな顔されても困るから、本当に」

この妹たち、非常にあざとい。

やめて、揺れる、揺れる！

俺は落ち着いていて厳しいクールな人物だ……

だからそんな如きで……そんな……如きで……

顔を……緩めて……たまる……かあ……！！

「あ、ちよつと笑ったよ」

「やっぱりこういう風にされると厳しくできないタイプなんだね」

「うーん、安定のリオンさん」

ダメだった。

どうしてもこうなると微笑んでしまうのは良い癖なのか悪い癖なのか……多分良い

癖だと思いたいが。

というより、もうこうなるのが予想できてたんだな……
なんというか、小っ恥ずかしい。

もうヤダ、誰か俺を叩いて。

願わくば気絶させてそのまま今のことを忘れさせて。

「まあまあ、それ程いい人ってことじゃない？」

信用されていることは確かに嬉しい。

でも、なんというか、自分の理想とは違う……

真反対なんだ……俺のキャラじゃない気がするんだ……

俺はどちらかと言うとクールにかっこいい奴になりたかった。だが現実はどうだ！
ただの穏やかなお兄さんじゃないか！自分でお兄さん言うのもアレだが！

心の叫びが漏れた。

「まーでも、穏やかなお兄さんやお姉ちゃんの方が私たちとしてはいいかなと思うよ

ね」

「私たちのお姉ちゃん、穏やかじゃないけどね？」

絶対M16とかアルケミストとか40とか、上らへんの方だなと容易に想像がつく。あいつらはむしろ妹関連になったら暴走しかねない。おそらくあの中で一番穏やかなのがアルケミストだろうからもつと酷い。正直、考えただけで胃痛がする。

「……なんだろう、急にお姉ちゃん達に甘えたくなってきたなあ……」

「こういう話をしてると、くっつきたくなるよね」

「戻ったら構ってもらおうかな……」

幸せそうな妹たちだ。

さぞあの姉たちもこんな妹たちがいて幸せだろう。

……何となく、本当の自分の家族が気になってきた。世界線を飛び越えてしまった以上もう何処にいるか、生きているかすら確認するすべは無いが。

それでも、せめて覚えていればと思った。

本当に疎遠になっただけかもしれない。

どこかで死んだのかもしれない。

もしかしたら、自分の手で殺したのかもしれない。

分からないというのは、一番幸せであり、一番不幸なのかもしれない。分からないことで真実は消え失せる。

分からないことであらゆる可能性が生まれる。

それが苦痛かどうか、救いかどうかはその人次第だろうが……俺はどちらかさえ分からない。

……少し、寂しくなってきた。

「……どうしたの?」

「いいや? 何でもない……楽しそうだなと思っただけだよ」

この疑問は俺だけのものだ。

幸せなものに不幸を振りまく趣味はない。

基本的にネガティブな考え方が多い俺の考察は、あまり参考になどならない。だか

ら、きっと俺の家族は……

いや、この話は忘れよう。

今の俺には、彼女たちという最高の仲間がいる。

昔なら違ったかもしれないが、今は平和だ。

それに……失った物も戻ってきた気がするしな。

「なんというかき、やっぱり……自慢はしたくなるけど、自分の姉が1番なのは皆変わらな
ないよね」

9の言う言葉に2人とも頷いた。

その人にとっての姉とは、その姉しかいない。

だから、その人が1番になるのは当たり前なのだ。

それを自慢したいかしたくないか、そのくらいの違いなのだろう。愛されているな、
あの姉共は。

またさつきのように頬が緩んでしまった。

俺も随分と絆されやすいものだな。

まあ、悪い気はしないが。

「S O P ー! S O P はいるかー!？」

「9 〃。そろそろそろそろ帰らないと40からまたいたずらの刑食らっちゃうわよ?」

「デストロイヤー、そろそろご飯だから帰るぞ」

姉共降臨。

なんでお前ら俺の部屋に居るって気づいたのさ。

M16は禁酒令が出ていたはずなのにいつの間にか出来ている状態で迎えに来たらしい。

45は早く帰らないと40にいたずら……心配されると言うっておきながら本人が心配で来てしまったようだ。

アルケミストは普通にそろそろご飯にするから帰るぞと母親のような理由で戻しに

来たらしい。

「うん、私はここだよー！」

「まだそんな時間じゃないのにく。心配症だなあ45姉も40姉も」

「分かったー。今日はどんなものかなー……」

三者三様の返答を返す。

反応はそれぞれ違うが、答えの意味は同じだろう。

姉たちへの思いも。

平和な姉妹だ。

見ているこちらも温かい気分になる。

……どうでも良くなつてはいないが、さっきの疑問のことに関しては、今は気にしなくていいと思えた。

今は、こんな温かい空間に居られるのだから。

「そーいや……なんでお前らの妹が俺の部屋に居るってわかったのさ」

「「姉の勘だ（よ）」「」

やっぱりこの姉たちはおかしいよ。

温和日常V I I I I : 天災技術屋人形

グリフィン・鉄血合同宿舎。

もはや説明する必要も無い部屋。

今日は珍しく、技術屋としての勉強中だ。

俺は基本、修理やメンテナンスを専門としている。

それ以外の技術はからつきしだった。

何せまだ俺は20代に入って間もない。

技術を学ぼうと思ったのはまだガキの頃。

第三次世界大戦が起きたあと、人形という物が現れてすぐの頃にその技術を学びたい
と思ったはずだ。

……そのきっかけは、今やわからないが。

そんなガキが覚えられるものなど一つを深く掘り下げるのが限界だ。俺はマルチタスクができる方ではない。

故に、俺は修理技術に関する道へと行った。

何故だろう。これも覚えていない。

いや、覚えていないというのは違う。

曖昧なのだ。鮮明には覚えていない。

ただ、人形を助けたい……そういう動機だったのは覚えている。だが、それ以外が分からなかった。

何をきっかけにそう思ったのか。

そこがどうしても思い出せないのだ。

……柄にもなく、また考え込んでしまった。

最近になって、妙に気になる。

殺伐とした所から平和な所に来たせいだろうか。

殺伐としていないから、自然とそういう風に頭が回ってしまうのかもしれない。悪癖だ。

俺はここで平和に過ごすと決めたのに。

……元の世界のアイツらはどうしているだろうか。
元々の敵を心配するというのも、どうかとは思うが。
どうも、こういう所の心配性は治らないらしい。

……この話は置いておこう。

頭の片隅にもあまり入れておきたくない。

なぜ別の技術を学ぼうと思ったのだろうか？

ここに来てから、整備以外の仕事も見てきた。

人形たちを支えるための装備の開発などに興味を何故か持ったのだ。なぜかと言われれば……

「おーっす！アーキテクトさんじょ〜！」

……大体この2019^ア年代の若者^ホ風人形のせいだ。

完全におちやらけている。見るからにハイテンションだ。

あれ？真面目な雰囲気ぶち壊ししちゃった？とすつとぼけて言っているが本当にそ

の通りだ。

とは言ったものの……

「……いや、よく来てくれた。同志建築家」
アーキテクト

思わなかった煩くも嬉しい来客に手を伸ばす。

そこには、初めて顔を合わせた時と同じ構図。

固い握手。謎の共鳴。妙な同族感。

そんな彼女こそ……

天才……いや、天災技術屋人形、アーキテクトだ。

「いやー、急に押しかけたのに意外とすんなり入れてくれたね？ 普段ならやめてくれ

！つて結構拒否られるつて聞いたけど？」

まあ、それは言えている。

普段の俺なら、こんな一番騒がしい奴を入れれない。

実はこのアーキテクト、鉄血ハイエンドの中でもかなり騒がしい部類に入る。俺の胃痛が加速するくらいには。

本当は、もう1人……：この見張り役の相方がいるのだが、大方そいつから逃げおせてこつちに来たのだろう。

今の俺はどんな精神状態をしている？

お前、ついに壊れたかと言われそうだが。

俺が彼女を招き入れた理由は単純。

俺のつい先程勉強をしていた分野の技術に関して、アーキテクトが非常に良く知っているという理由だ。

最近になってやってきた人形だが、アーキテクトは兵器製造や設計などの技術を蓄えたハイエンドになる。

俺が今自主的に学んでいたところもそういう分野だ。

そして何よりも……

「見てみてりっちゃん！新しい兵器案！」

「……こいつぁ……すげえな……！」

このアーキテクト、ロマンというものを分かっている。

年頃の男が燃えるような、そんなツボを分かっているとんでもない理解者なのだ。通りで話が合う訳だ。

今アーキテクトにみせてもらっているのはドラグーンの二足歩行ロボットに装備する兵器らしい。

複雑な機構、無骨なデザイン。

そして何よりも、一撃に賭けた最強のコンセプト。

鉄杭射突機^{パイルバンカー}。1発でノックダウン出来る。

さすがアーキテクトだ。

駆動時の挙動とかの予想まで書いてある。

抜け目がないな。

ただ……

「これさ、E・L・I・D・相手ならまだしも、生身の人間相手じゃヤバいだろ……大変なことになるぞこれ」

あからさまに口笛吹き始めた。

流石にこのご時世戦車とか使うのも一苦労だというのに対機械特化の武器を作ってもアレだよなとなってしまう。

かと言ってそれを生身の人間に打ち込むなんてとんでもない。そいつは風穴空くどころか下手したら破裂する。そんなものを見た奴からするとトラウマになりかねない。

いや、皆戦うために作られたから大丈夫か？

いやでも心配にはなる。

あと、実用的かどうかも作るとなれば考えなければならない。ドラグーンはある程度の耐久性を持っているとはいえ、そこまでの近距離に高速で向かえるほどの機動力はない。

「いやじゃないの！ かつこいいは正義！ 正義は全てにおいて優先される！ つまり、かつ

「こいいものは全てに優先される！」

「それじゃ暴論だぞ?!」

まあ、かつこいいは正義には同意するんだが。

アーキテクトはブーブーと不満を漏らしている。

だつてしようがないじゃん。

巨大な二足歩行型の高速移動出来る機械が空中を飛び回って撃ち合ったり斬り合ったりする世界じゃないもの。

いつの間にか水の中で推進器が壊れてそのまま沈没するなんて世界線じゃないもの。

「そーいや、この設計図のこことつてどういうことだ?」

「んー? あー、それはね……」

本題のことももちろん忘れていない。

正直なところを言うと、アーキテクトはおちやらけているからこそ、意外に説明が分かりやすいといふかなんというか。想像のしやすい説明をしてくれるものだから、すんなりと概要が頭の中に入ってくる。

彼女は意外にも、阿呆では無い。

ふざけた様に見えるが、実際に頭がいい。

そうでなければここまで事はやつてのけない。

……ただ、本気を出してくれるところが限られているが。

「……つてわけ！わかった？」

「なるほど、バッチリだ」

それにしても彼女、前の鉄血ではイントウルダーと同じく見たことがなかった。

初めて会った時に説明されたのだが、彼女とその相方のもう1人はこの世界でも本来この時期に完成する予定ではなかったらしい。が、妙に開発が順調に進んだ挙句、

O・P社の協力も得られたからか予定より早く完成したようだ。

それでこれだから凄いものだ。

鉄血の開発陣は化け物か。

「……にしても、よくこんなもん思いつくよな。元のモデルはあるとはいえ、ほとんどこの機構オリジナルじゃないのか？」

「うん、威力高くするために大分変えてるねえ」

良くもまあこんなものを思いつくものだ。

最近ではこんな武器はもう使われないうちか存在を知っている人物さえ知らないのではないか。

その大元を理解した上でさらに改良するとは……

「いやー、旧世代のゲームにハマっちゃってさー」

いろいろと昔のデータを漁っていたら、かつて存在した電子遊戯……いわゆる、テレビゲームのデータを発掘したらしい。それを何となく遊んでみたら、どハマりしたらしい。

鉄血側の一室から何かとはしゃぐ声が聞こえたのはそのせいかな。とつつきサイコー！とか、コ○マキヤノン最強！って聞こえてたのはお前のせいだったのか。

お陰でこちららスケアクロウから最近隣がうるさくて眠れないって相談受けたんだぞ！ダメでしょ！

まあ、そのおかげでこっちは素晴らしいものを見せてもらっているわけだから、一概に悪いとは言えなくて困るんだが。

何かと話す彼女は楽しそうだ。

むしろ、真面目そうな雰囲気になっているところが想像つかない。

「我々戦術人形にもさ、ブレードを導入するべきだと思うんですよ私！」

「銃とリンクさせてんだからそんなもん付けたらごちゃごちゃになるんじゃないか？」

相変わらず凄いことを口走るやつだ。

というか、お前の言っているそれはちゃんと実現できるものなのか……？という根本的な問題もあるが。

戦術人形に新しい装備を……とは確かに思ったことはあるが、人形のシステム上問題が起きかねない。

大雑把に言うくと、戦術人形が銃の名前を冠しているのはその中を認証してその個体に登録しているからだ。

ある程度のサブアームならまだしも、恐らくアーキテクトが言っているものは装備させてしまったら不具合が生じかねない。俺も予想できないエラーを吐いてしまうだろ

う。そうなたったら俺が治すことも困難になる。

そのことに関してはあまり同意出来なかった。

「だよねー……認証システムに上手く干渉しないものならいいんだけどさ」

よくまあ人形本体がここまで話をできるものだ。

さすがは天才さん、と言ったところか。

相変わらずロマン武器の魅力を語っているが。

そこまで必死にならなくても。

良さはわかる。良さは。

「こんどりっさんもやろーよー、ゲーム。色々といい影響受けるよ?」

「まあ、時間と余裕があったらな。あと、お前のそれはアイデア的には良い影響かもしれないが思想的にはアウトだろ」

妙なツツコミを入れながら、専門的な話を広げている。

……今思えば、記憶にもないというのにあつて直ぐにここまで打ち解けるといふのも珍しいな。

コミユカお化けか？

まあ、明るのが取り柄とか言つてたし……

そんな話や思考を巡らせている時に、インターホンが鳴つた。人が来るのはこいつも含めて珍しいことではない。

最近是人が来る事に慣れてるからか、オートロックを解除している。それなのにも関わらず律儀に呼び鈴を鳴らす律儀な人形は限られているが……

「…………ごめーん、私用事思い出した★」

静かに肩に手を置く。

ちよつとだけ力を入れてみる。

完全に顔が平仮名の“の”と片仮名の“ワ”で現せそうな完全にボケを狙つたような顔をしている。

「大人しく…………お縄につきましょか…………アーキテクトはん…………」

「リっさんなんか口調おかしいよー!?やだ!やーだ!普通のお仕事は退屈ー!!」

予想出来た来客。

予想出来た彼女が来た理由。

乾いた笑いを浮かべながら、玄関まで連れていく。

「……濟まないリオン、アーキテクトが^{うちの}ここに来ていと聞いたんだが」

玄関に現れた人形。

硬い口調に半ば呆れ混じりで話すこの人形が、あのアーキテクトの相方……俺と同じく、苦勞をしがちな人物。

その名を、^{ゲイガー}測量士。

なんとなく、彼女が来そうなことは分かっていた。

更にアイツがあからさまに逃げようとしていた事からも、確信を得ていた。アーキテクトは何かと彼女から逃げたがる。いや、彼女から逃げたがるというよりは仕事から逃げたがる。彼女は趣味ならば本気を出すが、仕事となると本気を出せなくなるタイプら

しい。

そんな彼女を見張っているのがゲーガーだ。

相方が奔放な分、しわ寄せも沢山だろう。

「はいはい、ここに居ますよつと」

大人しくならなきそうなおアキテクトを引つ張り出してきた。俺がまともに引つ張ってこれるあたり、本気の抵抗ではないようだ。本気で抵抗されたら普通に無理。

俺は人間です。人形には勝てません。

ゲーガーの前にアキテクトを突き出す。

まるで本当に捕まった人のようだ。

「申し訳ない、騒がしくしてしまった」

悪そうに言うゲーガー。

普段苦労しているからか、色々なことに付き合っている俺の苦労を分かってくれる数少ない人物だ。

だが、迷惑していた訳では無い。
別に大丈夫だと微笑んで返した。

「……そうか。ならいい。アーキテクトが迷惑をかけてしまったら、私の責任でもあるからな」

「ちよつと待つて？ 私上司、君部下よ？ 私の方が上なのになんで凄く上司感出してるの、ねえ？」

聞くや否やゲーガーはアーキテクトに対して握り拳2つでこめかみをグリグリやり始めた。あれは痛い。

確実に痛い。ものすごく痛い。

俺は知ってるんだ。

ギヤーツというけたたましい叫び声が廊下に響いた。

何だか可哀想に思えてきた、がこれはさすがに自業自得だ。

「今度は、お詫びの品でも持つてこよう」

「じゃーねー、リっさん。今度はうちに遊びに来てねー！」

痛みで蹲っていたところを完全に担がれて連行された。当のアーキテクトは担がれる状態でも軽いノリを崩さなかった。逆に感心するレベルだ。

2人の騒がしい新顔が帰った。

まあ、この2人は見えてて飽きない。

仲が良いなとも思えるし、気は合うし。

何だかんだで楽しい時間を過ごした。

その後、けたたましい叫び声がまた聞こえた。

ゲーガーのお仕置きはどうやらかなりえげつない様だ。

追悼、アーキテクト殿。

君のことは忘れない。

「私死んでないんですけどー!?」
「誰に向かって叫んでいる、アーキテクト」

温和日常ⅠX：病弱な少女の聖者

グリフィン基地内、医務室。

少し前に404小隊所属の人形たちを検査していた部屋だ。

様々な検査機会が立ち並び、人間の眠るそれと同じような医療用の寝床が複数用意されている。

そのうちの一つは、この部屋の常連となってしまう一人の人形によって占領のような状態だ。

少し言い方は悪いかもしれない。

頭には検査器具には繋がっていない電極が繋がれており、それがどこへ通っているかは分からない。

姿を見れば色素は薄く、所々に包帯が巻かれている。

見るからに痛々しい姿だ。

今日はそんな彼女の検査という訳だ。

「……どうかな。彼女の容態は酷くなったりはしてない？」
「大丈夫だ。悪くはなっていない……ただ、改善もしてない」

クラウス……指揮官も、この少女が心配で珍しく職務を一時停止して様子を見に来ていた。我ながら煮え切らない答えしか出せないことに歯痒さを覚える。

彼女は、このグリフィンでもかなりの病弱だ。

戦場に出れば確かに心強くはあるが、体がエラーや不完全なメンタルモデルによって蝕まれている故にいつ倒れてしまうか分からない不安定さがあった。

まあ、俺も指揮官も、そんなことの心配ではない。

一人の人間のように心配しているのだ。

そんな心配を受ける一人の少女は、ゆっくりと目を開いた。

「おっ、お目覚めかな？リベロールお嬢様」

「……終わったんですか……？」

場を和ませるかのように起きた眠り姫に声をかけるクラウス。向こう方の表情は相変わらずそんなに良いものではなかった。顔色も心無しか、あまり良くない。

検査の後に顔色が良い奴もそれはそれで不安になるから別にいいのだが。むしろそれが普通だ。

彼女の名前は『リベロール』。

医務室の常連であり、いつも医療ベッドで眠っている。

普通に眠っている訳ではなく、ほぼ昏睡のような状態だ。

それでも容態が悪化する可能性が無い訳では無い。

そのため定期的に検査をするようにしている。

「……期待はしていませんが、どうでしたか？」

「悪化はしてない。……かと言って、良くなった訳でもない。手は尽くしているはずな

んだがな……済まん」

俺は前にも言った通り、人形の整備やメンテナンスを専門としている。故に彼女の面倒を見る役でもある。

普段は別の整備士が面倒を見ているが、俺の方が技術が高いらしく時々任せられることが多い。

彼女は元々本体の性能があまりよく出来ていないらしい。さらにメンタルモデルは不安定。プログラムのエラーも少々起きることから人間で言う病弱の状態になっている。

これまでにプログラムの改善やメンタルモデルの安定化を図るなど、あらゆる手を尽くしている。

この人形の治療に関してはあの16Labのペルシカも手を貸しているが、彼女を持つてしてもなかなか治療が出来ない難敵だ。個人的に、思い当たる節がない訳では無いのだが……

そこを気にしていたところで改善が出来ないと言うのが現実だ。自分の技量不足に腹が立つ。

「整備士さんが謝ることでは……ワタシがいけないんです……」

彼女は自分の性質を誰よりもよく分かっている。

自分のことだから、当たり前といえど当たり前なのだが。それ故に自分が治らないことも薄々と感じているのだろうか。なにかに対して悲観的で、自己嫌悪が激しい。

正直な所を言うと、彼女の気持ちも分かる。

自分も似たようなところがある。

悪い事の連鎖を食らった者は、悲観的になりやすい。

その直接的な証明ができる証拠が俺らだ。

「……いや。お前は悪くない。……治してやれない俺の腕が未熟すぎるだけだ。だから自分を責めないでくれ」

我ながら、大して響かない言葉だと思った。

真に自分を嫌悪する奴が、この程度の言葉で揺らぐわけがない。たかが俺の口から出た言葉など陳腐なものではない。

彼女の朽ちた心に響くほどの力はないだろう。

……いや、良くないな。

本来励ましてやらねばならない立場の人間が逆に悲観的になってどうする。それこそ本末転倒だ。

「ですが……ワタシは、どれだけ手を尽くされても治れずに……ワタシがいけないんです……ワタシは、きつと治りませんから」

遠い目をするリベロール。

見ている、辛かった。

その苦しみが直に感じられる。

……だが、俺以上にもっと直に感じている人物が1人。

側で心配そうに見ていた指揮官……クラウスだ。

こいつもまた、人形を人間として見れる数少ない人間だ。

それ故に、生まれ持った病と戦う彼女をいつも元気づけようと頑張っている。時間の合間をみて、時々医務室に来ているのはそういう事だ。

「……リベロール……諦めたらいけない。現にこうやってリオンは手を尽くしてくれているし、ペルシカさんも今君を治す方法を探している。必要とあらば鉄血の技術者さんも君に手を貸してくれるはず。だから……」

「いいんです。……指揮官がワタシを元気づけようとしてくれていることは分かりますし、嬉しいです。ですが……それを聞いた所で、変わりはありませんから……」

辛い返答だ。

正直な事を言うと、彼女の言うことは正論だとは思う。

だが、本当にそれでいいのか？

事実が変わりえない。それでも、気分だけでも……

あいつは穏やかで明るく前向きだ。

特にそんなことは考えていないかもしれない。

それでも、アイツが彼女を元気づけようとしているのは確かだ。

「……俺は、どうするべきなんだろうね……」

なにも答えられなかった。

下手なことを言えば、余計に彼女が辛くなるだけだ。

彼女だけじゃない。

突き放されたこいつもだ。

俺には分からない。こういう時に馬鹿な事を恨むばかりだ。あたまの出来がもう少し良ければ……そう考えてしまう。

そんな中、部屋の中に足音が響く。

扉が開く音と共に。

「……失礼致します。リベロール様のお見舞いに参りました」

そう言って姿を現したのは、代理人だった。

いつも通り丁寧な物腰で、丁寧に見舞いのための品まで持ってきている。代理人はリベロールの事を知っているらしい。

故に今日予定が合ったために来たようだ。

「あ、代理人さん……」

「お取り込みのところ申し訳ありません。少し、真面目な雰囲気でしたので少し一息入れてもらおうと来たのですが」

なるほど。さすが代理人。

真面目な空気や暗い空気というのは連鎖して、時間が経てば経つほどもっと強くなってしまうものだ。

そうなる前に一旦一息ついてリセットしようということだった。と言うより、部屋の外からそんな雰囲気とかわかるものなのかと非常に疑問に思った。

少し真面目な話はなしにして、休憩がてらお茶でも飲んでいた。ここは医務室だが、ある程度は許されるだろう。

最悪指揮官の責任になるだろうし、俺は知らないとはかりに立ち回れるから少しガサツな対応だ。

我ながら最低だなこの男と思った。

「……悲観的、ですか」

状況を聞いていた代理人が口を開いた。

リベロールを何とか元気づけようとしたり、自分を責めることはないと言おうとしているが上手くいかないという話や悲観的な観点を上手く変えてやれないかという相談に対して唸ることしか出来なかったようだ。

私もそういうことには慣れていないので、どう言って励ましてあげたらいいか……と困っている。

「……済みません。ワタシなんかの為に」

「なんか」じゃないっての。そんなに心配する価値のないやつならここまでしてない」

少しぶつきらぼう気味に返した。

ちよつと言い方がきついよとクラウドに注意されてしまう。確かに、こういう相手に

厳しい返し方は逆効果だったなと思い出して、少し反省する。

「……ワタシはずっと、不良品だの、壊れかけの人形だの言われたんです。……実際、その通りなのですが。自分がだんだんと嫌になってきて、そのうち、そのまま消えてしまえばいいんじゃないかって……」

その経緯を聞いて、ふつふつと何かが湧き上がった。自分が劣っていると分かっているのにも関わらず頑張って役に立とうとしている相手に対して、その言い草があるものか。

そんな奴がいたとするならば、1発ほど殴らせて欲しいものだ。いや、1発と言わず2発。

いや、物が言えなくなるほどには打ちのめした方がいいだろう。
熱くなりすぎた。

……最近、考えが過激で困る。

「……少し劣っているというのは、どこにでもあるもの。ですがそれをどう生かすか、どうやって扱うか。それは本人次第です。それが分かれば、自ずと劣等感は無くなると思

いますが……」

代理人が、静かに口を開いた。

普通のもの言わぬ道具ならまだしも、意志を持った人間に近い存在になっているのだ。

劣っているだのなんだのと言えど、それを生かす方法は星の数ほどあるはずだと。そんな言葉が出てきた。

けれど劣等感、なかなか拭えなくて、自分への後ろ向きな暗示になりかねないとも。そこをどうにかするのは、なかなか難しい。

……問題のそこを、どうにかしたかった。

「ねえ、だったらさ……劣ってても良いって考えようか？別に不良品でもいいやと」

とんでもない発言をした。

この指揮官は。

それは一番言ってはいけない言葉ではないかと俺は思っていたのに。それを何となくしに言いやがった。

それが出来たら苦労などしない。

馬鹿野郎と怒号をあげそうになった。

だが、その声は代理人によって押し込められた。

そのまま、抑えていてくださいと小声で耳打ちされる。

「劣っていることは分かるし、考え方も変えられない。もうそれ以上の手の打ちようも無いって分かっているんだよね。じゃあ後は……」

指揮官は静かにリベロールの傍に歩いていった。

彼女は少し脅えている。

自分になにかされるといふ反射的な防衛本能が警笛を鳴らした。叩かれる。また虐げられる。また……

恐怖のあまり、目を閉じた。

しかし、やってきたのは痛みではなく……

「……しき、かん……う？」

……この手に限るね。

そんな言葉が聞こえた。

そつと触れるようなほど丁寧で優しい抱擁だった。

穏やかに目を瞑るアイツは、笑ってしまうほどに温かな表情をしている。大丈夫、大丈夫、大丈夫。

そういう風に囁きながら温もりを分け与える。

……正直、茶化してやりたかった。

でも、あいつは……真面目に考えた上でこうした。

クラウスが何も考えていない訳などなかった。

忘れていた。指揮官^アは、全てにおいて頭をフル回転させる男だったなど。

「いくら言葉で君を必要としていると言ったって、それは口先だけかもしれないと思うのは当然。……だから最後に必要だったのは、こうやってどんな理由だったとしても君

を必要としているという証明だと思っただ」

君のいる意味は、兵器としての意味だけじゃない。

兵器としてなら、不良品だって俺は構わないよ。

そう語りかけるように話す。

まるで、妹をあやす兄のようだ。

「自分で自分に価値を見つけてるのは大変。だから他人に必要とされたがるのが人だ。……必要なのは自分の中の意識もそうだけど、他人の手によって自分を肯定してもらえないのが、一番大切なんじゃないかな」

リベロールを離さないまま、微笑んだ。

彼女にその表情は見えないけれど、彼女の顔は心なしか泣きそうになっていた。辛くて泣くのではなく、嬉しくて泣きそうになっている。

優しい指揮官は、そんな心の鍵にトドメを指した。

「だから面と向かって言わせて欲しい。君がどれだけ劣っていたとしても……君がいな

くなったら、俺は辛い。使える道具としてではなく、一人の友人として」

だから……君がよければいい。諦めないで、必ず元気になろう？

彼女を離れた指揮官は、再び満面の笑みを見せてそう言った。暗く固まっていたその表情が崩れおちていく。

今度は、指揮官に彼女が抱きつく。

嗚咽を漏らしながら、目の前の聖者に縋りついた。

自身に見えるものは欠点が多い。

自分自身をまともに評価出来る人間は恐らくこの世に存在しないだろう。灯台もと暗しという言葉があるように、自身にはその全貌が見えるわけではない。

だからこそこういうタイプの人物は暗く足元に目が行きがちで、自分の欠けている所ばかりが目についてしまう。

そんな人に必要なのは、他人からの肯定。

全くもってその通りだと納得が言った。

他人から肯定をされるといふことは、自分の価値がないといふことを否定できるといふことだ。

何せ、相手からのお墨付きなのだから。

1番の効き目のある薬とやらは、こんな簡単な言葉一つだったのかもしれない。……
まだまだ、俺は学ばなければいけないようだ。

「……やはり、あの指揮官様も変わっておられますね」

「全くだ。……あれが本物の道化ってやつか？」

さあ、どうでしょうかと答える代理人。

何となく、代理人もクラウスが切れ者だといふことは察していたようだ。そうでもなければあそこで俺を止めることはしなかっただろうな。……誰かからの肯定、か。

「どうされましたか？」

「いいや？ 何でもない」

適当に誤魔化した。

こんな空気を汚しては悪いからな。

……人を救うのは、あそこまで考えられるお人好しなのだろうなとつくづく思わされる。

人など、殆どが私利私欲で全てを利用するものたちの事の総称だと思っていたんだがな。

俺が友人と言った男は、例外であってくれた。

その事が、少し嬉しかった。

そんな風に、感動の空気が流れている中に端末の通知音が鳴り響く。どうやら指揮官のもののようなのだ。

ごめんねと一旦リベロールを退けて、鳴り響く端末に耳を当てた。

「……うん。……うん。……えっ、本当!?!」

その反応に一同はキョトンとする。

そこまで嬉しいことがあったのだろうか。

ありがとうと礼を言い、嬉しそうにリベロールの方を向いた。

「ペルシカさんが、完治とまでは行かないけど日々の容態が良くなるような物を完成させられたんだって！これでまた1歩進んだよ！」

吉報と言うのも、意外と連鎖するものだ。

ちようにいいタイミングでの報告だったからか、つい吹き出してしまう。……なんというか、本当に。

ここは良い事ばかり起きるものだ。

1番幸せな基地ではなからうか、ここは。

リベロールも、静かながらに喜んでいる。

「……その、ありがとうございました。……指揮官も、整備士さんも、代理人さんも……ワタシ……いえ、私はもう少し頑張ってみようと思います」

ほんの少しだけ、光が戻ったその姿にどこか安堵を覚えた。……こりやあアイツ、また好かれた人形が増えただろうなと思うと、このあと茶化す話題に困らなさそうだ。

……まあ、あの天然タラシは気づかないのだろうか。

頑張れよ。こいつを落とすのは大変ってレベルじゃないからなと内心応援になっていない応援を送った。

「……まあ、また何かあつたら言え。修理やらメンテなら腕を振るわせてもらうさ」

「もしも困つたらグリフィンの人だけでなく、私達も頼ってくれて構わないのですよ……ですから、困つたら私達にもご相談を」

また一人、この基地で救われた人物が現れた。

ここはもしかしなくても楽園、皆が救われる為の場所なのかもしれない……そんなふざけた考察をしながらも、今広がる優しい空気にはやはり勝てない。

こここの指揮官は、やはり優秀だった。

勿論後に、指揮官大好き人形のメンバーにリベロールが入っていたことは言うまでもない。あいつはいつか刺される。

間違いなく刺される。

……ただ不安なのは、刺されてなお笑って死にそうという所が不安で仕方がない。あの器がデカすぎる男はやりかねない。そんな冗談さえ、頭に浮かぶほどであった。

温和日常X：兵器であること、人間であること

グリフィン基地内、執務室。

いつも通り俺はやることも無いので執務室に遊びに来ている。仕事中は結構困るんだけどなあという声が聞こえるが、休み中に人の休息を邪魔するお前に言われたくない。

それとこれとは違うと言われてしまえばそこまでののだが。

ここの特等席は指揮官の事務机だ。

就業態度が悪いって？お偉いさんに見られなきやどうにでもなる。……いや、こういう考えが出てくる時点で後ろめたいと分かってしまっているな。だがやめない。

「……毎回思うけど、リオンは自分の作業部屋とか持ってないの？作業部屋というか、執務部屋？」

そんな質問を投げかけたのはここの指揮官の補佐を務める、副官。指揮官の傍に1番いるであろう人物、WA2000だ。いつもここに来ているのを不思議に思っているのか、それともクラウスと二人きりの時間を邪魔されているのが気に入らないのか。

正直暇なのだ。申し訳ない。

質問に対しての答えだが、特定の作業部屋は持ち合わせていない。緊急整備などもする身だ。全ての環境に適応できねばならないという理由から個人の作業部屋は持っていない。

逆に言えば、個人の作業部屋がないからこそどこでも作業を行えるようにしている……と言いたいところなのだが。

メンテナンスルームや医務室がほとんど自分の作業部屋のようなものだ。自分の持つている器具ではある程度しかできない。

正直言って答えに困る。

「わーちゃん、コイツは自分の部屋を持ってても遊びに来るタイプだから多分あっても無駄だと思うよ」

酷く失礼なやつだ。

全くもって事実なのだが。

地味にわーちゃんと呼ばれて騒ぐわーちゃんの声が聞こえる。しようがないだろう

な、あの指揮官だもの。

机に腰かけたまま、ニヤニヤしながら二人を見ている。

仕事中の態度が悪い？今はまだオフだ。

俺が仕事をする時は本気でマズい時だけ。

……普段の業務や検査？

俺の中では仕事じゃない。

上から金は貰うがな。

そんないつもと変わりのない話をしていると、執務室の扉が開いた。そこには、無口な少女が。

なにも物言わぬまま、執務室へと入ってくる。

そのまま、執務机の前まで歩いてくると、手に持っていた書類を何も言わずに机の上に置いた。

「これ、今回の作戦の報告書だから」

「ありがとうVector。また騒ぎを鎮圧してきてくれたのかい？」

入ってきた少女の名はVector。

名前の元となった銃は非常に近代的なフォルムであり、性能も申し分ないほどの優秀さ。それに見合うように本人も優秀であり、淡々と任務をこなすクールな人物だ。

……少々無口が過ぎるような気もするのだが。

本人は無表情で全くの単調な返事だ。

本当に会話が成立しているか分からないくらいには。

「私は次の仕事があるから。それじゃあね」

「あ、Vector……行っちゃったか」

呼び止めようとクラウドが声をかけたが、その声はどうかやら届いていないようだった。うーんと心配そうに唸っている指揮官。それを見ているけれどどこか複雑な気持ちのWA2000。2人とも渡された作戦報告書を見るも、全く抜け目が無さすぎるほどで正直に言うところ困惑しているだろう。

彼女は確かに仕事ができる。

だが、それ以外の所が妙に欠けている……と言うよりは、意図的に欠けさせているような印象を受ける。

整備士の勘という奴だ。

未だにクラウドは怒ってるのかな……と呟いたり、何か不満があったかな……と不安そうに悩んでいる。それを見たわーちゃんやんは元々あんな感じだったとできるだけ落ち込ませないようにフォローを入れている。……確かに元々あんな感じだが、素があんな風では無い気がする。どうだかは分からないが。

そんな風に少し重い雰囲気の中、もう1人来訪者が現れた。

「失礼します、クラウド指揮官」

そうやって入ってきたのは鉄血ハイエンドの1人、ハンターだ。特に何かを報告することもなさそうし、俺を探しにでも来たのだろうか。ハンターは礼儀正しい。

鉄血の中でもかなりキツチリした方だ。

俺の中での鉄血常識人はハンターとゲージャーが双璧を成して1番だと思っている程だ。

スケアクロウは常識人じゃないのかと聞かれると、少し答えづらい。まともではあるのだが、どこか致命的に抜けている。だから常識人では無いと思っっているという理由だ。

……失礼だろうか。

そんなそれた話は頭の片隅に置いておいて、ハンターの言葉に耳を傾けた。

「……今回、Vectorと共に任務へ赴いたのですが……彼女はとも、無鉄砲な行動が多いと言いますか……自己のことをリスクの計算から外しているようで、どうにか出来ないかと相談に来た限りです」

ハンターはどうやらVectorと共に行動していたようだ。ハンターは仲間意識を大切にしている人形である。その証拠が処刑人との仲の良さや、隊員の仲間との円滑な連

携だ。そういった集団でのチームワークの適応は彼女に勝る者はそう居ないだろう。そんな彼女が Vector を見かねたのは、Vector の自己を案じない行動を不安に思っているからだそうだ。

……確かに、優秀である反面、そういった考え方による危険性は十分にありえる。流石に直すことは出来ないだろうが、多少の緩和くらいは出来ないだろうか。

「……うーん、本当は俺が行くべきだと思うんだけどね。まだ仕事があるから……」

それはそうだ。

指揮官は、この部隊やこの地区のトップだ。

そうである以上、多少のことで仕事から離れる訳には行かない。休みでもなければ。今は特に情報整理中ということもあり、離れる訳には行かない。

「……適任がいるじゃない。ほら、そこに人形の話聞いてあげる専門の人が」

そう言つてわーちゃんが俺を指名する。

まあそうだろうな。予想は出来ていた。

というか、お前から指名が来るのは思わなかった。

普通の褒め言葉を吐くわーちゃんというのも新鮮だ。

時々罵倒しようとして回り回って普通に褒める言葉を使ってしまっているわーちゃんは見ると、
んは時々見るが。

……まあ、仕事が回ってきたと思えばいい。

ようやく執務室の机から腰を上げ。真面目な体制に入る。これから人形の心に入り込むわけだ。冗談で取り合うのは失礼というものだろう。

ハンターはお前が来てくれるなら助かると安堵しているようだ。前々から思うが、本業は技術屋であってカウンセラーではない……それでもそんな依頼を受けてしまうのは、やはり俺がお人好しなのだろうか？

自分で言うのもなんなのだが。

少し息をついてから、執務室を出た。

「……よう、ここに居たのか」

「……ああ、整備士さん。何の用？」

Vectorは射撃訓練場にいた。

彼女は戦闘に関しては特に手を抜かない。

故にいつも訓練をしていたり、武器の手入れをしている時間が非常に長い。兵士や兵器としては優秀なのだが、人に近くなっている人形としてはどうなのだろうか。

いつも通りの淡々とした返事にいつも通りの調子で話す。

「何、少し話でもしたくてね。……時間、大丈夫か？」

「別に……時間はいくらでもあるし、いいよ」

私なんかと話して、面白い事は無いと思うけどね。と付け足されてしまったが、以外にも断られなかった。

近くのベンチに座り、射撃訓練をしているところを見ながら話してもしようかと思っ
た。

彼女からしたら、銃を打つついでに話をする的な感覚なのだろうか。別にそれでも、話を聞いてくれるならいいのだが。

「……ハンターから聞いたよ。結構、自分の事を勘定に入れない奴なんだってな。随分な命知らずだって言ってたよ」

その言葉を聞いて、特に顔を歪めるでもなく、緩めるでもなく。無表情のまま抑揚のない返事を返す。

……会話が続かない。コミュニケーションという訳では無いのだろうか、彼女はあまりコミュニケーションを取れない方なのだろうか。

続けて、なんで自分のことは勘定から弾いてるんだと理由を聞く。そんな彼女から帰ってきたのは……

「私はただの兵器。商品でしかないから。別に壊れた所で代えなんていくらでも効くでしよ。」

……彼女はそう言った。

自分はただの兵器だと。

商品でしかないのだと。

……ああ、確かにそう言っていた。

あのグリフィンの Vector でも、そんなようなことを言っていた気がする。その時は、まだ何を言っているんだ。そんな程度にしか思わなかったが、今は違う。

自分自身の価値を分らないのは、絶対にいけない。

失ってから気づくでは、最悪なのだから。

いや、彼女はそのままだら気づくことさえない。恐らく、そのまはまにしていたら自分の価値などどうでもいいまま壊れて行く。……それだけは、させたくない。

「……なあ、恐らくそれは烙印^{ASSIST}の記憶のせいだと思うけどよ、何でそんな考えになったんだ？」

回りくどいのは嫌いだ。

答えを絞り込みながら、彼女の核心に近づく。

……とは言えど、これは彼女が本心で隠している訳では無いだろう。今までの対話の経験からしてわかる。

彼女は……

「兵器として生まれたから。ただそれだけ」

……やっぱりだ。

戦術人形という名の兵器として生まれたから、自分を兵器として扱うのだ。最近になつてなお、戦術人形を兵器としてしか見ない人間が異様に多い。

それ故に彼女のその考え方が助長されているのかもしれない。正直な所を言うと、一番俺が気に入らない考え方だ。

本人が考えているのだから、強くは言えない。

それでもひとつ、伝えたいことがあった。

戦術人形が生まれる頃からずっと思っていた疑問だ。

「なあ、Vector。兵器に思考回路は必要だと思うか？」

「……何それ。効率的な戦闘をするなら、必要じゃないの」

勿論、普通に考えたらその答えが普通だ。誰だつてそう思う。自分で考え最善の戦略を持つて行動する……それは確かに、兵器の理想形だ。ただ単純なプログラムに沿つて戦闘を行う自立兵器など、ただの的やかもにしかならない。

故に常に思考し、その行動を変える兵器は理想系だ。

だが……それなら俺は、もうひとつ疑問があつた。

「なら、何でお前らの生みの親は人間らしい思考回路にしたんだろうな？」

そんな問いに、Vectorは答えられなかつたようだ。

全部が効率的に進めるような兵器なのであれば、極力邪魔な機能や思考パターンは排除すべきだ。こう言つてはなんだが、兵器としての力ならば鉄血工造の量産型達の方が良いと俺は思っている。だが、それでも人間らしい思考回路を持つのは……

きつと作り出した人間の勝手なのだろうが。

それでも、人の形を取つた以上は……

「せめて、普通の人間と同じように過ごして欲しいんじゃないのか？……戦場でも死なないように生きのびて、戦いのない時はのびのびと過ごして……もしかしたらそんな意

図は無いかもしれないが、俺はそう思ってる」

そんな考え方に、訳わかんないと答える V e c t o r。

「私が兵器じゃないなら、私は何なの？」

人間だろ。

そう即答した。

人形も人間も変わりない。

同じように感情を持ち、同じように過ごす。

そののどこに変わりようがあるのか。

少なくとも、俺はそう思っている。

「……私が人間だったとしても、無個性で無価値。それだったら兵器として見た方がマシじゃない？……戦うことだけが、私の意味だから」

そんな彼女にため息を吐いた。

……それだったら、俺は当にお前の所から去つて見捨てている。そう吐き捨てた。お前の所に居てこうやって話しているのは、お前を人間として見ているからだ。お前の価値がそれだけじゃないと知っているからだ。そう強く答えた。

戦いのために生まれて、戦いで捨てられる運命だと思っていたV e c t o r。だが、彼女のそんな考えが、ほんの少しだけ揺らいだ気がした。

……何処かには、殺しのためだけに生まれてきたと言いながら平和に過ごす人形がいる。本当に殺しのためだけに生まれてきたはずの人形は、今やそこに居ることだけで笑顔を振りまける人物になっている。

そんな人形と同じように、お前にだつて居るだけで意味がある。使い潰しの効くような兵器とは全くもつて違う。俺はそんな風に話した。

「……あんな風になれなんて言わねえけどさ。……せめて、自分の命の価値をもう少し重く見てくれ。お前だつて立派な人間なんだから」

そんな言葉に、未だに訳が分からないよと言いながらも、ほんの少しだけ表情が柔らかくなったようなV e c t o rがいた。兵器としてだけじゃなく、自分を人間として見

ろ。そんな訴えにVectorは少しながらも理解がいったようだった。

固まった考え方はなかなか戻せないけれど、少しは努力してみようかな。そんな声が聞こえた。

「……Vector。ここにいたのか」

「ハンター……どうしたの。次の作戦の話？」

ちょうど話が纏まりそうな所で、ハンターが入ってきた。

Vectorは切り替えてハンターの方へ向いた。

次の作戦の話かと言うと、また戻ってるなど少し思ってしまった。本当に変わってくれるのだろうか。

「いいや……ただ、つい先程のお礼を言っていなかった。ついさっきの作戦の時は助かった。でも、もう少し自分の命を重く見てほしい」

「……それ、さつきも整備士さんに言われた。すぐは難しいけど、まあ……何とか頑張ってみる」

そんな答えにハンターも少し驚いた様子だった。

普段のVectorならば何気なく押しつけるだろうが、今日は違った。俺の言葉が、届いてくれたのだろうか。

必死に語った甲斐があつたなど少し頬が緩んだ。

「良ければ、次の作戦も一緒に頼む」

「そうね……まあ、運が良かったら、また仕事しようか」

その後も、ハンターとVectorは少し話していた。

作戦の話や、行動の話。そのどれもが日常会話とは言えないものだったが……確かにVectorの中でなにかがほんの少しだけ動いたことは感じとれた。ハンターも、どこことなく変わったことを嬉しく思っているようだった。

「これ、今回の分の報告書」

「うん、いつもありがとう Vector。……少し、表情が柔らかくなった？」

あの子の執務室での一幕。

この前と同じように、Vectorが報告に来た。

その時の表情はほんの少し、多少感じられる程度だが、柔らかくなっていった気がした。
まだまだ無表情だが。

でも、指揮官はそんな細かな変化さえも気づいていた。

自分の部下をよく見ている指揮官だ。

「別に……変わってないでしょ」

「そんなことないって！ね？リオン？」

何でよりもよってそこで俺に振るのか。

変えたきつかけを作ったのは俺だろうから変わったことはわかるが、それを変に外に出すのも嫌だ。

と言うより、Vectorがそんなにいい顔をしないでらう。

俺はとりあえず、言葉を濁して誤魔化す。

「私はこれで……あと、最近是人権団体の活動が活発になってるから、早めに手を打った方がいいかもね」

「……分かったよ。ありがとうVector」

指揮官は、その言葉を聞いてわかったと返事をしてからまた色々な業務の遂行や、対策についてを考え始めた。

そんななにか引つかかるような、耳に残る注意を伝えてくれないながら、Vectorは部屋を出ていこうとする。が、なにかを思い出したかのように戻ってきて、こちらの方

に一言置いていった。

「この前は、ありがとう」

そんな感謝が、少しだけ俺の気分を良くさせた。

……ちゃんとお礼を言ってくれて、何となく嬉しい。

後々の不安はあるが、今はその嬉しさに浸ろうか……

これは別の話になるのだが……後にあのV e c t o rの警告によって、とある窮地を脱する事になる。

……俺の、この世界での初の救命作戦だ。

俺は忘れていた。

あくまでここは、鉄血とグリフィンが争わないだけ。

人間と人形の対立は、終わっていないのだと……

救命行動Ⅰ：作戦概要 | Mission Brief

ing—

グリフィン管理下敷地内。

とある廃ビル……

「……敵は見ただけで約数十名。中規模の拠点という所でしょうか」

目の前に見える大きな廃墟。

小さなカメラ越しに見える風景には、幾多もの人間。

ある者は銃を構え遠くを見張り、ある者は油断しきつて気を抜いている。ある者は周囲を警戒し、ある者はサボっている。その全てに言えるのは、全員武装をしているということ。

誰も彼もが思い思いの武装で身を固めているということ。柄の悪そうな集団は、ここを根城にしている。

……いわゆる、最近になって存在感を大きく示してきた反人形団体……自称、『人権団体』と呼ばれる集団のアジト。

私達が招集され任された任務は、この人間至上主義にして差別主義者達の居城を潰すことや、後に繋がるであろう他の人権団体共のデータを集める事。

何かが起きる前に根を取り払っておきたい。と。

グリフィンのクラウドス指揮官や、鉄血工造上層部からのお達しだった。正直な所を思うと、彼らも十分に苛立っているでしょうがこの辺りよりもつと腹が立っているであろう人物を私は知っている。

……寧ろ、彼が真つ先に出てきた。

野蛮な者達を放置して、私たちが怪我でもしてしまつたら彼は怒るだろうか？……それとも、怒らずに心配が先へ行くだろうか？彼がどんな反応をするかは分からない。

だが、確実にそのものたちに対しての怒りは沸き立つだろう。

……私は、彼の過去を本人から聞いた。

人形思いの優秀な技師が、人形を道具としか思わない人間の手によつてあらゆることをダメにされた話。

人形を人間と同じ観点で見る彼は、誰よりも人形を道具扱いすることに対して怒りを

覚え、誰よりも人形達が貶されることを嫌う。……彼は優しかった。

しかし、それが報われることは無かったと私は記憶している。彼にこれ以上辛い思いをさせたくはない。

勿論、他の人形たちが傷つくことも私にとっては嫌な事だ。それを含めた上で被害が及ぶ前に手を打ちたかった。

故に私が今回の作戦を買って出た。

私は本来電子戦特化モデルであり、通常の戦闘はあまり得手では無い。だが、今回の作戦は私だけではなく、他の人形も参加している。指揮系統は鉄血が優れているという所から、現場の指揮は私達鉄血のハイエンドが担うことになっている。逆に言えば、指示を受け動くことに関してはI・O・P製……グリフィンの人形達の方が優れていると言えるだろう。

適材適所。故に双方のいい所取りをして結成されたのがこの部隊……グリフィン・鉄血合同部隊。

実際に戦場に出ることは少ない。

最近はおぼ人権団体の制圧、またはE・L・I・Dの討伐程度だった。

実戦経験も少ない部隊が、数少ない拠点制圧に赴く。

予期せぬ事が起きない訳でもない。地盤は固めておくべきだ。

そう思いビツトの何体かを偵察に出していた。

見える人影は複数。

まとまりも何も無い連中がアジトに集っている。

そんな烏合の衆に、戦術人形が劣るわけがないと思いたい。

しかし、万が一がということもない訳では無い。

だからこうして偵察を行っている。

「……随分と慎重なのね。人権団体如き、私たちの敵じゃないと思うんだけど？」

そう自信ありげに答える人物……

今回協力してくれる小隊……FN小隊の隊長、FAL。

彼女は様々な場所での様々な経験を持ち合わせており、戦力としては願ったり叶った
りな程に有難い助っ人だ。

しかし、彼女は少々自信過剰ではないかとも私は疑っている。経験は確かに裏切らな
い。しかし、私が何度も思うように……経験したことの無い例イレギュラー外がが起こってしまった

場合はその経験を生かすことも難しくなる。

その経験に腰掛けて自信過剰になってしまつては、いざと言う時の対応が難しくなつてしまう……その事を懸念していた。

「……例外が起きない訳ではありません。下拵えはしつかりとしておいた方が良くかと思つたまでです」

「確かに、貴女の言う通りね。何かあつて怪我しましたらなんて言つたら、指揮官がものすごく心配しちゃうもの。……それに、整備士のお兄さんにも注意されちゃうしね」

肯定の意を示してくれたのはこの隊唯一の小型銃を扱うFive—Sevenだった。偵察や斥候などはほとんど彼女が担つてくれるが、今回は私のビットや必要とあらば本業の鉄血製スカウトがいる。偵察というのは常にリスクが伴うものだ。

見つかつてしまえば即座に攻撃を受けるだけでなく、下手をしたら救助できないはるか、人質としてそのまま鹵獲されてしまう事さえ有り得る。

グリフィンの人形に対して、そんな危険なことをあまりさせたくは無い。少しでもリスクのある行動は避けるべきだと踏んだ。

私は鉄血ハイエンドの中でもかなりの慎重派という認識が強いらしい。元々、戦闘能力が高いという訳では無い。

それ故に知略を張り巡らせた戦法を取らねば、直ぐに現場指揮の私が倒れてしまい部隊は壊滅するだろう。

そんな負け方ははつきり言つて恥だ。

そんな醜態を晒す訳には行かない。

故に直接相手を潰すよりも、しつかりとした下準備をした上での戦いを行うのが私だ。

それに今回は、私自身も壊れるのを避けたい。

普段ならそんなことを思わない筈だけれど、私が壊れて帰ってきてしまえば彼は……。

この前のあの話を聞いて以降、私はそういうことを考えるようになってしまった。慈悲や、優しさというものを覚えたのかどうかは分からない。

ただ、謎の使命感だけが私の生存欲を煽り立てた。

「んー……ねえねえ、お菓子食べない？ 頭をすごく使ってるみたいだし、糖分取った方がより働きやすくなるよ？」

そう緊張感もへったくれもない言葉を放ったのはFNCだ。
彼女はいつも何かしらのお菓子を頬張っている。

一体どうしたらそんなにお菓子が出てくるのか、とはいつも考えている疑問。しかし頭を使う時に甘いお菓子がいいとはよく言うものだ。

差し出してくれたチョコを受け取り一言、ありがとうとお礼を言った。いえいえ、とにこやかな顔をしている。

殺伐とした戦場には、こういった人物も必要なのかもしれない。

受け取ったお菓子を一口。

……甘い。受け取ったのはとびきり甘い物だったらしい。

ちよつともうひとつ欲しいと言いつつ欲しかったのは内緒。あくまでこれは頭を効率よく回すため。

そう言い聞かせてちよつとずつ。

「あ、あのう……偵察中のところ申し訳ありません……今偵察中の場所の他にも、見回りで何人かが外で警戒しているようです……」

最後に口を開くのは、偵察に手を貸してくれたFN49。彼女には私がビットを制御して内部の偵察を行っている間にスコープを利用して外の偵察を任せていた。

彼女はこの小隊の狙撃手であり、遠距離を見渡すのは慣れたものようだ。詳細を聞いても、かなり正確な位置を特定してくれている。気弱そうに話しているが、彼女もまた優秀な戦術人形であることには変わりはない。

助かります、と一言かけると恐縮したようにはい、と言う二つ返事しか帰ってこなかった。なかなか彼女も変わった人形だ。

もう少し自信を持っても良いと思うのだが。

その誇らない所が、彼女の魅力なのかもしれないけれど。

「……これである程度の内部・外部状況及び、敵の巡回パターンの解析が出来ました。今そちらの端末にデータとして送ります」

送ったデータには、敵の大まかな配置や武装状況、巡回ルートなど得られた全ての情報が入っている。内部の見取り図やトラップなども抜け目なく把握した。

情報収集や処理は、自慢ではないが得意な方だと思っている。私からしたら、かなり分かりやすくまとめた方ではないかとさ思っている。

「……なるほど？ 流石は鉄血工造のハイエンド。このデータ、もちろん信用してもいいのよね？」

「そう嘯みつかないのFAL。彼女は準備において最善を尽くしているだけよ」

よほど自分の目で見なければ納得がいかない様だ。

まあ、そうやって生き抜いてきたのだから仕方がない。

目で見て体感して、自分の経験で判断する。

それが悪い事だとは言わないけれど。

少しは情報をあてにして欲しいものだ。

それとも、私ที่ได้たデータが信用ならないのか。

「これはあくまで現在時点でのデータです。変わる可能性もありますが、大体のパター

ンや配置が分かればある程度の例外に対応できる筈です」

情報というのは基本的にあてにはなる。

寧ろ、情報がなければ暗中模索の中進行しなければいけない。それの方が余程危険だ。ここに関しては、私と彼女ら……作った企業による思考パターンの違いなのだろうか？

ただ、こんな所で内輪揉めを起こしても仕方がない。

これからそんなことをしては、自分たちの身が危なくなってしまうだけだ。作戦中のチームワークの乱れは致命的な弱点となってしまう……それがこの程度の小隊であれば、尚更。

「……そろそろ鉛玉パーティーに行く？」

物騒な単語を並べてFNCが私に聞いてきた。

……そろそろ、頃合だろう。

「……そろそろ始めましょう。作戦概要を説明します」

——今回の作戦目的は、人権団体の中規模拠点を潰すことによつて活動を抑制すること。および『人権団体』と呼ばれる物の勢力が実際にどれほどなのかを知るために内部に存在しているであろうデータを回収すること。

外部内部含めて十数名の団体の存在が確認されている。

今回は遠距離射撃に長けたFN49を主として、中距離戦にも対応できるFALと共に外部の敵を排除。

外部の敵を排除した後Five—SevenとFNC、私で建物内に侵入……敵を殲滅するという作戦だ。殲滅とは言えど、抵抗できない程度に戦力を削げば良いだろう。わざわざ殺してしまう必要は無い。

しかし、危なくなれば撃つ他ない。

……せめて、あまり抵抗してくれなければいいのですが。

「……最初は、私が重要でしたよね……よし。」

最初の鍵になるのは、いかに外部の敵を気付かれずに倒すか。ここで一人取り逃がしてしまえば内部や他の場所からの増援を呼ばれかねない。

そういった所では、遠距離戦のメインとなるFN49がいちばん重要になる。彼女だって戦術人形……きつと上手くやってくれる。彼女がスコープを覗き、射撃体制を取る。

「こちらスケアクロウ、及びFN小隊……作戦、開始します。」

電子音と共に、開始の合図が放たれた。

救命行動 I I : 開けられた風穴 | Pierce Bu

I I e t |

響き渡る悲鳴。

満たされる紅。

崩れ落ちる人型。

灰色の空の下、それは始まった。

「I I : ……こちらFN49、正面と左側は全滅させました……。残りは側面と建物後方のメンバーのみです」

「I I : 左側は私でやったわ。突入隊、準備はいい？」

廃棄された街中。

既に葉莖は落ちていた。

火薬と硝煙の匂いが充満し、確かにそこが何も無い廃墟郡から戦場へと変わったことを自覚させる。

しかし、それでいて静かだった。
あまりにも、何も無かったかのように。

作戦の第一段階は好調だ。

内部の敵に気づかれることなく、相手を全員排除することが出来た。本当ならFN4の銃声で気づかれるかと思っただが、今日は妙に風が煩かった。助かったといえれば助かったと言える。

しかし、これを遂行しているFALとFN49からしたらとてつもないプレッシャーになったはずだ。

銃弾といえどこの世に存在する物質。

物理によってその軌道を変えてしまう。

だが、彼女らはその障害を難なく乗り越えた。

流石はI・O・Pの戦術人形と言った所か。

「こちらは準備完了しました。時間差でこちらの方へ合流をお願いします」

そういう返答を返すと、2人から了承の言葉が帰って来た。

2人は室内戦には向いているとは言えない。……特に、FN49は狙撃をよく行うライフルだ。室内で狙撃を行える機会は少ない。FALはアサルトライフルではあるが、正確にはバトルライフルになる。バトルライフルは確かに殺傷力に優れており、威力の面では申し分ない。

しかし、これによる難点としてフルオートの射撃の難易度が跳ね上がることが挙げられた。

彼女は戦術人形、ある程度の制御はできるだろう。

しかし、その反動は何度も続けていれば身体に来る。

彼女を1番活かせるのはセミオートの単発射撃のため、制圧で弾をばら撒きやすい室内線には不向きだと判断した。

よって今回、最初の外部の敵の排除をこの2人に任せることにしたのだ。とは言っても室内の方が危険な場所だ。

そんな中で分断されたままでは後に厳しくなると踏んで、外部の敵の殲滅後は合流する事を伝えている。

……しかし、気づかれるのも時間の問題。

待っている時間はない。

なので先に私たちが中に入りある程度の敵を掃討したあと内部で合流、残りの残党を排除するプランになった。

外の2人の行動が終わったとなれば、今度は私たちの番だ。素早く敵を無力化し、2人が安全に合流できるルートを意識しなければならぬ。思考回路をフル稼働させ、最善の手を導く。

それが私の役目だ。

「……そろそろ行きましよ、2人が待ちくたびれてるわ」

「敵の排除なら任せて、正確に撃つことなら自信あるから！」

「頼もしい限りです。……Five—Sevenの言う通り、行動に移りましょう」

突入部隊の行動が開始した。

Five—Sevenが裏口の鍵をこじ開け、密かに中へと侵入した。無論、私も気づかれないようにビットの展開は最小限に抑えながら。

「……結構騒いでるみたいね。品の無い台詞が所々で飛び交ってるわ」

人権団体という名ではあれど、その実態はほぼ人形を差別する者達ばかりだ。さらに言えば、最近のここは差別主義者と言うだけでなく殆ど野蛮人と変わりない行動をとり始めているそうさ。片っ端から戦術人形がいる基地を襲撃し、略奪や被害を及ぼす最悪な蛮族共だ。

元は人間が私達人形に仕事を取られてしまうという思い込みからの反抗活動だったというのに、今となってはここまで悪化している。もはや目的は自分たちの仕事を取り戻すことではなく、人形そのものの根絶と化してしまっているのだろう。

馬鹿馬鹿しい。人間は新しいものに適応しきれない場合は拒絶反応を起こしてそれを避けようとするって聞いたことがあるが、まさにその代表例だ。

ただ自分に対応できないものが現れただけで、ここまでする人間の類は呆れを通り越してもはや憐憫を感じる域だ。

そんな者達に、私達の平和な日常を奪われてはたまらない。元々私たち鉄血工造とグリフィン……I・O・Pが友好関係になったのも、こういった輩が活発化してきてほぼテロリストと化した状況で私たちが協力するべきだという理由だ。

結果として、私達も知らない平和な日常が繰り広げられるような世界へと行くことが出来た。

殺伐としてしかいない、ただ殺し殺されの世界とは違う場所を知れた。そういった面では感謝するべきかもしれない。……だが、それを奪いかねないとなれば話は別だ。

「……ここが一番人が集まってるみたいだよ。乗り込む？ 乗り込む？」

FNCが喜々と聞いてくる。

廊下で聞こえてくる声あまりに不快で仕方がなかったのだろう。……時に彼奴ら、人形を捕らえて自分の欲望の捌け口にすることさえあるという。必要無いとは言っておきながら、そういう用途では使用するのかと考えると吐き気を催す。

この基地の司令官や、彼がそういった人間で無くて良かったと心から安堵する。その反面、彼女たちは余計に奴らへの苛立ちが募るばかりだった。

……今回は内部から聞こえてくる音や声的に、そういったことは無さそうだ。もしもそんな人形がいたら、必ず救出するという任務が追加されてしまう。

面倒とは言わないが、目的の達成が難しくなる。

それでも無理にお願いされてしまうのがここののだが。

それに、そんな人質がいたなら簡単に撃ち合うことは出来ない。その人質の安全が最優先なのだから。

そう思うと、かなり今回は楽な仕事になるだろう。

「……構いません。突入の要は貴女です……好きなタイミングでどうぞ」

「私達もそれに合わせて突入するから、お構いなくどうぞ」

私とFive|Sevenの意見は一緒だった。

Five|Sevenもハンドガンだ。私と同じように、お世辞にも戦闘が得手とは言えない。

ハンドガンはその携行性の良さや取り回しの良さからサポートや隠密行動等に優れた銃種だ。

アサルトライフルやサブマシンガンで武装された相手と正面切って撃ち合うのはあ

まりにも不利だ。

しかし、ダミーを最大まで配備したFNCが居る。

正面の打ち合いは彼女に任せ、こちら側がサポートに回り制圧する。それが私たちの作戦だった。

奴らは軍人ではなく、あくまで素人の犯罪者達。

強襲、急襲への備えはほとんど出来ていない筈。

静かに侵入し、内部で爆発的に暴れる。

そうすれば、相手は対応が遅れ気づいた時には手遅れ……そういう風にことが運べる算段だ。

相手が素人だからこそ行える作戦だった。

FNCがドアに手をかけ、カウントダウンを始める。

「……………3……………2……………1……………」

思い切り部屋の扉が開かれる。

中にいた数人が大きな音に気づき、慌てて銃を取り出し構え始める。……が、遅い。無警戒な相手に対して奇襲を仕掛けた場合、真つ先に攻撃を行えるのはこちらだ。既に銃を取り出している方が早く引き金を引けるのは当たり前前の話。

「打て打てー！」

すぐさま発砲の構えを取った者達をFNCは何ら焦らない様子で撃ち抜いていく。撃て、という合図に合わせてダメー達も一斉に別々の対象へと弾を撒いて。

戦術人形達は時々変わった構え方や姿勢で銃を運用することがあるが、FNCのそれは完全な模範と言えるほどに理想的な射撃姿勢だった。

銃弾のばらつきは少なく、ものの数秒で無力化を進める。反動も容易く制御しており、兵士としての力量はなかなか高いのではないかと感心させられてしまった。

少しすれば人だったそれは蜂の巣のように穴だらけの物体に変貌していた。

「初めまして……少し眠っていてください」

彼女に続いて私も、ビツトによる攪乱や援護射撃によって相手をどんどんと混乱させていく。

撃たれた痛みや、意図せぬ痛みは人の恐怖を煽る。

恐怖や苦痛は、悲鳴となつて響き渡る。

そうやつて連鎖して煽られた恐怖は、やがて人の内にある平静を崩して行く。悲鳴を上げた者達はのたうち回り、味方を撃つことさえあつた。

こういった殺し合いの場所では、冷静さを欠いたものから死んでいく。彼女らの様な手馴れた者はいくら口で騒いでいたとしても、その中身は必ず冷静だ。

如何に効率的に鉛玉を食らわせるか。

いかに相手の抵抗を減らせるか。

戦闘中の頭の中などほとんどそんなものだろう。

「のろまさん達、私についてこられる?」

一部の敵は一番無力だと思われがちなFive—Sevenに狙いを絞り引き金を引いている。ハンドガン持ちごとき、簡単に殺せる……その考えは、大きな間違えだ。

ハンドガンは小型の銃……サブマシンガンには劣るが、その身のこなしは軽快で、なかなか銃弾が掠ることさええない。弄ぶかのよう駆け抜け、的確に相手を撃ち抜く。

一部は死なずに済んでいる……だが激しく抵抗する相手に対して慈悲をかけられる程私達も肝が座っている訳でもなく、後ろから撃たれないという確信がある訳でもない。中には、急所に入り確実に死している人型も転がっている。

「クソツ、応援を呼べ！ グリフィンと鉄血の鉄クズ共をさっさと潰しに来いと命令しろ！」

彼らは口々に私達を罵倒しながら応戦する。

私達も超人らしく銃弾を避けられる訳では無い。瓦礫や家具、壁などに身を隠しながら確実に対象の数を減らしていく。

……私達を鉄クズと呼ぶけれど、そんな鉄クズにさえ撃ち抜かれる彼らは一体何になるのだろうか？

今度、彼に聞いてみるとしよう。

とてもでは無いが、人前に出せないような言葉で形容されそうなのが目に見える。

大きな発砲音と軽い葉莢の落下音が響きつづける。

辺りは一面の赤、赤、赤。

風穴の空いた何かが無造作に倒れ、その光景はまさに地獄絵図。戦いに身を置くものにとつては日常だが、それ以外の物にとつては衝撃的で狂氣的なものだ。

未だに激しい抵抗は止まない。

「もう・しぶといよ・さっさと倒れて！」

「一体何でもここまでやられておいて諦めないのかしら……そんな抵抗は、無駄な行為よ」
「早く投降することを推奨します。……そうすれば、身の安全は保証しましょう」

向こうとしても最悪の光景のはずだ。

こんな状況は、訓練を受けていない人間ならまず耐えきれない。それなのにも関わらず、未だ抵抗を続けているのは彼らが異常者ということだろうか？

銃声は鳴り止まない。

数少ない者達で、決死の抵抗を続ける。

言葉も通じなくなつたということか。

このまま続いていたらまずい。

別の場所のメンバーもそろそろ気づいてもおかしくない頃合いだ。早く片をつけなければ。

そんな時だった。

抵抗の手が一気に緩んだ。

いや、正確には抵抗の手が減つた。

私たち以外の銃声……聞き覚えのある、1発ずつの銃声。

「随分と手こずつてるじゃない……手を貸すわ」

「……は、早い合流ですが、ちょうどいいタイミングでしたか？」

別働隊の2人。

FALとFN49が予定より早く合流した。

裏から回っていたらしく、相手の不意をさらに付く事が出来た。もうこれで、残りは

1人程度。

もうさすがに勝てないということを悟ったのか、武器を下に落として両手を上げた。もう降参だ。

命だけは助けてくれ……そんな典型的な三下の言葉を吐いて、ただひたすらに懇願する。

……抵抗の意思がなくなったのなら、拘束して終わり。

最初にも彼女らに行つたが、わざわざ殺す必要は無い……指揮官からも、そういう様なお達しが来ていた。

ならば、ここは彼を拘束して終わりだ。

「……Five—Seven、彼を拘束してください。……何かしら、次の情報を握っている可能性があります」

「わかつたわ。……大人しくお縄につきなさい」

横には警戒のため銃を向けるFALとFNC。

彼を拘束する行動を取るFive—Sevenとそれを補助するFN49。生きた

まま捕えれば、次の情報が手に入るかもしれない。ある種、これも任務の遂行だ。

それに、私がやる訳では無いが、やろうと思えば今までの行いを解らせる事だって可能だ。その場合は、被害に遭った人形がメインとなるだろうけれど。

複数の意味で、彼を生かしておくのは得な選択だ。

Five—Sevenがようやく捕縛を終える……

「……ツツ!?!」

「何をしているんですか！大人しく……きゃあつ……!?!」

筈だったのだが。

彼女の身体に、激しい電流が走った。

反射的に手を離してしまい、捕縛が解けてしまう。FN49が慌てて押さえつけようとすが、同じように強い電流が彼女の身体を襲う。……スタンガン。

激しい電流によって、動きを止める護身用の道具。私達は戦術人形……あくまでも機械だからか、並の人間よりもその影響を強く受ける。2人は倒れ込み、それに気づいた

2人がそちらに目を向けてしまったその瞬間だった。

その男は、確かに……FALに向けて、捨てたはずの拳銃の先を向けた。既にトリガーに指はかかっている。

「……っ！FAL！」

叫ぶ声。

避けきれない身体。

「馬鹿が……壊れちまえ、鉄クズ風情が！」

響き渡った銃声。

食い込む鈍い音。

片腹に感じる違和感。

……私は、それを認知してしまった。

体が赤黒く染っている。

白黒の服にべとりとした感触がまとわりつく。

……私は……

「……嘘……あなた……何やって……？」

鮮血が私の身を染めている。

大きな風穴が空いた。

痛みが脳にフィードバックされる。

声が出ない。息が上手く吐けない。

私は確かに……

撃ち抜かれていた。

救命行動 I I I : 救命作戦 — Operation L

i f e s a v e —

「……える!?……返事を……」

グリフィン基地内、執務室。

彼女らが作戦中、特になにも変わりのない空気が流れていたこの部屋。今日は珍しく整備士の姿が無く、比較的静かだった。

いつものように指揮官は副官であるWA2000と絡んだり、時々執務室に遊びに来る人形と遊んだりなど、自由気ままに仕事をしていたのだが……

ノイズ混じりの通信が無線機に入る。

憔悴しきつた声が彼の耳に入る。

雑音が酷い。その中でもなんとか言葉を聞き取ろうと意識を集中させて……。

いつも漫才のようなやり取りをしている2人の空気が一瞬にして詰まる。只事ではないことはWA2000も察しているのだろう。

「こちら司令部……FAL、どうしたんだ」

ようやくFN小隊の隊長……FALの声が鮮明に聞こえ始める。しかし、今回現場の指揮を執っているのはスケアクロウのはずだった。

普通ならスケアクロウが代表してこちらに通信を伝えてくるはずなのだが……今回は焦りきった声色のFALがこちらへ無線を飛ばしてきた。余程緊急事態が起きたのだろうか。

クラウドは焦り切っているFALに落ち着いて、と普段からは想像もつかない落ち着き様のしつかりとした返答で返す。

現場で動く者達を束ねるものとして、ここで下手に焦る訳には行かない。彼は何時もそう頭の中に刻み冷静さを保っている。……本当は何が起きたのか容易に想像が付き、焦りが迫ってくる。

それでも、適切な判断を下さなければならぬ。

それが指揮感に必要な能力だ。

焦るな、息を乱すな……そう自分に何度も頭の中で復唱し、落ち着きを無理矢理取り戻す。

彼女が伝える事象を受け止める用意は出来た。

「……スケアクロウが、撃たれたわ。しかも、大口径のをモロに」

……負傷状況は？ 続けて問う。

負傷状況もかなり悪いらしく、人工血液の出血が酷い。まだ良かったのは、弾が貫通していることだった。

I・O・Pの人形が扱うホローポイント弾や、今やほとんど見ないがダムダム弾などであったりしたら、治療さえも困難になる。まだそれが救いだっただか……そう考えていた。

しかし……

彼女は続けて答える。

「かなり苦しんでるの、救助をお願い！」

撃たれただけでない。苦しんでいる。

その言葉に、さらに不安が煽り立てられる。

指揮官は、それを可能にする手立てを知らない。

人形相手に毒は効くのか……？

それとも、別の何かなのか……。

そうは考えるが、今は時間が惜しい。

追求は後に回し、まずはこの緊急事態の対処に当たらなければ。

……アイコンタクトで、WA2000に何かを伝える。

何も言わずに頷いたWA2000は端末を取り出してそれを耳に当てた。……彼に頼ろう。言葉でなくとも分かった。

彼の静かな指示は確かに彼女に伝わっていた。

「……すぐに救助に向かわせるよ。それまで、耐えられるかな」

「分からない。そろそろ応援が呼ばれてしまうかもしれないもの。……それに、Five—SevenとFN49が感電の影響で少し動けなくなっているわ。できれば、戦力的な補助もお願い」

今回の事例は例外だ。

普段なら鉄血のハイエンドが真つ先に負傷するなんて事は有り得なかった。……自分の警戒が甘かったか。

彼女の力を過信していたとは言わない。

ただ、自分が平和ボケをしていただけだろう。

何としてでも、助けなければ。

……彼女の為にも、彼の為にも。

静かな決意を固めて、もう一度返答する。

「……分かった。戦力補助は遅くなるけど、救助はいち早く向かわせるからね。応援部隊が到着後、戦闘できる君とFNCは作戦を継続して欲しい」

そして、最後に迫り来た下衆共への怒り。

自分の大切な仲間たちに手を下したその愚行を許す訳には行かない。……ただでさえ、見逃してやっていったのだ。

最早、ここで容赦する必要は無い。

連絡を取りながらちらりと指揮官の方を見るWA2000も、普段の穏やかな顔から一変して真剣な顔つきの中に灯る怒りの火種に気付いているようで、少し怯えかけている。

ここまで明確に、自分が感じられるほどの威圧感を放つ所など見た事がない。

……確かに、最近危ない戦闘がなかったからかもしれないが。そんな指揮官が、低い声でもうひとつの指示を出した。

「……そして、作戦内容を変更する」

相手を刺し殺すかの様な鋭い声が響いた。

FALは何も言わず、その指示を待つ。

「……殲滅しろ。1人も生きて返すな。誰に喧嘩を売り、いかに愚かなことをしているか……分らせてやってくれ」

純粋な黒い感情で形作られた言葉が、彼女たちに向けて放たれた。慈悲などもうくれてやらない。

報復の時は来た。

これは、個人の感情だけではない。

ここまで危険化していると言うのなら、そのまま生かして置けばエスカレートしていき、最後には人間さえも騙して殺す狂った獣に成り果てる。

そんなことになれば、ここでさえ混乱に陥りかねない。そんな下等な者如きに、この場所を掻き回されてはたまらない。自己の判断だが、クルーガーも納得する理由は持ち合わせている。ならばもう、後は派手にやるだけだ。

それでも、危なくなったら引くこと。と、付け足す。

こんな状況でも、怒りだけに支配されないので彼だ。

自分が怒りだけに身を任せてしまえば、実際に戦場にいる彼女らを余計に危ない目に遭わせかねない。

1番は何より、彼女らの生存なのだから。

「……連絡がついたわよ。アサルトライフルとサブマシンガンを何名か貸してほしいって。……あと、部隊は先に派遣しといて欲しいわ。現地集合の方が早いからとの

ことよ」

連絡の付いたWA2000がそう報告する。

分かったよといつももの優しい声で受け答えをする。

今彼はちようど出払ってしまっているからか、直ぐに戻って直ぐに現場に向かつてくれると言っている。

タイミングが悪い。

どうか、生き長らえてくれ。

そんな祈りを心の中に押し込め、相手を潰す準備を進める。……彼が仲間を救う者なら、俺は敵を殺す者だ。

そんな言葉を呟き、また新たな通信を始めた。

そんな中、俺はグリフィン管理地域市街へと赴いていた。人の営みはこんな荒廃した世界の中でも確かに存在する。

グリフィンの庇護下の街は、荒れてはいるものの確かにこの世界が壊れる前と同じように機能している。

変わったところといえば、昔以上に周りが協力関係を結び互いに助け合っていると云えようか。

第三次世界大戦が勃発した頃や、それ以前のこういった市街地はある意味戦場より恐ろしい場所だったと聞く。

俺は覚えていないから分からないが、ただ街中を歩くだけでさえ殺される危険を持つような場所もあったという。

警察機関の一部はその役目を放棄し、自らの欲望のままに動き。弱者たちは平和の裏で唯ひたすらに苦しめられ続ける。それでもなおそれを平和と言えたのは異常だった。

今が決して平和とは言えない。

ただ、そんなことを聞いてしまえば多少はこんな世界もマシだと思えるのだろうか……
人は、戦争や紛争を通して成長しているのだろうか？

どうでもいいようなことを考えながら、日常の日課をこなしていく。今日の飯はなにしようか。

今日は誰が部屋に転がり込んでくるのか。

そんな予想をしながら色々な買い出しを行う。

時々、予想が当たった時は自慢したくなる。

なんとなく優越感に浸れる気がしたからな。

そんな時、ポケットに入れていた端末が振動し電子音を鳴らす。

「……ハイハイ、リオンさんですよ」

そんなふざけた感じで今回は出てみた。

いつも普通に対応するだけでは面白くない。

適当にふざけて、笑わせるくらいはやってみたいものだ。

どうせいつもの様に勝手に勝手に部屋に入っているという事後報告だろう……そんな風に踏んでいたのだが。

「リオン、緊急事態なの。落ち着いて聞いて……」

いつも素っ気なくツンツンしているわーちゃんが珍しく焦りと怯えが混じった声でこちらに話しかける。

……どうにも様子がおかしい。

別にまだ怪談やらお化けの話が出てくる時期でもないだろうに。……いや、もうそんな時期か。

別に大して重要では……

「……スケアクロウが、撃たれたって」

その言葉を聞いた瞬間、一瞬世界が固まった。

あれやこれやとふざけて考えていた思考が一気にシャットアウトされる。頭の中が消えていく。

……あのスケアクロウが？

その言葉が頭に反響する。

どういふ事なんだ。俺は余りにも、この言葉に冷静にはなれなかった。焦り、恐怖、困惑。

色々なものが混ざりあつて何とも形容しがたい。

「どこで撃たれた!? 場所は? 何時だ!？」

食い気味に、威圧するような声色で聞いた。

圧されたWA2000はさらに怖がつているようだが、それでもしつかりと情報をこちらに伝えてくれる。

場所は近くのテロリスト……人権団体のアジト。

グリフィンの庇護下に置かれている地区ではなく、その少し外にあるらしい。この前のVectorの報告により活発化していることが判明して、それを制圧する作戦を

近々行うとは聞いていた。まさかその作戦で……

余計なことを考えている暇はない。

救命行動は、時間との戦いだ。

同行していたFN小隊のうちFive—SevenとFN49は拘束するはずだったクズの隠し持っていた高圧スタンガンにより一時的に行動不能になっているらしく、今まともに動けるのはFALとFNCだけ。怪我の状態もかなり悪いということも伝えられた。

提示された座標はここから装備を取ってすぐに向かったとしても20分はかかる。かなりひどい状況だが……

「……すぐに向かう。廃ビル内だったよな？……アサルトライフル、サブマシンガンに合わせて数名程度貸してくれ。それで十分だ」

あくまで俺は生身だ。

一人きりで行く訳には行かない。

そんな事でもしたら、俺は間違いなく死ぬ。

そうなれば、救えるはずの命も救えなくなる。

そんなものはもう御免だ。

状況に適した部隊編成を要望し、それを伝える。

WA2000はそれを伝えておくわと返答を返してくれた。

「……あと、部隊はヘリで先に送っておいてくれ。俺は後でバイクで向かう……現地集合の方が早いだろ」

……クズ共が。

俺の大切な仲間達を。

日常を共に過ごす家族達を。

この身に怒りが燻る。

今は、ただ助けることだけを考えろ。

それが終わったら……

次に撃ち抜かれるのは、貴様らだ。

楽に死ねると思うなよ。

アルケミストのような言葉を内に秘め、買った物の状態など気に求めずに走り出す。運動能力が無いわけではない。

早めに、早めに。全力疾走を持って基地に帰還する。

取り敢えず、荷物の事などどうでもいい。

手馴れたスピードでさっさと装備を整えていく。

軽量の防弾ベスト、自分用の武器、弾薬。

修理用の工具、応急処置用の携帯医療具。

通信機器を耳に取り付け、無線を繋げるようにする。

……思えば、この世界での初めての出勤だ。

本当なら、俺が出ないのが一番なのだが。

だが、こうなってしまった以上は俺が頼りになるしかない。人間も人形も、治す時は

時間との勝負だ。

初動をしつかりとした処置で始め、少しでも生存の確率を上げなくてはならない。怪我の状態が酷い以上、時間に猶予はない。

早いところ、行かなくては。

そう思い、ガレージに向かう途中だった。

「やつほー、旦那ー」

能天気な技術屋……アーキテクトがどこからともなく現れた。

今は変に世間話で時間を潰している暇はない。

そう思い、話は断っていこうと思ったのだが。

「スケアクロウを助けに行くつしよ？……はいこれ、頼まれてた武器のすーぱーばーじよんの完成品ね！」

投げ渡された銃を受け取る。

確かにずっしりした重み、以前よりも増している。

全体的なカラーリングは黒鉄のそれに変わっており、それ以外に変化は見られない。彼女が言うには装弾不良の可能性をほぼ排除、威力連射力を強化しており、確かに強くなった逸品だという。

ありがとよと軽く返し、もう片方のホルスターにそれを収納する。……こちらは早々使わないが、奴らに1発食らわせてやるには十分だ。

「あと、バイクの方もスピードが出るように改造しといたから！ある程度安定性も強くしといたから心配ないと思うけど、事故んないようにね〜？」

恐ろしい仕事人だ。

いつの間にそんな改造を。

していいなんて一言も言っていないが、非常に助かった。

どうやらまたゲーマーに追われているらしく、私はすぐ戻るからと言って帰ろうとする。

最後にアーキテクトは、スケアクロウをお願いするかんねと一言告げてなに食わぬ顔で立ち去った。

「ありがとさんアーキテクト、今度何か礼の1つでもさせろよ！」

そう告げると、ガレージに止めてある俺の愛車に手をつける。元々はジャンク品で俺が拾い上げ、技術勉強がてら修復したものだのだが……まさかこんな所で使用する事になるとは思わなかった。だが、今はとてつもなく心強い。

キーを差し、エンジンを吹かす。

確かに力強くなっている。

危なげはあるが、これなら間に合うかもしれない。

……待っていてくれ。

前は救えなかった。

だが今は。

「……死ぬなよ、死んだらあの世に行つてまでお説教だからな」

そんな冗談を口ずさみながら、エンジンを強くする。

轟音を轟かせながら、その身を外へと飛ばした。

「……あー、あー。へりの中、俺の音が聞こえてるか？」

バイクの轟音が音をかき消してしまいそうだ。

サイレンサーがついているとはいえ、流石に大きいか。

おーい！聞こえてるかー!?と結構大きな声を上げた。

かなりうるさかったのか、ガタガタという音がなりながら1人が答えた。

「聞こえています。そちらの雑音が大きくてなかなか聞き取れませんでした」

その声を聞き、借りた1人を把握する。

いつも指揮官にメイド長やら何やらと言われているアサルトライフルの戦術人形、G

36だ。

彼女は普段日常に関わる家事などの仕事を行っているが、戦闘の腕も良い優秀な人物だ。

彼女がいてくれるのなら周りは安心して任せられそうだ。今回の作戦は周りの警戒をさらに強めなければならぬ。遅くなれば応援さえ呼ばれてしまう。

そんな中でこの援軍は非常に助かる。

他には誰が居る？

そんな風に問う。

G36によると、他のメンバーは彼女の妹であるG36Cや同じ会社の銃を元にしたMP5、G41がこちらの護衛についてくれるらしい。ここまでの精鋭が揃えば心配はない。

だが、それでも撃たれた事例が起きている。

油断はせずに行こう。

「雑音の中悪いが、ブリーフィングを済ませちまおう」

そう言って今回の作戦の概要を説明する。

メインの目的は、制圧作戦に赴き負傷してしまったスケアクロウ、及びFN小隊の救

出。最重要となるのは致命傷になりかねない傷を負っているスケアクロウを迅速に救助し治療を行うこと。他の二人は感電が治れば動ける為、軽い治療を行う。

その後、護衛部隊は後の作戦に継続して参加する。

「奴らを見つけたら構わない、撃ち殺せ。そっちの方にも多分殲滅命令が出てるだろ」

俺も思うところは同じだ。

むしろこの手で全員を仕留めてやりたい所だ。

だが、俺の本来の役目は死にかけている仲間を助けること。本来の目的を見失って命を落とすものなら後悔してもしきれない。

だからこそ、俺はさらに続けた。

「……深追いはするな。最初は先ず救助を最優先に動いてくれ。……その後は俺が言うまでもないが、全部潰しちまえ。奴らのやった事がどんなことか、身をもって体感させろ」

衝動に身を任せたい。

だが、そうしてしまえば救える命を捨てることになる。

俺の気持ちとプライドが、それを許すことはない。

だからこそ、彼女らに任せる。

辛い仕事を押し付けて悪いな。

そんな風に謝罪したが、彼女達は責めなかった。

それが戦術人形の本来的べき姿であり、本来の役目。だから謝る必要は無いと。

本当はそうかもしれない。

それでも良心が痛むと感じる俺は、やはり異常なのだろうか。……今は、放っておこう。

何れ答えは出る筈だ。

かつて救えなかった人を救う為に。

今度こそは、助けてみせる。

辛い別れはもう十分だ。

決意と覚悟は決まった。

しばらくして、漸く建物の前へとたどり着いた。

そこには既に4人、自分の護衛を担ってくれる人形が立っていた。

「……来ましたね。私達は準備万端です」

「すぐにも行動出来ますわ。なんなりとお申しつけを」

「みんなを助ける為に……がんばります！」

「すぐに助け出して、悪い奴らを倒しちやおう！」

そんな各々の意気込みに口角を上げる。

流石、頼りになりそうな奴らだ。

そんな俺も、ホルスターから片方の銃を抜く。

白銀のカラーリングをした拳銃……

そのスライドには、この銃の銘が刻まれている。

『M93R Saver』。

俺の愛銃だ。取り回しが良く、必要な仕事をこなしてくれる。個人的な改造も施して

いるため、十分な性能を持っている。……さあ、準備は整った。
全員自分の獲物を構え、突入体制を取る。

「……救 命 作 戦、作戦行動開始！」

扉が壊される音と同時に、戦火の火花が散った。

救命行動Ⅳ：救命者 — The Lifesaver

「行け！行けッ！」

扉が壊される音と共に、戦火の火花が散った。

声を張り上げ、突入の合図を送る。

ここからが正念場だ、耐えてくれ。

内部にいる彼女らに、そのメッセージを込めて……

いちばん身軽な俺が先陣を切り、周囲のクリアリングを行う。ここら辺の敵はほとんど無力化されている。

だが、自分たち以外の足音も多々聞こえ始めている。

援軍がもう到着したのか。

それとも、既にもう到着してしまっていたのか。

考察をしている暇はない。

早く敵を制圧し、早く助ける。

最優先事項を間違えてはいけない。

足早に、気づかれる心配もせずに走り抜ける。

時間だ。今は時間が惜しい。

そんじやそこらにいる雑魚に構っている暇はない。

5人分の通行音がビルに響く。

そんな違和感に、敵が気づかないわけもない。

「居たぞ、グリフィンの野郎だ！撃て！」

応援の1部隊と出くわす。

運悪く、自分たちの進行方向の真正面に現れた。

数は見積つて10人程度。こちらは5人。

今回ダミーは急ぎのために用意していない。

だが、こんな程度ダミーが居ない所で結果は変わらん。なぜなら、俺でさえもこんな奴らに負けはしないのだから。

「邪魔だ、退けよクズ共が！」

怒鳴りつけながら Saver を相手に向け、トリガーを引く。このハンドガン……ベレッタ M93R は連射が聞く物だ。拳銃でありながらも、サブマシンガンと似た運用ができる。

他には目もくれず、駆けながら真正面の敵を撃ち抜く。

敵の銃弾を恐れて何が救助か。

この程度の戦場、いくらでも切り抜けてきたはずだ。

1人、2人。頭を目掛けて撃ち続ける。

偶然か否かは分からないが、何発かは相手に吸い込まれ赤い水溜まりを作り上げていく。

奴らはそれに圧されて勢いが弱まっている。

アイツはイカれているのか、そんな風に呟く奴もいる。

だが、もうここは戦場だ。

一瞬の気の迷いが命取りになる。

医療処置と同じだ。重要なタイミングで迷えば、それで命が失われる危険性が大幅に

上がってしまおう。

誰かが言っていた。

ビビったら負けだど。

遮蔽物から遮蔽物へと身を隠しながら、確かに一つ一つ段階を踏んでいく。

そんな中、メイドの姉妹がアイコンタクトで何かを伝えあった。この2人だ、面白いものが見れそうな予感がする。

「失礼致します」

軽やかな動きで銃弾を回避しつつ、敵へと接近するG36C。奴らは同様からか、狙いが上手く定まっていない。

弾が当たらない恐怖と、相手の間合いに入っている焦り。咄嗟に地を蹴り、後ろへと飛びのこうとする。

しかし、その瞬間を今かと狙っていたかのばかりにその頭蓋は鉛の銃弾によつて貫かれることになる。

「メイドを甘く見ないでくれる？」

G36が、G36Cの後方でその時を待っていたのだ。

G36Cが前方で相手を掻き回し、混乱させる。

混乱し動きが悪くなった所をG36が的確に撃ち抜く。

姉妹ならではの息のあったコンビネーションだ。

2人に負けじと、もう2人が意気揚々と攻めていく。

しかし敵は混乱こそしていれど、全くもって攻撃の手が緩む気配がない。絶え間なく飛び続けるそれに当たれば彼女らは怪我をする。俺なら最悪死ぬ。ミイラ取りがミイラになるような自体は避けたいところだ。……まあ、ミイラになどさせないのだが。

小さい影が2つ、派手に暴れているメイド姉妹に隠れて蠢き始める。勿論、必死に抵抗している奴らがそれに気づく訳もない。

「用意……」

そう小声で呟いたのはMP5だ。

この小隊の中で最も体格や背が小さく、機転が利く。

そんな特性を生かして、影へと潜む。

素早く死角へと入り込み、そのまま裏へと回っていき。

その期を今か今かと待ちわびていた。

もう1人……獣かのような眼光が、奴らを捉えている。

「撃って！」

その合図とともに影から飛び出すMP5。

素早く捉えられない動きで弾をばら撒き、瞬く間に場を掻き乱す。不意を付かれた敵がマトモな思考でいられる訳がない。

一斉に騒ぎだし、中には味方を撃つ馬鹿まで現れる始末だ。

そんな好機の中、獲物を逃すはずがない。

「外さないから！」

嘯み付くかの如く、G41が混乱し切ったところに鉛玉のプレゼントを送る。彼女の射撃精度は非常に良いことで知られている。さらに、野生ばりの洞察力を持つ彼女だ。

1発1発が正確に、相手の頭蓋を砕いていく。

弾倉一つ分の弾を撃ち切った頃には、もう立っている敵性目標は居なかった。

敵を片付けた後、続けて駆ける。

今は止まっている暇などない。

即座に制圧し、即座に移動の繰り返し。

一つ一つ、相手の伏兵を警戒して進む。

ある程度の距離を進んだところで、G36が何かに気づいた。

彼女の耳には多数の音、音。

金属がぶつかる音。

足が地面を蹴る音。

幾多ものそれが、彼女に危機を伝えた。

「……！後方からも敵が接近してきているようです、どうしましょうか」

「無視だと言いたいが、もう近いか？」

後ろに接近する影。

正直な所を言えば、無視したい。

奴らに時間を食われれば食われるだけ、こちらの目的が達成できなくなってしまう。かと言つて、このまま追われ続けて目標の部屋まで至つてしまえば明らかに面倒なことになる。

難しい局面に差し掛かってしまった。

本当にこういう手合いは面倒な事しかしない。

予想される距離を彼女に聞く。

「かなり近いですね……無視するのは難しいと思われます」

「どうやらこのチャンスを逃さんとばかりに食欲にゴミ共が群がつてこちらへ来ていてるらしい。

簡単にこちらを殺されてたまるものか。

彼女を助け、お前達への報復を終えない限りは死んでも死にきれない。応戦するのは

非常にリスクが伴う。

そんな時、防弾ベストの胸近くに引つ掛けていたものを見つけた。……本当は、こんな所で使うはずじゃなかったのだがやむを得ない。邪魔な虫共を少し黙らせるにはちょうど良いだろう。

「勿体無いがスモークを焚く！ G36、G41、後ろから出てきた馬鹿は仕留めてくれ！ 少なくとも抵抗の手は緩まるはずだ！」

「お任せ下さい！」
「了解しました！」

空いている左手でスモークグレネードを取り出し、口で思い切りピンを引き抜く。疾走体制を崩さないまま、後ろに思い切り投げ捨てる。

白い煙を噴き出しながらそれは転がり、瞬く間に周辺を白く染めて上げていく。視界がシャットアウトされ、敵は追ってこない。流石にああいう素人でも、視界の通らない場所の危険性は分かっているのだろう。利口な判断だ。

もちろん、そうであったとしても飛び出てこない訳では無い。G36とG41は最後まで警戒の目を向けた。

これである程度の時間稼ぎは出来る。
急いで現場に向かわねば。

頭の中で繰り返し返す言葉は何度も同じ。

自分が焦っていないように見えて、かなり焦っていることを理解させられる。余計なことは考えるな。

最善を尽くして救出することだけを考える。

余計な思考は、効率的な行動を阻害する。

ただひたすらに走り続ける。

「……こちらFAL！救助部隊、聞こえる!?!」

「聞こえてる！どうした!」

耳障りなノイズ混じりの声。

明らかに緊迫した表情が読み取れる程の声色の通信が入る。救助対象の1人、F A L
だ。

焦りきった話し方、彼女らしくもない。

それ程張りつめた状況なのだろう。

急いでその状況を聞き出さなければならぬ。

既に、マズイ状況になっているかもしれない。

「敵増援がもう既にこちらに着いてる、私たちだけじゃ防衛しきれないわ!」

……なんてこった。

クス共の方が一足先に着いていたか。

これではF A L達がやられてしまうのも時間の問題だ。

事態は予想以上に急を要する。

最悪の結末だけは避けなければ。

増援が完全に到着しているとなれば、殲滅に関してはこちらも応援部隊を待つしかな

い。

いくらこちらに戦術人形がいるとは言えど、物量には勝てない。戦場とはそういう世界なのだ。

加えて俺は人間だ。

弾の一つ貰うだけで死にかねない。

この最悪な状況だが、切り抜けるしかない。

どちらにせよ、生きる為にはそれしかないのだから。

「了解、すぐに向かう……できる限りの応急処置は施したか？」

「ええ、本当に軽度だけれど、これで本当に持つのか？」

しないよりかはマシだ。

そういう風に答える。

応急処置は傷を治療することではなく、本格的な治療の前に如何に状態を悪くさせないか、如何に生存率を上げるかにかかった延命措置だと思っている。

それを行っているかないかで、人形の死亡……完全な機能停止率が劇的に減ってい

ることを知っている。

逆に言えば、行わなかった方が数多く消えている。

俺が行けば、もう少し良い延命措置が行える。

そうすれば、彼女が助かる確率も……

その為には何度も復唱しているが、迅速に救助に向かわなければならぬ。焦りは禁物だ。

FALの方もなんとか耐えると言った。

こちらも直ぐに向かうと残し、通信を切った。

「早く向かわなければ、FALさんたちが危ないですよね？」

「ああ。……本格的に時間に猶予がなくなってきた。向こうの援軍の攻撃を受けているらしい。基地から殲滅部隊が来るのもまだ時間がかかる。最悪、俺達だけで何とかしなきゃならない」

MP5は不安そうな声で聞く。

何となく聞こえていたのか、察していたのだろう。

時間が無いだけではない。

救出のために立てこもっている部屋に突入しようにも、増援が近くにいます以上、下手なことが出来ない。

無理に突入してしまえば、内部に敵が侵入してしまう。

「それにしても、この人数……どういふことなのでしょうか」

「このくらいの人数だと、PMC規模のように思えますね……」

敵の増援はこの場所にいたであろう人数と同程度。

……何故ここまでの頭数を、人権団体程度の集団が揃えられる？この程度の人数では、小規模のPMCと同じレベルだ。

これは、さすがに報告対象になりかねない。

これは氷山の一角に過ぎないとさえ考えられ、その根が計り知れない。スケアクロウが撃たれてしまったのも、偶然ではないような気がしてきってしまう。

そもそも、拘束しようとしていた二人を行動不可にするほどの高圧スタンガンなど普通は出回っていないはずだ。

……最早、人権団体ではなく犯罪集団だ。

マフィアやヤクザと何ら変わりがない。

「……G36C、悪いが指揮官に殲滅部隊を想定より多く派遣してくれと言ってくれないか。敵の数が予想以上に多い」

「分かりました、すぐに通信を入れますわね」

彼女は連絡の取り方がスムーズだ。

G36の方でも良かったのだが、そちらは今後方を警戒している。今後ろを無防備にする訳にも行かず、そこで適任だったのがG36Cだ。指揮官とよく話していることもあり、すぐに連絡が通った。

「指揮官から了承を頂きました。後は到着するまでの間、私たちでこの場を切り抜けなければいけませんわ」

当面の目的はそれだった。

どうかして、数倍もあるであろう戦力差の中救出に向かわなければならぬ。部屋は防衛のため締め切られているだろう。

普通に部屋に入ることとは出来ない。

別の方法を探す必要がある。

壁を壊す……それではほとんど意味が無い。

それどころか、防衛網の崩壊に繋がる。

最悪、爆風でさらなる損害が起きる可能性もあるため論外だ。

どうするべきだ。

行動しながら考えているともう既に敵の大軍の近くに来てしまっている。ここから時間を食われるのはまずい。

入口……何でもいい、入れる場所を探さなければならぬ。

「……ねえねえ、整備士さん……」

「どうした、G41」

そんな風にも人懐こく話しかけてくるG41は何か気づいたようだ。彼女が指を指す先には、窓がある。

外は飛び出せば確実に人であろうが人形であろうが形を崩壊させかねないほどの高さだ。

こんなところを指さしたところで……普通の人間は愚か、人形でさえも空中浮遊はできない。

いや、待てよ。

もう一度よく考えろ。

自分たちの装備、取れる行動。

この場所の地形をよく照らし合わせろ。

深呼吸をして、深く考えるんだ。

時間は無い。だが、ここで答えが出なければ助け出せない。

「……何か、外から侵入することができればということですか？」

「そういう事！よく指揮官が見てる物みたいに！」

ようやくMP5とG41の言葉で見つかった。

そうか。俺は簡単なことを忘れていた。

救出作戦や、突入作戦なら常套手段だった筈だ。相手は所詮ただ武器を手に入れて暴れているだけに過ぎない烏合の衆だが……こちらは違う。

しつかりとした作戦用の装備も整っている。

それならば、道無き道を通ることだって叶う筈だ……！

つい、口元に笑みが浮かぶ。

俺はどうやら焦りすぎていたようだ。

自分で冷静になっていいると思わせているだけで、本当はかなり思考能力を奪われていた。

これは、感謝しなければならぬな。

「……ありがとよ、突破口が見えた！」

G41は嬉しそうに笑顔で親指を立てた。

それ、よく指揮官がやるやつだなと少し微笑ましくなった。逆にMP5は困惑しながらも照れていた。

……さあ、ここからは逆転の時間だ。

奴らが慌てる様が目に見える。

頭の中で自然と取る行動が組み立てられていく。

ここを切り抜ければ、後は俺の仕事だ。

全員を見渡し、指示を出す。

「……今、目標の部屋の外部では敵増援が防衛線を崩そうと戦闘を行っている。……そのまま俺たちが突入することはまず無理だ。今提案してくれた方法を行ったとしても、防衛線が崩れるのは時間の問題だ……」

黙って聞く一同。

俺の判断を信用してくれると言わんばかりの沈黙。

……責任は重大だ。

だが、これなら。

2つの問題を一度に解決し、後の作戦が楽にもなる。

リスクの伴う行動だが、それでも賭ける。

そう自分に言い聞かせ、内容を説明し始める……

「……まだなの!?救出部隊が来るのは!」

霞む視界に見えるのは、必死になって抵抗するFALとFNCの姿。増援から私達を守るために、必死になって銃弾を放つ。

今まともに動けるのはあの二人のみ。

Five—SevenとFN49は感電の影響か、まともに銃を構えられない。その状態で抵抗できる力を持つのは、あの二人だけだった。……私が、こんな過ちを犯さなければ。

自分の浅はかさを悔いた。

自分の愚かさを恥じた。

敵は私達を排除しようとするもの達。

あらゆる手を使つての抵抗は予想出来たはずなのに。

私は油断してしまっていたのだろう。

敵を甘く見たのか、それとも私が己を過信したのか。

どちらにせよ、私がこの事態を招いたのは間違いない。

戦えない2人は必死に私の処置をするが、私はそれさえも申し訳なく思えた。私の過ちで、彼女たちまで……

そんなことになったら、悔やんでも悔やみきれない。

ただの下級の人形に、必死になって治療をしても事態を悪化させるだけだと。

……私は、彼の望みを叶えられないだろう。

どうか、願う事ならば……私を、許して欲しい。

「ダメーそろそろこっちも限界だよ！」

「……ここまでなの？ここまで防いでおいて……！」

貴女の責任じゃない。

私の責任だ。

……彼を責めないで。

この全ては、私が招いたこと。

その結果が私に来るのは、当然の事。

「目を閉じないでスケアクロウ！閉じたら、本当におしまいになっちゃうわよ！」
「どうか気をしつかり……！」

必死に私の意識を繋ぎとめようとする二人。

それでも、迫り来る暗闇は止まらない。

段々と、黒く染まっていく。

周りが見えなくなっていく。

防衛線が崩壊し、私が意識を閉ざす。

そんな時だった。

「……ッ！フラッシュバンよ！伏せて！」

FALの叫びと共に、総員が伏せる。

私は何とかFN49に目を隠されて食らうことは無かった。

皆がもうダメだと諦めた。

この作戦は失敗だ。

恐らく、全員……

そう思った。

奇跡でも、起きない限りは。

「お前らッ！窓から離れろオオオッ！」

通信越しの叫び声。

大きな、何かが割れる音。

そんな破壊音と共に、それは現れた。

刹那が長く感じられた。

私の閉ざされかけた意識が、ハッキリと目覚める。

飛び散るガラス片、差し込む光。

それは、私も見た事のある顔。

それは、あまりに神々しく見えた。

私の知る、私の友人。

いつもそこにいて、いつも笑顔をくれる人。

白銀の拳銃を構えた救助者は、奇跡の如く現れた。

救命行動V・救う事、殺す事 | Save and Ki

111

彼はそこに現れた。

『救命者』^{Saver}の銘が刻まれた、白銀の拳銃を携えて。

砕けて散っていくガラスの欠片が、光を乱して私の目に差し込ませる。彼の姿は妙に神々しく見えた。

暗闇の中、陽光が彼を映し出す。

焦燥と覚悟が入り乱れた表情が彼を作る。

助からないかもしれない。

もしかしたら、自分が死ぬかもしれない。

そんな風にも思つたはずだろうに。

彼は、そんな中でもきつとやって来た。

迫り来る恐怖を無理やり払い除けてでも。

……本当に、彼は命知らずだ。

私の事など、捨ておけば良かった筈。

私は、君を殺した張本人なのに。

君を狂わせた犯人なのに。

私は確かに申し訳なく思った。

君に辛い思いをさせてしまうと。

君の友人として、最低だと。

「生きてるか、生きてるな!？」

彼が私に駆け寄る。

あまりにも焦っているようだ。

揺らぐ視界の中でも、それははつきりと見える。

想像以上に私の傷が深かったのか、それとも手遅れになりかねないと彼が判断したからなのか。

私にその真意は分からない。

揺ることさえしなないけれど、傷口が痛みそうな何かをしてきそうな勢いだ。こんな彼は、見たことがない。

「息がまだ有る……大丈夫だ、必ず助ける」

焦っていたその顔から一転。

確実に助けてみせるといふ思いが滲み出ている。

いつもはふざけていたり、笑ったりしているばかりの彼だ。だから私は、彼がこんな焦るなどとは思わなかった。

そして、この場でそんな真剣な表情が出来るとも。

必ず救う。そんな硬い決意が無ければできない表情だと私は思った。生半可な気持ちの物が、こんな険しい顔はしない。ましてや、普段からふざけているものなら、尚更。

「……聞こえるか、こちらは処置を開始する。防衛の援護を頼む！」

耳に指を当て、その向こうにいる人物に声をかけている。

無理矢理の突入だからか、外の状況は変わらない。

そのままではマズいと彼も分かっていたのだろう。

彼が合図を出すと同時に、銃声が増えた。

幾つかは聞き覚えのある音だ。

そんな中、FNCはあることに気づく。

「……!?別の場所から銃声がする!心做しか攻撃の手が緩んでるよ!」

FNCのその一言でFALも。

……確かに、攻撃の手が妙に緩んでいる。

相手のターゲットが一部乗り変わっているような。

所々の相手が、明後日の方向へ向いていることに。

今が好機と言わんばかりに榴弾を装填するFAL。

FNCも少し口を三日月形に歪め、ニヤリと笑った。

二重の意味で有利な行動を取ったのだ、しっかりと活かしてもらわなければ困る。

そんな風に思っていたのだろう。

彼は密かに笑っていた。

「1発お見舞いしてやってくれ、そっからは楽になるはずだ」

「……もう既に入口近くまで詰められているのは確認している。同じ階からの侵入は俺たちが危険なだけじゃなく、あいつらにもリスクを背負わせることになる」

突破口を見つけた後。

俺は具体的に、その作戦を思いついた。

同じ階からの侵入は経路の特定が容易になってしまう。

何せ、こちらが見つかると危険が多い上に追跡がし易いフロアだ。敵も攻撃している部隊の一部分を切り取って向かわせてしまえばいいだけなのだから。

そうすると、平面的に考えるのは良いとは言えない。

立体的に動くことを考えるべきだ。

「……敵に発見されないまま目標の部屋に入ることが第一条件という事でしょうか。その為にはこの階以外から侵入する必要があるということですね」

G36は俺の考えを要約してくれた。

完全に発見されないのは難しいだろう。

だが、大半は合っていると答えた。

敵が経路を特定できず、なおかつ追撃出来ない方法が好ましい。そんな中で良い方法が見つかったのだ。

中がダメなのなら、外からだ。

そんなちやうどいい方法が、すぐ近くにあった。

こいつを使うと腰のハーネスを指さす。

「あつ、ラペリングですね？そうになると、上の階から入るんでしょうか……？」

MP5、ご名答。

と言うより、そのくらいしかない。

正直、俺の本格的に活動していた時期は野外の救出が殆どだった。建物内の作戦などほとんど行ったことが無く、こういう方法が取れるということを忘れてしまっていた。

我ながら情けない限りだ。

折角の装備を使わないまま腐らせてしまいそうだったな。相手は正規の装備などなく、裏ルートで手に入れた銃器やら何やらを使っているのだろう。

それなら、追跡することも不可能。

簡単に単純ながら、そこに気づくのに時間がかかってしまった。焦りもと自分の経験の過信が足を引っ張ったようだ。

しかし、これだけではまだ問題がある。

未だ攻撃されている中、こちらは徐々に押されている。

いくら俺たち救助部隊が内部に入ったとして、そこから押し返すのは難しい。殲滅部隊が来るのもまだかかりそうだ。

また、目標の部屋に侵入したことが気づかれれば余計に攻撃の手が激しくなることは間違いないだろう。

そうなる、一部だけでも隙を作る必要がある。

それが実行出来れば、そこを攻めることによって相手を崩すことが出来る。特にFALの兵装には榴弾があつたはずだ。それを中心に打ち込んでやるだけの時間を稼げたら上出来だ。

「その為にこいつを預ける」

「スタングレネード？これを使つて、相手を攪乱するのですか？」

胸に掛かっているもう一種類の手榴弾……

閃光手榴弾をG36Cに預ける。

さすがに使い方は分かるよなと冗談交じりで話す。

ピンを抜いて、相手にぶん投げるだけ。

簡単だろ？そんな風に何とか余裕を作つて見せる。

もちろんですわと彼女から返答が来た。

まあ、使えないとは思つてはいないが。

作戦はこうだ。

MP5とG36C、2人のSMGが敵集団に対して閃光手榴弾を投擲、一時的に視界

を奪う。

しかし、これはあくまでついだ。

本当の目的は、その2人にターゲットを向けさせることだ。

フラッシュ投擲後は、フラッシュの影響を受けないようにするためブラインドショットによつてさらに注意を引いてもらうことになる。ブラインドショットとは、隠れたまま腕と銃だけを遮蔽物から出して発砲する方法だ。

命中率は非常に悪くなつてしまうものの、敵の注意を引くだけならば十分だ。その後、彼女たちには一定時間敵の目を引き続けでもらう。

そうして相手が混乱している所で、俺がラペリングによつて上階から侵入する。フラッシュが投げ込まれさらに別の場所から発砲されているとなれば、こちらに気を使う余裕は無くなる。

そうなれば安全に侵入を行え、反撃のチャンスを作り出せる。同時に俺がスケアクロウを治療するだけの時間も稼げるだろう。自分で言うのもなんだが、作戦立案に関して素人に毛が生えた程度の人物がよくここまで考えられるものだと言わなければならないのだ。……まあ、大した作戦ではないのだが。

「待って、そうしたら私達はどうすればいいんですか？」

G41は何か行えることがないのかと不安になっているようだ。彼女は作戦に関して非常に真面目で忠実だ。

この中でA Rが行う行動はまだ言っていないなかったからか、力になれる事が無いのかと思ってしまうているようだ。勿論、彼女たちにも一仕事してもらおう。

SMGの二人は一定時間敵を引き付けた後、俺と同じ方法で目標の部屋に合流する。しかし、その間に敵の追撃が来ないとも限らない。わざわざこちらから喧嘩を売っている以上、追いかけても文句は言えない。

その際、上階で敵を片付ける役が彼女とG36の2人だ。

合流するSMGの援護と共に、追跡してきた敵を排除する。そうすれば相手は余計に戦力を削がれるだろう。

応急処置後の退却が楽になる。

合流後はSMGとは逆の動きで、目標地点に向かい攻撃している敵部隊を強襲、挟撃する。

「……こういう作戦だ。皆、協力してくれるか？」

全員は一同に頷く。

これは成功させなければならぬ。

失敗は許されない。

非常に危険な事を任せてしまつて悪いな。

そんな風に謝罪した。

1歩間違えれば、行動する彼女らが危険になる。

それでも、俺はその決断を下した。

彼女達なら、絶対に……

訳の分からない信用かもしれない。

だが今は、信じるしかない。

戦術人形だからこそ、出来る筈だ。

「……OK、すぐさま行動へ移ろう。まずは全員で一つ上の階へ向かう。その後、SMG二人は逆の階段から相手の裏を取ってくれ。AR二人は俺が降下する部屋で待機を頼む」

「了解しました」

「了解ですわ」

「了解です！」

「了解しました！」

命令を理解した4人。

ここからが本番だ。

……クソ野郎共が、報いを受ける時だ。

静かな怒りを抑えながら、作戦へ乗り出した。

「……こちらG36C、及びMP5。所定の位置に着きましたわ」

「ああ。手筈は覚えてるよな？」

勿論ですと良い返事。

二人は既に目標フロア、敵集団の裏側にスタンバイしている。通信の様子からしても、気づかわれている様子は無さそう。

敵は手負いを総出で叩くスタイルらしい。

つくづく野蛮で脳味噌が足りてないと思わされる。

だが、そんな奴に遅れを取らされている。

どんな手が来るのか予想がつかない。

警戒は最大限に。

「G36とG41も位置に着きました、行動の開始を」

すぐ近くにいる2人が用意出来たことを伝える。

弾倉の交換、予備の弾薬チェック。

そして遮蔽物の位置や部屋の間取り。

どこに待ち構え、どこで撃つか。

その下見が終わったようだ。

本人たちとしては問題ない様子。
迎撃も十分に行えると答えた。

……よし、すぐに行こう。

ロープを窓枠に引っかけ、外へと出る。

そこから下は奈落とは行かない。

底が見える故に恐怖が煽られる。

だが、不思議と逃げようと思わない。

準備は出来た。あと1ステップ。

通信機をまた強く耳に当てる。

「……始めるぞ。閃光手榴弾の投擲を頼む」

「はい……！フラッシュ、行きます！」

通信の向こうで、微かに音が聞こえた。

備えて、という声が聞こえる。

大きな破裂音。

それと同時に聞こえてくる、様々な怒号。

悲鳴、喚き。

あまりにも耳障りな喧騒が合図となる。

「お前らッ！窓から離れろオオオッ！」

勢いを付け、後ろに振れる。

振り子の原理のように、そのまま前へと身を乗り出す。

目の前にはガラスだ。そんなものは壊してしまえばいい。

ホルスターから取り出したM93R Saverで窓ガラスへと思い切り傷をつける。何発もの銃弾が突き破り、俺がそれを蹴る頃には、もう既にほとんど耐える力は無かった。

そのままそれを勢いのまま蹴り壊す。

ダイナミックで、スリリングだ。

まるで映画のワンシーンのように。

白銀に煌めく相棒を構えたまま、突入した。

どうやら上手くいっているらしい。

見る限り、敵の約半数は向こうに釘付けだ。

G36CとMP5の陽動が上手く効いている。

奴らは現在人数で圧すことしか出来ていない。

そんな奴から頭数を取れば、直ぐに弱点が出る。

こちらを向けば奴らに打たれる。

だが、放っておく訳にも行かない。

嫌な選択を迫らせているというわけだ。

逆襲してやると言わんばかりにFALは自慢の弾薬を装填する。相手の中心に打ち

込んでやれば、直ぐに崩壊する。

「好機を逃すな！」

そう叫び、装填していた榴弾を3発。

一気に敵の中心に向けて撃ち放った。

弾丸は空気を裂きながらその場へと向かって行く。

一つ、二つ、三つ。

大きな轟音と共に爆風が広がる。

悲鳴と爆音が入り交じり、正しく阿鼻叫喚だった。

「反撃出来ないほど、コテンパンにしてあげる！」

群がっていた者は恐怖し、纏まっていたはずが散り散りに逃げ惑う。人形など所詮人の道具であればいいと傲慢になっていた輩がここ迄錯乱している所は滑稽だ。

自分たちが舐めていた人形に殺される気分はどうだと聞いてやりたくなる。……そんな余裕は無いし、そんな時間の猶予を与えてやるつもりもないが。

そろそろ、彼女たちが退却しても良い頃合だ。

こちらも始めなければならぬ。

こっちは応急処置に取り掛かる。

その一言を区切りに、ほくそ笑んでいた表情を戻す。

すぐさま処置のための道具や医療品を取り出す。

時間が命取りということをつかっているからか、行動に迷いはない。テキパキと、素早く確実に処置が行われる。

少しの間、痛覚を和らげる薬を投与した。

痛覚は生体パーツ故の機能だ。

生体ならば、薬だつて十分効いてくれる。

少し触れる、痛いかもしれないが我慢してくれ。

そんな言葉を申し訳なさそうに呟いては、正確に傷の処置を行っていく。これならば、多少は……

そんな風にも意図せず呟いていた。

「すみ……ません……」

「下手に喋るな。今は安静にしてろ」

謝罪の言葉が飛んでくる。

そんなことを言うな。

お前の責任じゃないのだから。

酷い出血の止血、鎮痛薬の追加投与。

また、彼女が気を失わないように繋ぎ止めることだつてしなければならぬ。応急ではあるが、破損した箇所を修復を行う。時期的に置き換えるパーツを取り付け、ひとまずの機能を取り戻さなければならぬ。

痛みは鎮痛薬でなんとかなっているだろうが、それでも顔を顰めている。……辛いことは分かっている。

それでも、お前を生かすためだと自分に言い聞かせて。

「――指定地点への移動を開始します、ARのお2人が挟撃に回るまで、もう暫くお持ちください！」

通信越しに移動を開始したことを告げるMP5。

その通信が入る頃には、今行える処置を終えたところだ。後は彼女たちを連れて退却

するだけなのだが……

まだ包围されている状況が変わった訳では無い。

一人一人外から下ろすにも、こちらの防衛の手が緩んでしまう。やはり、正面に溜まっていく奴らを退かすしかないだろうか。つい先程の榴弾である程度片付けたとは思うが、まだ残っている。

「分かった、出来れば急いでくれ！」

急かすようで悪いが、処置をしたとはいえ長く持つ訳では無い。すぐにもタイミングを見て建物内から逃げたいところだ。だが、その為には目の前の集団だけは排除する必要がある。正直に言えば面倒だ。

それでも俺たちだけではどうにもならない。

とにかく、今は抵抗するしかない。

ある程度の時間が経った。

言えば、5分程度だろうか。

未だに状況は変わらず。

逃げ出したいのは山々だが、キリがない。

さらに銃声が増え続ける。

まだ増援がいるというのか。

本当に、奴らは何者なんだ。

普通の人権団体ではこんなことはありえない。

本当に大規模なテロリスト組織のような……

頼む。早く来てくれ。

「……聞こえますか、こちらは所定位置につきました。直ぐに挟撃に入ります……SM
Gの2人もすぐ合流致しますので」

分かった。

そう応えようと思った矢先、俺と同じような方法でG36CとMP5が籠っている部屋の中に入ってきた。

ようやく部屋の中の戦力も整う。

そろそろ、脱出に臨めるだろうか。

こちらで応戦しつつ、機会を伺う。

未だにスケアクロウの顔色は悪いままだ。

苦しんでいるように喘ぐ声が聞こえる。

苦悶に満ちた声が、俺の心を蝕む。

聞いていられない。

俺自身も苦しくなる。

頼む。もう少しなんだ。

……この野郎共もしぶとい。

そこまでして人形が憎いか。

お前たちにはそれに値するほどの思いなど無いだろうに。良くもまあ自分の欲だけでここまでやれるものだ。良くもまあ自分の欲だけ

怒りや呆れを通り越して、感心する。

……俺や指揮官が殺意を抱くのも、当たり前な訳だ。

外ではG36とG41が攻撃を開始している。

対応するように部屋の中にいるメンバーが応戦を続ける。俺はその間、スタンガンによつて動けなかったFive—SevenとFN49を続けて治療する。彼女達は高圧の電流で一部の機能がダウンしてただけであり、簡単に回復させることが出来た。

「ありがとう、私もすぐに加わるわ」

「す、すみません……私たちの不注意だったにも関わらず……」

お前たちの不注意ではないと答えた。

後ろめたい奴というのは、必ず気付かれないように動く。特にこの場所では、鉄血との戦争がない分平和ボケしていた部分もあるのだろう。それを入れたとしても、彼女らの責任とは言えないと思っっている。

あの抵抗したクズが悪い。

あれは普通では手に入らない違法品を所持しているのだ。幾ら人権団体とはいえ民間人。

普通はそんなものを所持しているとは思わない。

謝りたいなら、無事に基地に帰ってからにしてくれ。

そう言つて謝罪を払い除ける。

「このままじゃこちらがジリ貧よ……時間が無いって言うのに、援軍はまだなの？」

FALは不服そうに漏らした。

俺もさすがにそれは思う。

そろそろ、流石にこちらも限界だ。

早く来てもらわなくては……

そう思った時だ。

「皆さん、聞こえますか！AR小隊、到着しました！これより敵戦力の排除へ移ります、直ぐに基地への帰投の準備をお願いします！」

M4A1の声だ。

通信の内容にもあるように、どうやら殲滅部隊にはAR小隊が選ばれたらしい。

アイツめ、ここから出せる最大戦力の部隊を投入したか。余程腹が立っているのか、冷静に考えて先程のような異例を危惧して力で押し伏せに行つたか。

どちらにせよ、ようやく来てくれたことには変わりない。

これで抜け出すことが出来る。

かなり時間がかかつてしまった。

だが、今の状態で俺に出来るのは彼女がどうか耐えていてくれと願うことだけだ。

帰投するまでは、本格的な治療もできない。

苦しいが、何も出来ないのだ。

「……すぐにも抜け出す準備をするぞ。G36、G41。殲滅部隊の到着後、直ぐに撤退する。その際は合流を早めにしてくれるか？」

了解しました！とG41の元気のいい返答だ。

直ぐに逃げることにさえ出来ればいい。

彼女達の身の安全を確保したら、その先はAR小隊の仕事だ。彼女達はこの基地でのほぼトップと言って良いエリート部隊だ。それでいて殲滅命令が出ているということ、相当なヘマをしない限りは必ず成功する。

彼女らに匹敵するのは、404小隊くらいのものだ。

……そんな風に思っていたら。

通信が入ったのはつい先程。

1分経ったかも分からないレベルだ。

部屋の前を包围している集団の悲鳴が増えた。

増えたかと思えば、途端に止む。

銃声はほとんどしていない。

どういう事だ。

その疑問は、すぐに解決されることになるのだが。

「聞こえる〜？整備士さ〜ん？」

こんな甘えたような飄々とした喋りをする人形など少ない。こんなタイミングで報告もなしにやってくる人物ともなれば、ほぼ確定だ。

「……来てくれてんなら一言位くれよ、45」

噂をすればなんとやら。

どうも、404小隊が若干先行していたらしい。

逃げ遅れちまうだろとボヤくと、45は冗談交じりで元から逃げ遅れてるでしょと返された。

全く持つて返す言葉もない。

もう既に目の前の敵集団をほとんど排除している。

三方向からの集中砲火ともなれば耐えられるわけも無い。

榴弾で半壊滅していたとはいえ、補充要員もいた中殲滅するとは、やはり彼女らはレベルが違う。

今となつては頼もしすぎるな。

「撤退ルートはもうあたいた達が確保してるから、さつさと撤退しちゃつて！」
「残りは私たちとAR小隊でやるから、容態が余計に悪くならないうちに！」

40からはもう既にルートの確保をしているとのことを伝えられる。さらに追撃は404小隊が止めてくれるとの旨も9が伝えてくれた。どれだけ用意周到なのやら。

まあ、時間がかかった訳だ。

これ位して貰わなければ割に合わないな。

「悪いな、助かる！」

「礼なんていいから早くしなさい、AR小隊が来る前に片付けちやいたいのよ」

「素直じゃないなあ……まあ、416の言う通りにしなよ。1人残さず潰してくるから」

対抗心むき出しに見せかけて心配してくれる416。

言われた通りにしてと唆すG11。

G11の方は報酬はラムレーズンアイスね……と呟いた。

ふざけんな。いつも俺の冷凍庫漁つては突っついてるだろうが。なんて突っ込んでやりたかったが。

今回は助けられてる立場だ。

1段階くらい良い物をくれてやる。

だから、今はまず逃げる事が最優先だ。

「……分かった、撤退に移る！スケアクロウは俺が運ぼう」

動けないスケアクロウを連れていくのは俺が適任のはずだ。戦闘力で言ったら俺が1番頼りにならない。

連れていく人物は戦闘行動が限られる以上、俺以上の適任はいないはずだ。

肩を貸したところで、上手く歩ける訳では無いだろう。そうすると、この方法が1番良いはずだろう。

そう思い、スケアクロウを抱えた。

所謂、お姫様抱っこの状態だ。

「……似合ってるわ、その状態」

「茶化すな、置いてくぞぞ?」

こうするしかないんだから仕方が無いだろう。

なにがそんなに面白いのやら。

俺が人形を抱えるなんていつもの事だ。

何故そんなにケラケラ笑ってるんだ。

未だ危ない状況だと言うのに、気楽なものだ。

後ろには404小隊が。

前方にはAR小隊が。

こいつらに勝ち目などもうない。

あとは任せてさっさとずらかる。

そう思い、駆けようと思ったときだ。

何者かが俺の足を掴んでいる。

力強く、倒れ込んだまま。

死にかけのクズが俺を行かせまいとその道を阻んだ。

勿論、全員が撃とうとする。

俺はそれを静止した。

「テメェら……タダで済むと思うなよ……」

「あ？」

今だに口だけは衰えない。

そんな姿に免じて、大サービスを暮れてやる。

面白い奴は最後に殺すと相場が決まっているからな。

少し薄ら笑いを浮かべて……

「……ゴミが喋るなんてな。ゴミはゴミらしく黙つてろ」

大きく火薬が炸裂する音。

掴んでいた腕は思い切り吹き飛ばされ千切れていた。

そこにあつたはずの腕が無くなっていることに気づき、もはや恐怖も限界だったのだろう。

そのまま気を失いかけている。

その弾丸を撃ち出したもの。

それは白銀に輝く拳銃ではなく、鈍い黒が光る別の拳銃だ。

通常では扱えない、高火力の弾を使うために作られた物……マグナムだ。銃身には『殺人者』の銘が刻まれている。

44. automatic Killer.

相手を殺すことに特化した、最悪の改造拳銃。

どこかで使うだろうと思っていたが、よもやストレス発散の為だけに雑魚に向けて撃つとは思わなかった。

「……お前のやった事の報いだ。潔く受け入れるんだな……ッ！」

思い切り足を上げる。

自分の全体重をかけて、その顔面を踏み潰した。

これでもう立って来ることはないだろう。

周りから見えていたやつからしたら、余りにも狂気じみていると思われるかもしれない。

だが、これは確実に敵を仕留める為だ。

2発もこんな奴に使いたくはない。

邪魔者は居なくなった。

あとは撤退するだけだ。

無事、俺達は支援を受け脱出することが出来た。

スケアクロウの治療を急ぐために、俺はまた単独行動で直ぐに基地へと帰投することに決めた。

スケアクロウ本人やFN小隊、今回救出作戦に協力してくれたGr小隊はへりで帰投するらしい。

帰ってからが余計に大変だ。

だが……とにかく、手を尽くす。

今回は手こずったぶん、もう治療で時間は食えない。

一刻も早く、修理を行わなくては。

「……………聞こえるか？ 医務室の手配を頼む。スケアクロウの治療を帰投後直ぐに行う。何人が技術者を貸してくれ。俺だけで手が回るかは分からないからな」

絶対に、見捨てないからな。

救命行動V I : 大切な友人 | True Friend

……修理は無事終了した。

あの後、直ぐに医務室を手配した俺は即座に帰投し……彼女の修理環境を整えた。今まででない事例。

普通は撃たれても、痛みと傷が残るだけだ。

しかし、今回はまた別の何かが残っていると云っていた。ただの痛みだけならば、彼女だって抑えるだろう。

だが……何かに蝕まれるような、そんな感覚を覚えたと彼女は言っていた。それが普通じゃないのは明白だ。

傷の処置自体は、完全に終えられた。

だが……彼女が苦しんだ原因が完全に取れたかどうか分からないある程度の検査も含めて施術中に様態を確認していた。そこには、謎の微弱電流や、謎の信号の残りが彼女の中にあつた。

……一体、どういう事だ。

俺が今まで修理してきた中で、こんなものは見た事がない。普通信号や電流なら電子線の傷だろうと推測できるはずだ。電腦を焼き切られる、そんなものだ。

だが、今回は物理的な傷を伴った上でこんな症状が出ていた。彼女が苦しむのも無理はない。

それを継続的になると、最悪だ。

体内に弾が残っていないくて良かったと安堵する。

「……見覚えの無い症状、普通なら持ち得ない武装……今回の相手はどうも例外だらけの奴らだったみたいだね」

指揮官も、この事態は予想出来ていなかったと言う。終わった後、酷く申し訳なさそうな形相で謝った。

何もそこまでしなくてもと周りから声が上がっていたが、彼からしたらそれほど重大な失態だったのだろう。

……普通、人間は物事に慣れてしまうと例外を忘れがちだ。最初の方こそ警戒をする

が、後になればそんな事を忘れてしまう。仕方ないといえば仕方が無いのだが、確かに割り切れない部分が存在するのも確かだ。

事前に確認出来た情報では、殆ど蔓延している通常の人権団体と変わり無かったはずだ。

しかし、蓋を開けてみれば最悪だ。

通常の人権団体よりも更に悪質な人員、PMCにも匹敵する程の構成員の数。更には違法な武装と来た。

俺らがやっていたのは反社会勢力の排除だったのだろうか？そんな疑問さえ抱くレベルだ。

「彼らは……何故私怨だけでそこまでやれるのでしょうか……私には理解が出来ません」

そう話すのは、殲滅部隊……AR小隊を率いていたM4A1だ。その疑問は誰もが持っているだろう。

人形でさえそう思うんだ。

相当イカれている。

人間の倫理さえ捨てた獣に理論は通用しない。

そう言つてすつぱり諦めるとも考えた。

だが、それではきつと納得がいかない。

……胸糞悪い。

何故奴らにここまで邪魔をされなければいけない。

お前ら人類が勝手に作りだした挙句、出来上がった瞬間に必要ないやら邪魔だと捨て

ていくのは身勝手の極みだ。

苛立ちだけが込み上げる。

だが、それ以上に。

「……………スケアクロウ……………」

苛立ちよりも、不安が強くのしかかる。

今だ、彼女は目を覚まさない。

俺に出来ることは殆どやった。

治療もした。検査もした。

異物は取り除いたし、傷口は塞いだ。

これ以上は、俺ではどうしようもできない。

……この時間が、1番苦しいんだ。

自分が手を尽くしても、生きるか死ぬかを彷徨うこの時間が。確実に俺の精神を溶かして傷をつけて行く。

ただただ祈るしかない。

こんな荒廃した世界に神など居ないのに、こんな時ばかりありもしないものに縋り付くのは俺も人間だからなのか。結局、どうしようもないことに対してはそうやって縋るしかない。

何度も、俺は人形の死を見てきた。

どれだけやったとしても、救えなかった奴もいる。

それを思い出す度、吐きそうになる。

最悪な無力感と虚無感に襲われる。

本能的にそれを抑え込もうとするほど、苦しくなる。

頼む。

もうやめてくれ。

俺の目の前から消えないでくれ。

別れの言葉を聞くのはもう沢山なんだ。

不安そうな目で見る2人。

大丈夫。いつもの事だ……。

もう今更、どうこう出来る事でもない。

何とか落ち着く事を意識する。

大丈夫。手を尽くしたんだ。

彼女は助かる。絶対に。

自分に暗示をかける。

そうでもしなければ、頭がおかしくなってしまう。

「……お前らは戻っているといい。俺はもう少し、様子を見てから戻る」

そう言って、戻ることを催促する。

指揮官も、M4A1も今回の作戦ではかなり体力面でも精神面でも疲弊している筈。休息が必要だろう。

特に彼らはこの基地の中心だ。

俺なら兎も角、彼らは十分な体勢でいる必要がある。

心配ということもあるだろうが、俺が居る。

安心して休んでくれと作り笑いを浮かべた。

指揮官……クラウドスは意図を汲んだかのようにM4A1を連れて部屋を出ていった。済まない。お前達にこんな引き攣った顔を見せるのは申し訳無かったんだ。

……半分は言葉のままだがな。

今は酷い顔をしているだろう。

こんなままで、彼女の前にいるというのも失礼だろうか。それでも……せめて、彼女の目が覚めるまでは……

眠っている彼女の手の上に、優しく自分の手を乗せる。冷えかけてはいるが、まだその温もりは消えてはいなかった。これなら、少しは希望が持てるだろうか……

暫くの時間が経った。

日はもう沈み、この基地も静まり返っている。

未だに俺はここで彼女が目覚めるのを待っていた。

目を瞑り、何も考えずに。

ただ祈る事は彼女が無事であることだけ。

そんな俺の元に、旧友であつた人形が尋ねてくる。

いや、尋ねると言うよりはただ見に来たと言つた方がいいだろうか？

「まだ宿舎に戻ってなかつたんだ。貴方も嘘つきなのね」

先程助けられた、404小隊のリーダー。

死ぬ前の世界での旧友、UMP45だ。

こいつが来る時は決まってなにかを茶化しに来る時が多いと冗談ながらも思っている。

口の減らない奴故、そういう言動が多いのだろう。

これは必要な嘘なんだよ、と軽口で返す。

そういうノリが好きなのか、少し楽しそうにしていた。正直に言えば、俺は気が休まらないのだが。

「……久しぶりに404 not foundとしての任務があったわ。これ、報告書の一部ね」

そんなものを俺に手渡してどうする？

俺は指揮官ではない。これを手渡されたところで……

そう思っていたのだが、その内容に目を奪われた。

そこに乗っていた内容は、交戦した人権団体が所持していた武装の詳細や推測される入手ルート。

及び、その一部を潰して得た情報に關しての書類。

その中には、彼女を撃ち抜いた弾丸に關しての情報が載っていた。通常の9mmパラベラム弾を改造して作られたその弾丸の特徴はこう書かれている……

『人形に対し、遅効性ではあるが機能の破壊やシステムのバグを引き起こす電磁波を発生させる弾丸』と。

つまりこれは……

「対戦術人形用弾、だと……？」

疑念がさらに抱かれる。

人形の複雑な構造を理解する人間は多くない。

その上、人形に有効なものを作れるなど……

そんな技術者が存在するのか？

ペルシカがそんなことをするとは思えない。

それ以上に、なぜ人権団体如きが……

PMCはおろか、正規軍でさえ持つていない物を……

頭が痛くなる。

こんなになるまで放っておいたのか、あの馬鹿は。そんなふうには顔をしかめる俺に対して続けた。

「どうもこの人権団体、最近になって急に勢力を伸ばしたみたい。これの前にも、グリフィンと鉄血が手を組む原因になった団体がいるんだけど……それが潰れると同時に成長していったらしいわ」

新興勢力だと言うのに、この有様か。

この世界線はどうやら、人間の凶暴性が余計に強くなっている。むしろ、人間が余計に凶暴になっているおかげでグリフィンと鉄血が協力関係になった様だ。

喜ぶに喜べない。

……だが、本当に何が奴らを駆り立てるのか。

そこまですて人形を壊したいのか。

俺には理解出来ない。

いや、常人には理解できないだろう。

「……訳が分からないな」

「同意するわ……あなたの世界線と違って、こちらのグリフィンが民間人に対して被害を被らせたような事例は無いし、鉄血側も同じはずなのよね」

疑念は深まるばかり。

このグリフィンと鉄血は人間に対して友好的だ。

それなのにも関わらず、あそこまでの直球な殺意を向けられるだけの何かがあるとも言えるのか。

今回潰した人権団体は完全に鎮圧出来たそうだが、また何時同規模の戦いが起きるか分からない。

何時の時代も、何処の世界線でも。

争いというのは無くならないものだど落胆する。

「……ねえ、前々から思ってたんだけどさ」

なんで貴方はそんなに人形に肩入れするの？

そんな問いが、俺に投げかけられた。

理由は……最初はわからない。

人形と触れ合い、仲良くなる度に。

それが人間と同じものだと気づいた時からだろう。

だが、こう言った整備士になって……

人形の死を見ていく度に俺は余計に恐れるようになった。今思えば……目の前にいるこの人形が、その発端の欠片だったかもしれないとも思う。

人形の死を病的に恐れる者となった原因の。

だが、今はそれを語ろうとは思えない。

何せ、そんな話をするのは不吉だからな。

分からない、と適当に誤魔化す。

本人が目の前の中で、それを言うのもあれだろう。

「そう……なら別に詮索はしないけど」

そう言って、俺に渡した報告書を回収する。

404小隊でも分け隔てなく接する俺をどうやら信用してくれてはいるが、その裏が知れないのが不安だと呟いた。

……明かす方も辛いんだ。

自分本位で済まない。

何れ、語れる時が来たのなら。

その時は教えてやるとしよう。

それじゃあねと音を立てずに部屋を出ていった。

彼女はまだ目覚めない。

この場を離れるのが、少し怖い。

ここを離れてしまえば、彼女の顔を見れるのがこれつきりになってしまいかもしれない。

そう嫌な思考ばかりが俺を苛む。

大丈夫、大丈夫だけれど……

もう少しだけ、傍に居ようか……

………眩しい。

眩い光が、瞼越しに目に差し込む。

俺は……少し眠ってしまっていたようだ。

しかも、傷を負って眠っている人の上で。

傷が痛まなかっただろうか。

悪いと言う気持ちから、直ぐに身体を起こした。

顔を上げれば……

「……おはようございます。君も目覚めたのですか」

微笑ましそうな顔で、彼女が笑っていた。

優しい声で、おはようと声が掛けられた。

これは、夢じゃないよな？

本当に……

「っ、リオン……？」

「良かった……いよかった……いよ」

彼女を抱きしめる。

俺の大切な友人が、また死ぬなんて嫌だった。

もううんざりだった。

また消えないでくれと何度祈った事か。

震える声で、ただ繰り返すだけ。

生きてくれていて、良かったと。

本人の様子など気にすることも無く、ただただそこにある事実を噛み締めるだけで。

余計に酷い顔になっているんだろうな。

人にはとても見せられない。

「リオン……嬉しいのは分かりました……その、少し苦しい……」

その一言でようやく正気に戻った。

彼女は紅くなりながらも、ふうと一息ついた。

急いで離れた。怪我人に対してする行動じゃなかったと反省する。でも、勢い余って

そうなるほど、俺は安心した。

酷く安心したんだ。

決してこの顔が、泣きそうになっている訳では無い。

「ずっと心配で、ここにいたのですか？」

「……ああ」

弱々しい笑い方で微笑む。

そりゃあそうだ。傷付いた人が心配じゃない訳がない。

友人であることもそうだが、自分を救ってくれた恩人ならば尚更だ。心配性な俺だ。ずっとこんな風にもなるさ。

「申し訳ありません。私の失態で、君まで巻き込んでしまいましたわ……」
「馬鹿、謝るな……むしろ、謝るのは俺の方だ」

その言葉にどういう事かと言う目をするスケアクロウ。

元々、俺の取り柄というのは人形を治してやる技術だ。

それを戦場で活かすことが、俺の価値だった。

だからこれは俺のやるべき当然のことであり、ここまで手こずるのは本来であれば論外だ。

下手したら、お前を救えなかったのかもしれないのだから。それでも俺は、お前を留め続けてここまでにしてしまった。謝るべきなのは、俺の方だった。

「……何故君は、私をそこまでして……」

そんなものは決まっている。

理由なんて簡単だ。

「友人を見捨てる野郎がいるか？……居ないだろ。ましてや、俺の弱みをさらけ出して握らせるほどに信用出来るやつなら、尚更な」

そんな言葉に、彼女は少し頬を紅く染めていた。

そこまで大切に思われているとは思わなかったのだろうか。確実に言えるのは、俺にとってスケアクロウは他の人形以上に思い入れのある人物だ。

前に本人に語ったように。

今の俺がここにいるのは、彼女のお陰なのだから。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

単調な会話だ。

でも、確かにその一言だけで意図は伝わる。

淡泊なように見えて、その中身はちゃんと籠っている。

傍から見れば、ただ一言。

俺達からしたら、一言だけじゃない。

そんなやり取りだ。

心做しか、彼女の顔も嬉しそうだった。

あの時よりも、もっと表情豊かだ。

機械的だと思っていた彼女は、以外にも俺たちと変わりなく近づいてきているのだからか。

もしや、俺に悪影響でも受けたか。

さすがに冗談だ。

でも、ここでそう問うなら、きっと彼女は冗談で返すかもしれない。ここはそんな場所なのだから。

今回の事件は、一先ずの幕を閉じる。

彼女を無事に救出出来て良かった。

初仕事だったが、失敗をしなくて本当に良かったと安堵する。ここで失敗しようものなら、更に俺は自分を責めるだろう。もう、救えなかったと後悔することはしたくない。

俺の居る意味は、救えなかった事の贖罪か。

それとも、まだ彼女達を救い足りないのか。

……考えるだけ無駄だ。

どれだけ力が無かろうと……

どれだけ人が彼女らを拒絶しようとする……

せめて俺は、彼女達にんぎょうの味方であり続けなければならない。それが、俺の望んだ事なのだから。

朝の太陽は、確かな長い日を終えたことを告げた。

朝日に照らされるのは、確かな2人の微笑みだった。

温和日常X I：夢想家と案山子

グリフィン・鉄血合同宿舎。

何時もの如く俺の部屋。

救出作戦終了後、ある程度の休暇のようなものを取らされた。俺も含めてだが、何よりも他の当事者達からだ。

特にスケアクロウは完治するまでに時間のかかる傷を負わされた訳で、治るまでは安静にするように言っている。

が……意外にも傷の治りが早いため、激しい行動以外は別段制限をかけている訳でもないのが現状だ。

お陰でよく俺の部屋に来るようになってる。

皆して困ったら俺の部屋に来るの止めてくれよ……

そんな風には思うが、もはや今更の事だ。

「開き直って俺の部屋に来るといいとまで自分で言っている始末だ。そんな上で文句を言うのは流石にアレか。」

まあ、今日も今日とて平和に客人を迎えるわけだ。

この辺りは大して変わりはない。

もうあまりにいつもの事だ。

なにをするでもなく待っている。

ただ……

「お邪魔します、リオン……」

あの作戦以降、よく部屋に来るようになったスケアクロウがまたいつものように遊びに来た。

まあ、怪我人である以上暇なのはしょうがない。

いつも通りにいらっしやいと出迎えるが、彼女の顔は妙になっていた。なんとも言えなさそうな表情で俺の方を見ている。……何となく、理由は分かるのだが。

正直に言つて、俺にはどうしようもなかったんだ。

膝の辺りにはかなりの重み。

正直言つて足がつりそう。

そんな俺の膝元を見て彼女は一言。

「……^{ドリーマー}夢想家、何故リオンの膝に座っているのですか」

「何でつて、ここが私の特等席だから？」

俺の膝の上に陣取っている小娘ひとり。

突っ込む気にもなれない。

うん。だつていつもの事だもの。

鉄血ハイエンドの中でもかなりのハイスベックな彼女。名前はスケアクロウが呟いた通り、^{ドリーマー}夢想家という名前だ。特技は口プロレスと煽り。

デストロイヤーをよく虐めていて、俺がその度に止めていたような気がする。

だが、頭が切れるし、確かに優秀な人形だ。

実力は充分買っている。

……だが、俺が見たドリーマーはやはり平行世界故か印象がだいぶ違っていた。

まず、時々デストロイヤーに対してみせていた恐ろしい形相を見せる……と言うより、豹変することが無い。

俺のいた世界でのドリーマーは所々不安定な部分が垣間見得るというか、狂氣的な一面を見せることがあった。

さすがの俺でも理由は分からない。

ただの憶測しか出来ないのだから。

本人はそれを語ることは無かったし、俺から聞いたとしても彼女はきつと頑なにそれを話そうとはしなかった。

だから、俺はその理由を知らない。

だが、ここの彼女は違う。

確かに他の人に対して嫌味を言ったり、煽ったりすることは多少あれど豹変する事が恐ろしいと言っているほどなかった。

お前は本当にドリーマーかと聞いたら、もれなくライフル弾1発プレゼントされるところだった。

まあ、流石に本気で撃とうとは思っていないなかっただろうが。まあ、なんだかんだ言うてある程度の原型はあるが、かなり穏やかな方になっている。

デストロイヤーとの関係も、ただ利用できる道具として見ているということではなく普通に姉妹のようになっている。

そんな彼女が、俺の膝の上にちよこんと座っているのだ。なんでお前はここがお気に入りになっちゃったの？

別に膝なんて硬いだけだろうに。

ドリーマーは俺の手を運んできては、膝の上から落ちないようにして欲しいと言わんばかりに俺の腕を腹の前で固定した。まるで抱っこしているような感じの体制だ。

お前ももうそんな子供じゃないだろう。

そんな光景を見ているスケアクロウはなんだか複雑そうな表情だ。なんかそんなになるようなことを俺はしたか？

「そろそろ離れてくれないか？」

「嫌よ」

即答。こりやひどい。

お前は猫か。どかそうとしても無理無理戻ってくる。

足痛いんだって。この前の疲労もあるんだから。

本人曰く、近くでこうしていると安心すると。

本当になんと言うか、幼くなったな。

「ドリーマー、本人もこう言っているのですから離れなさい」

そんな風に降ろしにかかるスケアクロウ。

だが、依然として彼女が離れる気配はない。

そこまで頑なに維持するポジションか？そこ。

お前普段は気が乗らないからいいやって断ったりする割にはこういう時に全く離れないのはどういうことだか。

スケアクロウは唇を尖らせて困ったものですと対処に困っている様子だ。ガスマスクをつけてしまっていて分かりづらくはなっているが、未だに微妙な表情だ。

「別にいいでしょう？だって、貴女が座る訳でもないし？」

その言葉を聞いたスケアクロウは一瞬固まった。

別に何の変哲もない言葉だったと思うのだが、妙に刺さりでもしたのだろうか？

暫くすると、だんだんと彼女の顔が熱を帯び始めているのが分かった。何を考え込んでいるのやら。

というより、若干目が泳いでいる。

（私が……？普通は人の膝に座る事なんてしない筈で、当たり前前の事のはずなのに……何故か、妙に引つ掛かりを覚えますね……）

本当にどうしちゃったんだと少し不安だ。

ちらりとドリーマーの方を見ると、あからさまに悪い顔をしていた。豹変している訳では無いが明らかにかを考えている。イタズラやら何やらをする時の顔だ。

そんな不安の中、ドリーマーが口を開いた。

「もしかして……貴女もこういう状態になってみたいの？」

……おい待て。

どうしてそうなった。

乗せないよ？と内心でボヤク。

お前はまだ小さい少女のボディだから難なく座らせてやれるが、スケアクロウはさすがに無理だろう。

普通の女性くらい的身體だ。

俺の足の負担がさらにかかる。

……なんて、俺の体の事ばかりを考えていたがこいつの本心は読めない。どういう事なんだか。

ちらりとスケアクロウの方を向いたが……

(いや、そんな事はないわ……だって、私はそんなことを考えたことすらないのだから、有り得るはずがない……なのに、何故か妙にどうしても引つ掛かりの様な、何かを言い当てられたかのような感覚を覚えるのは何故……?)

追い打ちをかけられたかのように汗をかき始めるスケアクロウ。だんだんと顔の辺りに帯びていた熱が強くなっていく気がする。おーい、スケアクロウさん、戻ってこーい。そんな様に軽く呟きながらスケアクロウの目の前で手を振る。

「はっ……! どうしました、リオン」

どうしましたじゃないよ。

お前がどうしましただよ。

完全に一瞬意識が別のところに飛んでいただろう。

すぐに何事も無かったかのように取り繕っても分かるんだからな。お前明らかに何かおかしかったからね。

「……いや、完全にお前上の空みたいな感じになってたから引き戻そうかと」

そんな言葉で、ようやく自分の陥っていた状況を理解したらしい。小さくふるふると首を振って、なんとか自分で平常心を取り戻したようだ。

対するドリーマーは何かの確信を得たかのような表情をしており、未だに悪い顔をしている。

若い少女がする顔じゃない。

もつとなにか別のものに見える。

(これは……もうちよつとだけ揺すってみようかしら)

そんなドリーマーは、ある行動に出た。

「ねえ……もつと構って？ 私だつて任務中とか、他の人が来てる時とか寂しかったんだから少しくらい良いでしょう？」

急な猫撫で声。

逆に怖くなるわ。発言も問題だが、それ以上に問題行動を起こしている。膝の上で向きを少し変えては……

ぎゅーつと俺に抱きついてきた。

完全に兄に甘える妹の様相だ。

ドリーマーは見せつけるかのように大胆な行動に出ている、それでいてどこか挑発的だ。

俺の胃が痛くなるからやめて？

当の俺の表情とは言えば、ジト目で見つめているが恥ずかしさが隠しきれていないだろう。

多分、変な顔をしている。

傍から見ているスケアクロウからすると、見せつけられるのはたまったものじゃないだろう。

俺もチラリと見る分には微笑ましいと思うが、見せつけられたらうわあ……ともなる。それが普通だと思う。

「……ドリーマー……いい加減にして下さい」

「あら？怒っちゃった？ただ私は構って欲しかっただけなんだけど……」

またもや何かが刺さったように硬直するスケアクロウ。俺視点からすると、完全に彼女はドリーマーに遊ばれている。姉よ、それでいいのか……？

スケアクロウはちよつとするとブツブツと何かを呟き始めている。ドリーマーは面白そうに頬を緩ませ、純粋な悪戯心を振り回している。おかげで大災害だ。

少しばかり聞き耳を立ててみると……

いや、何も聞こえない。

もごもごと音がするだけだ。

ガスマスクで聞こえなくなっているのだろう。

（ドリーマーはただ構って欲しかっただけ……そう、ただそれだけだと言うのに何故ここまで気分が晴れないのでしょうか……別にただ構って欲しかっただけで、それ以上のやましい事も考えていない筈。もしそう考えていたとしてもなぜ私はそこまで気にして……つい先程から、私は一体どうしてしまったと言うの……？）

ガスマスク越しには小さい声は届かないし、表情だって読みづらい。ただ、俺に見えるのは……

完全にオーバーヒートしかかっている。

顔は赤熱しているし、煙を噴いている。

これは流石にヤバイだろと内心思う。

そろそろ止めるべきだと止めようとした時だ。

ドリーマーは未だに追い打ちを続けてしまった。

「もしかして……嫉妬？」

俺は全く訳が分からなかった。

なぜ嫉妬？と完全にボケた顔で頭には？マークが浮かんでいるだろう。目に見える。本人でさえ見えるからきつと見える。

そんな訳の分からないことを口走るほど理解が追いついていない。嫉妬する要素な
どどこにも無いはずだ。

それなら訳が分からないのも当たり前になる。

「わ、わたくしがしつと……う？」

呂律が回っていない、もうヤバいぞこれは。

オーバーヒートしかかっている状況だからか、心做しか表情も少しとろんとしてい
る気がする。

絶対目をぐるぐるに回して混乱してるよこれは。

少しの沈黙。

妙な時間が流れる。

何この時間とツツコミを入れようと思った瞬間。

「ふしゅー……」

そんな音がした。

と言うより、スケアクロウの口から自然にこの擬音が発された。それと同時にパタリとスケアクロウが倒れてしまったのだ。これには思わず俺とドリーマーは同時にあつ……と素つ頓狂な声を出してしまった。

バカ、相手は怪我人なのにぶつ倒れさせちゃいけないだろうが！と上手く止められなかった自分を叱りつける。

ドリーマーの方もまさかここまでなるとは思っていなかったからか、かなり大慌てだ。

「ど、どうするのこれ……スケアクロウ倒れちゃった……」

「あーもうこいつ怪我人だし病氣したら余計に体調も傷の調子も悪くなるつてのに……とりあえずドリーマー、冷凍庫に氷嚢とかあるだろうから持ってきてくれ！」

分かったと返事を返したドリーマーは慌てて取りに行った。イタズラも度が過ぎる

のは良くないと言うことをはっきりと言うべきだった……

「……………ん……………？私は……………」

彼女が目を覚ました。

少し呆れもあるが、大事がなくて良かったという気持ちの方が強い。微笑みながら、彼女の顔を覗き込んでいた。

「おはようさん、体調は大丈夫か？」

「……………まだ、少し変な気分で……………」

スケアクロウの頭の上には氷嚢が乗っている。

ガスマスクは外され、ある程度排気もできるように寝かしていた。彼女は人間でいう熱中症のような状態にも似ていたが……どちらにせよ、高熱を出していたことには間違いない。

彼女もまだ気分が優れないようだ。

そんな彼女だが、ふとした時に目を見開く。

「……っ！」

よくよく彼女が状況を見た。

周りには人はいない。

ドリーマーは仕事が入ったらしく、謝りながらもスケアクロウを任せて部屋を出ていった。

実質二人きりだ。

目を開ければ、目の前に俺の顔がある。

後頭部には、多少柔らかくも芯があるような感触。

「リオンの膝で、寝てしまっていた……？」

「……ドリーマーが、こうした方がきつとよく眠れるって言ってたからな。試してみた迄だ」

彼女の顔がまた再び赤みを帯びる。

……まあ、友人と言えど膝枕は流石にな。

でも、大人しく眠る彼女の寝顔は少し可愛らしく見えた。こんなことを言っでは、変態に見られるだろうか？

「……迷惑をお掛けしました」

「良いんだよ別に。減るものじゃないしな」

俺は俺で良いものを見させてもらった。

対価はそういう事だ。

彼女はほんの少し、頬を緩めて微笑んで見せた。

いつも通りの光景だ。

彼女は病人になってしまったようなものだ。

早めに部屋に送り返して安静にさせなければ。

彼女がダウンしてからそう時間は経っていない。

だが、また熱で倒れても困る。

「今日は体調も優れないだろ……部屋まで送っていいこう、立てるか？」

「え……いえ、そこまで迷惑を掛ける訳には」

迷惑だなんて思っていない。

そんな風に呟き、スケアクロウを抱えて部屋を出る。よく考えたら、オーバーヒート後は体調もかなり優れないらしい。特にそれが思考系であれば余計に。

それなら、もしものことを考えて俺が抱えて連れていくべきだと踏んだ。抱えられたスケアクロウは何も言わないが、視線は完全に逸らしている。

悪いことをしてしまっただろうか。

そんな風に思っていたが、彼女の顔は不思議と嫌ではなさそうだった。

(膝枕……不思議と、心地よかったのは何故……？自然と眠りに落ちてしまうほど私も嫌ではなかった……でも、とても何か得をした気分、嬉しい様な……本当に、私の考えることはよく分かりませんわ)

また何か考えているようだ。

考えすぎはさっきのようになるというのに。

でも、その顔は引きつってはいなくて、リラックスしている様子で。そんなに俺の腕の中は心地がいいのだろうか？後でセクハラだなんて訴えないでくれよ？

そんな風に冗談を吐きながら、彼女を部屋へと送り届ける。

彼女は少し嬉しそうにしていて、最後に一言。

いつもありがとうと声をかけてくれた。

そんな一言だけで、やはり頬が緩む。

ダメだな。格好はどうもつけられないらしい。

それでもまあ、いいか……

彼女がぐっすり眠ったのを確認してから、自分もまた部屋へと戻った。

後に二人でいるところを目撃されて基地内の話題となってしまう、ちよつとした騒動に発展するのは、また別の話だ……

温和日常XII：自分達だけの“秘密”

グリフィン基地内、射撃訓練所……

日は既に落ちきっており、月明かりが淡く確かに空を照らしている。

そんな中1人だけ、黙々と拳銃を握りターゲットを撃ち抜いている人物が居た。手には白銀の拳銃。

トリガーガードに付けられた折りたたみのパーツが特徴的なマシンピストル……M93R。

スライドに刻まれた文字の羅列。

Saver……救命者や、助ける者を意味する単語だ。

そんな銘を刻んだ拳銃を持つものなど一人しかいない。もちろん俺だ。あの作戦以降、少し戦闘での実力の無さを自覚しつつあった俺は、密かに射撃訓練場に向いていた。

「……ダメだな……改善の兆候が見られない……」

自分のスコアと言うより、結果を見て落胆する。

通常の民間人よりも1段2段上程度だ。

戦場に赴くという性質上、多少は訓練を受けている俺だが……それにしても随分と情けないものだ。

人形たちを助け、守ると豪語している人物がこれでは安心できなければ信用もできない。

何度も何度も繰り返し返しているが、上手くならない。

自分の観察やパターンの考察、様々なことに手を尽くしているはずなのだが。

自分の成長の悪さに呆れる。

知識と技術で仲間は助けられる。

しかし、実戦での実力というのも確かに必要な要素だ。

この前の作戦ではないが、ミイラ取りがミイラになるような自体にならないとも限らない。

その為にも、自分自身と仲間を守れる程度の力は必要となるだろう。

「……情けねえな」

訓練所のベンチで項垂れる。

自分が軍人のようなタマでないことは分かっている。

身体能力で劣っていることも分かっている。

しかし、どこは俺は割り切れないようだ。

最近は何度も同じような訓練をしているが、未だに治らないことの苛立ちと無力さへの嫌悪が混ざりあつて余計に頭の中が黒く染め上げられていく。

そんな優れない気分の中、どこか違和感を感じた。

ゴソゴソ、ゴソゴソとどこかから音が聞こえる。

今日皆に訓練場を深夜に使うと言ったのは俺だけの筈……

侵入者か？イントウルダーのことではない。

真正正銘、敵性因子の事だ。

今は弾が入っていないが、脅しには十分だ。

咄嗟に構えに入る。

「誰だ……そこに居るのは……！」

先に撃たれば死ぬ。

先に見つけなければ死ぬ。

そう自分に言い聞かせ、銃を構えたまま動く。

こんな深夜に俺以外の者が来るはずがない。

そんな警戒の中、もう一つの可能性に関しても俺は考えていた。

話は少し変わるが……

俺がこの訓練所を深夜に使うと言った理由の一つに、最近の噂が含まれていた。今度は、夜な夜な射撃訓練所から声が聞こえるという物だった。

うーん、うーんと唸るような声が深夜に響き、怖がりな人形はなかなかスリープモードに移行出来ずに困っていたようだ。自分の密かな訓練のついでに、その真相を確かめようとしていた訳だ。

不可解なものへの警戒も含めて、出てきたら撃つ。それを意識していた。

その筈だったのだが……

「だ、誰もいない……いないわよ……」

そんな間抜けな一言で張り詰めた気が一気に抜けた。

敵がそんな間抜けなわけがない。

ましてや俺達の敵は酷く人形を憎む者であり、それに関わる一切を排除しようとする連中だ。

そんな奴がこんなふざけたことはしない。

少し気の抜けるようなゆるい声。

さらに自分がないなんて隠したい奴は一人だ。

「……何だ、テイス。お前だったんだな」

警戒を解き、拳銃を下ろす。

安心したかのように、またはバレてしまったかと言わんばかりにため息をついて一人の少女がひよっこりと現れた。

彼女の名前はO T s — 1 2。

またの名をT i s s ^{テイ} ^ス。

自らを秘密兵器と称するちよつと変わった子だ。

何故よりもよつてこんな時間なのかという疑問はあつたが、話を聞くとただ訓練をしにここに来たようだ。

彼女は何よりも秘密を大事にする子だ。

自分の実力も隠したがるし、自分の姿も隠したがる。

自分のことに関しては何んでも秘密にしたがる子なのだ。それほど自分が“秘密兵器”であることに誇りがあるのだろう。だから秘密に訓練がしたかつたという所だろ

う。

しかし、彼女は悩んでいた。

しばらく訓練を続けているところを見ていたが、所々ため息をついたり、落ち込んでいる様子が見える。

ああ、もしかして……

そんな様に思っ、彼女の元へ。

「よう、どんなもんだ？」

「全然……これじゃ、期待に応えられない……」

そんな風に落ち込むティス。

確かに、結果を見るからにあまり調子が良いとは言えないようだ。彼女の落胆やため息の理由はそれだったか。

だが、何故そこまで落胆するのか。

そこが俺には分からなかった。

とりあえず、同じ訓練をするもの同士だ。

仲間はいた方がお互いの問題点を把握しやすい。

そう思い、まずはお互いに訓練に取り組むことにした。

大して上手くもない人間の射撃と、そういう用途で作られた人形の射撃。全くもって天と地の差だ。

俺が見ている中でも、かなり上手い方だと思っている。

だが、それでも彼女は満足しなかった。

「なんでそこまで、訓練に拘るんだ？」

「私、秘密兵器だから……強くなきゃいけないでしょ？……でも、今の私はお世辞にも強いなんて言えない、このままじゃ……って」

話を聞いていくと、何度か自分のミスで仲間を危機に陥らせてしまったことがあるらしい。

その仲間達は全然気にしていなかったようだが、彼女にとっては大問題であっただろう。

秘密兵器ともあろうものが、逆に自分たちを苦しめてしまったのだから。またそんな

目に遭わせたくないと言う理由もあった。

成程なと自分の内心で納得する。

彼女は烙印^{ASST}の影響もあるからか、自分が秘密兵器ということにこだわりを持っている。

銃本体も表向きにされず、開発段階で消えてしまったという面からも確かに秘密であることに変わりはない。

だが、あまりにも“秘密兵器”であることにこだわりを持ちすぎて、自分の在り方を固定化させてしまっているのだろう。

固定観念が彼女の成長を阻害しているのではないか。

その考えが、俺に何かを気づかせた。

彼女の状態は、俺と似ている。

「……強くなることを急ぎすぎてるかもな。俺と同じだ」

そんな言葉にえ？と疑問のように飛んできた。

今の彼女と俺の状況は似ている。

今の彼女は、秘密兵器であるが為に強くなくてはいけないという固定観念が根付いている。

だが、今の現状を見ては自分はそれにあてはまらないと感じて成長を急ごうと空回りするばかり。

俺も全く同じだ。

俺も人形を助ける者であるならば、強くなくてはいけないという固定観念が根付いてしまっていたのだろう。だから俺はドツボに嵌って行き、成長を急いでいたのかもしれない。

結果空回りして、上手くいかないばかりだ。

同じような人物を見て、初めて気付くものだなと知った。何となく、自分だけが焦っているわけじゃないと安心した気がした。ふう、と一息ついて、どういふ事と分かっただけいなさそうな彼女にもう一言。

「俺らはもうちよつと、ゆつくり歩く必要があるってことだ」

そつか……とこの例えで何となくわかったようだ。

焦りは周りを見えなくさせる。

周りが見えなくなった次は、自分自身が見えなくなってきた。そうすれば、成長できる部分を自ら潰してしまう要因ともなってしまう訳だ。

まずは焦らずに。

少しずつ少しずつ自分達の改善点を見つけていけばいい。それに、今ここで同じ悩みを持つものが現れたのだ。

それなら……

「協力して、お互いに強くなる……なんて事だつて出来るだろ？」

「……そうだよ。自分が見えない所は他の人が見えるかもしれないもん。1人で抱えるよりは、2人とかで……」

自分に見えないならば、他人に見てもらおう。

基本中の基本だが、驚かせようと思ったり、頑張っていることを察させないようにしようという思いがその行動を忘れさせていたらしい。無理な意地は張るものじゃない。

それに……同じ隠したがかり屋なのだ。

お互いに“秘密”にすることだってできる。

「それじゃあ、お互い観察しながらもう一度やりますか」

「賛成。ちゃんと見ててね」

お前こそ、見てなかったとか無しだからな。

そんな冗談のようなやり取りを交わす。

肩の力が抜けたような気がして、不思議と結果が伸びている。つい先程よりも、上手く動ける気がした。

向こうも同じようで、少し調子を取り戻したかのように良い成績をばんばんと叩き出していく。

「全然上手いな、ここをこうやったらもう少し行けるだろ」

「ふふん。秘密兵器ですから。逆にリオンはこうしたら改善が出来ると思うわ」

どや、と言うようなテイスの顔。

あまりにほのぼのしていて、少し笑ってしまった。

お互いがお互い、改善点を伝え合う。

別の人物の視点というのはいやほやいやと凄いと思わされるばかりだ。自分の気がつかない場所が気づくことが出来るのだから。他の人に褒められることでやる気も出る。

欠けている部分を指摘される事で次にすべきことを明確にできる。とんでもなく重要なことを頭から飛ばしてしまっていたものだなと少し反省した。

その後も少し続けたが、確かに改善の調子が全く違って見えた。指摘されていた部分を重点的に意識して行うことよって劇的に変化するように見えた気もする。

それほどの収穫があったのだ。

もうそろそろ日が登ってきてしまいそうだ。

訓練はここまでにしようかと切りあげる。

「ふう……今日はありがとな、ティス」

「こちらこそ、大事なことに気づかせてくれてありがとう」

お互いに礼を言う。

少し照れくさい気もする。

謎のうめき声事件の真相も分かった。

自分たちの悩みだつて解決した。

この一夜だけで、色々。

深夜の訓練は新鮮だった。

また一緒にやろう、と約束もした。

最後に、一番大事な事を約束しよう。

「今日の訓練やら何やらのことは……俺らだけの“秘密”だ、な？」

「……うん、私達だけの“秘密”、だね」

にひひつ、という声が聞こえてきそうな……

2人分の眩しい笑顔が月夜に輝いた。

それはまるでイタズラを考える子供のよう純粋な、暗さの欠片もないような笑顔だった。

「なんか最近、射撃訓練所のうめき声が収まったけど物音が酷くなつたつて話をよく聞くんだけどさ……なにか変わったことでもあつた？ポルターガイストとかさ……」

「そ、そんなものあるわけじゃないじゃない！非科学的よ、そんなことなんて起きてないわ！ たつ、ただの勘違いじゃないの!？」

その日の昼。

いつも通り指揮官やわーちゃんの所へ遊びに行き他愛も無い話をする。今日は例の訓練所の話が話題だった。

幽霊やら亡霊やら、そんな風に思われているらしい。

わーちゃんはそういう物が苦手なようで、明らかに動揺しているのが見て取れる。

「リオンは何か知ってる？」

そんな質問が投げかけられた。

まあ、確かに俺が行ってからの話だったな。

でも……残念だな。

「俺は分からない。あれ以降は行ってないからな」

まあ、嘘なんだけどな。

だって、あの話は俺とあいつの“秘密”なんだから。
そう簡単に教えてたまるもんですか。

密かに、やんちやな子供のような笑みを浮かべた。

温和日常X I I I : 代理人の双子

グリフィン基地敷地内。

機械が立ち並ぶような、無骨な雰囲気など微塵も感じさせないひとつのスペース。

テーブルと椅子がいくつか置いてあり、自由に座っていいスペースになっているようだ。

少し洒落た内装が特徴で、レコードの再生機まで置いてある。特徴的な香りが鼻を抜
け、訪れるものを虜にする。

ここは一時の休息を楽しむ場所……カフェ。

カウンターにはよく見なれた女性が立っている。

普段と同様に、穏やかながらも凛々しいその風貌は見るものの視線を釘付けにしてい
く程。

彼女はスプリングフィールドだ。

あのアルケミストの同士であるあの人だ。

彼女がマスターをやっている姿というのも、意外に馴染む。

今日は珍しく、一人で落ち着いて過ごそうと思いいここに来ていた。普段ならいつも部屋などにいるが、たまにはこういうのも悪くないだろう……そんな気分だ。

カップの中にある液体を啜り、ふうとため息をつく。

口の中には強い苦味ではなく、甘みが広がった。

「お口に合いましたか？」

「ああ。甘いものは口に合わないわけがない」

スプリングフィールドは俺が甘党なことを知っていたからか適当にという一番困る注文に対して、最善の選択をしてくれたらしい。中に入っているのはコーヒーではなく、ココアだ。

正直、コーヒーはブラックで飲める気がしない。

砂糖も1つ2つ程度では全く変わらない気がする、あまり飲むのは気が進まないのだ。

かと言ってせっかく入れてくれたものに対してそうどほど味を足すというのは正直言つて申し訳なく思う。

その程度で?と思われるだろうが、何故かそんな気分になるから仕方ないだろう。

「それにしても、基本的に自分の部屋にいらつしやるリオンさんがここに来るなんて珍しいですね」

「たまには客の襲来から離れたいんだよ、俺も」

確かにここにいる奴らとの交流は良いものだと思うし、俺も積極的に関わっていききたいと思う。

だが、あまりにしつこいと言うか、たまには1人で息抜きする時間だつて必要だ。俺は戦術人形とは違って完全な生物だ。疲れることだつてもちろんある。

そういう時は1人でのおんぴりしたい。

今や俺の部屋は来客が無い方が珍しい。

そんな部屋でゆっくり休めるわけがないと思つたから柄でもないようなカフェで

ゆっくりしているという訳だ。

周りには見知った顔もいるが、皆驚いたような顔をしていた。確かに柄でもないことは分かっている。

でも、ここの雰囲気は結構気に入っている。
だからついつい来てしまうのだ。

「まあ、落ち着くにはもってこいの場所だからな」

カップを置き、一息つく。

今日ばかりは、何時もの様に何かが起こることもなく平和に休めるだろうか……そんな穏やかな空気。
だったのだが。

「リオン！いるかい！」

……ああ、この流れは……

焦って入ってきた1人を完全なジト目で見つめる。

この話し方と言い、この見た目と言い。

確実に指揮官の野郎だ。

安息の地を汚すと申すか痴れ者が。

内心そんなことを思っているのがバレているのか、スプリングフィールドが苦笑いを浮かべていた。

「……なんだよまた……せつかく落ち着けると思ったんだが」

少し苛立ち交じりな声を漏らす。

また厄介事なのか、それともただ騒ぎに來ただけなのか。どちらにせよ俺にとっては好ましくない。

だが、奴の動揺が見えるということは切羽詰まった事態ではないだろうが……アレはとりあえず来て欲しいと催促する。

言葉では説明できないものなのだろうか？

まあ、無理無理連れていかれそうになる前に向かおう。

「悪いな、スプリングフィールド。ご馳走様でした」
「ええ。また落ち着く時間が必要でしたらいつでも」

お代をカウンターに置き、ぶつきらぼうに立ち上がる。
どうもいつもの事だが、俺に安息の2文字はないらしい。

仕方がないと割り切り一息。

仕事だ仕事。切り替えていくとしよう。

仕事だと割り切ってきたはずだった。

しかし、今現在の状況は俺の目を疑いたくもなる状況だ。医療用ベッドの上に寝かされて
いる人形が1人。

しかもI・O・P製ではなく、鉄血製だ。
さらに言えば量産型ではない。ハイエンドだ。

「……本当にそこいらで転がってたのか？アイツともあろうものが……」

転がっている人形。それは代理人の事だった。

彼女はダミーを持っていない。

故に今ここにいるのが本人であり、彼女が倒れている事など有り得ないと思っ
た。

だからクラウドが焦っていたわけだ。

しかし、見てみると外傷は全くない。

検査を試みたが、内部損傷もなかった。

息もあり、全くと言っていいほど異常がない。

「代理人、酔っ払って寝ちゃったのかな？」

「代理人が羽目外してここまで支障をきたすわけ無いだろ……別の要因があるんじゃない？」

代理人は実質的には鉄血のトップの様な人物。

本人もそうであることを理解している故にそんな自己管理が甘いなどと言ったことは確実でない。

時々検査をしている俺の方が怖くなるレベルだ。

だが、そんな彼女が倒れているとは……

「……………本当に何があつた？」

過労か？それとも何処かメンテナンスに不備があつたのか？どちらにせよ俺達にとつて代理人が倒れているという事は異常だつた。目を覚ましたら事情を聞く方がいいだろう……

心配と不安が頭を満たす。

本当に大丈夫なのだろうか。

そんな中、彼女がぼつちりと目を開いた。

何となく、顔立ちが穏やかなような気がする。

「……お目覚めか？代理人」

「はい……ええと……」

辺りをキョロキョロとする代理人。

彼女らしくない挙動だ。

随分と脅えているというか、なんというか。

いつものクールな感じではなくなっている気がした。

「あ、あの……ここは何処でしょうか？」

「……は？いや、ここはグリフィンの医務室だぞ？」

訳の分からないことを口走り始めた。

ここが何処だが分からないようだ。

しかも口調さえ変わっている。

彼女は本当に代理人か？

クラウスの襟を掴んで取り敢えず引き寄せる。

「おい……本当にあれ代理人か？ある程度一緒にいたが、あんな代理人前の世界線でも見た事無いぞ」

「い、いやいや、俺に言われたって……だって見た目完全に代理人じゃんか……それに俺、倒れてる所見ただけだし……」

あわあわという少女の様な声を出しながら困惑している様子の代理人……多分本人だと思う。恐らく。

そんな彼女が本物かどうか信じられないけれど恐らく本物。いや、本当にそうなのか。

指揮官であろうそこの阿呆を掴みながら尋問している。もしかして空似の人を連れてきてしまったのでは？

はたまた、記憶喪失か？

そうであつたら大変だ。

不安が余計に増した気がする、そんな時だ。

「……何の騒ぎですか？」

俺たち2人は唾然とした。

驚かない方がおかしい。

何故なら、今倒れていた筈の代理人がもう一人いるのだから。俺はベッドの上にいる代理人と、今現れた代理人を交互に見る。全くもって訳が分からない。

開いた口が塞がらない。

クラウスも同じで、向こうの方がより笑える様な間抜け面を晒している。今、本当は真面目なはずなのだが……

「え、えーと……代理人さん？なぜ2人目が……？」

「私の方が聞きたいのですが」

そりやそうだ。当たり前前だ。

普通に考えて1番困惑するのは本人だろう。

いる訳のない自分のダミーのようなものがここにいるのだから。基本的に彼女達ハイエンド人形はダミーが存在しない筈だ。俺が居た世界線でもそれは変わらない。

特に代理人ともなれば尚更だ。

表情にこそ出ないが、彼女はかなり困惑しているだろう。

そんな中もう1人の代理人は彼女を見つけるや否や、水を得た魚のように彼女の方へと目を輝かせている。

今にも飛びつきそうな、そんな状態。

「Oちゃん！Oちゃんもここに居たんだね！」

「お、おーちゃん……？」

彼女自身、呼ばれたことの無い名前に困惑する。

そんな様子を見ていたもう1人の代理人はその反応を見て忘れちゃったの？と目を

潤ませて上目遣いで彼女を見ていた。正直彼女ともう1人の代理人の関係は分からない。
い。

いや分かるわけない。

本人が分からないのに分かるわけがあるか！

「申し訳ありません、あなたの言うOちゃんとやらと私は別の人物だと思いますが」
「……本当に、私の事を忘れちゃったんですか……？」

今にも泣きそうだ。

これは……さすがに止めないとまずい。

とは言っても、理由が分からない以上は……

俺たちの知っている代理人がここまで困惑しているということは、新しく製造された
ダミーではない。

もしそうだったとしてもあるはずの無い記憶が有るのはおかしい事だ。その線も含
めて無いだろう。

となれば、違法製造か？

そういうわけも無いだろう。

……まさかな。

いや、ないとは思うが……

とりあえず話の流れを切っても。

「あー……悪い。ちよつと質問いいか？」

「は、はい！ 私に答えられることなら……」

まず第1問。

俺たちに見覚えはあるか。

答えは一部NOだ。

代理人は見た事があり、俺達は見た事がないらしい。

彼女のいた場所にも指揮官はいたが、クラウドとは全くの別人の様だ。

第2問。

現在のグリフィンと鉄血の状況は。

ここで差がつき始めてきた。

元々グリフィンと鉄血の敵対が起きていない。

ここまででは同じだが、彼女の記憶との差異は鉄血が民生用人形を製造しているという所だ。

俺の知っている鉄血、及びこの世界の鉄血は民生用人形など製造していない。戦術人形のみだ。

……これは、あの線再びか？

第3問。

と言おうと思ったのだが、少し様子を見ることにした。

そんな時に、彼女からも一言。

「すみません、私の方からも質問良いですか？」

本当は尋問のようなものではあるが、別に堅苦しくもなく、そんなに切羽詰った危機的状况でもない。

大丈夫だと伝えて聞く体制を取る。

「……この近くに、『喫茶 鉄血』というお店がありませんか？」

……ああ。今の質問で完全に確信を得た。

もちろん、俺たちに聞き覚えはない。

名前から察するに鉄血の人形達が喫茶店を経営しているのだろうが、そんなところを見た事など一度もない。

強いて言うなら、スプリングフィールドのカフェを手伝っているところを見た程度だ。

「いや、悪いが聞き覚えはない」

「……そうですか……」

「……今の質問で、こっちの質問の必要も無くなった」

え？と答えたそうな顔をしているもう一人の代理人。

安心してくれ。俺もそんな顔をしたい。

彼女はおそらく、全く同じことが起きた。

要因こそ違うだろうが、状況は同じ。
俺が導き出した結論……それは。

「……どうやら、俺と同じだ。……何らかの拍子で、並行世界へと飛んで来てしまったみたいだな」

普通は何を言っているんだと言われる回答。

並行世界転移だ。

だが、俺という前例がある以上完全否定はできない。

黙って聞く代理人と指揮官。

並行世界に関しての話を軽くしてみる。

ただ、本人がそれを受け入れられるかどうかだが……

「え、ええ……？私がパラレルワールドに来てしまったんですか……!？」

……嘘だろお前。

あの代理人……いや、中身は違うだろうが、彼女がそんな純粋に受け止めるなんて思わなかった。

と言うかこの子ちよつと不安になる。

悪い人に連れてかれそうな性格だぞ……

同じ代理人とは思えない。

「まあ、簡単に言うたさういふ事だ。……正直信じられないだろうが安心しろ、俺もそうだったから」

非常に遠い目をしているだろうな、俺。

あんなにパニツクになっていた頃が懐かしい。

今や争いがほとんど無くてかなり安定してるし、平和ボケし始める頃合いだし……

でもまあ、来てしまった事実が変わる訳では無い。

受け入れてもらうということしか……

「あの、私、帰れるんですよね……?」

「……」

「目を逸らさないでください!」

うん、全くもって考えてなかった。

帰れる方法は今のところ見つかっていない。

俺の場合は死亡が引き金だった。

つまりは、その逆という説が1番だろう。

だが、彼女の原因が何かは分からない以上は下手なことをしたくない。いわば彼女は『喫茶 鉄血』からの来客だ。

客人に手を出す阿呆はいない。

「だ、大丈夫だよ! 悲観的になるとそうなっちゃうから、前向きに考えよう!」
「だからと言ってありもしない嘘をつくのもどうかと思いますが……」

大波乱。ここは色々な世界線の吹き溜まりか。

自分で言ってるにだが、かなり酷いことになっている。

一番可哀想なのは飛んで来てしまった彼女だ。

聞くにその世界では人権団体さえ武力で物を語ることを辞め、真に平和的な世界になっっている。

だがこちらはどうか？

グリフィンと鉄血は協力している。

しかし、相対する人権団体の行動は激化し人間対人形の体制が作り上げられつつあるこの世界に放り込まれるとは……同情を覚えてしまうレベルだ。

あと、その他にもやるべきことがある。

彼女は代理人の姿をしている。

混乱を招く訳には行かないのもそうだが、まずは彼女の処遇……どうやってこの先の事を確約してやるかだ。

さすがに2度も俺と同じ手は使えないだろう。

俺はグリフィンに所属していた経緯があつた故に何とかなつたが……

「このまま放っておく訳にもいかないしな……」

「クルーガーさんに話すような内容でもないよね、これ」

協力関係にあるとはいえ、今回の管轄はどちらかというところ鉄血の管轄だ。どうしたものかと目を向けるのは代理人の方へ。等の彼女も口元に手を当て暫し考えている。

「……取り敢えず、所属としては何とかして鉄血の方に所属しているということにしましょう。帰る方法が見つかるまでの間ですが」

ほっと一息つくもう一人の代理人。

ですが、と続ける代理人本人。

曰く、鉄血は働かざる者食うべからずの精神です。との事。つまり、彼女にも何かしらの業務をやらせるべきだと言いたいらしい。そこで彼女はもう一人の代理人にこんな事を聞いた。

「良ければ、『喫茶 鉄血』についてお聞かせ頂いても？」

「……！うん、大丈夫！」

……一体何を考えているのか。

俺達には知る由もない。

しかし、ひとつ分かることはある。

あの代理人だ。本人のことまでしつかり考えているのだろう。一人で大暴走するアーキテクトやら、何かと面白い様に物事を持つていこうとするドリーマーやらとは違うのだから。

……これ、アーキテクトはまだしもドリーマー本人にこの本心聞かれたら絶対引つかれるな。最悪髪の毛引つ張られて抜かれるぞ。無理矢理の脱毛は勘弁だ。

取り敢えず、検査やら何やらは終わらせたあとだ。

俺の仕事としては終わっている。

だが、もう少し。

直した相手の事くらいは知りたい。

「あー……その、話してるところ悪いんだが、お前の事は何って呼べば良いんだ？ほら、いつまでも名前を呼べないと不便だろ」

そんな風に頭を掻きながら問いかけると、そうだったと言わんばかりな反応を返した。

わざとらしい咳払いをしながら、彼女は自己紹介に入った。

「私は代理人の高性能ダミーです！名前はダミーからとって“D”と呼んで下さいね！」

彼女はそのまま自分に関してのことを話してくれた。

元々は彼女の元となった向こうの世界線の代理人のダミーリンク実験で作られた高性能ダミーのようだ。

普通のダミーとは違い、ほとんど本体と寸違わぬ思考力を持つダミーという話だ。

しかし、向こうのアーキテクおぼかトかと171aへんたいどもbなる集団による魔改造で今のような性格になったらしい。

彼女の人格は、“素直になった代理人”らしく、この根底にあるのは向こうの代理人とほぼ同じ。

同期された感情や思考などをそのまま純粹に出すのが彼女のようだ。……しかし、こ

ちらには肝心の本体がない。

このダメーだけでも自立して動いているというのか。

つくづくヤバい奴らだと思わされるものだ。

「素直な私、ですか……なんとも言えない感覚なものですね」

「良いじゃないの、だって可愛いし」

「でも、世界線を跨いでもあまりお前自身の性格やらなにやらに差異はあまり無かった様だからな……正直、お前の本心と言っても違いは無いんじゃないか？」

ほんの少しだけ恥ずかしそうに袖で口元を隠す代理人。

こちらの方が少し大人しいのだろうか？

普通だったら追いかけて回されるなどとDは言っていた。

まあ、俺も表にして意識させるようなことを言ったらアイアンクローで頭を掴まれるだろうな。

絶対痛い。

あとクラウス、鼻の下を伸ばして彼女を見るな。

お前を好いている人形達が泣くぞ。

「……まあ、何はともあれこれから鉄血の仲間になるんだろ？……リオンだ。人形の整備・修理を専門にやってる。よろしくな、D」
「おつと抜け駆けか？あ、ごめんね。俺はこの地区の指揮官……クラウドだよ、俺からもよろしくね」

お二人共、よろしくお願ひします！と元気な声が響いた。あの代理人の本心が現れているとは言ったが、あのクールな中身がこんな天真爛漫な少女かと考えると……

まあ、少し考えてしまう部分もない訳では無いな。

まさかの二人目の転移者。

随分と奇妙なところに来てしまったものだ。

代理人はそろそろ手続きに取り掛かると言つてDの手を取り、彼女と話しながら去つていった。

結局、今日も波乱だった。

新しい仲間が増えるのは嬉しいが、そろそろ落ち着く時間が欲しいものだ……

後日、グリフィン基地内カフェ。

ようやく少し落ち着きを取り戻しつつあった俺の日常。

再度改めてここで息抜きをしようとした。

この前のようにカウンター席に座る。

レコードから流れる曲を楽しみながら、メニューをちらり。とは言っても、大抵頼むものは変わらない。

今日も甘い物が欲しい。

目の前に映るパンケーキに目を奪われ、これにしようと思った。
注文良いか?と聞けば、いつもの様にスプリングフィールドが丁寧に
対応してくる。

「この前と同じココアと、あとこれを頼む」

「了解しました、少しお待ちくださいね」

この前とあまり変わりのないやり取り。

こんな感じに落ち着いたのが理想的なのだが。

そういうえば、心做しか鉄血の人形達も今日はよく来ているような……いや、
気の所為
だろう。

周りを見れば、リッパーが集まっていたり、ヴェスピドとイエーガーが
平和そうにお
茶をしていたり……

妙に賑やかになったような……

「お待たせしました」

「ああ、ありが……!?!」

頼んだものを持ってきてくれたウエイトレスのような人物。ここに普段いることがなかった容貌だけに、少しびっくりしてしまった。と言うより、驚いて倒れるところだった。

普段はお偉いさんとして働いている容姿。

しかし、彼女は別人だ。

そう、彼女は……

「D、お前ここで働いてたのか!?!」

「はい、私の経験が生かせると思ってここのOちゃんが交渉してくれたんですよ!」

なるほど。

まあ、確かに喫茶に務めていたのだから当たり前か。

だから妙に鉄血の客が多かったということか。

彼女の笑顔はグリフィンの人形だけでなく、基本感情が見えない鉄血の量産型でさえも驚きとつられた笑顔を見せてしまう……そんな魔法の様な笑顔だ。

そりゃあ繁盛する訳だ。

今日俺が訪れたカフェ……

それは、スプリングフィールドのカフェと、『喫茶 鉄血』別世界線支店の合同店だったらしい。

まさか別の世界線で支店を立ちあげるとは。面白いこともあったものだ。

元の世界線に戻る方法が見つかるまで、ここでより多く経験を積もうということなのだろう。

彼女もやはり、代理人ということか。

真面目な彼女の姿に、少し頬が緩んだ気がした。

温和日常XIV：苦労人の後輩たち

グリフィン基地内。

喫茶 鉄血支店……もとい、カフェ。

最近は本当によくここに来るようになった。

部屋に居ると良く騒がしくなるからだ。

ある程度はいい。だが、あまりにも多い。

俺の部屋はお悩み相談やら溜まり場やら、多目的室となりかけているのが現状だ。

デストロイヤーやドリーマーが暇潰しにやって来ることもあるし、45や40が任務で疲れたからつてくつろぎに来ることもある。時にはスケアクロウがちよつとしたことを話に来たりもするし、ヤバい例だと時々M16が禁酒令を出されてるつてのに呑みに来ることさえある。

さらに言えば、この前の面子勢揃いでだ。

流石にそれは叩き出すぞと言ったが。

まあ、そんな状況が今日も今日とて続いていた。

さすがに俺も疲れを感じていた頃だ。

そんな中、この前カフエに来たことをきっかけにここによく入り浸るようになったのだ。

ここは比較的穏やかで、雰囲気としても好みだ。

落ち着くにはうってつけの場所で、結構気に入っている。入り浸る理由は他にもあるのだが……

いちいち説明をしていたらキリがないな。

「……あー、今日はコーヒーを頼めるか？」

「はい、ですがちゃんと飲めますか？」

スプリングフィールドがそんな風に茶化す。

うるさいやい。俺にだって格好つきたい時はある。

クールな男にはブラックのコーヒーが似合うと誰かが言っていた。俺のキャラにぴったたり……という訳では無いが。

たまには渋く行ってみたいじゃないか。

「リオンさんは甘党ですもんね」

「……なんの事だか。今日の俺は一味違うぞ」

Dまで言ってきた。

そこまで俺が甘党なイメージが定着しているのか。

まあ、基本甘い物ばかり頼んでいるが……

そんなDが持つてきてくれたカップを手に取り、恐る恐るというのをバレないように口を付ける。

……ダメだこりゃ。

苦い。凄く苦い。

思わず顔を顰めてしまった。

絵に描いたのなら口が菱形になってしまっていることだろう。そんな見え見えな見栄を張っている自分がなんだか虚しい。

「……悪い、やっぱり砂糖とミルク貰っていいか？」

「そんなことだろうと思ひまして……もう用意してたんですよ」

やっぱりバレてる。

うん、分かつてはいた。

甘党にブラツクのコーヒーは厳しい。

目を逸らしながら砂糖とミルクを要求する。

向こう方も完全に分かつていたようで、もう事前に用意されてしまっていた。手の平で自分から踊っていたな。

Dが砂糖とミルクを渡してくれる。

自業自得とはいえないんだか悔しい。

2人は完全に生暖かい目で俺を見ている。

ちよつとその視線がづらい。

そんな平和な時間が過ぎる中、2人の新しい来客があつた。

「いらつしやいませ、お好きな席へどうぞ」

そんな2人の来客だが、組み合わせとしてはあまり想像がつかないコンビだった。片や委員長気質で生真面目、小隊内で唯一のSMGである人物……AR小隊のRO635。

もう片や奇天烈で大暴走する上司に頭を悩ませる、これまた生真面目で苦勞人な鉄血のハイエンド……ゲージャー。

この2人の組み合わせなどほとんど見た事がない。

多少話している事は見かけるが、そんなに仲が良かっただろうか……2人は俺を見つけると一瞥して近い席へと座った。

「何だ、ROとゲーガーと一緒に居るなんて珍しいな」

そんな風にボヤいてみる。

2人は意外とそんなことは無いとばかりに答えてくれた。

「いえ、ゲーガーさんとはよくお話しますよ」

「お互い、何となく気が合うようだな」

彼女たちはなんとなく気が合うらしい。

聞いてみれば確かにと思うのだが、彼女たち2人には意外に共通点がある。1番なのは、性格面だろう。

お互いに生真面目な事もあり、しっかりとした話が出来るとお互いを気に入っているという所か。

他には、上司や関わりの深い人物が適当やら暴れまくったりするところだろう。代表

例を上げると、ROならM16……ゲーガーならアーキテクトと言った所だろうか。

彼女らを止めるブレーキは基本的に彼女たちだ。

他のメンバーが止めないということは無いのだが、真面目な人物までもがノツてしまつたら最終的にしわ寄せが来るのは根から生真面目な彼女たちだ。

「よく息抜きでここに來ることが多いですね、この2人は」

「私は新参だけど、二人が一緒にいるのはいつも見てるかな？」

そんな中で苦勞することも多いからか、ここで集まって共に苦勞話をする事が多いようだ。今日もそのうちの1回なのだろう。

「まあ、言われてみれば……」

彼女達にとっては数少ない悩みの共有相手だ。

よく話すのもおかしい話じゃない。

たしかによくよく思い出してみると、彼女達は意外と話している。真面目な者は真面目な者を好むのだろう。

「まあ、たまにはこうしないと私も胃に穴が開きそうなのだな」
「ええ、本当に……」

心中お察しします。

特にゲージャー。

ROはまだ常識的なM4やAR―15がいるが、彼女の負担を軽減してくれるようなものはほぼ居ない。時々様子見に来る代理人程度か。いや、言うならDもだろうか？

つい、微妙な表情になってしまう。

どちらにせよ、彼女たちは確かに負担がかかっているというのも事実だ。そんな彼女たちには息抜きが必要不可欠だろう。

「まあ、今日くらいはゆっくりと休んだ方がいい。幸い俺もいる事だし、なんかあつてもある程度は止められるから」

「そうだな……なら、お言葉に甘えるところでしょう」

「と言つても、彼女たちと言えどここで騒ぐことは無いと思いたいものですな」

正直なところを言うと、俺も苦労していると思っている。今ここには苦労人達の集会が出来てしまっているのだ。

されど、俺たちにとっては安息の地だ。

お互いの苦労を分かち合い、そして次もまた頑張ろうとお互いに元気づける……そんな会話だろう。

そんな様に意気投合をする……

ある程度、3人で苦労話をしたり、何となく起きた良い話をしたり。なんというか、普通に普通の日常会話をしている。本当に何の変哲もない。

「……またアーキテクトが突拍子もない事を始めてな……後で謝る私の身にもなって欲しいものだが」

「あー……」

ゲーガーはアーキテクトに振り回された時の話を良くしている。正直、俺も無関係で

はないといえれば無いから少し罪悪感がある。仕方が無いじゃないか。彼女は男のツボを分かっているのだから。でもやっぱり罪悪感はある。

悪い、ゲーガー。

だが、彼女はそう語りながらもその顔はどこか穏やかな雰囲気だった。彼女も、そんな日常を悪くはないと思っっているのだろうか？

「私の方はまた小隊の方であれこれありまして……」

「そちらの方はなんと言うか、上司と部下じゃない分勝手が違うな」

ROはAR小隊内の色々な話をしている。

その殆どがM16の暴走であったり、SOPMODが色々とはしゃぎ回った故の混乱などの話だったが。

でも、所々見せる平和な顔は、たしかにその日常を楽しんでいるかのような穏やかな顔だった。

彼女もなんだかんだ言っていないながら、内心ではそんな平和な日常を楽しんでいるんじゃないだろうか。

そうなのだとしたら、俺としては微笑ましい。

「……なんと言うか、話す内容の割には楽しんでそうだな」

「本当ですね……なんだかんだ言って、本当は楽しいんだったりして」

スプリングフィールドがちよつとしたボヤきに反応してくれた。そんな俺はあいつらの顔、笑ってるしなと付け足して言った。ROは確かに苦笑いをしていたが、ゲーガーは無意識だったようでそんな事は無いと必死に否定していた。

何もそこまで否定しなくてもいいのに。

でも、無意識という事は自然と悪くないと感じている証拠だ。そう考えると、余計に温かく感じる。

「……よくよく考えると、確かに騒がしい日常の方が楽しい……なんて感じてしまうこともありますね」

「そうじゃないと逆に退屈しちゃうかもしれないから、少し騒がしいくらいがちょうどいいと私は思うよ?」

まあ、本当にその通りなのだろうな。

多少刺激がある程度だから面白く感じる。

……または、殺伐しすぎているからこそ、こんなちっぽけな騒ぎでワイワイできる平和さを再認識出来るのか……

その答えは、俺には出しようがない。

ただ言えるのは、なんだかんだ言って付き合っただけでやっている彼女達も実は楽しんでい
るといふこと。

そして、そんな風に付き合っただけでやろうとしてやれる程仲が良いのだと言ふことだろう
か。

本当に仲が良くなければ、こんなやり取りは出来ない。

俺はまた、頬を緩めて穏やかな顔になった。

「平和って……いいな……」

近くにいたゲージャーは完全に何かを察したような目でこちらを見ていた。決して空
気を悪くしたいわけじゃない。

純粹に思っただけだ。

もちろん、俺の置かれていた境遇は決して良いものではなかった。でも、その辛さを彼女らに押し付けるつもりなどさらさらしない。平和な者達は、平和なままで居るべきだ。

ただ、改めて平和なことの良さを確認しただけ。

だが、その一言が気を使わせてしまったのだろうか。

まだまだ、周りが見れていない証拠だ。

「悪い。気にしないでくれ」

そう言ってカップに入ったコーヒーを喉に流し込む。

苦味がより強く感じられた気がして、口の中に残したくはなかった。苦いものが苦手だと言うのに、なぜ見栄を張るのか。正直、俺もよく分からない。

「……まあ、お前の過去に何があつたかは分からないが……私たちと同じように適度に外に出しておくべきだと私は思うぞ」

見透かされていたか。

いや、当たり前か。

あんなそれっぽい言葉を吐いたのだから。

分かった、気が向いたらそうするよと軽く返す。

せつかくの空気を壊してしまった気がした。

俺の中では、重苦しい空気がまた流れてきた。

そんな中だった。

「あつ、いらつしやいませ！」

また来客だ。

「……あれ、RO。どうした、ゲーガーと一緒にいるなんて珍しいな」

「あ、本当だ！おーい、RO〜！」

彼女が見慣れた姉貴分と妹分。

M I 6 A I と S O P M O D 2 だ。

そういえばM4A1とAR―15は今日2人で任務だったな。
そんなことを思い出しつつ。

ROは2人の方を見ると確かに微笑んで手を振った。
彼女も、ついさっきの話で少し気持ちが穏やかになったのだろうか？

「よし……とりあえず、酒はあるか？」

「……M16、ここに来てまでお酒ですか。それに、貴方は禁酒令を出されていた筈ですよ！……全く、貴女はいつもからして……」

前言撤回。

やはりいつも通りだった。

ROによるM16への怒涛の説教。

着いてきたSOPもまた始まっちゃったと眩ぐが、肝心の問い詰められている姉を気にすることも泣く。

Dちゃん私これー！と自分の好きな物を頼んでいる。

Dもはーいと和やかに返事を返している。

さらに客は続く。

今度は1人だが……

「やつほー、またさぼr……息抜きに来たよ……って、げげ、ゲーガー!？」

いつもいつもとんでもないタイミングだ。

次に来たのはゲーガーの上司にして俺の悪友……

アーキテクトだ。

完全に入店時にサボりに来たと言おうとしていた。

それでいいのか鉄血ハイエンド……

「ほう……?またお前は仕事を放り出して来たというわけか……?」

確実に額に青筋が浮かんでいるゲーガー。

俺もちよつとビビる。

だつて怖いもん。

すごく怒ってるんだもん。

お前がビビってどうするんだと言われそうだが、本当にこればかりは仕方がないことだ。

静かに手で十字を切って手を合わせる。

アーキテクト、死ぬなよ……と。

「お前には話がある……着いてきてもらうからな……済まないRO。今日はここまでにしておこう」

「ええ、こちらこそ済みません……また今度」

別れの挨拶と共にアーキテクトの悲鳴が上がる。

引きずられカフェを出たあとと言うまでもないだろう。

カフェの中も中で、M16が正座をさせられている。

ROはカンカンだ。こりやひどい。

SOPはいつもの事で慣れたのか、特に気にする様子がない。

カフェのスイーツを堪能している。

「……悪いな、なんだか騒がしくなつて」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それがこの基地の良いところですから」

「騒がしいのは私たちの場所でも同じだったけど……でも、こういう光景を見られるのも平和だからこそ、だよね！」

それもそうかと2人の言葉に同意する。

騒がしいのも、確かにそれはそれでありだな……

そんなふうに思えた気がした。

いつもが葬式のように暗く静かな場所より、ここのようにどんちゃん騒ぎしている方が良い事など火を見るより明らかだ。こんな光景は確かな平和の象徴だ……

またカウンターで頬杖をつきながら、そんなワイワイやっている光景を微笑ましそうに見つめていた……

温和日常XV：プライド高い系女子Ⅱポンコツ

グリフィン基地内、指揮官の執務室……
もはやいつもの光景が拡がっている。

椅子には指揮官……クラウドが座っており、書類仕事を淡々とこなしている。その隣にはいつも通りにWA2000がいる。

指揮官の仕事が大変そうだから手伝ってやろうとしてるだけだからね！とつんつんしている……ように見えるが、つっけんどんになれていない。むしろ本音が漏れている。

さらに掘り下げるなら指揮官と一緒にいたいだけなのだろうが。彼女は実はポンコツなのではなからうか。

そしていつものように、部屋から抜け出しては執務室で好き勝手やっているいつもの奴……

俺ことりオンだ。

今日も今日とて執務室に入り込んで適当に寛いでいる。仕方が無いじゃないか。仕事がないんだもの。

いや、あつたらあつたで困るけれども。

そういえば最近、妙に鉄血ハイエンドたちの部屋が騒がしい。話し声が喧しい、姦しいという訳では無いが……

とにかく物理的に騒がしい。

何かが暴れる音や、崩れたり倒れたりする音。

普通にしていればそんな音出るわけないだろ！と思うような轟音だったり……

「……ねえりオン、私ちよつと書類ちらつと見たら……最近鉄血の奴らの部屋の修理費が酷いことになってるんだけど」

「え、っ、何だそれは……」

普段出ないような阿呆な声が出た。

ちらりと見たわーちゃんによると、鉄血達の部屋……どこか一部屋という訳ではな

く、全体的に何かしらの器物が破壊・損壊しているようだ。

非常に嫌な予感がした。1番に名前が上がるであろうデストロイヤーは名前通り壊す事特化の人形だが、普段からそんなに暴れることはしない。いつも怒られるから懲りているはずだ。

駄々っ子なのは変わらないが。

だが、それ以外では破壊行動を取るような人形は知らない。他の人形達は基本的に大人しく、確かに騒ぎを起こすようなことはあるが部屋の破壊やら何やらまで至ることは無いと思っていたのだが……しかし、現に部屋の修理の支出がある為壊れているなどといったことは本当なのだろう。

一体誰が……？

そんな風に思っていた。

凄い爆音が響いた。

いつも自室にいる時と同じような感じだ。

……まさか、俺が聞いてたあの破壊音が……？

いや、当たり前なのだ。

聞いていた指揮官の目は完全に笑っていない。

目が死んでるよお前。

「ごめん……ちよつと鉄血の部屋見てきてくれないかな？俺はちよつと書類に追われてさ」

見ればわかる。

この基地の財政は大丈夫なのだろうか。

あと、それを処理する担当や責任を問われそうな指揮官の胃も……なんだか、非常に申し訳ない気分になってきた。

実際鉄血のハイエンドたちと一番関わっているのは俺だ。

監督不届きと言われても仕方が無い。

呆れ混じりの溜息をつきながら、部屋を出た。

「ハイ、だよな」

明らかに扉から煙を上げている部屋が1つ。

例に漏れず、この区域は鉄血ハイエンド達の部屋が立ち並ぶ場所だ。そんな中の一室

……

確実に誰かがやらかしている。

予想しなくてもわかる。

誰だこんな馬鹿なことをしたやつは。

「……………入るぞー！」

そう強く言い放って電子式の扉を開ける。

その目の前に映っていた光景……

なにかも分からないような破片が散乱している。

壁にはクレーター。

床には綺麗な穴がいくつも空いている。

家具も壊れたものが沢山だ。

そんな中に1人、未だに暴れている人形が。

「く、く、黒い化け物は……!?何処へ……殺ったか……!?いやそこか!」

鉄血ハイエンドの1人。

あのイロモノ揃いの中でも特にプライドが高い人物で、同時に救いようのないほどのボンコツ。

彼女の名は……ウロボロス。

旧世代の学生を思わせるような服装と、古風な話し方が特徴的だ。今この部屋には彼女しかいない。

さらにあの物騒な物言い。

手に握られている獲物。

間違いない。

「お前かぁーッ！お前が暴れてたのかーッ！」

ビクリとなつてこちらを向くウロボロス。

こちらを向くと同時に固まる。

さしずめ、彼女は今這い寄る黒光りするものの恐怖から逃れたいが、自分のプライドが許さないと口をつたところだろう。

震え声になりながら口を開き始めた。

「り、りりりオンか……あ、ああれごときにおぬしの助けはひ、必要ない……！私一人で十分よ……！」

説得力は皆無だ。

モロビビってるじゃん。

膝笑ってますよウロボロスさん。

こんな時でもプライドが勝つとか凄いな。

そんなことよりもひとつ言わせてくれ。

「お前……殺虫剤は？」

「……」

目エ逸らした。

絶対今逸らした。

このボンコツ、天敵に対する1番の武器の存在を忘れた挙句実弾を使って仕留めようとしていたのだ。

プライドに対して思考が追いついてない。

「わ、忘れていた訳では無いわ！」

「嘘つけ！じゃなかったらあんなあからさまな反応するかよ！」

やいのやいの騒ぎ出す。

俺もヤケになつてゐる気がする。

とりあえずこいつが原因なのはわかつた。

さすがに俺と言えど、この惨状は看過できない。

まず報告しなくては……

そう思った時だ。

俺の背筋が凍り付く。

後ろを振り向いてはいけない。

振り向いた瞬間、俺達には恐怖が走るだろう。

いや、既に恐怖が走つてゐる。

それでも、見なければ……

仕留めなければまたウロポロスが暴れてしまう。

俺は、恐る恐る後ろを振り向いた。

同じ方向を、彼女も見ると……

そこにはもちろん。

黒光りする最悪なモノが……

「で、でで出た！と、おぬしなら倒せるであろう!?こ、ここは手柄を譲ってやる……!だから早くアレを……!」

ああ、もうプライドとか関係無くなっている!

しかもウロボロスは俺にしがみつくし!

というか俺だって見たくないわ!

やだ!うわ気持ち悪ツ!?

「ああ!さっさとくたばれよこの○○が!」

人前で言っただけはいけない言葉が出た。

これにはウロボロスからも流石にその言葉は控えろ!怒られるぞ!とツツコミが。

こんな状況で冷静でいられるか！

言葉にならない悲鳴をあげながら殺虫剤をばら撒く。

さながらこの部屋は下手な戦場より戦場している。

ただ原因を確かめに来ただけがどうしてこうなった。

直に当てられたそれはある程度もがき、少しするとひっくり返りピタリと動きが止まった。

ひっくり返らないで。

余計気持ち悪い。

「や、やったのか……?」

「あ、ああ……殺ったんだ……!」

いつの間にか意気投合。

満面の笑みで拳を合わせる。

黒光りする多足の物体は、何時の時代も全ての敵だ。

故に敵の敵は味方。

そういう事だ。

はしやぎまくる俺達。

しかし、その後の惨状を俺達は考えていなかった……

扉が開く音。

俺達以外の誰かだ。

我々の第六感が告げた。

今度は恐怖というレベルではない。

動けない。

金縛りのような感覚に陥る。

後ろは地獄だ。振り返れば死ぬ。

そんな風に思える程凍りついた空気。

「……貴方達、何をしていらっしやるんですか？」

物腰丁寧でありながら、確かな威圧感を孕んだ声。

丁寧な話し方というだけでもかなり絞れるのに、この威圧感で最早個人が特定出来

る。

後ろにいるのはおそらく、鉄血の実質トップ。

彼女たちの最も上に君臨する者。

その給仕人のような立ち姿は、見間違えるわけもない。

……代理人。

俺は死期を悟った。

「……只の虫一匹程度でこの有様ですか」

「俺が来た時にはもうこうなっていた……」

俺とウロボロスは正座させられている。

これの殆どは隣のポンコツがやった事だが一緒にいた俺も同罪と見なされてしまっ

たらしい。

畜生、原因を突き止めに来たというのに俺が原因と見なされちゃ意味無いだろうに……

今更足掻いたところでどうしようもない。
大人しく説教を享受するしかないだろう。

「最近指揮官から鉄血の部屋の修理費が酷いことになっているという話を聞きましたが……これもその原因の一つという訳ですか」

「いやそれは俺も分からない……というか、俺よりもこつちに聞いてくれよ」

そうやってジト目で横にいる奴を見る。

なんで私を見るのだ！と言いたげな視線。

いや、お前が今回の主犯でしょうに。

元はと言えば殺虫剤なんて言うGキラーの存在を忘れて鉛弾ばらまいてたのはどこのどいつだい。

「い、いや……その……外敵に対してそれ以外の対処法を知らなかったというか……」

さて、ここでネタばらしみたいなきことをしよう。

彼女……ウロボロスは、確かに戦闘では群を抜くほど強力な味方だ。戦術面では切れ者であり、本人自身の戦闘能力も高い。だが、ポンコツなのだ。それはなぜか。

彼女は、日常生活スキルは皆無なのだ。

戦い以外は本当にポンコツなのだ。

大体家事は誰かに頼むというより、呆れられながらもやって貰っているらしい。本人は学習する気がないようだが。

主な被害者は今目の前にいる代理人だ。

「……あれだけ対処の方法は教えたはずですが？全く聞いていなかったと？」
「え、そんな話をしておったのか……？」

ダメだこのAI。

話をまるで聞いていないらしい。

どうやら代理人によると、過去にも似たような事例があったようだ。その時はなんとか耐えていたようだが2度はさすがに……

「……ウロボロス。少しお話ししましょうか……他の一連の件についても、今回についても……」

プルプル震える子犬のようになってしまったウロボロス。

まあ、自業自得だよな……

話の中で彼女もいくつか自然に自白しているし。

正直言うと、自分で自分の首を絞めまくっている。

ちなみに、他の件については日常生活スキルの無さを他のハイエンドたちに煽られて沸騰したウロボロスが自力で頑張ろうとしたところ、あんな大惨事が起きたらしい。

唯一例外として、新参者のDはまだ仮の部屋を使っていたために被害を免れたようだ。

元から居た組は全員被害を受けたらしい。

彼女のその後が不安になる……

まあ、何はともあれ……

「一件落着、か……？」

やっと俺も安心して部屋にいられる……

そう思った矢先だ。

「いでででエー！頭割れる！爪立てないで！」

代理人が貴方も逃がしませんよと頭にアイアンクロー。

割れる！割れる！頭蓋骨壊れる！

人形が力入れたら万力に匹敵してしまう。

冗談だが人よりは力があるからかなり痛い。

というよりなぜ俺も。

「貴方もあの騒ぎの中にいたんです、容疑をかけられてもおかしくない筈ですが……？」

これは有無を言わせない感じだろう。

なにかを悟ったような目をしていたらしい。

襟を掴まれて引きずられていく。

隣のウロボロスはしてやったりのような顔だ。

道連れにされたというわけか。

畜生、覚えてろよ……！

その後、もちろん代理人による制裁が入った。

次の日、顔色が悪いのは指揮官ではなく俺の方になっていたという事が基地内で出回っていたらしい。

俺はきつと今日のこととは忘れないだろう……

温和日常XVI：腐れ縁はどこまでも

グリフィン・鉄血合同宿舎。

最上階、いつもの如く俺の部屋……

今日も今日とて、俺の部屋には来訪者が。

今日の時刻はもう夜方。

外を照らすのは、点滅を繰り返す街灯と淡い月の光のみ。荒れ果てながらも、俺はこの風景を嫌いになれなかった。

何時も、どうしても見入ってしまうのだ。

人の気配一つ無い荒廃した風景が、あまりにも焼き付いて離れないのだ。安心するよ
うな、不安なような……

よく分からない気分になる。

……普段は。

「よう！部屋借りるぞりオン！」

「邪魔するわよ」

「俺の部屋はレンタルじゃないって言ってるだろうが!!」

今日ばかりは、そうもいかないらしい。

酒の瓶を持ちながら部屋に乗り込んできた2人の人形。
腐れ縁の宿敵同士の2名だ。

M16A1と、HK416。

前居た場所では、様々な事情が重なった結果味方同士であると言うのにも関わらず殺し合いを始めるほどの険悪な仲だった。

最も、殺意があつたのは416の方のみだが。

しかし、M16の方も恨まれる覚えがあるという様な立ち振る舞いをしていたのは非常に気になる場所だった。

……なんて言っているが、俺は事の成り行きを知っている。

彼女達は、本当に仲間同士だった。

あることをきっかけに、殺すべき対象と変貌してしまつたが。それに関してはあまり思い出したくはない。

まあしかし、ここではあくまでライバル程度で収まっているからまだ良いだろうと考えられる。

だから一緒にいることも大して不思議には思わない。

ただひとつ思うことがあるなら……

「またかよ！お前らまた何処から酒なんて持ってきているんだよアル中共が！禁酒令ど

うしたー！」

「大丈夫大丈夫、前にもあつたんだし」

「私は完璧なのだから、誰かに制限されるまでもないわ」

もうこの組み合わせの時点で俺は胃が痛い。

この前の騒動起こした面子から処刑人ブレイキとモシンナガンまだおだやかなこを抜いたこの2人だ。

しかもよりにもよつてM16に416だ。

何も起きないわけがない。

既に頭は現実逃避モード。

流石に酒気で酔うわけではないが……

ここで暴れられたらたまつたものではない。

M16の言っていることは褒められたものではないし、416に至つては正直言い返したい。

お前酒入つてる時だけは完璧じゃないぞ。

普段完璧でもそれだけは擁護できないぞ。

しかも今回、誘つたのはM16では無いらしい……

あれ？非常に嫌な予感が……

「今日は私が飲みみたいから誘ったのよ。コイツ以外は付き合ってくれないから」

よくM16も付き合おうと思ったものだ。

彼女にアルコールが入るといことは、凶暴な彼女の枷を外すのと同義だ。俺だつたらできない。

いや、むしろ俺以外でも出来ないだろう。

彼女は真つ先にグリフィンで禁酒令が出された人形だ。入った時の荒れ様はもう酷い。

その辺一帯が荒地のようになる。

それほどにまで恐ろしいのだ。

しかし、このM16……

416が荒れた時でも平然としているのだ。

ブレーキにならない人間が一番平然としているというのはなんとも言い難いが、貴重な人物であることも確かだ。

普通ならこの416を躲し切れる者はいない。

が、彼女だけは躲し切れるのだ。

本人曰く、ジャックダニエル飲んできると強くなる

らしい。酔拳じゃないだろうに。

「まあ、そういう訳だから、場所借りるぞー」

「どうせ帰らないだろ、お前ら……良いよ、ただもう夜だからあんましはしやぎ過ぎるなよ」

「もちろん、分かっているわよ」

自信満々な回答。

俺はそれが不安で不安で仕方ない。

分かってます？君お酒飲むと変わるよね？

と、丁寧口調で聞きたいほどには不安だ。

今日の夜は悪夢として出てきそうだ。

せめて明日に支障が出なければいいのだが。

「さあ、飲むわよ」

「M16う……わたしわらひはまだのめるわ……」

「呂律が回ってないぞ、416」

案の定。416は既に酔いが回っている。

しかも、この前とは違って呂律が回らないほどにまで。

この前よりも酔いが酷い。

M16は禁酒令を破っていることをチクられたらまずいと思っているのか、完全に酔

うまでには飲んでいない。

彼女は普段からこう自重してくれていれば良いのだが。

まあ、叶わぬ願いなのだろう。

ただ、今日は妙に酔いが酷い割には416が大人しいような気がした。

「……なあ、なんだか今日は416が妙に大人しくないか？」

「同感だよ、私もこんなのは初めて見た」

どうも彼女も同じことを思っていたようだ。

普段の416ならもっと暴れたり、荒れ狂うほどだったと認識しているのだが……そんな素振りは全くない。

なんだかM16にじやれているような、そんな状態だ。

「おい416、どうしたんだ。普段ならそんな寄ってこないだろ？」

「……」

無言ではあるが、M16にしがみついているのは変わらない。

本当にどうしてしまったのか。

あの対抗意識の塊である416がここまでなるとは。

何かあったのだろうか。

そんな風に思った。

が……

「わたしはM16のライバル……わたしがいちばんM16のあいほうにふさわしいの……!!」

大人しいかと思つたら急にじたばたし始めた。

なんだ、いつもの416だったか。

しがみつかれたままバタバタされているM16は流石に困惑している。いつもとは違い、くつつかれている状態だからだろう。さすがの彼女といえど困惑もする。

さらに言えば、彼女の出したセリフに關しても氣になるところはあるだろう。“私が1番M16の相棒に相応しい”。

突拍子もないことを言っているのもそうだが、それ以上にその言葉の意味が一瞬理解できなかった。

そんな言葉もM16は聞いていたからこそ、余計に困惑している。いつも敵視しているような416が、本当はそんなことを考えていたのかと。

困惑と同時に顔を少し赤くして恥ずかしそうに頬を掻くM16。あいつもそんな顔をするんだなと珍しいものを見た気分だ。

「だからわたしにもっとかまっへよ……」
「だからわらひにもっとかまっへよ……」

恐らく、私に構ってよ。と言ったのだろう。

その言葉を輪切りに余計に擦り付く。

彼女、もしかしてM16に自分を見て欲しかっただけなのだろうか……？ そう考えると、何かと納得する部分がある気がする。

「……構ってやったらいいんじゃないか？ どちらにせよそれ以外に方法はないだろ」

「私はこいつと違つて子守りは苦手なんだがな」

そう言いながらも、穏やかな微笑みで擦り寄る416の頭に手を置く。まるで、妹たちに見せる微笑みのように。

……ああ、やはりここは平和だ。

きつと今までなら、こんな光景など見られなかった。

殺しあつてばかりいた2人が、ここではこんなにも仲が良いのだから。

「頼りにされてるんだな、M16」

「さあな。……まあ、なんだかんだ言つて何度も喧嘩してるが……AR小隊のメンバー以外じゃ、1番こいつが私の隣にいるのは確かだよ」

彼女達は、元々最初は味方だったのだ。

俺の居た世界線でも、それは変わらなかった。

しかし、歴史を大きく変えた”あの事件”によって、2人の未来も大きく塗り替えられてしまった。

416は所属していた軍を追われ、その原因の一端を担ったM16に対して殺意と復讐心を抱く。

M16は確かに己が成すべきことを成した。

416は自分のプライドに従い動いた。

その違いが、彼女達の間には亀裂を入れる原因。

故に彼女達はAR小隊と404小隊に別れた後も殺し合いを続けたのだ。416は復讐のために何度も襲い続けた。自分の存在価値を証明するために。こうやって考えると何ともくだらない理由と取れるが、それでも本人にとっては譲れないものだった筈だ。

ここでも、M16と416はなんだかんだ言って味方同士なのだ。それは全く変わらない。

しかしここでは、対立しているながら助け合っている。

お互いに皮肉を言い合いながらも、結局背中を任せられるのは自分が最も苦手な相手という訳か。

きつとあの事件が起きていなかっただからこそ、今の彼女たちの関係があるのだろう。

戦場にこの二人が共に立てば、どれほど頼もしいだろうか。きつと、その連携は凄なものじゃないかと一人勝手に期待する。彼女の眼差しは、確かに擦り寄る彼女に向けた信頼の証なのだろう。

「わたし……このまへはすこくがんぼつたの……すこいでしょ……？」
 「ああ。凄いよお前は。さすが私の相棒だな」

ポンポンと頭に手を載せる。

まるで今の416は子供のようだった。

きつとこの416の敵愾心に見えるそれは、彼女に自分を見てほしいという気持ちの裏返しなのかもしれない。

それとも、自分が早く彼女と同じ立ち位置に追いつけるようにと素直じゃない相棒意識でそうなっているのか。

烙印^{ASS T}で刻まれた記憶だけではない。

彼女の対抗意識には、それ以上の意味があつたように思えた。本来の彼女たちの関係

とは、こういう物だったのだろう。それだけに、自分の辿った歴史が嫌になる。

今更過ぎたようなことを言ったところで何も変わらないとは俺が1番分かっているはずなのだが。

だが、こんな平和なところを見せられては、暗い気分も晴れるというものだ。穏やかな温かい空気が1番の薬のように思える。2人の信頼や付き合い……一言だけじゃ表せない関係が、少し見えた気がした。

「……今日ばかりは飲ませて正解だったかもな。シラフじゃこんなこと言わないだろう、416は」

「まあ、そうだろうな。素直じゃない奴だ……こうでもしないと本音が出ないのは困りものだよ」

もしかしたら……

さすがにこれはないと思うが。

416は、狙って飲みに誘ったのか？

……なんてことは無いか。

もしそうだったとしたら……

中々完璧な作戦じゃないかと感心するところだ。

「……416も、中々やるよな」

「ああたりまえよはひまへよ……わわたしはらかんべきひだはかんらへひらからから」

いつものキリツとした表情はなく、にへらあとした気の抜けるような表情。もしかしたら、本当はこんな姿か彼女の素なのかもしれない。

なんだかんだ言っつて、今日だけはこの酒盛が良いものだったんじゃないかと感じられた。

普段は暴れるだけで、俺の胃が痛められるだけだったが……今日は、良いものを見せ

てもらったのだから。

「^{だから}らから……わらひはM16の……」

そこまで言いかけると、416はM16の腕の中で眠りこけてしまった。幸せそうに寝息を立てている。

M16はあーあと口にしてはいるが、心做しか頬が緩んでしまっている。あんなことを言われれば、それもそうか。

俺も少し温かい気持ちになった気がした。

今は辛いことを忘れよう。

いずれ向き合わなければならなくなるのなら、こういう時に平和ということを実感しておかなければ。

次に同じことが起きそうになったら……

その時は、絶対に止めてみせる。

彼女達の腐れながらも美しい縁は、誰にも切らせない。

どこまでも続くこの友情を、まだまだ見ていたいと思いがら……

「さあ、そろそろお暇するか。今日は助かったよ」
「気にするな。俺もいいものを見せてもらったしな」

そう言つて見ると、M16は苦笑いを返した。

本人としても柄ではないところを見せてしまったとでも思っているのだろう。柄でもないことと言うのは、人の目には不思議と良く見えるものだ。

普段が残念な以上、余計に。

少しM16に失礼なことを考えていただろと言わんばかりにジト目で睨まれたが、口笛を吹いて誤魔化する。

「416は私がちやんと帰しておく。安心してくれ」

「……一人で大丈夫か？」

大丈夫だよと一言。

背中におぶられる416はより幸せそうな顔を浮かべている。こちらはいつも頼りになる分、余計に珍しく見える。

思わず、俺も笑みが零れた。

帰りに怪我をするなよと一言忠告を入れて。

「それじゃ、もしかしたら今度は普通に飲みに来るかもな」

「そいつは勘弁してくれ」

冗談のようなやり取りを交わして、波は過ぎ去った。

今日は色々と思うところが沢山だった。

416とM16の事。

それに繋がる過去の話。

良い事を知った反面、思い出さなくなかったことを思い出してもいる。まあ、でも今

日は……

「まあ、楽しかったからいいか」

自室のベッドに飛び込む。

今日は少しだけ良い夢が見れそうだ。

最近が悪夢続きだっただけに、少し希望が持てる。

元よりここ自体が夢のようなものだが。

あの二人には、これからも良き仲でいて欲しいと願った。

余談だが、その後404小隊の部屋ではお互いに惚けて寝ていた416とM16が発見されたそうだ。

416は昨夜何があつたか覚えていなく、大混乱したらしい。M16はそれをニヤニヤしながら眺めていたようだ。

そんな状態でまた小競り合い勃発。

……やっぱり、良くも悪くも彼女達は変わらないらしい。

温和日常XVII：情報屋誘拐事件

グリフィン・鉄血合同宿舎。

いつもの如く俺の部屋。

まだ日の出ている時間帯。

今日は特にこれといって騒ぎがない。

俺が待ち望んでいた静寂だ。

「随分と今日は血色が良いですね……何か良いことでも？」

「いや、そういう訳じゃない。客が来てて適度に静かな時間がとても心地良いと感じてるだけだ」

だからと言って、静かすぎるといふこともない。

今日はスケアクロウが部屋に来ている。

彼女はよく俺の事を見ているのだろうか。

普段より調子が良いことを見抜かれてしまっていた。

最近は何屋に來るとだいたい騒がしくなる事ばかりだった。故にこういう時間が非常にありがたく感じてしまうのだ。

「まあ、普段は騒がしいから無理もありません」

「本当、勘弁して欲しいもんだ」

なんだか彼女がいる間は妙にリラックスしている気がする。まあ、彼女のペースが一番俺に合っているのだろうか。

そんな事を小さくぼやく。

少し聞こえていたのか、スクエアロウが少し目を逸らした気がした。恥ずかしくているのだろうか？

今日はガスマスクを付けているため表情の変化が読み取りづらいが、最近はそれでも分かるようになってきた。

しばし平穏な空気が流れた。

決して指揮官とWA2000のように甘い空気ではないが、確かに平和で、確かに暖かい雰囲気だった。

俺は決して彼女達に異性として見てほしい訳では無い。ただ、俺が望むのは彼女達の良き友人となればよい。

そんな風に思っている。

だから、これはこれで心地が良いと思う。

「この位のゆったりした時間が続けばいいんだけどな……」

かなり切実な願い。

普段がかなりドタバタ大騒ぎ故に。

「……すみません、無線が入ったようで。少し失礼します」

少し話を切って耳に意識を集中するスケアクロウ。

仕事の話なら指揮官が直接伝えに来たりするし、そもそも個人にだけ伝えるというの

もここでは少ないはずなのだが。

なんだか非常に波乱の予感がする。

スケアクロウが少し何か面倒臭そうな顔になった。

なんで嫌な予感と言うのは当たるのだろうか。

普段彼女がそんな顔をすることは少ない。

が、途端に真面目に返答を返している。

まあ、俺は巻き込まれないだろう……

と、思っていたのだが。

「すみません、リオン。……イントルーダーが、誘拐されたそうです」

「……何だつて？」

どうしてこう、休ませてくれないのだろうか。

普段ならそう思っただろう。

しかし、彼女の口から伝えられたのは恐ろしい事実だ。鉄血ハイエンドともあろう者が、何者かに誘拐されたのだ。

「まず、無線を飛ばしてきた主は？」

「代理人です。彼女に用事があつて訪ねた様ですが、その時には既にイントウルルーダーは部屋に不在。他のハイエンド達も彼女が何処へ行ったのかの行方は知らず、無線も繋がらない様ですわ」

イントウルルーダーの失踪を仮定して告げたのはどうやら代理人だ。彼女は本質として心配性な一面がある。

最初はただの不在だと思つていたようだが、話を聞く度に不安になつていた様子だ。

まあ、無理もない。

彼女は確かに道化のような人物ではあるが、流石に何も言わずに急に姿を消すような人物ではない。

さらに言えば、無線の回線をシャットアウトするような事などほとんどない。彼女の役割的には味方との連携が必要故、そうそうシャットアウトする必要が無い。

そういった理由を踏まえて彼女は誘拐と断定したのでらう。しかし、いとも簡単にハイエンドが誘拐されるものだろうか？彼女達は並の人形よりも強い。

そんな中の一人である彼女が誘拐されるなど、考えづらいのだが……

「仮定とはいえ、可能性が無いわけではありません……彼女は電子戦モデル故、生半可なジャミングなどに邪魔をされるとは思えません」

「流石に人権団体共の仕業つてことはないよな……今は侮れない技術を持っているだけに、ないと言いきれないのが怖い所だが」

今の近況は緊迫している。

ついこの前、人権団体との交戦もあった。

そんな殺伐となりつつあるこの地区で急な失踪者ともなれば、その可能性がないとは言いきれない。

それだけに、不安は強く出ていた。

彼女も、俺たちからしたら大切な家族のようなものだ。

その身に何かがあったと考えると……

いや、悪い想定に入るのはまだ早い。

ただ単に彼女自身の不調なのかもしれないわけなのだから。

「……取り敢えず、混乱を招かないように搜索に乗り出すとしよう」

「ええ。今無用な騒ぎは起こすべきではないでしょう……代理人が焦りで無闇やたらと連絡をしていなければ良いのですが」

今の状況を聞けば、確実に黙っていない人物もいるだろう。そう言った騒ぎを起こしてしまえば、基地全体の混乱に繋がる。あまり言いふらすべきことではないのだ。

「まずはこの基地内から搜索しなければならぬだろうな……」

「私の方でもイントゥルーダーの信号の搜索を行いますわ。どうか、協力をお願いします」

「当たり前だろ、と返事を返す。」

「外に連れ去られていなければいいのだが……」

その頃、とある部屋。

「情報の取引後は、この部屋に一緒にいて欲しいとの事だけれど……無線を遮断するよ
うなジャミングを施すほど嚴重にしなければいけないことなのかしら？」

「はい。……わがままですがその方が私としては都合が良いので」

片や探し人……このグリフィンでのちよつとした情報屋と呼ばれる人物、イントウ
ルーダー。彼女の腕も足にも何もついていない。拘束されているという訳ではなく、普
通にその部屋にいるようだ。もう片や、その姿は影に隠れて……

「まあ、知らない仲でもなく、危ないこともしないわけだから別に構わないわよ」
「ありがとうございます」

怪しい取引。情報という概念の売買。

物理的な形をとっている訳では無いが、その取引は彼女たちにとって非常に重要で、決して邪魔される訳には行かない。そしてその取引が終わったあとも、彼女の依頼は続く……

「どうしました？急に上の空になり始めて」

「いや、あれだ……今日、妙にクラウドがげっそりしてたんだよな……大して関係ないと思うけれども」

今日のクラウド……指揮官は、妙に体調が悪そうだった。

『大丈夫大丈夫、仕事に支障はないと思うよ……』などと言っていたが、明らかに疲労が見て取れる。

彼にも何かがあつたのだろうか？

彼は基本的にバテるなどということは起きない。

自分のことは自分で完璧に管理できる男だ。

見てくれは馬鹿だが、中身は優秀。

彼が自己管理不足であなつたとは思えない。

「とは言つても、指揮官殿は殆ど体調を崩している所を見たことがありません。……外的要因があるように思えます」

「まあ、そうだな。……アレが自分の不足でバテるなんて、それこそ竜巻でも襲つてくるんじゃないか？」

そんな冗談が言えるくらいには、ありえないだろうと言えるくらいには珍しいことだった。

つまり、彼の体調不良は何かしらの要因があるのではないか？という話なのだが……正直に言つて、今の状況とは何ら関係ない。

「……まあ、だからどうってわけじゃないが」

少しスケアクロウがマスクを被った顎に手を当て、何かを考え込む。彼女はこういう仕草をする時は、決まって何かしらの計算を行っている。つまりは、頭を使っているという事だ。しばらくすると、なにか腑に落ちたようにこちらへと声をかけてくる。

「もしかしたら、繋がりがあるかもしれないわ」

「って言う……」

俺がそう言って聞くと、彼女は仮説を展開し始めた。

「まず、確か指揮官は一回“情報屋”イントルーダーの被害に遭っていたはずですが、部屋への不法侵入もあつたようですから」

「そういうばそうだったな。」

彼は1度イントルーダーの噂が流れた時、被害に遭っていたはずだ。と言つても部屋に入られたのは彼自身が自分の部屋の施錠を忘れていたからだが。

それが大した関係を持つようには見えない。

「そこで、私は指揮官とイントウルダーが誰かによつて繋がっているのではないかと仮定をしました。……犯人と思わしき人物は、この“誰か”に当てはまる人物なのではないかと」

なるほど。この前イントウルダーが教えたのはクラウス……指揮官のことだった。

さらに言うなら、情報の取引相手は指揮官の事が好きな人形だ。つまり、彼の情報を手に入れたがために強引に実績のあるイントウルダーを連れ去り、そこから情報を手に入れようという魂胆か。

「あくまで仮説ですが……確かめてみる価値はあると思います」

「話の筋が通つてるしな。他の可能性やら突き詰めたらキリがない。ここのラインを見て行くのでしょうか」

となると、怪しい人形をさらに絞り込む必要がある。この基地には様々な指揮官好きを公言する人形がいるが、不法侵入をするものはそうそういない。それを行ったと言

えば、昨今では2名居たはずだ。1人はステアーTMP。さらにもう1人もいるこの2人が少し黒に違いだろうか？

さらにここから絞るなら……部屋に入った時の行動だろう。

TMPは指揮官の部屋の日当たりのいい所でただ日向ぼっこをしていただけと断っていた。

勿論、彼女本人ではなく被害者の指揮官がだ。

元より彼女は結構繊細で臆病だ。

見つかったらどうしようということも考えるだろうし、そんな大胆に行動を起こすことが出来る子だとは思えない。

彼女の人物像からしても、この線はないだろう。

となると……残りだが。

そう口に出した時だ。

「………そういえば彼女、指揮官の寢床に忍び込んだことがあるそうですね」

「ああ、言ってたな。………うん？」

指揮官の寢床に忍び込んだ？

よくよく考えてみる。

彼女は妙に指揮官に対してベツタリだ。

一部の人形がビビったりするレベルには。

本人は他の人形に対して敵意があるなどと言ったことはない。むしろ律儀で丁寧な事で定評がある。

だが……

前科持ちじゃないか。

よく考えたら大きい前科持ってたよこの子。

黒い。まっくろくろすけだ。

もしかして指揮官がげっそりしていたのは……

……ああ、なにか察してしまった気がする。

「……スケアクロウ」

「はい」

「……早く終わらせて指揮官の負担、減らしてやろうか」

その顔を見ていたスケアクロウ曰く、何かを悟った挙句に指揮官殿を憐れむような顔で抑揚なく話していた、らしい。

とても目は死んでいたらと聞いて俺でもびっくりしている。

まあ、そういう目にもなる。

何時か彼は刺されるだろう。

冗談抜きで。

話を戻そう。

つまり、イントルーダーが情報目当てに攫われたとするなら、今のところ一番黒いのは彼女なのだ。

つまり、そこから当たってみようという話だ。

確実にそこがいちばん黒い。

ここで見つかってくればいいのだが。

「……まあ、解決してもクラウスの苦勞は消えなさそうだが」

「それは言わないお約束、というやつです」

俺達はようやく目的の場所へとたどり着いた。

グリフィン所属……I・O・P社製の人形たちに割りあてられている宿舎の区画だ。
その一室……

つい先程、話に出ていた人形の私室。

攫われたならここにいるだろうと予想したのだ。

扉の前でノックをする。

まあ、反応はない。

ちらりとスケアクロウの方を見た。

彼女は妙に深呼吸をして、何かの準備をしている。

彼女の事だから、変なことはいしないだろう。

「開けなさい！鉄血市警よ！」

急に声を張り上げるスケアクロウ。

意味の分からない文脈と共に。

……そうだった。

前の居た場所でもそうだが、彼女は妙な所でテンションが上がることがある。テンションが上がるというより、はっちゃけると言った方がいいだろうか？

普段落ち着きがある人物だけに、ギャップが凄い。慣れたものだったはずなのに、時間が経って不意を突かれたようだ。

と言うより、普通に言っただけ。

自分の親しい友人がこんな子だと俺まで同じだと思われてしまう。まあ、別に気にしないのだが。

でもひとつ言わせてくれ。

「ここ他のやつも居るから静かにしてくれ……」

「失礼しました。少しやってみたくて……」

だとしても何だ鉄血市警って。

そんな警察聞いたことないわ。

聞くに、どうやらアーキテクトの奴がまたなんか吹き込んだらしい。スケアクロウもサブカルにハマったらどうするんだ。あれ復元するの大変だつて言つてたじゃないか。

しばらくすると、中から人がでてきた。

その人物は……

「……イントウルダー！」

「ごめんなさい、他の人の部屋だけととりあえずすぐ入つてくれないかしら。ちよつと見つかるかと不都合だから」

誘拐されていたと思われていた本人。

なんとか何事もないようによかつたと思つたが、取り敢えずは部屋に上げられた。

「……お前、何かされてないよな？」

「ええ、大丈夫よ。ちよつとお願いされてここにいるだけで」

その割には無線に出なかつたり、行方がわからなかつたりなど色々な不明点が浮き彫りになる。

何ももされていないとは考えづらいが……

ただ、特に拘束もされていないければ、この部屋から出ないで欲しいとだけで本当に特に何もされていないようだ。

「……この部屋。ジャミングが施されています。……通信が出来なかつたのはこのせいですか」

「ジャミングだ？なんでまたそんなもんを……」

そんな物騒な物をつけてるって、何かあるな……。

としか思いようがないだろう。

わざわざジャミングを部屋に仕込むなど、隠したい何かがあることが見え見えだ。

しかし、それらしきものなど思い当たらない。

彼女が隠しているものは基本ない。

指揮官への好意はいつもオープンだからまず隠してもいない。

「……余計になんかアレだな……」

そうやって唸っているところに、扉の開く音。

まずい。非常にまずい。

と思ったが、逃げれる訳でもない。

俺を含めた3人は、バレることを想定して堂々とすることに決めた。

今回の犯人のお出ましだ。

赤いベレー帽に、一部が透けるような薄い服。そこから見えるのはあからさまな下着。しかも、布面積が少ない。

こう言ってしまうのも悪いが傍から見れば、唯の痴女。

そんな姿をした戦術人形。

9A—91。

「あれ？なんで皆さんが私の部屋に？」

……あれ、反応が思っていたのと違う。

てつきり豹変して襲われるかもと思っていたが、普通だ。

「あー、それが……」イントウルリーダーがいなくなつたと大騒ぎになつてしまつたので、それで私たちが搜索に「おいおいおい！真っ先に言うのかよ！」

適当に濁そうとしたが、スケアクロウが直球でバラしてしまつた。下手に言い訳をするより、ありのままを話した方が彼女もどういうことか説明してくれるはず。この事だが……

「やっぱり、ここままでしてしまうと騒ぎになりますよね……」

この子、本当に行動が行き過ぎではあるのだが……

根から危ない子と言う訳では無いのだ。

実際に、今回を除いては実害はない。

今回もイントウルダー自体には何もしていない。

だが、今回の行動は混乱を起こしかねない。

それは少し言っておかなければならないだろう。

「……どうして、このような事を？」

「その……指揮官を、抜け駆けで取られたらなくて……」

いいことを教えてあげよう9A—91。

抜け駆けしてるの君よ。

嫌だつて言ってるけどそれしてるの君だからね。

……まあつまり訳せば、他の人に指揮官の情報を与えてしまったら自分が不利な状況

に立たされてしまう。

よつてお願いしてなんとか情報源を断とうとしたという事だろうか？

「でも、お願いされただけで強制はされていないからそんなに怒らないであげて欲しいのだけれど」

「……まあ、確かに」

今回のことは決して褒められたものではない。

しかし、強行的な手段に出なかつたのは彼女の真面目さ故か。そこはに関してまあまあ、と言つた所だろう。

しかしこの彼女……自分の首を絞めている。

その理由を彼女に教えれば、きっとこういつたことも無くなるだろう。

「なあ……9A—91」

「はい、何でしょうか……」

指揮官はそういうことをする相手よりも、しつかりと真正面から行く相手の方を好む

タイプだぞ？あれ。

それに、わざわざイントウルダーに頼らなくとも本人に聞けば個人情報なんてペラペラ喋る。

そういう指揮官なのだ。

「だからな、そんな回りくどいことしなくて良かったんだよ」

「そう、なのですか……」

スケアクロウはうんうんとうなづいている。

イントウルダーは地味に口撃を食らった気がするとちよつとジト目。ごめんって。そんな意図で言ったつもり無かったの。説得しようと思ったただだから泣きそうにならないうで。

「ごめんなさい、イントウルダーさん。私の勝手で……」

「いいのよ、私としてはこういうのも面白いから」

イントウルダーは気にしていないと答えた。

彼女は人に情報を教え、その後どんな展開になるかを楽しみに見ている様な人物だ。色々なことの当事者になるより、傍観者が楽しいと答えるタイプだからだろうか？ 申し訳なさそうにする9A-91に大丈夫と声をかける。アイツもいい性格しているよな。

何はともあれ、今回の事態も無事解決だ。

……あれ、何か忘れているような……。

「リオン」

「何だ」

「指揮官殿の苦勞、むしろ増したのでは……？」

……あつ。

止めようとするつもりが、火に油を注いだ。油どころかガソリンだったかもしれない。

……

「……頑張れ、クラウドス……」

俺の招いた事態だが、ただ手を合わせて応援することしか出来なかった。真相をつきとめて同じことが起きないようにするためにはこうするしか無かった。

彼は、尊い犠牲になったのだ。

その後、もつとげっそりした指揮官の姿と、妙につやつやした9A—91の姿があったという。

副官のわーちゃんは、その惨状に思わず何時ものツンデレが出なくなるほどには焦ったそうだ……

温和日常XVIIII：量産型だって強くなりたい！

「……鉄血製の量産型戦術人形の強化？」

「そそ、なんか少しは強くした方がいいだろうって言ってたんだよねー」

鉄血工造支部の一室。

グリフィンのメンテナンスルームや製造室とほぼ大差の無い器具が立ち並ぶラボラトリー。

大差がないとはいえ、物理的なメンテナンスを行う器具に関してはこちらの方が非常に大掛かりなものが配置されている。

俺は今日、アーキテクトと呼ばれて珍しく鉄血工造の方へと出向いている。非常に

久々なこの風景。

無骨な作りやら何やら、あの時と余り変わらないなと思いつながらその場を歩いていった。

今はラボラトリーの中、大きなデスクの上に広げられた資料を見ながらアーキテクトと話しているところだ。

その資料に大きく書かれているのは、『鉄血工造製の量産型戦術人形の強化計画』。どうも、鉄血の上の方はグリフィン製の戦術人形一人一人がそれぞれの思考回路を持ち、効率的に戦闘を進めているという状況を見て従来の量産型そのままでは戦力の向上に貢献できないと思ったのだろう。

「内容としては、指示を受けるだけじゃなく、私たちハイエンドのように自律して行動し、小規模に指揮を摂ること出来るAIを組み込みたいってさ。詰まるところ、分隊長みたいな感じ？」

つまり彼らがやろうとしていることは、ハイエンド達の仕事の規模を小さくした“ちよつとだけ優秀”なAIを搭載しようとしているらしい。

さすがにハイエンドレベルをどんどん量産できるわけもない。だが、ある程度何人かに搭載できる手頃な規模での開発なら量産型戦術人形を生かせるのではないかと考えたようだ。

鉄血の技術者達も、決して劣っている訳では無い。

しかし、I・O・Pに常に先を越されてしまう。

力になれていないという事実を見せられ、なんとかこの状況を打破できないかと考えでもしたのでらうか？

量産型を急に強化し始めるなどと言ったことは、俺からしたらあまりにも突拍子もない計画だった。

「まあ、簡単に言うともミドルってところかな」

「成程?……この強化した量産型戦術人形の個体を仮称“Type:ACE”とする……なんて書かれてるな」

つまり、未強化の量産型戦術人形はそのままの呼称で。強化を施された量産型戦術人形をType:ACEと呼ぶようだ。

A C Eに抜擢される人形は、比較的破損率が少なく様々な戦場をかけたベテランが選ばれるようだ。

量産型とはいえ、戦闘に関する思考回路は持ち合わせているのだ。長く生き残っている人形は優れた戦闘のセンスを持っているということなのだろう。

ならば、その優秀な人形を格上げするのが道理というものだ。新しい鉄血の力を、経験のない者に持たせるのは不安だろう。

「……という訳で、もう実は抜擢された子達のアップデートは終わってるんだよね。入っていいよー！」

「随分と手際がいいな、いつもの事だけでも」

アーキテクトは色々と問題児ではあるが、その技術や頭の良さなどは他の追隨を許さないレベルだ。

それ故、基本的に技術仕事では頼りになる。

……まあ、何が起ころかわかったものでは無いのだが。

「それじゃ、入っていいよー!」

そんなアーキテクトの一言を合図に、3人が部屋に入ってきた。

「それじゃあ、挨拶お願いしまっす!」

アーキテクトがはっちゃけたように言う。

今日の前に立っているのは3人。

1人はサブマシンガンを。

1人はアサルトライフルを。

1人はスナイパーライフルを装備した人形だ。

まず前に出てきたのはアサルトライフルを装備した人物。

「Vespidd||Type: Aceであります。今回、私が数あるヴェスピドの中より抜擢されバリージョンアップを行いました。これより一層、貴方方のお役に立てるよう活動してまいります」

驚いた。まさかハイエンドたちと同じように話せるようになっていたとは。鉄血の量産型は基本、コミュニケーションを上手く取れるようには作られていない。どちらかと言うと信号でのやり取りによって命令を受けるため、中々話せるようなタイプではなかったのだ。

それにしても、標準的な子だからか性格は律儀なようだ。と言うより、典型的な軍人の話し方というかなんとというか……どちらにせよ、真面目そうで何よりだ。

何処かの変態技術者とは違うな。

そう思っただけで横を見るが、当のJK風人形は完全に口笛を吹いてなんのこともやらと言わんばかり。

お前の事だよアーキテクト。

「ああ、宜しくな」

穏やかに微笑んで、軽く挨拶を交わす。

ヴェスピドはROやゲージャーに近いのだろうか？

言葉を掛けられれば、しゃつきり直立し敬礼する。

良くも悪くも、兵士だなという立ち振る舞いだ。

アーキテクトの、はい次々という合図で次はサブマシンガンを装備した人形が出てくる。

「私はリップパー、Ripperll type: Aceです。他の2人と同じく抜擢されて強化を受けました。敬語はちよつと苦手……少し大目に見て欲しい。私も、2人に負けないうように頑張るから」

彼女はリップパーの強化型のようなのだ。

彼女の性格としてはどうだろうか？

まだこれといってハッキリわかるような口ぶりではないが、どちらかと言うと、兵士とは違うだろう。

ヴェスピドのようなタイプではなく、例えらるとするなら傭兵に拾われた戦争孤児のよ

うな……

具体的すぎるか。

でも、そんな印象を受けた。

こちらにも宜しく、と返す。

リッパ―は表情はしつかりしているのか、薄く笑顔で返してくれた。バイザーで隠れてはいるが、彼女は感情表現が出来るようだ。その点、性格としては民生用人形やI・O・P製の人形に近いのだろうか？

彼女はすぐに周りにも馴染めそうだ。

他の2人は時間がかかるという訳では無いが。

最後に、スナイパーライフルを持った人形が出てくる。

「……Jager Type: Ace。よろしく。2人に負けず劣らず、力になろう」

無口。彼女はかなりの無口だ。

そんな彼女はイーガーの強化型だ。

雰囲気からしてクールな仕事人という感じだろうか……？

そう思ったのだが、妙な違和感がある。

彼女は口数こそ少ないが、少ない言葉を発したあとにいい笑顔で大袈裟に敬礼をして見せた。

……もしかして、彼女は口数が少ないだけだろうか？

テンプレートのようだが、彼女にも宜しくと答える。

そんな彼女が返した反応は、力強いサムズアップ。

更には自分の獲物をくるくる回してはストックを地面に付けるように銃を突きたて、また大袈裟に敬礼。

結構なユーモアがある。

恐らく、この3人の中で一番インパクトがあるだろう。

そんな大袈裟なアクションを終えた後でヴェスピドに軽く手刀を頭に食らうイエーガー。

痛いと言わんばかりに頭を抑えている。

「遊ばない。今は上官殿の前でありますよ」

「だからって急に手刀はどうかと思うけど……」

この3人組の中で一番苦労しそうなのはヴェスピドかと思っていたが、このやり取りを見ているとリッパーが一番苦労しそうだ。ヴェスピドも意外とズレている所があるようだ。

痛みが収まったのか、イエーガーは口を尖らせながらやつと戻ってきた。

次の話に移ろう。

と言っても、そんな難しい事じゃない。

「今紹介はしてもらったけど、呼び名で判別しやすいようにしたいよねえ」

アーキテクトは言う。

確かに、Type: Aceとだけ呼ぶのは紛らわしい。

というより、呼びづらい。

かと言って今まで通りでは判別がつかない。

ここは新しく名前を考えるべきじゃないか？

という話だ。

「確かに判別出来ないのは致命的であります」

「そうね……私達は元は量産型。元々の名前で呼ぶと混乱を招きかねないけど」

「(顎に手を当てて考え込む)」

同じようなことは思っているらしい。

しかし、良い名前が……

うーんと1回唸る。

……そうだ。

いい名前が思いついた。

「……ヴェスピドは“ワスプ”、リッパーは“ジャック”、イエーガーは“イーグル”

……なんてどうだ？」

もちろん、理由もしつかり有る。

ヴェスピドの名前の由来は“働き蜂”だ。

しかし、それよりも強力なものとなれば……“狩蜂”と呼ぶべきではないだろうかと考えた。

女王蜂にまでなってしまうたら、戦場には出ない。

だから強く、そして敵を穿つヴェスピドは“ワスプ”と呼ぼうと考えたわけだ。

リッパーに関しては実はあの一瞬で少し悩んだ。

リッパーの由来は“切り裂き魔”。

実は、何処かで旧世代文明の事件を見た事がある。

その時、偶然にも見た犯人の名前が“切り裂きジャック”だったのだ。彼の犯行動機は不明でありながらも、その腕は確かだったのだろう。

ならば、今強くなった彼女に最適ではないか。

良い意味だけ込めて、“ジャック”なのだ。

……元は男性名詞だが、強くなったことも含めてだ。

イエーガーは所謂連想で思いついた。

“狩る者”は“鷹の目”を持っているなどとはよく聞く話だ。

強化の施されたスナイパーには持つてこいの良い名前ではないか。スナイパーにとっては名譽とも言えるこの名前を、彼女につけようと決めたのだ。

だから“鷹の目”から取って、イーグルという名前を。

それを聞いていたイエーガーはうんうんと言わんばかりに頷いていた。

「ぴったり、でありますね」

「かつこいい。私は気に入った」

「いいセンスだ」

3人にも気に入って貰えたようだ。

咄嗟とはいえ、良い名前と言って貰えると嬉しい。

彼女達は、これから鉄血をさらに支える人物となる。彼女たちの手入れもさらに丁寧

に、細かくしてやる必要があるだろう。少しやる気が出てきた。
技術屋の血が騒ぐというものだ。

アーキテクトも何気なく楽しそうだ。

……あいつの事だから彼女たちに何をするかは分からないが。そのうちリッパ……ジャックに何かしらしそうな気がする。ジャックが苦労人な雰囲気があるため、ただの勘ではあるが。

「ありがとね、3人とも！今日はまだバージョンアップしたばかりだから慣れないだろうし、宿舎に戻っていいよ！ダイナゲート達が案内してくれるから安心していいかんね」

そんな軽い言葉と共に案内をするいつものマスコット、ダイナゲートが跳ねながら出てきた。

この子は本当になんでも出来るな。

信号で合図を送りながら、3人は宿舎へと戻っていく。

なんとなくだが、仲のいい3人だなあと言う風に思えた。

少し話せるようになるだけで、あそこまで個性が出るとは思わないものだ。少し、良いものを見た気がする。

「どうよ?うちの新しい子達?」

「中々だな。面白い奴らだと思ったよ」

アーキテクトがにやにやしなから聞いてくる。

そんなもの、聞かなくなつて顔を見ればわかるだろうに。彼女も中々悪いやつだ。

アーキテクトも、最初はどうも不安だつたらしい。

量産型の素体でAIを強化しても、それに上手く体がついて行くか、精神がついて行くか。

しつかりと命令を処理できるのか?

そんな不安があつたようだ。

だが、彼女もあの様子を見て安心している。

「あの3人、結構上手くやれると思うからさ。だから、あの子たちもちゃんと面倒見てやってくさいな」

「言われなくともわかつてるよ。そこは俺の管轄内なんだ、手は抜かねえよ」

にっ、と自信ありげな笑顔を見せる。

アーキテクトもその顔で充分信頼してくれているのだろうか、なら大丈夫か！と返してくれた。

鉄血の新たな仲間。

戦場で常々共に戦う兵士が、一段上へと上がってきた。
彼女たちも、ただの兵士ではなく。

1人の人形に、1人の人間にどんどんと近づく。
そんな彼女達はまだ新参者だが……

せめて、彼女たちが怪我をしないように。

彼女たちの帰れる、安心できる場所になれるように。
頑張ってお仕事しますかねと再び意気込む。

晴れて、彼女たちもこの基地のメンバー入りだ。

状況訓練Ⅰ：訓練準備

グリフィン基地内。

指揮官の執務室。

「うーん……」

執務室の椅子に座り、デスクで書類仕事をこなしている人物……指揮官ことクラウドス。

彼に似つかわしくない唸り声を上げながら目の前の仕事をしている。……いや、それだけならば特になんということは無いのだが。俺が居るにも関わらず今日は上の空のようだ。

いつもは俺やわーちゃん……WA2000などと話していて少しはゆっくり、ゆったりと仕事をこなしている筈なのだが……

今日はやけに指揮官が真面目だ。

ゆるいという感じは抜けていないのだが、普段以上に仕事へ身を入れている気がする。た。

ぱっぱぱつぱと重なる書類を恐ろしい速度で処理していく。この気合いの入りようには副官であるWA2000も困惑している様子だ。

「……なあわーちゃんや、アイツどうした？ 今日俺が居ても不気味なくらい集中してないか？」

「私が聞きたいわよ……指揮官がゆるくやつてるのはいつもの事だから、余計に今みたいにハキハキやつてるのが恐ろしく見えるのよね……あとわーちゃん言うな」

ツツコミを欠かさないあたり、よく訓練されている。

流石わーちゃんだ。冗談は置いておくとしても、今日のクラウドはやはりどこか違うような気がする。

元より仕事はできる方ではある。

しかし、ここまでやるのは早々見ない。

なぜ彼が上の空なのだろうか。

あの能天気な指揮官に悩みなんてあったか？

……流石に失礼だ。撤回しよう。

そんなふうにはコソコソ話しているうちに、クラウスは既に本日の書類仕事の殆どを終わらせた。

「……後はカーリーナの管轄内だし、そろそろ動こうかなあ」

そんな一言が聞こえた。

カーリーナ……この指揮官の秘書のような者だ。

副官とはまた別の役割になっている。

様々な補助はほとんどは副官に任されるが、金銭関係や資材関係、契約書などの管轄は彼女がやっている。

あと残っている仕事はどうもその程度らしい。

仕事があまりに早すぎて恐れを抱くレベルだ。

さらに気になる言葉。

そろそろ動こうかな……何か企てているのだろうか？

アレのことだ。アレが考えるのは両極端だからどちらとも言えない。下らない事の場合はとことん下らないし、真面目な事だと本当に真面目な事だ。

今の様子を見るには、真面目側だろう。

「……2人には先に伝えとこうか。実は……」

「……AR、404、ハイエンド達の部隊による擬似戦闘訓練だつて？また随分と唐突な……」

彼の行おうとしていたことは、普段彼女達が行っているごく普通の“訓練”だった。しかし、今回は何かが違う様子。

クラウスはただの訓練にここまで時間を潰すような人物ではない。そうになると、何かしらの特殊性をつけるはずだ。

今の所そういった特異性と言えば……

この基地における重要部隊や重要人物で行われる、ということだろうか。AR小隊は正統派なエリート、404は裏工作や隠密作戦などのプロフェッショナル、鉄血ハイエンドはそれぞれの役割を1人でこなせるほどのスペックを持つ人形。

ここまでのエリートを集め、何をしようと言うのか。

「最近、この前の制圧作戦の様に人権団体の抵抗が異様になってきているからね。他の部隊の訓練をするのもそうなんだけど、まずは先達を担ってくれる彼女らをもっと強くないや行けないかな、という事を考えてたんだ」

確かに、考えてみればそうだ。

彼女たちを先導として他の部隊も動くとするならば、その先導が潰されてしまつては元も子もない。

だからこそ、元より優秀な部隊をさらに強化する魂胆ということらしい。

「それは分かったけど、わざわざあんたがそこまで考え込むって……本当に一体何考えてるわけ？」

一番重要なのはそこだ。

わーちゃんと言う通り、彼が何を考えているのか。

今明かしてくれたこと以外の考えが読めない。

たかがその程度なら、パツと思いついてパツとやってしまうのがこの男だ。俺達は忘れていたが、こいつも大概な処理能力を持っている。

だからこそ、ここまで時間をかけているのが分からなかった。

「そうだねえ……まあ、言うならば……ちよつと訓練をする本人たちには意地悪な事をするかな」

申し訳なさそうな顔の裏に、少し悪戯っぽい笑みが浮かぶ。彼は本当に何を考えているのか。

意味の無いただの悪戯なのか、それとも……

その訓練の内容の予想もつかなかった。

本当にただの訓練か？

実弾を使用した、実戦か？

もしもそうだとしたら、当たれば当たるほど死に直面する。失敗をするところであり、そこから学ぶ訓練においてそんな事するのはあまりにふざけている。

そんなことは無いと思いたい……

「……そうだねえ、その顔だと皆に身体的な危害を加えそうだと考えてるみたいだけど、そんなことはしないから大丈夫よ」

「本当か？ いまいちお前の腹ん中が見えないんだがな」

ネタばらしをしようとする面白くないだろうか？

そんな声が聞こえた。

少なくとも、危害が加えられることはない。

その言葉を信じるでしょう。

しかし、物理的でないとするならば……

また他の部分だろうか？

「わーちゃん、それぞれのリーダーに言伝……まあ端末へのメッセージでもいいんだけど、近い内に擬似戦闘訓練を行うって伝えておいてくれないかな？あ、もしも誰か誘って観戦したいならそれもいいよ〜」

「わーちゃん言うな……はあ、わかったわよ……とりあえず定型文みたいにしておけば司令部からつぼくなるでしょ？」

俺はフレンドリーにメッセージを送る派だから定型文はアウトなの！知らないわよそんなの！などというまたまた騒がしい声が響く。

今回の訓練の特異性を俺は完全に知らない。

かと言って、その詳細を知るのは指揮官のみだ。

しかし、今回の訓練は改めて精鋭たちの戦闘力や行動パターン、そしてもしも負傷をしてしまう際の癖やよく攻撃を受ける被弾箇所など、様々な事を観察し知ることが出来るチャンスかもしれない。詳細は分からないが……

この機を逃す手はないだろう。

「……その訓練、俺も見物させてもらうわ。俺も少し、アイツらがぶつかっただらどうなるか興味があるからな」

この訓練の観察で何かが掴めたならば、彼女たちの救助がより迅速に、容易に行えるようになるかもしれない。

救命行動は速さが大切だ。

それを迅速に行えるということは、彼女たちが負傷した際のシャツトダウンの回避……つまり、生存確率に直結する。

これ以上ない絶好の機会だった。

奴の思惑は分からない。

しかし、せめて悪い事でないとは思いたい。

そう祈りながら、準備に奔走する指揮官を眺めていた……

数日後。

グリフィン基地敷地内。

旧司令部の廃墟。

「……私たちが呼ばれた理由は、擬似戦闘訓練ですよね？」

そこに佇む5人の人形。

口を開いているM4A1を筆頭とするグリフィンの精鋭部隊……AR小隊だ。彼女達は、指揮官からの命令によってここに待機している。彼女達が今から行うのは、別の人形との戦闘訓練だ。

しかし、彼女達の目の前には誰も映らない。

「その筈だけど……私達以外のメンバーが見当たらないわ」

AR小隊の参謀役とも呼べる人形……AR-15がその事実を口にした。見渡してもそこに居るのは自分達のチームメイトだけ。本来、相手となる人形もまずは集合すると思ったのだが。

どうやらそうでは無いらしい。

いくら待っても、ここに居るのはAR小隊のメンバーだけだ。

「おかしいな。私達の相手をしてくれるハイエンド達は何をしているんだ？」

今度は小隊内で最も頼れると言われている人形……M16A1が口を開いた。彼女の言い方からすると、鉄血のハイエンド達が彼女達の相手をしてくれるようだ……全くもってなにも反応がない。

何故だろうか？ハイエンド達と言えど、指揮官の命令をすっぱかすような真似はしないだろう。

すっぱかしてもあの指揮官だ、直ぐに許してくれそうな気はするのだが。

「ねえねえ、まだなの？やるなら早くしようよ〜！」

「SOP、これは遊びじゃないんですからね。……彼女達にも、何かあるのでしょうか。それに本当に忘れていているなどしていたら、指揮官が何も手を打っていないとは思えません」

残酷な一面が控えめになったとはいえ、戦いを楽しむ節があるSOPMODII。早くしようと駄々をこねるが、隣にいるRO635がなだめている。相手がいないと言うのに、どうやって訓練などを行おうと言うのか。

しかし、あの指揮官の企画だ。

そういうことをするとしたら抜かりはない。

ただの遅刻とは思えないようだが……

各々が口々に呟く中、それは響いた。

全員がよく聞き慣れた、緩い男性の声。

「あーあー、聞こえてるかい？」

今回の騒ぎの犯人にして首謀者。

指揮官、クラウスの声だ。

緩い雰囲気はそのままに、ノリノリで放送をしている。

「指揮官、未だに相手である鉄血ハイエンドたちが来ていませんが……」

M4が代表してその事実を伝える。

しかし指揮官は、特に焦ることも無く。

「君達は相手の小隊が居ないと困惑しているようだけどご心配なく、そこに居ないだけでちゃんと来てるからね」

M4の言葉が聞こえているのか居ないのか、微妙な答えだ。しかし、彼は特に気にす

ることも無く続ける。

まるで、全体に言い聞かせるように。

“全員”に対して言葉をかけているようだ。

「さて、いきなりで悪いんだけど……君達にはすぐに擬似戦をしてもらおう。場所はここの旧司令部の廃墟」

これからの戦闘は屋外戦ではなく、室内戦がメインとなるだろう。相手は戦術人形でも兵器でもない。軍人でも無ければPMCでもない。

これから敵対するであろう相手は、突き詰めれば経験の無い……あるいは浅いただの武器を持った民間人だ。

彼らを鎮圧するとなれば、必然的に自分たちが有利を取れるであろう室内を選ぶはずだ。

こちらから居城を潰すこともある。

そういう意味で室内戦をメインとして、廃墟が選ばれた。

「君達のやることはただ一つ。敵小隊の殲滅だ」

彼女達の行動は逐次ステルス迷彩をかけたダイナゲートによってこちらで確認している。

敵の小隊メンバー全員に対し、擬似銃弾を1発でも当てれば良いのだ。1発でも当たったら、それは死亡と見なされる。全滅とは、これ以上に分かりやすい勝ち方もないだろう。

「ちゃんと擬似銃弾の準備は出来ているね？訓練とは言えど、怪我をしないように。怪我したらしつかりリオンに伝えるんだよ！」

クラウドがサラッと俺を巻き込んだ。

俺が救護班として参加するなんて聞いていないぞ。

まあ、言われなくてもやるのだが。

怪我したやつを放っておくほうがおかしい。

任せろ、と小声でボソリと呟く。

「やる気旺盛だね……整備士さん」

「ああ……って、Vector。お前もこれを見に来たのか」

後ろからVectorに声をかけられた。

辺りにはVectorだけじゃない。他の人形達もこの訓練を見に来ている。それはそうだろう。エリートの小隊3部隊が撃ち合う光景など、そう見えるものではない。

正面切つての戦闘技術や連携など……

この擬似戦で参考になるものが山ほど出てくるのだろう。それは是非とも、他の人形達にとっては得たい知識の筈だ。

しかし、何か引つかかる。

指揮官は特に何事もなしに話しているが、違和感が抜けない。彼女達に対する“意地悪”とは一体……

「最後にもう一つ。今回のキーワードだ。……『不測の事態を想定する事』。どんな者が出てこようと、“チームメイト以外は全員敵”だと思つて戦闘をするように」

その言い方には、明らかに含みがあつた。

「それでは、そろそろ始めようか。制限時間は1時間。1時間を過ぎたら、残りの人数によつて勝敗を決める。……カウントダウン開始。3……」

その合図とともに全員が銃に弾を込める。
弾倉を押し込み、しっかりとロックをかける。

「2……」

コッキンググレバーを引く。

内部に擬似弾が押し込まれる。

擬似とはいえ、確かな銃弾だ。

「……………」

ストックを肩に当て、その獲物を真っ直ぐに持つ。

グリップは確かに握られ、トリガーに指がかけられる。

「……………行動、開始！」

その合図とともに、廃墟は精鋭達の戦場と化した。

状況訓練 I I : 精鋭達の仮想戦場

「……行動、開始!」

指揮官のその一声によつて、廃墟は精鋭達の戦場と化した。AR小隊は一斉に行動を開始した。

規則正しく、陣形を崩さず。前線には敵を引きつける役のM16A1と、唯一のSMGであるRO635が陣取る。

その後方には、主に敵に打撃を与える役であるSOPMODIIと、的確に敵を減らしていく役のAR115。

そしてその中心には、この小隊の中核となる人物……M4A1だ。

彼女達は、この基地におけるエリート達だ。正面戦闘において確実に彼女達の実力は他の人形のよりも頭一つ抜けているだろう。彼女達は、彼女たち自身が引き連れているダミー以外の個体を持たない……唯一の特別な人形たちだ。

故にその戦闘能力、作戦遂行能力が高いのだろう。

《クリアリングをしつかり、誰かが攻撃を受けた際は直ぐにカバーに入れるようにして》

《了解、周囲に注意しつつ前進します》

《後ろは任せるからな、2人とも》

《任せて、鉄血の人達を見つけたらすぐどーん、だね！》

《SOP、声を小さくして。敵に勘づかれるわ》

その理由は、彼女達が16Labの直属だからだ。

16Labは、人形達の生みの親とも呼べる技術者……ペルシカが所属している。このAR小隊の人形達も、彼女の手によって生み出された存在と言っても過言では無いだろう。

ペルシカの他にも優秀な技術者が揃っている所で生まれた者達だ。戦術人形としての性能は比べ物にならない。

M4A1も、普段の彼女とは打って変わっている。

任務の時や戦闘の時は隊長らしく振る舞い、確かな実力を持ち合わせているというと

ころを見せてくれる。

それに合わせるかのように、他のメンバーも動く。

A R 小隊の中核は、間違いなく彼女だろう。

「それにしても、A R 小隊は最高の戦闘力を持っている部隊だ。……彼女達の力を過信している訳じゃないが、彼女達の今回の訓練における具体的な目的ってなんだ？」

「今回のA R 小隊への口実としては……ほら、彼女達は正面切つての戦闘は確かに得意だ。だが……相手が必ず正面から来るとは限らないからね。奇襲への対策や、罨などの対処を学んでもらおうかなって事さ」

クラウドが言うには、彼女達は正面戦闘が強い故に相手は奇襲を仕掛けることが多くなるだろうと踏んでいるらしい。

その為、室内戦闘での周りへの警戒や索敵、もしも奇襲を受けてしまった際の対処などを想定した訓練のようだ。

確かに相手はそういった知略や、奇襲、闇討ちが得意なタイプだ。そうすると、正々堂々行く彼女達にとっては不利になりがちだろう。その対処に関して実践を通じて学ばせようということか。

「……さて、別チームの映像も見てみようか」

そう言うと、別チーム……現在A R小隊の相手となつているチーム、鉄血ハイエント達の視点が映し出される。

予想通り、全く見覚えのない場所だ。

彼女たちは最初から別々の場所に招集されており、そこからいきなり始められたのだ。

わざわざそんなことをする必要があるかと疑問に思う。

されど、コイツの考えることだ。

まだ、黙って見ているとしよう。

《……ビットで偵察を試みましたが、敵影はありませんわ》

《なんだよ、まだお預けってことか？》

《焦るな処刑人。無理に仕掛けても負ける》

《簡単に倒してもつまらない。多少頭を使う程度がいいって事さ》

5人のいかにも強者らしいような雰囲気を出す小隊。

本来は小隊ではなく、個人個人で動いているのだが。

彼女たちが噂の鉄血ハイエンドだ。

《痕跡もなし、音もそこまで聞こえません……まだ近くにはいないと思われれます》

周りの状況を調査しているのはスケアクロウだ。

周りに浮いているビットはどれも攻撃だけでなく索敵にも使える様子。しかし、成果は得られず。

この建物は広いのか、手掛かりがない。

彼女もこれには手を焼いているようだ。

《そろそろ始めたいところなんだけどな》

《時が来たら嫌でも働くことになる、今は座して待つべきだ》

潜伏しているのは処刑人とハンター。

彼女達は、特定の1人を追い詰めることに特化している。

しかし、処刑人は近距離での切り込み、ハンターは遠距離や罠を張り巡らせての戦いを得意としている。

凸凹に見えるが、彼女たちの特性はお互いを補うように出来ている点もある故、2人が組むと非常に強力だ。

《1回は奴らと戦ってみたかったんだ……ああ、ゾクゾクしてきた》

《アルケミス。気持ちが高ぶるのは分かりますが、今はあくまで訓練です。本来の目的を見失わないように》

残り2人はイントウルダーとデストロイヤー……かと思っていたのだが、居たのは

アルケミストと代理人。

イントウルルーダーは電子戦特化のため、本人の戦闘能力は他のハイエンドと比べると少し低い。

そのため今回は選ばれなかった。

デストロイヤーに関しては彼女の得物が榴弾を使用したグレネードランチャーだ。場所が建物内ということもあって、殺傷能力が他のハイエンドと比べて飛び抜けて高すぎる。更に言う和最悪の場合彼女の放った榴弾が建物の崩壊を招きかねない。

そういった理由で現在はこの場にはいないという事だ。

逆にアルケミストは兵装的にも室内で不足なく戦闘が行えるレベルであることから抜擢された。

代理人は言わずもがな、本人が鉄血ハイエンド達の司令塔として動くことが出来る最大の戦力だからだ。

《我々の役割は別れています。各々、自らの性能をよく理解し……：相手を的確に追い詰めていきましよう》

「……お前が考えてることが、丸々代理人の口から出たような気がするな」

「流石代理人だ。俺の意図をしっかりと読みとつてる。彼女の言った通り、鉄血ハイエンド達への意図は“個人の特徴を生かした連携”にある。彼女達は確かに優秀だけれど、如何せん皆我が強い所があると思うからね」

鉄血ハイエンドたちは皆、個性が強い。

そして、自我が強い故に衝突も珍しくない。

そんな彼女達に必要とされているのは、スムーズな連携だろう。同じことを想定されていない設計ではあるものの、それを生かした戦いをする事が出来たならば、他の小隊など敵ではない。

その為にも、今回の戦闘訓練を通じて連携を取りやすくさせたい訳だろう。

「……さて、そろそろ始まりそうかな。敢えて404小隊の画面は

伏せておこう。彼女たちの行動が闇に包まれているのは、今に始まった事でもないしね」

そんな風に格好を付け、勿体ぶるように彼女たちの行動を隠す。普通の戦闘訓練ならば、そんなことをしなくてもいいはずなのだが。むしろそうされると俺が困る。

こっちは彼女達の行動の癖を読み取るために来たのだ。観察によつての治療の効率化を図る以上、彼女達の行動が見れなければ本末転倒ということだ。

奴の意図も未だ分からない。

そんな時だ。

画面はA R小隊へ。

《目標を発見しました!》

《そのまま進んで、相手に攻撃を仕掛け……》

ROの敵発見の合図。

そのまま相手に仕掛けようと思った矢先だ。

《!?危ない、背を遮蔽物に隠して!》

鳴り響く炸裂音。

AR-15が叫ぶと共に、全員が別々に壁へと背を付ける。

彼女が叫ぶ前に描いた直線の軌道は、偶然か否か……誰にも当たることは無かった。

されど、その一撃は彼女達を困惑させるには十分すぎるほどの1発だ。敵は確かに見えていた。

しかし、今撃たれたのは紛れもなく事実だ。

《嘘でしょ!?ハイエンド達はいさつきROが……!》

《落ち着けSOP!焦ればやられるぞ!》

その1発を区切り、銃弾の風が吹く。

彼女達よりも早い連射。

鉛玉の風は、彼女達を封じ込める。

反撃の隙は見えない。

唐突の奇襲からの混乱。

銃弾の風の向こう側には……

《……外した……! どうして、私は完璧なのに……!》

《落ち込むのは後——416のおかげであたい達が動けるんだから今はそういうこと言わないの!》

《G11、後ろは大丈夫?》

《うん、大丈夫。あとは3人がある程度まで貼り付けといてくれればルート確保するか

ら》

《お喋りも後にして、油断したら手痛い反撃がくるわよ》

なりを潜めていた404小隊のお出ました。

やはり裏の部隊と言うだけある。

奇襲を真つ先に仕掛けたのは彼女達だった。

しかし、どこか引つかかる。

彼女達は、AR小隊の相手として伝えられていただろうか？

「……どういう事だ、クラウス。アイツらの相手に404小隊は伝えられていなかった筈だが」

「わざとだよ。そうでもしないと、不測の出来事なんて起こせないからね」

答えはNOだ。

彼女たちが伝えられていたのは、鉄血ハイエンドが相手ということだけだ。……つま

りは、404小隊に関しては何も伝えられていない。敵になると伝えられていなければ、味方になるとも伝えられていない。

なるほど。

お前の意地悪とはこういう事だったか。

“不測の出来事”を引き起こす為に、わざと最初から情報の一部だけを伝えなかったというわけだ。

《ごめん、弾切れしちゃった!》

《おっけー、あたいが変わるよ!》

《9、私と40が1マガジン撃ち切ったら陽動に出るから準備して!》

UMP三姉妹のコンビネーション。

連射力の高い彼女たちが礫にしていた張本人だったようだ。2人が弾幕を張り、1人が撃ち切ったら控えのもう1人に。

そうすることによって安定して制圧を狙ったのだろう。

《こっちは潜伏完了したよ……眠いから寝てもいい?》

《今寝たらストックで叩くわよ。……早くこのナマケモノに餌を上げてやって》

最初に全員を認識させず、A Rの2人が別の場所で潜伏している。意図的に相手をおびき出し、的確に仕留めていく算段ということだろうか。

ここで1つ指摘するならば、A R 2人が襲われた場合が1番面倒になるだろう。A Rは火力、射速共に優秀ではあるが……防面や耐久性がある訳では無い。

攻撃を引き付け、回避出来るS M Gが居ない以上はリスクな行動となるだろう。

当の2人はコントのようなやり取りをしているが。

4 1 6もG 1 1も、A Rの人形の中でトップクラスの实力を持つ。そんな彼女たちに奇襲を仕掛けられたとなったら、まず被害は免れない。今回は幸運だったのだろう。

特に、今回は1発でも命中した時点でアウト。

あの1発が命中していれば、A R小隊は更なる混乱に陥っていたかもしれない。相手を揺さぶるには最適の一撃だ。

《敵の弾幕で下手に身を出せません！》

《どうすればいいの！このままじゃ私たち追い詰められちゃうよ！》

SOPの指摘は的を得ていないと思った。

傍観者側からすると、牽制をされているだけだ。

それだけでは追い詰めるには至らない。

しかし、その発言が意外にも的を得ていると知るのはすぐだった。

《……！まずい、聞こえづらいが確かに別の誰かが近づいてきているぞ！》

《この状況で……!?今退避できる場所は……！》

牽制されているこの状況の中、他の敵がきたとなれば逃げ場が無い。SOPの言った通り、本当に追い詰められている状況だ。

さらに言えば、今メンバーは2つに分断されている。

通路を跨いでM4とAR15、ROとSOPとM16という風に別れている。ここで問題になるのは、M4側には攻撃を捌ける人物がいない。

別々に逃げたとして、そちらを攻撃されてしまえば間違いなく2人ともやられてしま

うだろう。

この状態ではどう動いていいのか……

そう思考を張り巡らせていたのだが。

銃弾の嵐の中、その流れに逆らう一本線。

《うわっ、こっちに弾が飛んできた!?!》

牽制射撃を行っていた40が間一髪で銃弾を避けた。

もちろん通りすぎた軌道も少しは見える。

だが、あまりにも突然だったのだ。

《AR小隊は私たちが釘付けにしてたはず……遮蔽物からも顔を出していない……どこから飛んできたというの?》

A R小隊が顔を出した所も、銃身を出したところでさえ見ていない。そんな状態で銃弾が飛んでくるといふことは、何処かに1人忍ばせているのだろうか？

様々な戦場をくぐりぬけてきた彼女ならば、そう思うだろう。相手は隠れているうちに何をしているかは分からない。

ならば、気付かれないうちに回り込まれていたり、近づかれたりしていてもおかしくない。

そんな仮説を立て、45がさらなる指示を飛ばそうとした時だ。

《45姉！そこに何か浮いてる！》

《……ッ！》

9の叫びでなんとか反応出来た45。

そこには確かに浮遊する物体が1つ。

それは殺傷能力のあるプレゼントを渡すには十分な配達屋だ。こんなものを飛ばせるものなど一人しかいない。

《416、G11! 作戦変更よ! 陽動は中止! 想定外の敵から攻撃を受けてるから援護して!》

《ええ……? 予想外なの……? 絶対危ないじゃん……》

《つべこべ言わないG11! 今動かなかつたら私達が余計面倒になるからさっさと援護に行くわよ!》

素早い対応だ。流石は404小隊の長という所か。

こちらも想定外と言っているあたり、伝えられていなかったのだろう。段々と法則が見えてきた。

45が9と40に指示を飛ばそうと向きを変えるその時。

《よそ見は禁物ですわ》

《やっぱりか、狡いことをするわね!》

聞き覚えのある言葉遣い。

やはり、予想は容易だったか。

当たり前ながら、ビットの持ち主はスケアクロウだ。

もう片方のビットを用いて指示の暇を与えないように上手く立ち回らせる。

狡いとは心外ですわ、と軽口で返すスケアクロウ。

実際俺もズルいと思う。だって遠隔操作とか強いじゃないか。しかし、スケアクロウ本人の戦闘能力は皆無に等しい。ビットを撃ち落とされてしまえば、彼女は無力化されてしまう。

それ故に、扱いや立ち回りは普通の戦術人形以上に考えなければならぬところだろう。

さらにそれを守るように現れたのは……

《残念ですが、貴女達の相手は私です》

ハイエンド達の長、代理人。

この混沌の中、動じることなく歩みを進める。

ニヤリと口を歪ませ、確かな敵意を剥き出しにする。

《……鉄血ハイエンド？なぜ私たちではなく404小隊を攻撃しているの……？》

AR—15の疑問は彼女たちからしたら最もだ。

相手は鉄血ハイエンドと伝えられたのに、彼女たちが攻撃しているのは404小隊だ。

彼女達からしたら、不思議極まりない。

しかし……

《……これはチャンスだな。相手が404小隊に気を取られてるなら、私たちの方から奴らを叩ける》

《この状況から脱し、優位に立つチャンスは今しかありませんね》

危機的状況不測の事態。

しかし、向こうにとつても同じことが起こった。

向こうも混乱しているなら、今が立て直す絶好のタイミングだ。

《やっっちゃおう、M4お姉ちゃん！》

《ええ、皆……改めて鉄血ハイエンドたちへと攻撃を仕掛けます！404小隊も攻撃対象に指定、指揮官の言葉通り……》 チームメイト以外は全て敵”よ！”

改めて体制を立て直すAR小隊。

再び、今度は2部隊を相手と改めて認識し戦場に赴く。

ここまで来たら、今度はAR小隊のターンだろうか……

「……なるほど？ わざわざお前は三すくみになるように相手を伝えることによつて、全員を混乱させる算段だったつて訳か」

「そういうこと。404小隊は慣れっこみたいだし、あまり効果はなかったかもしれないが……まあ、柔軟性を鍛える為つてことで」

なんとも取つてつけたかのような言い分だ。

どちらにせよ、今回の奴の狙いは分かつた。

あの奇襲で一氣に戦場が展開し始めた。

正々堂々と実力勝負を挑むAR小隊か。

知略を張り巡らせて裏より挑む404小隊か。

個々を繋ぎ合わせて押し潰すハイエンドか。

勝者は、未だ予想がつかない。

されど、既に戦いの火蓋は切つて落とされた。

さあ、争乱の始まりだ。

状況訓練 I I I : 三つ巴相打つ

A R 小隊の潜伏から数分。

4 0 4 小隊と鉄血ハイエンド達の交戦。

状況は 4 0 4 小隊が優位。

何故かと聞かれれば、答えは 1 つ。

こちらはメンバー全員に対し、向こうは 1 部のメンバーが居ない。その状況では、人数的な優位を撮っているのは明らかだ。しかし相手も絶妙。

自分たちの反撃を軽くないす、されど攻撃の手は緩慢だ。

《ちよつとこのままだと罫が明かないし、そーつと本体を……》

一步進んで一步下がる戦況にしびれを切らしたからか、少し合図を 4 5 に出して密かにスケアクロウの位置を特定しようと動く 4 0。

9 にこの場を任せ離れようと歩き始めるが……

《おおっと、何処へ行くつもりだ？》

《ヤバっ、勘弁してよー！》

口では軽く言いながらも、その指は引き金を引く。

幾つもの軌道が目の前の人形へと向かうが、その巨大な腕に握られた刃によって弾かれてしまう。

《冗談きついなあ……：……よりもよって処刑人と出会うなんて》

《ははっ、そりやあ悪かった。だが、下手に単独行動に乗り出すのは感心しねえな？》

処刑人。1対1において、最強の強さを誇るハイエンド。

よりもよって離れた時に限って鉢合ってしまった。

その巨大な刃と拳銃による攻撃は1人では捌ききれない。

もしも捌ききれたとしても、彼女に攻撃は通せない。

これじゃあ勝ち目ないんだけどなあと呟く40。

《いやあ……こういう時つてあれに限るよね》

《はあ?》

能天気な彼女の発言に訝しみを覚える処刑人。
その次の瞬間だ。

《につげろー!勝てない勝負は捨てるに限るもんねー!》

全力で逃亡に走る40。

軽口が抜けないということはまだまだ余裕ということだろうか。追撃を軽々避けながら走り抜けようとするが……

《上手く掛かってくれたな、小さな兎さん?》

《嘘つ、あたいの逃げ道バレてる!》

逃げた先にはハンター。

まんまと手のひらで踊らされていた。

両手に握られた拳銃からも放たれる銃弾。
とにかく逃げまくるしかない。

まるで○トリックスの様子に銃弾を避けながら、何とか包囲を躲そうと動き続ける。
しかし、着々と追い詰められていく。

されど、一筋縄ではやられない。

擬似銃弾が空気を切り裂いた。

ハンターはその切り裂かれた風を確かに受けた。

振り向けば、失態を取り戻そうとする1人。

《誘い込みが出来るのは貴女たちだけと思わない事ね……!》

《面倒なのは早めに対処するに限るよ……》

《つ、いつの間に……!》

遠距離からの的確に狙った射撃。

416が先程よりもより正確に狙いをつけ、確かに彼女に向けて引き金を引いた。ハンターも咄嗟に避けようとするが、G11固有の技能によって放たれる数多の銃弾を避

けることはほぼ無理に等しい。狩人が、見事に誘い込まれた。さすがに1人退場か。そう思った瞬間だ。

《悪いが、イレギュラーとは常に連続するものだぞ?》

《やはり見えないと思つたら……!》

アルケミストだ。彼女は両手に持った獲物で銃弾を全て捌ききつた。化け物じみている。しかし、それを可能にするのが彼女の実力だ。故に化け物と呼べるのだろう。

不敵な笑みを浮かべながら、2人に急接近する。

416とG11はリロード中。

この状態では……

だが、この戦場は予想外しか起こらない。

《そうはさせません!》

この戦場ではまだ聞きなれない声。

鉄血にとつても、404小隊にとつても予想外の攻撃。

発砲音と硝煙の匂いが更に強まる。

接近したアルケミストに迫ったのは、AR小隊唯一のSMG……コルト9mmサブマシンガン、RO635。

アサルトライフルに酷似したそれからは、確かに早く鋭い銃弾が何発も放たれた。

鉛と鉄が衝突する音。

散らばる火花。

《おいおい、AR小隊が居るなんて聞いてない……ぞッ!》

並外れた身体能力でも避けられるかわからなかった攻撃。脅威の身体能力を持ってはどうにか掠める直前程度まで抑えられたようだ。しかし、そこには確かな動揺が見え隠れする。

《私達も、今貴女方が相手をしている404小隊がいるとは知りませんでしたよ……不測の事態を指揮官が作り上げたようですが》

《へえ……なるほど。つまり撃ってきたあんた達も今は敵ってことだな!》

そんな会話の中、リロードを終えた2人が狙っていたことは既に見えていたのだろうか。右手に構えた銃で2人を、左手に構えた銃でR Oを捉え器用に攻撃を重ねていく。しかし、それは本来出せる力を2等分してそれぞれに充てているとも考えられる。そんな弾には当たらないとダイナミックな動きで回避するR O。その後ろには……

《陽動の時間は終わりです、次へ行くので任せましたよ!》

《はいはい、ありがとうR O。さて……サプライズプレゼントだ、感謝して受け取れ!》

楽しそうに銃を構える。

軽いノリの言葉を発しながらも、その銃口は確かにアルケミストに向いている。

片方だけの瞳が、同じ隻眼を捉えた。

《M16……!どうしてこうも厄介な相手がそろそろ……!》

《ヒーローってのは、遅れて登場するものだろうか?》

ケラケラと笑いながら、冗談を言っただけ。

本当の主役というのは、狡いことに途中から現れては見せ場を奪って行く。

その狡さこそが、主役たり得る力なのかもしれない。

されど、それまで場を盛り上げていたものからしたらたまたまったものでは無い。この面倒な事態に、アルケミストも余裕を失いつつある。

《ほら、お前の大好きな戦いだ。楽しまなきや損だぞ?》

《本当に変わらない軽い口だな、M16。確かに楽しむのもそうだけど、そこで周りが見えなくなるほど私も馬鹿じゃないんでね》

双方のリロード。

お互いに銃弾を撃ち切り、仕切り直しといった所だろうか。

咄嗟に身を隠し、安全に弾倉を変える。

アルケミストも同じく……少し引き、器用な手ですぐ様装填してみせた。改めて一騎打ち……そう思っただが。

《この好機を逃すなんて有り得ないわ、ちょうどよくその奴も撃てそうなんだから

……!》

もう一つの照準がアルケミストへと向けられる。今度こそは外すまいと意気込む。自分は完璧だと言いつけ、神経を集中させる。因縁の相手に対して、確かに自分が優れているとしらしめる為に。

《……へえ。なるほど……ここまで都合なのもそうそうないな……！》

その真反対、建て直したM16も同じくアルケミストに銃口を向ける。隠された片目が、確かな殺気を溢れさせる。ニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、引き金に指を伸ばす。

くたばれ！

一斉に双方向から放たれる弾丸。
その中心点にいるのはアルケミスだが……

《(なんだ……? 確かに私を狙ってはいるが……)》

あっさり回避するアルケミス。

しかし、この2人が狙っていたのはそこではない。

彼女が避けることを最初から想定していた。

彼女達がアルケミスの中継点にして狙っていたのは……

《うっ……!!》

《ちっ……!!》

その直線上にいる己の宿敵に向けてだった。

上手くアルケミスに注意を向けることによって、もう片方の戦力を的確に削ろうと企てた作戦だ。

すれ違う双方向の力。

一部は衝突し、その方向を変えては跳ね返り。

一部はぶつかること無くそのままお互いの相手の元へとたどり着く。その銃弾に当たるまいと互いに回避行動を取るが……

互いに銃弾が1発だけ命中する。

M16は肩に、416は足に。

この時点で、この2人はアウトだ。

しかし、M16は未だ不敵な笑みを崩さない。

416は味方に何か合図をし、タダではやられんとそのまま外へと抜けていく。その顔はどこか、惜しみながらもしてやったり、と言った顔だった。

それにしても、この2人は特定の獲物になると周りが見えなくなるらしい。集中しているといえば聞こえはいいが、外部からの攻撃を受けては負傷しかねない。その当たりは不安要素だろう。

そんな分析をするが、まだ状況は終わらない。

《……呆気にとられてちゃ、すぐやられるよ》

静かに大人しく。

気だるげな銃手が引き金を引く。

つい先程蚊帳の外に回されたアルケミストに向けて。

無理やり外へ投げ出されたと言うのに、今度は無理やり引き込まれたということだ。

そんな緩急の激しいペース。

彼女は自分の調子に引き込み相手を蹂躪する。

アルケミストはついてこれるか……

《私だってハイエンドだ……簡単にやられると思うな！》

そこはエリート在意地か。

その急襲さえも、なんとか凌ぎきってみせるが……

《はい、今日は晴れ時々銃弾の日だから気をつけてー!》

そんな幼い声が響くと同時に無差別に飛び交う銃弾。

アルケミストを狙っているでもなく、G11に向けているでもなく。そのトリガーの行く末はどこでもない。

辺り一帯全部を壊さんとする勢いだ。

《うえ……SOPMOD……よく読めないから苦手なんだよね……逃げよう》

SOPMODの戦い方……いや、戦い方と呼べるかどうかすらも危うい。彼女は戦闘となると直感3割、命令追従3割、トリガーハッピー4割位だ。つまり、考えることは苦手で、常に本能のままに戦っているようなタイプだ。

有難いといえば有難いのだろうが、俺からしたら非常に危なっかしくて不安になる。そんなタイプのSOPMODは常に相手の行動の裏を搔くような彼女達にとって厄介

極まらない相手だ。

《取り敢えず撃てるところはどんどん撃てー！あはははー！》

特に、今の状況ではもう1人のアサルトライフル使いである416がM16と相討ちになってしまっている。そんな状況でメインの攻撃主であるG11が離脱してしまつては後が辛い。

そう言ったところまで瞬時に考えを巡らせ、彼女は引いた。どうせ自分が手を下さずとも、消耗したあの状態なら……飛び交う銃弾の中、遂に。

《っ！嘘だ、よく狙われていなかったのに……!?!》

あの広範囲の弾丸の雨を捌ききれぬわけが無い。

半ば、彼女は確信を得ていた。

アルケミストは確かに戦闘能力は非常に高く、特に機動性や反応力に置いては他の追随を許さないレベルだ。

されど、それは同時に消耗が激しいという事でもある。

自分の体力やキャパシティをよく理解することが、彼女の性能を活かす一番の近道ではないだろうか。

アルケミストはルールはルールだものなど呟き、名残惜しそうにその場を後にした。

しかし、今だ大人しくなった訳では無い。

もう片方はもう片方で、さらなる火花を散らしていた。

《あーもー、2対1とかずるいでしょ！あたいは1人なんだよ！》

《これは訓練だ、実戦じゃないだけまだマシと思うべきだろ？》

《処刑人、お喋りはいい！このチャンスを逃がすな！》

奇襲に行った40、処刑人とハンターの戦い。

40も流石の手練れと言ったところだ。

ハンターの銃弾を避けに避けまくって、処刑人しえもなんとか相手にしている。攻撃のタイミングが見つかりはしないが、なんとか残ることは出来ている。

《なかなかやるじゃねえか、なあ！》

《お褒め頂き光荣です、つてね！》

思い切り刃で薙ぎ払う処刑人。

しかし、その振られた刃を思い切りジャンプで踏みつけて空に舞う40。かなり楽しそうな声を上げながら、確かに相手の疲労を誘っている。されど……

《人数差までは、埋められないだろう！》

《そりやそうでしょ！あたいだって限界あるんだよ！》

仲のいい会話だ。

しかし、そこで繰り返されているのは一瞬の油断も許されないシビアな戦い。そんな中で余裕を持てるのは確かにありがたいが、同時に不安とも思える。

そして、こちらにも別のチームの影が現れ始める。

《皆聞こえる？戦闘中だろうから一方的に話すね……AR小隊もこつちに乱入してきたから、恐らくかなりめんどくさいよ……その警告だけ。今から改めて援護に向かうよ》
《りょーかい！ダツシユでお願いね！》

そんな通信が終わった直後……

《お楽しみに割り込むようだけど……私たちを忘れないで頂戴！》

正確に狙われた一撃。

命中を狙うのではなく、明確な隙を作り出すためにに撃ち込まれる。確かにそれは、目の前の獲物に夢中になっている処刑人の足元に散る。

《新手か！悪いハンター、あの鼠は任せた！》

《分かった、1対1で遅れを取るなよ！》

そう言って、今なお逃げ続ける40を追う処刑人。

ハンターが目をやるその先には……

《そうか。相手を弱らせ、確実に勝ちを掴みに行く……AR小隊で私と同じタイプの考えを持っているのは一人しかいなかったな》

……AR―15。その名前を口にした。

その名を口にするその声はどこか嬉しそうに。

同じ堅実な狩人同士の戦いに思いを馳せる。

《残念だけど私は狩人じゃない。ただの兵士です》

《よく考え動ける兵士など、ひと握りもないだろうに》

称賛と取れる言葉。それと同時に、二丁の拳銃が火を噴く。

もちろん、直接仕留めては面白くない。

しつかりと考え突き詰め、確実な勝利を収める。

それこそがハンターの戦いだ。

《獲物は逃がさない……!》

だが、安易にそれに乗らないのが彼女だ。

《牽制射撃というのが見て取れるわ……その程度の脅しに引つかかると思わないで》

言葉を発しながら撃ち続けるAR—15。

少し狙いが恐怖でブレていることを隠すように。

その様子を、目ざとく見るハンター。

これはチャンスだ。

そう確信して追い込みに行くが……

《私たち戦術人形は基本チームで動く……それを忘れたのですか？ハンターさん》

《……そうか、混戦で私もどうやら混乱してしまったようだな……狩人として、まだまだということか……》

後ろに立つのはA R小隊のリーダー、M 4 A 1。

その銃口は確かに頭部に向けられており、戦術人形の持ち合わせるスペックでは動こうとした瞬間に撃たれるだろう。

これが後ろのM 4だけならば、ハンターは容易く返り討ちに出来るだろう。しかし、今は2対1だ。

いっどこから、どの敵が現れるかわからない。

今回は運悪く同じ敵チームを引いてしまった。

下手に抵抗しても意味が無いと悟ったか、両手を上げ降参の合図。

《今回は少し運が悪かったわね》

《全くだ、これが先程逃げたG 1でもあれば変わったかもしれないがな》

少し悔しげに笑うハンター。

余談だが、疑似銃弾でも当たると結構痛い。

そんなことを知っていたA R 15は取り敢えず痛くないようにちゃんと防御されたところに1発だけ撃ちハンターを討ち取った。当のハンターはそんな止めに少し苦

笑いだった。

《ねえー！なんでそんなにしつこいのー？》

《お前が早く捕まってくれば終わるんだがな、そういう訳にも行かないんだろ！》

ハンターが討ち取られた現場にたどり着くのは、それこそ猫と鼠の様相。未だちよこまかと逃げながらも反撃を続ける40と1対1の状況を掴もうとする処刑人だ。

未だにいたちごっこをしていたらしい。

《もう1人も仕留めるチャンスね》

《AR—15、連携を崩さないで》

起動した当初から一緒の2人。

阿吽の呼吸というのだろうか、シンクロしているかのような連携を見ることがも多々

あつた。

今回もそれを見られるだろうか。

そんな期待が高まる。

確かな希望の一手を掴むため、2人はまた別の獲物を狙い始める。

「……交戦が始まってから、というもののかなりの波乱だな」

「そりゃあそうだ。だってそうなるようにしたんだから」

何ら悪びれない指揮官。

後でクレーム付けられても知らないからな。

しかし、こうして改めて見ると彼女達の能力の高さが実際に感じ取れる。エリートと
いう事もあり、確かに実力があるという事は理解している。

しかし、共に行動する時は余裕が無い時だ。

こうして冷静かつ客観的に見ることなど、これが初めてではないだろうか？

「A R 小隊は M 1 6 を、4 0 4 小隊は 4 1 6 を……鉄血ハイエンドはアルケミストとハ
ンターを失った。今人数で見れば鉄血は明らかに不利だね」

「各々の役割を重視している分、融通の聞かない面もあるんだろうな……道理で鉄血の
技術者達が I . O . P . に勝てないと嘆くわけだ」

正直な所を言うと、鉄血寄りの俺からはなんとも言えない思いだ。確かに個人個人の
性能は確実に炊けているはずなのだが、柔軟性が低いと言う点においては難しいところ
だ。

「でも、やらせた目的は達成したね。いい連携だと思つたよ、あれは」

「まだ終わってないだろうに。残りは 1 5 分程度だ……どんでん返しなんていくらでも
起きる。実力のある者なら、尚更な」

俺が個人的に応援するならば、やはり鉄血のハイエンドたちに勝つて欲しいという思
いはある。かと言って A R 小隊と 4 0 4 小隊に負けて欲しいという訳では無い。

自分的には……

場面は変わり、UMP姉妹へと視点が向けられる。

《ねえ45姉！ついさつきから40姉の姿が見えないんだけど！》

《平気！私の姉なんだから生き残れるわよ！》

代理人の下部アームに取り付けられた武器から次々と放たれる銃弾と、スケアクロウのビットによる猛攻をなんとか耐えながら応戦する2人。本当ならG11か416の手助けが欲しいところだろう。

《処刑人は……未だ追いかけてこの途中ですか？》

《40さんが予想以上に耐えているようです、仕方ありませんね》

逆を言えば、こちらもちちらで2人も戦力を失っている。

そんな状態で完全に追い込めるかと言われれば、出来ないことは無いが難しくはなるだろう。

この状態は一見して有利に見えるが……

スケアクロウは至近距離まで接近されてしまえば為す術が無くやられてしまうだろう。敵は今見えている2人だけではないのだから。彼女達としても、援軍が欲しいだろう。

《……聞こえる？G11！今何処！》

《近くだけど……トリガーハッピーが居て下手に動けない……》

G11は未だに猛犬に目をつけられていたようだ。

炙り出し、という意味では有効な手かもしれないが……

弾薬の無駄遣いもそうだが、リロード時が怖い戦法だ。

その時のためにROがついているのだろうか……

どちらにせよ、G11も2対1の状況では下手に動けないだろう。

《当初の作戦がめっちゃくちゃだよ……》

《そんな事でやられてたら、私達は今頃スクラップになつてるでしょ？だからまだ何とかなる！》

そんな風に言つて見せるが、余裕が無いのもまた事実。

お世辞にも拮抗しているとは言えない。

《防戦一方で状況は打破できません……このままでは、私達の勝利という事になるわ》
《まだ奥の手を残しているのなら、早く出した方が良いでしょう》

妙に余裕そうな素振りの2人。

実際にその通りだ。

前面には代理人の弾幕が貼られている。

しかし、一定の場所で籠つていては何れスケアクロウのビットに見つかり被弾してしまふだろう。

何でもいい。

この状況がひっくり返るようなことを祈るしかなかった。

途端、スケアクロウのビットが何かを感知した。

瞬時に処理を行い、察知した方向に向けて攻撃を飛ばす。

そこには確かに、相殺された弾丸の跡が。

《……代理人！》

《途中参加でメインイベントを盗りに来ましたか……AR小隊》

即座を目を向けると、そこに立っているのはRO635だった。たった1人、されども怖気付く様子もなく。

明らかに不利な状況に踏み入ったのにも関わらず、堂々と。

《最初からクライマックスでは、盛り上がりには欠けますから》

真面目そうに見えるROだが、かなりノリノリでかつこいいことを言っている。ヒーロー大好きな子だから仕方が無いのか……？澄ました顔をしたROはそのまま構え発砲し始める。

この好機を、今かと言わんばかりに掴みに行く者が。

《行くよ、9!》

《了解!まず狙うは……!》

2人が定めた先は、スケアクロウだ。

ビットを打ち落としさえしてしまえば、彼女は無防備。それを狙い、まずは邪魔なビットを標的とした。

しかし、その思惑は読まれていたようだ。

スケアクロウは今の一瞬の中で判断を下し、ビットを一時的に引かせる動きを取ったのだ。

今こちらの手札を更に減らされては、打つ手が無くなる。

今は雌伏の時だと身を引いた。

《代理人、今は身を隠しましょう。今はまだAR小隊のメンバーが1人。404小隊は優先的に向こうを狙うはずですわ》

《それに対応するためにAR小隊もこちらの追跡を中止するでしょう。その作戦が現時

点では最善ですね……処刑人、聞こえていますか?》

作戦立案を無線を通しながら行う。

もちろん、それは今離れているものにも通じる訳で。

《聞こえたよ。今追っかけてるやつもそろそろ追い詰められそうだ、そっちが終わった
らまた急襲を仕掛けるから待ってろ》

時間は刻一刻と過ぎていく。

残された時限が迫るこの勝負。

まだ、波乱の嵐は過ぎ去らないようだ……

勝負を掴むはしぶとく生き残る404か。

不利な形勢から這い上がる鉄血か。

それとも……遅れて登場した主役、AR小隊か。

それが見えるのは、硝煙の晴れた先だろう。

状況訓練Ⅴ：混迷の雑音

「三陣営総員が1つの戦場に集まりつつあるな……」

「1人でも離脱者が出ると焦りが出てくる。そういう物さ」

今この戦場を客観的に見ている者は多い。

その中で、その事に気づけるものは少ないだろう。

彼が言うには、チームの1人でも欠ければ焦りが出るとの事。基本的にチームというのは、誰も欠けずにある状態が完璧だと言う。それは当たり前だ。

完璧な状態を想定して作戦は形作られる。

その作戦通りに動こうとして一部が崩れてしまえば、そのあとの対処が難しくなっていく。

下手に継続をしようものなら、完全にチームが壊滅する可能性だってある。しかし、作戦に失敗は許されない。

故に不安要素が積み重なり、焦りとなって現れるのだと。

「少しでも痛手を受けたところを補修しよう」と合流に向かうだろうから、結果として中央の総力戦になる。……逆に言えば、この状態を逆手に取ることが出来たのなら、上手くやれるかもしれないな」

最初のうちは室内ということもあり、奇襲や潜伏などがメインとなつて行動していたように見える。

しかし、戦闘が始まればそれぞれのカバーや応戦などでなかなか作戦通りに行かないということがある。

特に今回など、皆が想定していない相手からの攻撃を受けているという状況なのだから。

「……実戦ではこれ程酷い情報の錯綜はないと思いたいんだが」

「いいや？ 戦場では何が起きるか分からない。下手をすれば……仲間の裏切りだってね」

その一言に、鋭い視線を向ける。

向けられた指揮官は、何とも思っていない。

それはそうだ。何一つ間違ったことは言っていない。

俺がそんな事起きるわけないと馬鹿のように信じているだけだ。

「でもまあ……」

彼女らは、そんなことをしないと信じているよ。

そんな声が聞こえた。

そうだった。彼は指揮官なのだ。

時に、冷徹に振る舞わなければいけない時もある。

信じたくないことを信じざるを得ない時だつてある。

それが、戦場を指揮する者だったと。

だからこそ、真面目に考えた意地悪をする訳だ。

「……野暮なことを言ったな」

「良いんだよ、そう思うのは当たり前前だ」

人権団体との戦いは、そう遠くない未来だろう。

そんな中で彼女達を生かすためには、多少なりとも冷徹になる覚悟が必要だった。このような事を想像させなければ、彼女達がいざと言う時に死んでしまつては……きつと後悔さえもできない。そんな思いが、アレの胸の中にあるのだろう。

画面に戻ろうか、という一言で再び映像に目を向ける。

擬似戦はもう終盤。被害こそ少ないが……

一箇所に戦力が集中するこの時が、このルール上1番脱落者が出る。しかし、1点のみに集中しては同じ轍を踏むと彼女たちも知っている筈だ。その裏の掻き合い……果たして天秤はどちらに傾くだろうか？

……今思えば、この訓練の目的は人権団体との戦闘において被害を出さないための訓練だ。

そのために想定外の事態への対応に関する部分を改善する、という目的だったはずが今となつては普通の撃ち合い……

「……おい、この訓練の目的……だんだん逸れてきてないか？」

「……大丈夫、大丈夫。ボクの思惑通りだから、多分」

白々しい誤魔化し方にため息を付く。

お前が“僕”なんて言う時はふざけてる時だけだろうが。

このバカはしっかりと考えているのかふざけているのか判断に困る。今だけはアークテクトに付いて回るゲーマーの気持ちかわかる気がした。

流石にあそこまで酷くはないと思うが……

「まあもしそうだったとしても、常日頃から戦闘時の動きを実践で復習しておくことはいい事だからね」

《逃げ足が早くて上手く追撃できない……!》

《ビットも上手いこと扱ってるから弾が当たらないよ……これじゃあ取り逃がしちゃいそう!》

2人は苦戦していた。

狙う目標は定まってはいる。

しかし、そこを上手く撃墜できない。

的は小さく、更にはちよこまかと動く。

狙いを定めたとして、上手く当たる相手ではない。

彼女の処理スピードも早く操作も正確だ。

さらに頭を悩ませる要因が……

《逃げても無駄です!》

《大人しく私たちと戦った方がいいんじゃない?》

後ろからは2人の追手。

RO635とSOPMOD I Iだ。

弱ったハイエンド達を狙う404小隊に標的を定めて追跡に來ている様子。今2人は退路を塞がれている以上、追いつけてスケアクロウを撃破しなければ後ろの2人に撃たれるだろう。

逆ならばどうか、という話だが……

もしもAR小隊の相手をすれば、ハイエンド達は確実に潜伏するだろう。人数的な差もある以上、自ら出てくる事がなくなる。そうなれば、AR小隊との戦闘で少しでも被害が出れば鉄血たちが逃げ切ってしまう。

UMP姉妹の置かれた状況は、まさに最悪だ。

《……獲物に気を取られすぎたかも。私としたことが……!》

《後ろからも來てるし、まずはスケアクロウを倒さなきゃ……!》

予断を許さない状況。

1つでも間違えてしまえば、こちらはやられる。

最初に優位を取ったのが嘘のようだ。

アレの言った通りだ。

焦りが目に見えるようになってきている。

このまま、最善の選択をできるのか。

45は常にそういう状況で切り抜けてきたはずだ。

そこに關しては、心配はないのだろうか……

判断力が確かに鈍ってきていてもいるだろう。

絶体絶命の危機。

そう思っていた。

しかし、あのAR小隊が言うように。

ヒーローとは……

《!?後ろから撃たれている?》

《わわわ、嘘でしょ!あっちの方はM4とAR——15が見てたんじゃ……!?》

《隊長の姉たるもの、常に切り札でいないといけないもんね!》

「……遅れてやってくるものだ。」

追っ手のさらに裏にいる人物、UMP40。

彼女が、処刑人の追跡を躲して救援に来たのだ。

画面を見ていた俺は、完全に呆気にとられていた。

あの状況から、良くもまあなんとか抜け出せたものだ。

「……別のカメラには映ってたけど、処刑人は2人の退却とともにUMP40の追跡を止めたわ。逆に40はそこで下手に追撃をせず、妹たちの救援に向かったって訳ね」

それを見かねたWA2000が、俺にその状況を説明してくれた。40は処刑人が逃

げる所を追撃しても良かった。

しかし、それを行ったら確実に今狙われている2人が更に不利になる。連携が大切となる室内戦で、仲間を失うのは不味い。それ以上に妹に手を出させまいという使命感が彼女を動かしたのだろう。結果として、彼女がROとSOPの裏を搔けたという訳か。

「いい判断だった。元から相手に対して奇襲を仕掛けようとしたのも良かったが、こんなところで上手く作用するなんてね……さらに言えば、AR小隊のターゲットの優先度を理解していたからかもしれない」

しかし大前提として、40が一旦奇襲のために離れていたという状況があった。下手をすれば不利な状況ではあったが、前々の選択がここに響いて来たようだ。

彼女はそれだけでなく、45から事前に通信でとあることを言われていた。俺達が別の場面を見ている際に、簡単に推測した行動パターンを彼女に伝えていた。

AR小隊は定められた任務に忠実であり、404小隊ほどの柔軟さを持ち合わせているとは言えなかった。

そこで予想された行動パターンが、鉄血ハイエンド達を優先的に狙う……という予想

だった。

それは見事に的中し、40が抜け出せたということだろう。またもやひっくり返る盤面。

エースの戦いとは、こうも目まぐるしいものなのだろうか。

《相手は1人、ですが向こうの2人が振り向いたら……》

《逆にピンチになっちゃった……！》

一転攻勢。

ROとSOPはいきなり劣勢に立たされてしまった。

M4達の判断は、命令からすれば悪くなかった。

しかし、現場から見れば結果として悪い方向へと向かっている。この状況をどう切り抜けるか。

考えるよりも先に、行動しなくては。

《M4、ARR-15!聞こえてたらすぐー援に来て!敵に挟まれーっつた!》
《相手は3人、場所的にも逃げ場がーません!》

通信機に向ける切羽詰まった声色。

それを聞いていた2人からの返事がない。

それどころか、少し回線が悪くなっている。

聞こえる声にノイズが走り、どうにも聞こえづらい。

そう、それはこちらにも言えることだ。

もしかしたら、交戦中なのかも……

そんな風に思い、不安を募らせるSOP。

最悪の場合、2人のみでこの状況を切り抜けなければならない。

《……SOP、追跡は止めーよう》

《ええ!?なんでーれじゃあ2人を逃がしちゃうし、下手したら挟まれてやらーやう

よ!》

本当に最後の手段ならば、SOPMODは助けられるかもしれないとROは考えている事だろう。

実戦でやろうものなら、説教物だが。

しかし、意外にもROの答えは違った。

《彼女たちが必死になって向こうのチームを追いかけているのなら、それなりの理由があるはずよ。それなら、向こうは向こうで相打ちになることを願う。その間にこの予想外な追跡者を倒せば、それだけ相手は見えないところで不利益を被るはず!》

なるほど!と納得したように声を上げるSOP。

この推察は間違いではない。

現に2人が追跡をやめない理由は、ここで逃がせば相手は潜伏に徹する。これは実戦でも有り得ることで、逃がした残党が結局見つからずじまいになり、最終的に援軍を呼ばれてしまうなどといった事例もあるレベルだ。

さらに言えば彼女たちは暗部のようなものと同じ。

狙った獲物は逃がしてはならないというプライドがある。それも相まってこの状況

になっている。

そこまで考えられているのなら凄いな、と感心する。

《ここで彼女を倒せば、結果——て私たちが優位を——るはず!》

《後ろが不安——ど、やるしかない——!》

そう言つて追撃の足を止めた2人。

振り返り、迫りくる1人へと銃口を向ける。

《あれ……わわっ! そうなっちゃう?》

意外にもこの展開は彼女も予想していなかった。

確かによく思い返してみれば、自分も優先標的の1人だと呟く40。姉妹で頭は回
のに、どうもこういう所は弱いのか。

そこに少し呆れも混じりながら、もう少し見守る。

《しょうがないなあ……あたいがここでやられ——つたら——が危ないし、姉の威厳

……見せーうよ！》

llllSystem OverLord。

SMGを携える戦術人形特有の思考。

回避を中心に立ち回り、守りに徹すること。

その思考回路の中身全てを1度、0へと戻して。

《さあ、派手に撃ちまくるぞー！》

目の前の敵を殲滅するように、思考を再び修復する。

その大元は、守りではなく攻め立てへ。

枷から解放されたかのように、真の姿を現す。

にっと歪めた口は、明らかな狩人の様相で……

パン！

……甲高い音。

あまりにも不自然な炸裂音。

壁に開けられた1つの穴。

それは2人の方にも、40の方でもない。

丁度よく垂直になる様に軌道を描いたそれは、明らかに異質であることを物語る。

引き金に指は掛かっているが、引かれていない。

40は、確かに引き金を引こうとした。

だが、その前にそれは起きたのだ。

同時に反撃のチャンスでもあるが、相手の2人さえ硬直している。そう、可笑しい。

なぜなら……

《……実弾……!?!》

状況訓練V：異常

《……実弾……!?!?》

演習用弾は下手な破損をさせないように出来ている。

弾頭の材質、火薬の量。

ただ凹みができただけならば分かる。だが……

事細かに調整されたはずの弾薬で、コンクリートの壁を抉るような穴が空くわけが無い。ここに居る皆が使っているのは演習用弾。

「RO、SOPHIE、何かに隠れてっ！あたいら……」

グリフィン外部の奴から狙われている。

そう、狙われたのだ。

何者かに。

その声に反応するようにROがすぐSOPMOD2を抱えて遮蔽物に隠れる。急に抱っこされる形になったSOPは状況が分からないような感じになっていたが、それを気にしている余裕はない。

40がROにハンドサインを送ると同時に、こちらへと無線が飛ぶ。

《ごめん、聞ーてるなら誰でもいいからーして！あたいらは今何者かに狙われー！演習をー断しなきゃーい！》

勿論、指揮官もその状況を見ている。

直ぐにモニターから目を離し、観戦者として見ていた人形たちに直ぐ様出撃命令を出した。

ヘッドセットを取り、素早く対応する。

《こちらクララー、こつちも今リオーラーに状況を確認ーた！敵情報と被ー況は分かるか!》

《ごめんノイズがー！分かんない、今訓練上で鉢ーたROとSOPMOー、あたいはー！敵詳細はーだし、他の場ーも今通信を……》

あまりにもノイズが酷すぎる。

マトモに通信が聞き取れないようだ。

途切れ途切れに加え、大きな雑音。

あまりにも最悪な状況だ。

さらには……

「……!?!指揮官、モニターにもノイズがかかったわ!」

「完全なジャミングだ、皆離れないように!」

モニターに砂嵐が映る。

完全に訓練場所の状況確認手段が絶たれた。

あそこにはまだ訓練をしている者がいる。

さらに言えば、あの1箇所だけのみなら他のメンバーが銃撃を受けていることを知らないかもしれない。

少し軽い遊び程度の訓練をしようかと思ったら、あまりに切羽詰まった訓練へ早変わりするとは誰も思わないだろう。あまりにも最悪だ。

酷く視界が歪む。

とても息が苦しい。

恐怖が、絶望のような感情が。

黒い何かが、せりあがってくる。

頭で、ある光景がフラッシュバックする。

「あたいを、忘れないでね」

とても良くない状況。

想定していない奇襲だ。

今回の訓練の1番の目的ではあるが、それが本当に起きるとは誰も思わなかった。

指揮官である、自分でさえ。

……だが、それ以上に大変なことが起きた。

「……う？リオン？リオン！」

WA2000が呼びかける先には、もちろん名前の通りの人物がいる。だけれど……

その呼び掛けにも気が付かない。
何時もなら、すぐに対応する筈なのに。

「皆が……………！」

焦点の合わない瞳。

あまりに過剰とも取れる呼吸。

拳銃のグリップを握る手はあまりに震えている。

大きな声でWAが呼んでも、振り向きもしない。

明らかに様子が変だ。

それに……

「40……………が……………！」

特定の人形の名前を呟く。

彼は、たった1人だけ。

他に縁のある人形は沢山いるのに、ただ1人だけ。

その途端、異常な状態のまま現地へ向かおうとする。

震えた手のまま、金切り声を出しそうな様相のまま。

怯えているような、狂っているような。

何が引き金になったのか、分かりもしない。

だが……この状態で行かせてはまずい。

アイコンタクトで指示を出し、抑えるように命令する。

それを理解したかのように、WAは彼を止める。

「退け！ 邪魔をするな……！！」

「そんな状態でマトモに動けないでしょ?! 大人しくしなさい!」

相手は人形、性能を活かせば人間の力で引きはがせるわけもない。わざとそういう風に命令しているのだから。

彼が今のまま現地に赴き、通信が遮断されたまま撃ち殺されでもしたら、大変な事に

なる。

彼の技術だけでなく、彼の人格を好む人形たちだっている。現に、彼が友人になってくれて良かったという人形たちだっている。

下手な単独行動は二次被害を巻き起こす。

それが物理的であれ、精神的であれ。

俺は指揮官だ。だからこそ、冷徹な判断が必要だと分かって欲しい。彼には悪いが、今は大人しくしてもらおう。

少し手荒い方法かもしれないけれど。

「……WA2000。彼を少し寝かせてくれ」

「いいの!?!終わった後の治療はリオンがするんじゃないや……」

「今の彼には、時間が必要だ」

一刻も早く、再び正常な判断が出来るだけの落ち着きを取り戻してもらわなくてはならない。

この処断はリオンを信用していないからでは無い。

むしろ、信用しているからこそその処断だ。

今は頭を冷やしてもらわなくては。

その後は大変になるが。

「ふざけるな！お前は、アイツらを……！」

「助ける。君には後で治療という重要な役割があるんだ。それまでに君が死んでは意味が無いからね」

WA2000はそれを聞き届け、自分が渡したスタンガンを彼に当てる。勿論、威力は調整してあるが……

動きを止めるのには十分すぎる。

強い電撃を受けたリオンは声にならない悲鳴を上げる。

苦悶の音が響き続けるが、今はそれを気にしている場合ではない。言い分も分かる。やろうとしている事だつて。

でも、今は彼の出る幕ではない。

今は、自分に任せてくれ。

「……………つてえ……………」

身体中に駆け巡る痛みで、その身を起こす。

目を覚ましたら、いつもの自室……

という訳ではなかった。

病室の一角のベッドだろうか。

手は一応拘束されているらしい。

「……目は覚めたかな」

隣に座っているのはクラウス。

更には、関わりが有ったという訳か45が座っている。

……今から、実力行使の尋問でも受けるのかと言う状態だ。

扱いは完全に捕虜のソレだろう。

敵を見るかのような目で、指揮官へ向く。

「……拘束して、俺を拷問にでも掛けるつもりか？」

「そんな荒いことはしないよ。45もきつと望んでないしね」

君のついさっきの様子を見てこうさせてもらった。と指揮官は語る。話の話題に出
てきた45はそうね、と淡々とした返事。

しかし、その視線はずっと俺の方へと突き刺していた。

そうだ……、40は？

みんなはどうなった？

俺はそう焦る様に聞いた。

何かがあつたら、俺の責任だ。

食いつくように答えを急かす。

頼む、答えてくれ。

「焦らないで。私達はみんな無傷。M4A1とAR―15、それと処刑人がいち早く気づいていたみたい。ある程度の先手を打っていてもらったから助かったわ」

誰も怪我人はなし。

その言葉に安堵を覚えた。

もしも、何かがあつたとするならば。

マトモな状態で居られなかっただろう。

一時だけだが、安心した。

説明によれば、その3人が気づいた時にはもう既にジャミングが開始されていたらしく連絡が取れなかった。

その為状況を判断して訓練を中断した3人が裏で何とかやってくれていたという訳だ。

いざと言う時のチームワークは非常に頼りになる。

製造元も違うと言うのに、流石だと感心した。

だが、そんな気分にはひたつてもいられなかった。

「……次は私達からの質問よ」

「君には答えてもらわなくてはならない。君自身の為にも」

第一の質問にして、本題。

——何故、あの時に錯乱したのか。

何故、たった1人の名前を口にしたのか。

この場にいる誰もが最も聞きたい話の筈だ。

何も無ければ、ああなるはずが無い。

そんなもの、本人でさえ分かる話だ。

だが……

「……お前らには大して関係はない。だが詳しく伝えられない、伝えるべきじゃない」

平和であるこの世界線で、そんな話をするべきではない。

その内容は、この基地での疑心暗鬼を生み出しかねない……そんな内容を含んだ、最悪の話だ。

毅然とした態度で、そう答える。

思い起こされる記憶は、とても気が狂いそうなものだ。

「本当に私たちに不利益がないって言いきれれるの？ 私たちに関係がないと堂々と言えるの？」

疑いの目を向ける45。

無理もない。1番信用出来る40の名を、あの錯乱した状態で口にしていただけ

ら。何も無いわけがないと疑うのもわかる話だ。

ただでさえ心理戦にも強い彼女だ。

俺の誤魔化しなど、すぐに見抜く。

だが……それでも俺は答えない。

答えられない。

ただ静かに首を振る。

薄いポーカーフェイスで、何とか取り繕う。

「……別にその言葉を疑う気はないからいいけど」

妹の警戒心故だろうか。

何かあることだけは、きつと掴んでいる。

掴んでいないわけが無い。

それがはつたりのようには思えなかった。

その言い方も、何もかも。

俺の頭の中を見透かされているようだった。

わざとらしい咳払いをクラウスがした。

この重苦しい雰囲気を少しでも和らげようとしたのか、それともこのまま聞いていても埒が明かないから別の話題にしようとしているのか。

また別のことを口にし始めた。

「……今回の訓練としては無事終了。本当はもう少し軽い予定だったんだけど……こんなことになるとは思わなかった。暫くはまた、奴らの動向を見張っていないと行けないかもしれない」

今回の訓練の結果と、これからについて。

あの襲撃犯の身元は、恐らく前回制圧した人権団体の残党と思われるらしい。こちら側に被害はなし、万が一を考えた上で襲撃者は捕縛ではなく射殺。

持ち物から、例の対戦術人形用弾も確認されているらしい。

……どうも、この因縁は長く続きそうだ。

ただでさえ心理的に安定しない状態で来られるのは辛い。いや、むしろそれを知られ

ているのか？

考えれば考える程、余計に悪循環へと誘われる。

寝かされる前に言われたことは、非常に重要だろう。

俺が焦っては、余計な被害が出る。

逆を言えば、俺が焦りさえしなければ被害を受けてもリカバリーが出来るかもしれない。

そういつたことを踏まえると、何とか混乱していた頭が冷静さを取り戻してくる気がした。

それでも、体の強張りが抜けない。

乱れた呼吸が戻らない。

精神は落ち着いているのだろうか。

身体が言うことを聞かないのだけは確かだ。

「……その調子だと、まだ完全に復活するまでは行かなさそうね。警戒は強めにしてあげるから、暫くはまだ安心できると思うけれど」

そう言って、45は俺の手の拘束を外した。

身体的な不調はあれど、先程のような錯乱は起こさないと判断したのだろうか。けれど45の重い声は、未だに響く。

いいや、もしかしたら、俺がそう思っているだけなのかもしれない。それほど、負い目を感じているのだろうか。

「今日のところはここで休んでいて欲しい。明日また身体検査をするからさ」

そう言って大人しくしているように釘をさしてクラウスは医務室を後にした。

同じく、45が後を追って出ようとする時だった。

「きつと近いうちに話してもらおうことになるわ。……遅かれ早かれ、ね」

その言葉に、寒気を感じた。

それは優しさなのか、それとも脅しなのか。

それさえ理解するに至らなかった。

只今感じるのは、恐怖だけ。

……今日は、眠れなさそうだ。

クラウドスが部屋を出た後。

手元の端末に入っている情報を見ながら指揮官は呟く。
その中身に散りばめられた悪行の数々を見て……

「……人類人権団体。貴様らは、本当にそうなのか？」

彼らしくもない暗く、低い声が廊下に木霊する。

この基地は、正しく異常に巻き込まれそうになっているのだろうか。

心傷潜航0：悪夢 — night mare —

『45、40！無事か！無事だろうな!?!』

目の前には、力無く倒れた1人の人形。

それは確かに、彼女自身の手で撃ち抜かれている。

夥しい量の流血。生々しく写る風穴。

それは確かに、俺のかけがえのない友人であり……

それは確かに、彼女の唯一無二の姉だった。

そこに落とされた彼女の銃が、それを物語っている。

傍に崩れている妹の銃と瓜二つ。

おびただしく流れる人工の血液。

『……嘘だろ、40……待ってる、今治してやる……！なあ、おい頼む、返事をしてくれよ……！』

その日、俺は壊れた。

その日、俺は知ってしまった。

……真に、人形の死という物を。

心の奥底に付けられた深い傷。

未だ脳裏に焼き付く赤、赤、赤。

何時も馬鹿やって、笑いあつて。

時に激励し、共に戦った。

そんな俺達の支えであつた彼女が……

『うああああああああ……ッ!!』

自分の妹によって、撃ち殺された。

——あたいを、忘れないでね

「……………ツツ!!」

唐突に、意識が現実へと引き戻された。

周りを見渡せば、慣れた光景だ。

何時もの俺の部屋。

騒がしく、そして何時もの日常が広げられる。

そんな平和な場所だ。

まだ周りはとても暗い。

月光と、今にも切れそうな街灯だけが外を照らしている。

…酷い悪夢を見た。

最近、良く夢に出てくる。

どんな夢か。それを語ろうとは思えない。

額にも、頬にも、身体にも。

酷く冷たく感じられる汗が張り付く。

顔には、何かが流れた跡。

酷く不快だ。

あの時から、ずっとだ。

最近はやまりかけたと思っていたが、どうやらそんなことは無いらしい。一体、何時まで苦しめばいい？

そんな物を問うても、答えは同じだ。

……一生。

落とされた命は、再びその元へ帰ることなどありえない。

救えなかった命の代償は、一生背負い続けなければならない。恨まれようが、呪われようが。

それは自身の力不足故招いた結果だ。

自分の行動ゆえに招いた結果だ。

文句など言えない。

言って良いはずがない。

「大丈夫？随分と魘されてたみたいだけど」
「40……………!?!」

突然現れた人影に気が動転する。

すぐ側にある拳銃に手をかける。

震える手で周りへと銃口を向ける。

指は確かに引き金へ。

弾はしつかり込めているか？

そんなことを気にするほどの余裕などない。

敵は何処だ。

彼女に死ぬように命令したクソ野郎は。

きつとここにだつて居る。

居ないはずがない。

また誰かが、きつと彼女が死ぬように仕向けている。

そんなことになる前に殺してやる。

45も40も、絶対に……

「何処だ、出て来いよ……！ブツ殺してやる、今度は、今度はコイツらを死なせたりしない……！」

焦点の合わない目。

憔悴し切った声で叫ぶ。

鼓動と脈拍は加速していくだけ。

居る訳も無い、知るはずもない黒幕の幻が見える。

すぐにでも、あらゆる場所に銃弾を打ち込まなくては。

どこに潜んでいるかなど分からない。

絶対に……！

「リオン!?大丈夫、あたいは大丈夫だし狙われてもないから！」

肩に強い力を感じた。

落ち着いてという確かな声と、ゆさゆさと変に揺さぶられる感覚で意識が戻ってく

る。

酷い過呼吸だ。

とても苦しくて、息ができているかも怪しい。

腕は震え、肩で呼吸をしている。

それほど、錯乱していたのだろうか。

「よ、40……」

「落ち着いて、まずは呼吸を整えるよ」

そう言って背中に彼女の手が載せられる。

優しく摩られる事に少し情けないと思いつつも、漸く何とかまともな状態へと戻ってくる。

言葉さえ満足に発せなかった状態よりはマシになった。

落ち着いて横を見ると、非常に顔が近い。

40は、どうやら寝顔を観察していた様だ。

……俺が涙を流していたことも、見られていたのだろうか。急に恥ずかしくなつてく

る。

いつも頼りになる様に立ち振舞ってきているのに、こんな所を見られてしまうとは。情けない限りだ。

それもそうだが、なぜこんな時間に40がいるのだろうか……

「なんでお前がここに……」

「昨日の状態を聞いたからだよ。あたいが襲撃された所を見たら、あたいの名前を口にしなから壊れたように動いてたって指揮官から聞いた」

あの馬鹿。

下手に心配をかけさせるようなことを言うな。

確かに事実だったのかもしれない。

あんな所まで追い詰められるんだ。

どんな行動をしようとおかしくない。

だが、余計な情報の開示は混乱を招く。

それはアイツ自身が言った事だろうに。

「何か、辛いことでもあったの？」

「……いいや、何も無い。今はな」

心配そうな質問に、すぐに分かるような嘘で答えてしまう。その程度で取り繕うことしか出来なかった。

こんな頭の中で、出来上がった完璧な嘘など作れるわけが無い。嘘をつく理由は簡単だ。

彼女には、伝えるべきではないからだ。

明るく、それでいて優しい瞳。

そこには曇りなんてひとつもなくて、ただ澄み渡っている。昔にあったアイツとは、全く持って違う。

もちろん、辿った歴史が違うから彼女も確かに俺の知っているUMP40だということとは分かっている。

……彼女には、もう陰を見せたくない。

この世界線は、彼女が死ななくてよかった世界線だ。

それなのに……

あまりに恐ろしい凶兆に感じられた。

また再び酷い動悸が襲う。

目の前が歪む。

強い吐き気が喉まで出かかる。

激しい頭痛が走る。

嫌だ。そんなことを言わないでくれ。

怖い。お前がまた、そんな目にあってしまつたら。

一緒に笑いあつて、バカしたような中の友人の最期が、また脳裏に浮かんで……とて
もでは無いが、まともな状態ではいられない。気が狂いそうだ。

声にならない声が、辺りに響く。

その場から逃げてしまいそうなほどの恐怖。

収まりかけていた狂気が、また蠢き出す。

体の震えとして現れる。

「……!? 大丈夫!? と、とりあえず落ち着いて……あたかも大丈夫だから!」

40に何とか支えられて、再び一時の平穩を取り戻す。

あの襲撃から、あまりにも不安定すぎる。

歯車が1つ壊れたかのように。

今の俺は硝子より脆いのだろうか。

少し安定してきたかと思えば、すぐにヒビが入る。

どれだけ外面を鉄の仮面で覆おうと、変わりはない。

壊れかけのまま、動いているだけ。

「……悪い」

「大丈夫、分かってる。今は落ち着く時間が必要だよ」

幸い、あれ以降まだ襲撃は来ていない。

まだ落ち着くことは出来る。

まだ時間はある。

その間に、少しでも安定しないと。

自分でどうこう出来るものではないと知っているが、それでもやる他無い。

出来なければ、悪夢は繰り返すだけ。

「あたいはまだリオンの事を完全に知ってるわけじゃないから、どう言葉をかけていいか分かんないけど、不安なら言ってみて！」

元氣な励ましの言葉。

昔と変わらない言葉だ。

45に掛けていた言葉も、俺に掛けてくれる言葉も。

彼女らしい優しさの籠った言葉だ。

「今は大丈夫だ。だから心配しないでくれ」

「そっか……分かった。でも、何かあったら必ず言ってみてよ、必ずだからね！」

ここでも親交があつた事を嬉しく思いながらも、後悔もしている。この言葉で救われたと思うが、同時に苦しめられているとも思う。なんとも分からない奴だ、自分は。

40は言い残して、俺の部屋を出ていった。

それは全ての始まり。

俺の悪夢の根源。

誰にも見えないところに隠された、跡形も無い物。

俺のみが知る、心の奥底に刻まれた後悔の残滓。

決して癒える事のない、深い傷痕……

身を焦がすほどの恐怖と絶望。

今でも縛り付ける後悔と共に……

再び、奥底の記憶の鍵が開く。

悲劇を隠すことも、忘れることも……

決して赦される事ではないのだから。

これは俺の罪。

何も出来なかった、俺への罰。

……きつと、語らなければならぬだろう。
救えなかった記憶。

殺してしまったという恐怖。

殺させてしまったという罪悪。

その全てが、ここに投影される……。

心傷潜航 | Dive Hurt |

心傷潜航1：投影 — projection —

結局、あの後もあまり眠ることは出来なかつた。

あいつが安心させてくれたから幾分かはマシになつた。

だが、それ以上に傷跡は俺の奥底まで刻まれていた。

目を瞑る度にその光景が脳裏に過ぎる。

瞼の裏に焼き付いているのだ。

『あたいを、忘れないでね』

眠れずに、ずっと魘されている。

まるで牢獄の様だ。

後悔という鎖に繋がれて、恐怖という枷を付けられて。

日が昇った時、漸く外に出れると開放された気分だった。

鏡に移る自分を見た。

酷い限だ。ほとんど眠れていないせいだろうか。

寡れた顔。光の灯らない目。

……自分は、ここに来てからこんな表情をしただろうか。

「……情けねえ顔だ」

スケアクロウが襲撃された時でさえ、こんな顔をしなかった。俺はどこか大丈夫だと信じていたのだろうか。

彼女が撃たれた所を見た事が無かったからか。

今は1度死んだ者の亡霊を見ているからなのか。

思案すればするほど、深くへと沈んでいく感覚がした。

……部屋の外へ出よう。

もしかしたら、やらなければいけないことがあるかも知れない。

そうして、無理無理本調子でない体を動かす。

だが……

「あれ〜？リオン、もう体は大丈夫なの〜？」

指揮官にする時のような、猫撫で声で話しかけられた。

すぐそこにいるそれがだ。

分かっている。

きつと最初から居たのだろう。

だが、まだ心配は掛けさせたくない。

大丈夫だと軽く嘘をついてみた。

「……酷い顔ね」

「知ってるよ」

やっぱり、彼女は見抜いていた。

声の正体……UMP45の言葉に思わず肯定してしまう。

本当ならここは笑ってそんな事言わないでくれなんて言うかもしれないが、今の俺には冗談を言える気力も無いらしい。

それ以前に、嘘をついた事を肯定しているようなものだ。

やはり、彼女の目は誤魔化せない様だ。

「もう少し休んだら？そんな体じゃいつ倒れてもおかしくないわよ？」

「大丈夫だ。少ししたらまた調子だって直る」

少し苛立った声色が出てしまっただろうか。

ぶつきらばうに、わかっていると云わんばかりに。

大丈夫だと平然と嘘を付く。

この舌は、一体何枚有るのだろうか。

1枚くらい切り落とされても文句は言えない。

「いいから。まだ仕事だつて余裕あるでしょ？」

「俺にしか出来ないこともあるだろうが。気にするな……」

どうだろうが、これ以上足を引つ張るのは出来ない。

そう思った時だ……

いきなり、襟元を掴まれた。

人形の強い力で思い切り引つ張られる。

完全に今から喧嘩するのかわと言わんばかりの雰囲気だ。

今から殴られるのだろうか。

それとも、撃たれるのだろうか。

「ぶつ倒れられたら困るの。いいから大人しく休んで」

呆けることしか出来なかった。

彼女から出た言葉は、休めという一言だけ。分かった？と最後に念押し。

何も俺は答えられなかった。

確かに、今の状態が不安定な事は俺が1番分かっている。

だが、だからと言って俺が動かなければ……

そう思った故の行動だ。

だが、それは今の彼女からしたら足手まといらしい。

……無力さ。

それがとても強い。

酷く脆い自分に嘲笑することしかできない。

端末をポケットから取り出して、メッセージを送る。

『今日は休めと釘を刺された。済まないがもう少し大人しくしとかないと他のやつに殺されかねないみたいだ』

——送信完了。

今日はロクな仕事が出来なさそうだ。

普段から携帯していた錠剤を2粒、自らの口に放り込む。ここに来てからはこれを使わないでいいと思ったのだが。

どうも今日はこうしないといけないらしい。

無理無理飲み込んで、効果が出る前に戻る。

その場で倒れてしまつては大騒ぎだ。

自室のベッドに倒れ込み、強く訪れる睡魔に身を委ねた。

こんなもので治るのならとうに悪夢は終わっているのだが。

悪夢さえも見れない、深い眠りの中に……

「……下手に手を出す必要は無さそうね。良かった」

医務室内。

あたいた達UMP姉妹は、急な連絡を受けた。

医務室に来て欲しい。

ただそれだけの連絡。

作戦行動のことではないということを見せてもらった上で、そういう言葉を指揮官は発した。

一体何のことか、想像が付かないあたいたいじゃない。

昨夜、確かにそれを見たのだから。

今も尚、悪夢を見ているであろうあいつのこと。

それ以外に考えられるものはなかなか無かった。

普通の事なら、小隊全員が呼ばれるはず。

本来なら9は来る予定ではなかったけど、どうしても来たいと言うから指揮官に許可を貰っている。

「しきか〜ん、言われた通り3人揃って来たよ〜」

扉を開ければ、そこには指揮官が佇んでいた。

その隣には、鉄血工造の顔役とも呼べる代理人が。

鉄血にも関係があることもかもしれないということと呼ばれたのかもしれない。

どちらにせよ、以外にも話は広まっている。

「うん、済まないね。色々ある中呼び出しちゃって……」

「あたいも呼び出されたつてことは……アレの話？」

「ご明察、と指揮官は苦笑いをしながら答えた。

そうじゃないわけが無い。

404小隊の中で、あたいたちの知らない接点が1番多くあったのがあたいと45だ。その2人がメインで呼ばれるのだから、察さなければ鈍いだろう。

「……WA、入ってきて」

副官のWA2000が、あいつを寝かせたベッドを運んでくる。当の本人はとても強い薬効で深い眠りに付いているようだ。

暫くは起きないだろうし、何をしても気づかない……
とは行くのだろうか？

「彼は眠ったままでよね？」

「勿論。かなり効力の強い睡眠薬を服用したみたい」

「少なくとも、暫く起きることは無いでしょう」

45が小声で私が手を下す必要もなかったね、と呟く。
どうも、薬を盛る予定だったらしい。

「これから、本格的に彼の調査をする」

なぜあそこまで錯乱したのか。

なぜそこまで戦術人形の生死に固執するのか。

なぜUMP姉妹の名前を出したのか。

様々な謎を明らかにする為に、その調査に乗り出した。

しかし、そんなことが出来るのだろうか？

頑なに口を閉ざし続けるあいつが、今更その真実をその口から語ってくれるのだろうか？

あたいからしたら、何を言っているんだとしか思いようがない。

「それについては私から説明しよう」

現れたのは、I・O・P.の戦術人形の生みの親とも言える人物……

16 Labのペルシカだった。

彼から時々聞いていた。“向こう”の世界でも面識はあるらしい。

語る事件の前も、その後も。

だが、こんな人物がわざわざ出向いてくるなんて。

相当なことをするのだろうか。

それとも、ただ単なる興味なのか。

「なぜ貴女までここに?」

「最近の人権団体の驚異が大きくなってきているから、それに関係する技術の試運転って所かな」

ペルシカはそう答えた。

続けて、今から行うことの内容も。

「今から、彼の記憶の投影を行う。それによって、何が起きたのかをより具体的に私達は知れるはずよ」

聞けば、人間の脳をそのまま人形のメンタルとして取り入れる技術を開発し切ったところがある様だが、人道的にその技術を封印した……しかし、その応用として大掛かりな器具を用いて人間の脳をスキャン、その中にある記憶を映像データとして出力し、それを証拠として手に入れるための技術を試験中だそう。

この技術が完成したら、現在手を焼いている犯罪組織や人権団体などの情報を尋問せずに取り出せるという画期的な計画だ。

その被験者という名目で検査をするという事らしい。

「いい考えね。確かに理に適つてると思う。でも、わざわざI・O・P. がグリフィンのためにそんな技術を開発するかな？」

純粹な疑問。

I・O・P. は現在戦術人形を開発する大手企業。

そんな企業が、たかがPMC如きにそこまでの手助けをするのだろうか？普通は疑問になるはずだ。

「本当はあまりしないんだけどね。私自身、あの技術の流用はしたくないし……でも、それを実行した方がいいという判断が下されるレベルに、この一帯は緊急事態に見舞われているってこと」

前例のない対戦術人形用兵器の所持や、明らかに意図的に起こされているような暴動。

規模の大きすぎる敵勢力。

それに呼応するような彼の錯乱。

あまりにも異常すぎるのはすぐにわかった。

「今までの人権団体と名乗る連中のレベルを越しているからね。戦術人形に肩入れしている人を迫害したり暴行したりはあったけど、殺人に戦術人形自体の破壊、威力業務妨害などフルコース……」

「正直、同じ人間とは思いたくないわね。更には下劣な真似までして戦術人形のメンタルモデルにトラウマを焼きつけかねない奴まで出ているらしいし」

実際、人権団体とは言うが人間にまで危害を加えている。

そういう所を見ると、本当にお笑いだ。

名前の意味などとうに無くして、今はただの暴漢の集まり。最悪と言わざるを得ない。

だから都合よくこんなものがあつたわけね。

いや、都合がいいのは向こうも同じかもしれない。

実際にこれが実用できるかどうか、それを確かめるにはうってつけの被験者がここに
いるんだから。

「……これで脳内に爆弾でも抱えてたらどうしよう?」

「何も物理的な爆弾が仕込まれているなんて思っていないよ」

冗談混じりでそんなことを言ってみる。

それに対する返答も軽かったが……

精神的な爆弾なら、確実に見つかるだろうけどね。

そうペルシカはつけ加えた。

勿論、分かっている。

それを見つげ出して、少しでも起爆しない様にする。

現実には出来ないかもしれないけれど。

「もう準備は出来てる。早めに行わないと、彼の深層心理が見えなくなる」

人の深層心理に秘められた光景は、無意識の中にも現れる。それを投影する故に眠らせる必要があった。

本来なら45があいつを眠らせる予定だったのは納得だが、本人がそういう薬を服用していることが驚きだ。

しかし、それのお陰で今は良い方向へ傾いている。

あいつが作ってくれたこのタイミング。

記憶を覗くのなら、今が絶好のチャンス。

「……隠してた事、全部見させてもらおうわ」

「大丈夫。何が出てきても受け止める準備は出来てる」

45はその奥底の扉に手を掛ける覚悟が出来たらしい。

何が出てきても、恐怖を繰り返させないために。

あたかも、逃げたりしない。

何が見えたって、あたいはその事実を認める。

あたいたちなんかのために尽くしてくれる、優しくしてくれる……そんな人の為に、絶
対に。

仲間として、友人として。

あたいたちにはそれを知る権利があるはずだ。

「私も……45姉と40姉への思いの理由が知りたい。だから……大丈夫。私も、ちや
んと見てあげるから」

9も、有り得たかもしれない姉妹の行先を知りたいと覚悟を決めている。これはもう
あいつだけの問題じゃない。

あたいたちUMP姉妹も関係があるのだから。

同じくして、代理人は何も言わない。

本人の記憶を覗くことに申し訳なきような表情をしているが、それでも目を逸らそうとはしない。

それがきつとあいつのためだと知っているだろうから。

「皆、覚悟は決まったようだね。恐らく、ここから先に見る光景はとても辛い結末だ。けれど決して……目を背けては行けない。彼に同じ結果を繰り返させないためにもね」

最後に指揮官の一言。

指揮官だつてわかっている筈。

最初に出会った時の酷い有様。

そこに至るまでの経緯。

そして、今のボロボロな状態。

明らかに普通ではない過去がある事は誰でも分かる。

だから、あたい達は寄り添わなくては。

あたい達の寄る辺が指揮官やあいつであるように……

あたい達があいつの寄る辺にならなきゃいけない。

普段支えられてる分、今度はあたい達が。

その恩を返す時。

——見せて。あんたの奥底の記憶を。

心傷潜航 11 : 始まり | b e g i n n i n g |

——再生開始。

「……鉄血工造の摘発だって？」

「ああ。何せ、本来違法レベルの機能を有した何かを隠しているらしい。……君には、その作戦に携わる戦術人形たちのメンテナンスを頼みたい。もちろん、現場の仕事も含めてだ」

突然の呼び出し。

それが一番最初だった。

鉄血工造を追われたあと、俺はグリフィンに拾われた。

過去にI・O・Pの戦術人形を助けたということを買われたらしいが……結果として、俺としては助かっている。

だが、それを加味しても断りたくなるような仕事の話だった。内容としては、鉄血工造の襲撃に関わる戦術人形達の整備を頼む、という話だ。

……複雑だ。

俺は今、二者択一を迫られている。

今過ぐすI・O・Pの人形を取るのか……

嘗ての友の鉄血を守るのか。

だが、それ以上に……

俺の世話になった場所が、本当にそんな事をするのか。

正直な所、半信半疑では無かった。

ほぼ9割型信じてなどいない。

……残りの1割の可能性はある。

元々俺は、何故グリフィンに来たのか。

謎の疑惑から始まった。

誰も知っては行けない、極秘の計画。

それを知ったという濡れ衣を着せられ、鉄血工造を追われた。その極秘の計画と言うのは、俺を良く思わない奴からのでつち上げだと思っていた訳だ。

だがこんな話を聞いては……余計に混乱する。

「……本当に、鉄血工造は……後ろ暗いことをしていたつての……」

何時か救ってもらった誰かの背中を追いかけるために……

スクラップ同然の亡骸を弄り倒して、それでやっと生きてきた俺を雇ったあの場所が、本当にそんな事をするのか？

俺の頭の中は、それを理解することを拒んだ。

当たり前だ。

恩があることには変わりない。

それに、珍しく信用できた場所だった。

そんな所が……

しばらく考え込む。

決めかねている。

俺には、どちらかを選ぶなど……

「……一つだけ条件を提示させてくれ。半ば、お願いのようなものだけだな……」

「鉄血工造の人形達に、出来るだけ危害を加えないでくれ。身の安全の保証をしてやってくれて言うんなら、全力を尽くす」

鉄血工造は俺の居場所でもあった。

作られたハイエンド達とも交友があつたし、敵対しなくないという気持ち強いのは確かだ。

しかし、今の俺は鉄血工造の者ではなくグリフィンの者だ。与えられた仕事を遂行すべきなのもわかっている。

だが、それでも……せめて、彼女達を傷つけないで。

その一心で、受け入れられない言葉を出す。

「……分かった。上手くいくかどうかは分からないが、私の方からも交渉してみよう」

俺の事情を知ってくれているからか、善処すると返答が帰ってきた。良い方向に向くかは分からないが、それでも信じるしかない。

【ここから先は映像が乱れている】

――再生再開。

基地の一角を歩いている時に、それを見た。

2人の人形が訓練をしている姿を。

最初こそ、なんの疑問も思わなかった。

ただ普通に動作のチェックや、射撃精度の確認をしているものばかり。

けれど、繰り返して見る度に違和感があった。

ずっと同じことを繰り返している。

訓練と言えど、息抜きだつて必要なはずだ。

他の人形が小休止を挟む中、彼女達だけはそのまま。

少しの不安が、頭を過ぎっていた。

その数日後、上官と思わしき人物に怒鳴りつけられているところを見た。詳しい理由

までは聞き取れなかったが……

正直に言おうと、胸糞悪いと感じた。

同時に、あの人形には何かがあつたんだと察した。

奴らが出ていってから少し時間を置いて、再び訪れる。

適当にそこらにあるであろう販売機で、3つほど飲み物を買ってから……手土産になつてくれればいいんだが。

そう思いながら、その場所へと足を踏み入れた。

突然現れた俺に、片や怯え、片や警戒された。

無理もない。あんな怒号を挙げられていたら、怯えもするし警戒もする。俺だとしても同じだ。

何も言うことはしない。

下手に口を開けば、余計に刺激するだけだ。

周りを見て、少しサボっても問題ないかと確認をして……

「……よし、誰も見てないな」

その言葉に、怯えた様子の人形は何が何だか分からないとでも言いたげだった。当たり前前だ。

「少し休憩でもしないか？根を詰め過ぎたら辛いぞ」

そう言って2人分の缶ジュースをそれぞれに投げる。

人形は飲み食いでエネルギーを得る訳では無いのは知っている。だが、ほんの少し思考回路をクールダウンさせてやれる効果ぐらいいはないだろうかと思つた迄だ。

集中して頑張ることは確かにいい事だ。

だが、気を張り過ぎればいつか限界が来る。

そのラインを超えてしまえば、その労力は無駄どころか逆効果になってしまう。

「えっと……ありがとうございます」

おどおどした方はありがとうございますと感謝の言葉を述べ、逆にもう片方は驚いたような表情をしていた。

俺はなぜそんな顔をされるのかと不思議でしょうがなかった。別に俺は変なことをした訳でもないと思つた。

だが、それでも無いらしい。

「……随分変わった事するわね。何企んでるの？」

「企んでなんかねえ。失礼だな。普通に疲れてんだろって思っただけだ」

そう吐き捨てては適当な場所に腰かけ、寛ぐ体制を取る。

正直、そんなことをしていいのかと言う意見もあるだろう。

だが、リラックスする程一番の休憩方法はない。

それが一番気の休まる方法なんだから。

当の俺が一番ゆっくりして、休め休めと気楽に言う。

俺が認めるから、と釘も刺して。

最初はまだ続けようとしたが、じつと見つめる俺の視線に耐えられなくなったのか暫くしたら一息つこうとする姿勢に変わった。

「それでいいんだよ。過度な集中は遠回りだ」

「うん……」

もう片方、反抗的だった方もしばらくして少し休憩する。こちらは元より俺の言葉がなくても良かったようだ。

また、しばしの無言。

けれど、今度は向こうから口を開いた。

「こんな事を認めて、大丈夫なの？」

「大丈夫だ、なんか言われても言い返してやる」

特に迷うこともなく、そう言い放つ。

機械も人間も、適度な休憩を挟むことが最高効率への近道だ。特に、自分の実力を上げようと焦っている奴には。

理屈は揃っている。

文句は言わせない。

まあ、サボろうが俺は何も言わないが。

死ななく、怪我をしなければお小言は言わない主義だ。

「私、役立たずだから早く人一倍訓練しないとって言われて……」
「馬鹿、役立たずなんていると思ってるのか？」

少しづつきらばうな言葉に反抗的な方から睨みつけられるが、怯むことは無い。
それは確かな事実なんだから。

戦場で役立たずなのはそこに立っていることさえ出来ない奴のことだ。

立ち続け、最後まで戦う姿勢を見せるものを役立たずとは呼ばないはずだ。

……それもあくまで、俺の視点からの話なのだが。

「……言い方は荒いけど、良い人なの……？」

「さあ？それは俺の判断するところじゃねえよ」

若干の警戒が解けたようで、ほんの少しだけ言葉に変化が見られた。敵対視自体は避けられたようだ。

聞けば、彼女らははみ出し者のような扱いらしい。

理由はこの時代、ほとんど用途のない情報戦特化の戦術人形だからだそうだ。

特化するということは、リソースを特化した分野に回す。そうすればその分を別のところから持つてこなければならぬ。

い。つまり何が言いたいかと言うと、彼女達の戦闘能力の低さに奴らは苛立っていたらしい。

「知ったことか、自分たちが死ぬのが嫌で任せてると言うのにそこに文句を付ける馬鹿がいるかよ」

聞いてて気分が悪い。そういう悪態を付くとまた驚かれた。彼女らの中での人間像と言うのは、自分達の味方をしないものだと思っていたらしい。

無理もない話だ。

周りにはああいう奴らが殆どなのだから。

俺からしたら胸糞悪い。

そんなに気に入らないのなら自分が行け。

人手など手を尽くせばもつといるだろうに。

呆れた言い分のため息が出た。

「随分と言うけど、大丈夫なの？」

「平気だ、聞かれちゃねえさ」

どうせ聞かれてたところで、それは事実だ。

崩壊液汚染の中で死ぬのが嫌で作り出したんだろうが、結局用途としては体のいい捨て駒のような扱いだって有り得る。

人間と機械の差はある。

だが、今や機械も意思を持つ。

それならば、考える人間と何一つ変わらないではないか。

なのに、有機物か無機物かで全てを分け隔てる。

人間ならば命がもつたいたいといい逃げ、機械ならば使い捨てられるとボロクソに不条理であると俺は思っている。

だから、こんな考え方をする人間は嫌いなんだ。

「あんたも同じような立場じゃないの？」

「あんなただふんぞり返って偉そうにしてる奴と一緒にしないでくれ」

そういう手合いが一番嫌いなんだ。

物の価値の分からない馬鹿。

兵を自分の駒として見る阿呆。

ただ実地も見ずに、机上の空論だけで話を進めては自分の思い通りに行かなければ現地の兵士達を罵るクズ共。

そういつた奴らが居るから、犬死する奴が現れる。

人には長所短所がある。

それを生かすために作戦を考えるのが上だろうに。

腕の良し悪しで扱いを決めるようなやつとは一緒にされたくない。

「……あんた、本当に普通の人と違うね」

「言われ慣れた。アイツは頭がおかしいだのなんだのって……と言うか、ここまで聞いて今更か？まあ、今の“普通”がおかしいだけだと思ってるけどな」

戦術人形だって、人と同じように扱われていいじゃないか。それが、俺の本心だった。

俺だって、姿も心もほとんど変わらないと感じている。なら、それでいいはずだ。

だが、そんな言葉を遮る者が……

「ううん、今の普通は間違ってる。私達は確かに人に作られた道具、人の為に戦って、人の為に死ぬ。それが私達の役目でしょ？」

気弱な方が、そんな言葉を零した。

その諦観気味な答えが俺の耳を劈く。

「んな訳あるかよ。少なくとも、道具だったとしても……人の為に捨て駒になるのは間違ってるだろ」

そう教えこまれてきたと、彼女は言った。

俺はそれを否定するが、その考えを塗り替えられるだけの答えはきつと出せない。

いいや、納得して貰えないの間違いだろう。

幾度も怪我をしている者たちを見てきた。

あの基地は違ったが、他の基地の救援に行く時に腐るほど見た。未だに、ただの道具として見る風習は抜けないらしい。

だから死にかける奴が現れる。

死にかけても、代わりがいると見捨てる。

呆れるものだ。

そうしていけば、最後には誰もいなくなる。

道具として見たとしても、この結論に至るのが分からないらしい。

だが……

「いい事言った！そうよ、あたい達だってもっと自由になっていいと思わない？」

活発な方が、そう俺の意見を肯定した。

片方はそういう願望を強く出して来て助かった。ただ使い倒されるだけなんて、あまりに酷い。

俺が、戦術人形を“人間”として見る異常者だからかもしれないが……俺は、そんな奴らを救いたい。

ただ戦場で朽ち果てないように。

意志を持ったからには、人になれる様に。

その為に、この役割を請け負ったのだから。

「……そう、なのかな……」

未だに戸惑う彼女に、俺は答えた。

「本当にただの道具なら、わざわざ人に近い形を取らせて、人に近い思考を与えて……そんな事をするってか？ 本当にただの道具なら、意思なんて必要ないはずだろ。自分の命令だけに忠実に動かすように作るはずじゃないのか？」

俺はずっと、この考えを持っている。

道具は道具でしかないのなら、なぜ思考を与えるのか。

それも、機械的なものじゃない。

人間的な物をだ。

鉄血工造の量産機がそれに値するものだ。

それでも俺は情を持ってしまっているが……

本来、道具とはああ言うタイプの思考までのことを指すと思っている。命令に従い、

その為に最善のルートを導き出す。

ただそれだけの人工知能。

しかし彼女らはどうだ？

独立した思考を持ち、それぞれの特徴が現れる。

今のこの2人だってそうだ。

一貫せず、正反対の性格。

更には感情だって持っている。

そんな人間に近しくなる物を、わざわざ道具如きに付けるだろうか？

「全てにおいて合理性を求める技術者や科学者共が、わざわざそんな不合理な事をする」と

は思えねえんだ」

だって、それでは説明がつかないから。

ただ単に俺の頭が悪いだけなのかもしれない。

けれど、それでも納得がいかない。

道具は道具のまま、道具風情の性能でいいはずだ。

そうすれば、あとは自分達の使いよう。

けれど、それを自律させたなら……

その判断は全て、“それ”が行う。

だから俺達が口出しをするのはお門違いだろう。

だが、その矛盾は未だに変わらない。

自律させてなお、それを支配しようとする。

俺から言わせれば、異常者はそういう人間自身だ。

「あたいの言おうと思ったこと全部言っちゃった……いや、正確には違うんだけどさ、でもほぼほぼ考えてる事は同じみたいね」

「らしいな、そういう奴が居るとどうも安心できるわ」

ここまでの理屈を捏ねる気はなかったが、それでも人形が自由であつていいと語りたかつたと話す。

姉貴分の方が自由に飢えている。

妹分の方は、どこかまだ縛られたような声だった。

道具であると知っているからこそ、諦めるような。

そんな気持ち伝わって。

「……少なくとも、俺はアイツらとは違って理不尽にキツく当たる事は殆どねえよ。あつたとしたら、馬鹿みたいに無理したり、死に急いだりした時だけだ」

最後だけは、語気が強くなる。

コイツらが、スクラップになるところを見たくはない。

死ぬことだけは絶対に許さない。

どれだけ怪我しても、どれだけ失敗しても、それは取り返せる。けれど、死だけは取り返せない。

替えが効くと言っても、“そいつ”は一人しかいない。

死んだ者に替えはない。

それは俺が1番知っているはずだ。

「その言葉、信じてもいいの？」

「嘘はつかない」

2人は真剣な眼差しで聞いてくる。

俺は確かにろくでなしで変わり者だが……

こんな所で嘘をつくような人間ではない。

そういえばと大事なことを思い出したかのように。

さつさと口を開く。

「自己紹介、まだだったな。俺はリオン。今日からお前達の整備やメンテナンスの担当になった。これから色々関わることが多くなると思う……と言っても、大体は物理的な

ところだと思っけどな。とにかく、よろしくな」

2人の人形に手を差し伸べる。

につ、と格好付けのような笑みを浮かべて。

これから一緒になる訳だし、印象は大切だ。

……だが。

「あはは！なにその笑顔、格好付けようともしました？」

「してねえよ！これが素だ！」

姉貴分の方が急に耐えきれなかったのか笑い出す。

別に変に意識した訳じゃ……ない訳では無いが。

腹を抱えて笑っている所を見るとなんか腹が立つ。

……が、別に笑ってくれている訳だし、いいか。

釣られるように妹分の方も笑ってしまっている。

そんな彼女が、最初に俺の手を取った。

「……UMP45。よろしくお願いします、リオンさん」

「あんまり固くなんな。リオンでいい。俺はお前らの上官じゃねえ。ただの整備士なんだから」

まだ緊張が解けていない様子だ。

優しい声で、普段の笑顔で答えた。

その内心は言葉のままに。

彼女の微笑み方は、不安が抜けたかのような感じで悪くなかった。

「はー、よく笑った……!」

「笑いすぎだ、そんなに面白かったか」

漸く笑い終わった姉貴分も、同じように手を取る。

満面の笑みで、棘の抜けた顔で俺に向く。

さつきまでの敵意など、何処かに消えたのように。

「あたい、UMP40って言うんだ。よろしく!」

「お前は45と違って遠慮ねえな……まあ、その方が俺としても楽でいいんだけどよ」

45とは真反対のUMP40。

活発で陽気。

けれどなんだか手のひらで転がされている感があるのは少しなんとも言えない。
なんだか悔しいからと言うだけだが。

UMP40とUMP45。

2人の人形。

それはまるで、人形でなく人間のように。

俺が出会った中で、最も人間に近い人形達。

よく耐えてくれた。

少しくらい俺がいる時は楽をさせてやりたい。

そんな一心で、不真面目な友人たちができた。

文句やら何やらに従順なように見えて、裏では好き放題。

でも、重要なことは必ずこなす。

そんな集まりが、俺は好きだった。

鉄血工造の皆を“家族”と形容するなら、彼女達は“親友”だった。過ぎ去った時間こそ短けれど、そこには確かな絆があつたと信じたい。この奥底に眠る記憶は、決して嘘ではないから。

全ては、あの事件のせい。

悪夢も何も、全ての始まり。

【再びこの先は映像が乱れている】

心傷潜行III：遺言 —Dying message

——再生再開。

「……今日はここいらで区切るぞ。今日も一日よく頑張ったな」

あの出会いから数日。

他の戦術人形のメンテナンスも兼任している俺だが……

その自由な時間のほとんどはここに来ている。

UMP40とUMP45。

この2人は、どうも放っておけないらしい。

気づけば足を運んでいるし、気づけば目も奪われる。

いつも見ているが、やっぱり頑張りすぎている。

通る度に目を配れば、どんどんと疲労で動きが悪くなっているのがわかる。

そんな頑張りすぎな奴の支えになろうと40は頑張っているが……当の本人も、かな

り頑張っていることが伺える。

度重なる45への侮蔑から庇ったり、45を慰めてやったり。

いい姉じゃないかと思うが、それだけじゃない。

あいつ自身も、休まず自分の問題と戦っている。

自分自身も優れたものではないと知っているからこそか。

良くも悪くも、姉妹だと納得がいった。

「はあく……結構やるとやっぱり疲れるね……」

「でも、こんなくらいで休むなって上官は……」

その言葉を遮るように俺は話した。

現場の視点と命令の視点は全く違うと。

命令している側は実際を知らない。

その行動にかかる労力やリスクなど、自分がやらないから全く知らない。けれど、実際に動く者はそれを知っている。

つまり何が言いたいかと言うと、真に受けるな。

そういう事だ。

戦術人形だつて個人差がある。

長く体力が持つものもいれば、すぐに息切れを起こす者もいる。それを奴らは知らない。

だが、それを抜きにしても彼女らは頑張りすぎだ。

「命令じゃなきゃ休めねえなら、これも命令だろ」

「だつてさ、実質上の人からの許可出たから休もう？」

いつも45は頑張りすぎている。

周りからの評価と、自分の劣等感が重なっている故だろうが……何度も言っているように、度を超えた労力は無駄になるだけだ。自身のパフォーマンスの低下に繋がり、それは更に訓練の効率を下げる。どこかで聞いた話だ。

「いつも頑張るのはいいけどさ、ちゃんと休憩とかも取らないと」

「そういうこつた。ほれ、銃を置き置き」

早く休むように急かす。

こうでもしないと、アイツはいつも目を離れたらなにかしている。逆に、そうでもないかと落ち着かないのだろう。

自身に劣等感があると、そういうものだ。

俺自身少し近しいものがある。

昔から俺に出来ることなど少なかった。

この技術だって、何でもかんでもやって、漸く手に入れた。

その間は、何も出来ない時間がとてももどかしかった。

それに近い感覚と考えると、無理に言うことも出来ない。

「ありがとさん、じゃあ暫くゆっくりするぞ」

少し息抜きする姿勢を見せてくれた45に礼を言う。

本当に聞かない奴というのは、何を言っても聞かない。

45がなんだかんだ言ってもこうしてくれるのは助かった。

「……あっ！そうだ、この前、自分のデータベース内を調べてたらこんなものを見つけたんだ！」

突然思い出したように、40が話し出した。

広がる青い風景。澄み渡り、光を乱反射する綺麗な一面。

それは……

「海か。未だにそんな所の記録が残ってるなんてな」

「いいなあ……リオンは普通の人だし、自由に見ることも出来そうだよね」

「そんなことねえよ。このご時世なかなか行けるもんじゃねえ」

しかし、自由に行こうと思えば行けなくはない。

けれど、彼女らの脳裏に写っているような風景が見られるかどうかは別だ。もしかしたら、この近くの海など既に崩壊液に汚染されきったものかもしれない。

けれど、彼女らの境遇を考えたら羨望する気持ちも分からなくはない。だって彼女達は“役目”に縛られている。

俺とは違い、明確な枷がある。

俺は自由な癖に、自由を選んではないただけだ。
アイツらから見たら、とてつもなく腹立たしいかもしれない。

「いつか、一緒に行けたらなって」

「行けるだろ。この任務終わったら、グリフィンに戻れるんだ。そしたらクルーガーさんに請け合ってもらおうぜ」

その時はもちろん45も一緒に。

この一言が、上手く重なっていた。

俺も言ったし、40も言っていた。

何となく、お互いの思うことが分かるようになってきた。

俺達の誰か1人でも欠けては行けない。

俺達は仲間で、友達なんだから。

だから、無理は絶対にいけない。

「その夢の1歩に近づくためにも、今はゆっくり休んでまた明日に頑張らなきゃいけないだろ」

「……うん。40と、リオンさんと一緒に、その風景を見たい。だから……今は、少しお休みさせてもらうね？」

それでいいんだよ、と一言。

ゆっくり休んで、また明日頑張る。

疲れたらまた休んで、次に備える。

その繰り返しで、成長していくものだ。

所詮プログラムなどと言うかもしれない。

けれど彼女達は確かに成長している。

45も、40も。

技術的な面もそうだし、少しづつ概念的な面も。

だから俺はそう信じれるのだろう。

そろそろ、作戦の時は近い。

刻一刻と迫る運命の時に、不安と焦燥を抱く。

本当に行ってしまうのか。

本来、こんなことは思っては行けないだろう。

それは、戦術人形の存在価値を否定するような言葉だ。けれど俺は、どうしても……

失うのが怖かった。

もしも彼女達が戦場で散ったら。

そうならないための俺だ。

だが、本当に俺は助けられるのだろうか？

「……リオン？どうしたの？」

「いや、なんでもねえ。作戦、無事に成功させるために頑張るぞ。俺らの夢の為にもな」

【ここから先は映像が乱れている】

——再生再開。

それは“あの事件”が起きるほんの数日前。

そろそろ決行が近い中、俺達は変わらなかつた。

しつかりと訓練と休憩のメリハリをつけて、いつもの様に頑張る。それが俺たちのやり方であり、その時も変わらなかつた。

ただ違ったのは、今日は45は別の場所で訓練の成果を確認しに行っている。

俺が教えた方法でどうやら上手くいっているらしい。

40が教えたコツと組み合わせ、しつかり劣らないくらいには上達できたと教えてくれた。

自信が無い故の悪循環から徐々に抜け出せているようで何よりだ。……つまり、今日は2人だけ。

よりにもよって、いちばん真面目なのが居ないのだ。

国家安全局の中に、こんなガサツな奴がいると知られたらまずいだろうに。けれども、そんなことは全く気にしてさえいなかった。

そんな中、あまりに退屈を拗らせた40がある提案を持ち出した。

「ねね、リオン、おにごっこしよう！」

「いや、出来ねえだろ。んな走り回ったらクソうるさい奴らにバレちま……」

いくら暇とはいえ、そんなことは出来ない。

ただでさえうるさい奴らの巣窟なのに、これ以上煩くされたら耳が壊れてしまいそうだ。

そう言おうと思った瞬間、40が俺のお気に入りのヘアバンドを外して奪っていった。

すぼんと綺麗に抜けたものだから俺も啞然とした。

何しやがる、と俺が言っても聞かない。

そのまま自分の頭につけて……

「どうよ！似合ってる？」

ただ単につけたかっただけらしい。

似合っていないことは無い。

むしろ意外と似合っている。

ふんす、と聞こえてきそうなくらいのドヤ顔。

「いや、まあ、似合ってるけどよ……俺のだから返してくれ」

そう伝えると、ほんの少しだけ照れくさそうに笑う。

似合っている、と言われたのは純粹に嬉しかったのだろうか？

けれど、その笑いは段々と悪戯っぽくなって……

「ふふふ……返して欲しければあたいを捕まえてみるー！」

「は？」

そう言つて一目散に逃げ出す40。

畜生、最初からそれが狙いだっただのか。

アレはお気に入りだし、しかもなかなか同じものが見つかからない。偶然見つけて気に

入った一品だ。

「畜生、せめて面倒な奴らに見つかんのだけは勘弁な……！」

乗らざるを得ない。

必ず返してもらうからな。

そう言つて、悪ガキ2人の追いかけっこが始まった。

走つて逃げて、走つて追つて。

面倒な奴に見つかりそうになつたら40はすぐ隠れるし、俺は何とか言い訳をする。この言い訳を考えるのも一苦勞だ。

忘れ物をした、急ぎの用がある、誰かに呼ばれた、探し物をしている……正直、一生分の頭を使った気分だ。

「はあ……はあ……クソ、ようやく捕まえたぞ……！」

当の俺はもう息を切らしているどころではない。

正直、なぜ立てているのか分からないレベルで苦しい。

当たり前だ。向こうは機械の体、こちらは生身。

人に近いとは言え、その差は埋められない。

「ふう、隠れながら追いかけられるのは結構楽しかったよ！」

「あのなあ……言い訳考える俺の身にもなってくれよ」

でも、言い訳考えるのはいつもの事じゃない？

そんなことを言われた。

いや、まあ、確かにそうなんだが。

でも今回に関しては露骨すぎるから中々誤魔化しがバレそうで今まで以上に大変だった。

バレれば処罰は待ったナシ、そうなると余計に面倒だ。

正直に言えば、スリリングな綱渡りだ。

「たまにはいいでしょ？……それに、そろそろこうして遊べ無くなっちゃうし……作戦が終わったあとも、こうして会えるとは限らないでしょ？」

最後だけ、とても寂しそうで悲しそうな声だった。

確かに作戦が終わったあとに一緒に居れるかは分からない。

そのまま会うことはなくなってしまうかもしれない。

いや、そこまでは無いだろうが、交流が減るかもしれない。それは確かに、俺としても寂しい。

その気持ちがわからなくはない。

だからこれ以上は何も言えなかった。

子供のような純真さ故かと考えれば、怒りもない。

ただしようがないな、と言うだけで……

「……でも、一生のお別れなんて訳じゃねえだろ」

「そうとも言いきれない。あたかも45も、へマをしたら死んじやうんだから」

最近の彼女にしては珍しい物言いだと思った。

確かにそうだ。

へマをすれば死んでしまう。

そんなことは当たり前だ。

……だが、そんなことにさせないために俺がいる。

死にそうになっても、助ける為に俺がいる。

そう強く言い聞かせた。

「そうだよね。……リオン……」

その先の言葉は聞こえなかった。

いいや、最初から言葉に詰まっていたのかも知れない。

けれど、小声で何かを言っていた気がする。

今となつては、真偽は分からない。

「生きて帰るんだよ、俺もお前も45も、皆でな」

40は笑うだけで、何も返してくれなかった。

もちろん、という肯定にも見えて、そんなことなど出来ないという否定にも見えた。

でも、どこか弱々しい笑顔だったのは覚えている。

「……不安か？」

「……そりゃ、不安だよ。だって、戦いに行くんだから」

そう漏らしてくれた40に微笑んだ。

それでいいんだ。

不安を無くしたら、今度は生きることへの執着が消える。

そうしてしまえば、より死は近づく。

そうであるよりかは、不安で生き残りたいと願った方がいい。

それが俺の意見だ。

「……リオン？」

震える手にそつと手を重ねた。

それは子供に向けるようなおまじないかもしれない。

けれど、それで不安が消えるのなら……

ガキのような笑顔で、語って見せた。

「大丈夫だ。何時だって、俺はお前達と一緒に居るからよ」

「……あたいを安心させようとしてくれたの？」

また、あの時のように吹き出していた。

俺のこういう所は子供らしいと思われているのだろうか？

でも、あの時よりは少し控えめだった。

あそこまで腹を抱えて笑ってはいなかったし、ほんの少しクスリと笑う程度だった。

「ありがとう」

「どういたしまして」

軽い返事。

軽い会話。

でも、そこには確かな温もりがあった。

「ねえ、リオン」

その言葉に振り向く。

どうした？

そう言おうと思った。

「もしもこの作戦が終わって、離れ離れになっても……」

——あたいを、忘れないでね

……何を言っているんだ？

とても当たり前のことを、彼女は言った。

俺があそこまで手をかけて、あそこまで馬鹿やった友人を忘れるわけがないだろう。

そんな意を込めて。

「当たり前だろ。忘れるわけなんてねえよ」

「そっか、ありがと……」

笑って返すと、安心したように笑い返してくれた。

変な奴だ、と今更ながら思った。

……ごめんね、でも。

何かを、小声で呟いた。

とても当たり前前の事を聞いたり、急に弱気になったり。

でも、それが彼女の個性なんだと納得している。

彼女はさらに俺に近づいて、耳元の辺りでさらに暗号のような言葉を紡いだ。

「……あたー、いーもーいーいるーら」

【ここから先は映像が乱れている】

心傷潜航Ⅳ：悲嘆
—g r i e f f—

——再生再開。

——急がなくては。

——早く見つけなければ。

——何処にいるんだ。

——お願いだ。

——死なないでくれ。

——生きていてくれ。

作戦当日、作戦中。

突如として、戦術人形が人間に対して攻撃を始めたという報告が上がった。それ以上に、味方の戦術人形の破壊も確認されるとの報告が、俺に焦燥をもたらした。

45と40は無事か。

他の戦術人形のこと、もちろん心配だ。

だが、それを気にする余裕などなかった。

とにかく走れ。

鉄血の建物内をとにかく探し回る。

消えた40と45の信号を辿るために。

アイツらが死んでしまったら、俺はどうすればいい？

俺が1番、仲良くして、心配して、笑いあったあの二人が死んでしまうことだけは、絶対に避けなくては。

中には幾つもの人形の死体。

これも全部、鉄血の人形がやったものらしい。

信じられない。信じたくない。

吐き気を催しそうな最悪な光景の中、死体の山を踏み荒らしてでも。とにかく向かうんだ。

しかし、その最中に乾いた音が木霊した。

『……銃声……!?!』

未だに戦闘が行われているのか。

この銃声は聞き覚えがある。

……間違いなく、UMPによる射撃音。

どんなに危険でもいい。

アイツらの安全を確保しなくては。

『45、40！無事か！無事だろうな!?!』

目の前には、力無く倒れた1人の人形。

それは確かに、彼女自身の手で撃ち抜かれている。

夥しい量の流血。生々しく写る風穴。

それは確かに、俺のかけがえのない友人であり……

それは確かに、彼女の唯一無二の姉だった。

そこに落とされた彼女の銃が、それを物語っている。

傍に崩れている妹の銃と瓜二つ。

おびただしく流れる人工の血液。

『……嘘だろ、40……待ってる、今治してやる……！なあ、おい頼む、返事をしてくれよ……！』

その日、俺は壊れた。

その日、俺は知ってしまった。

……真に、人形の死という物を。

心の奥底に付けられた深い傷。

未だ脳裏に焼き付く赤、赤、赤。

何時も馬鹿やって、笑いあつて。

時に激励し、共に抗つた。

そんな俺達の支えであつた彼女が……

『うああああああああ……ッ!!』

自分の妹によつて、撃ち殺された。

その殺した犯人さえ、泣き崩れている。

本意ではなかつた。

きつとそう言うだろう。

分かっている。

分かっているんだ。

だが、それでも聞かずにはいられなかった。

「何でだ、何でだよ45！教えてくれ、何で撃つちまったんだ……！あいつを撃つなんてそれほどの理由があるんだろ？なあ、願むよ……教えてくれ……何で、あいつが死ななきゃならなかったんだよ……」

肩を掴んで揺るように。

今思えば、俺は残酷な事をした。

恨まれてもしようがない。

1番語りたくもなければ、現実を見たくないのはアイツのはずだった。それなのにも関わらず俺は……

その口から語られた真実は、あまりに残酷だった。

「裏切り者は、私達」

愕然とした。

その一言だけで。

だが、まだ45は続けて話した。

「……私達のどちらかが死ななければ、両方とも死ぬだけ。良いように使われて、そのまま棄てられる……だから、40は私に選択を迫ったの……40を、殺すことを」

全てに合点が行った。

なぜ人形たちが次々と人を襲ったのか。

なぜここに死体が転がっているのか。

そもそも、元より裏切り者がいた。

そう、鉄血の裏切り者が彼女達だった。

道行く者たちを殺して行ったのも。

この混乱を招いたのも。

全てはこの2人が鍵だった。

——あたいを、忘れないでね

あの時、弱音の様に吐き出したあの言葉が……

きっと彼女なりの最後の助けを求めるサインだったのだろう。俺は、それにさえ気づけなかった。

ずっと一緒に居たはずなのに。

アイツの事を、何よりも知っている使用者の筈なのに。
何一つとしてアイツの苦しみに気づいてやれなかった。

「私も、言われてようやく知ったの……私が、代わりになるはずだった人形だって……自由になれって、40が……!」

45を責める気なんて毛頭ない。

アイツが、理由もなく自分から引き金を引くわけが無い。

きつと……40に選ばされた。

どんな事情があったのか知らなかった。

教えてもくれなかった。

そんなことがあることさえ分からなかった。

必死に生きたいと願い、役目から逃げようとして……

必死に抗った筈だ。

自分の望む自由のために、最後まで。

その行先が……こんな結末だったなんて。

こんな方法で、それを叶えようとしていたなんて。

「……俺は……気づいてやれなかった……」

「……え……う？」

腑抜けた声を出す45に、ぽつりと零した。

「あたいを忘れないで、って、アイツは……最後の日に俺に言ったんだ……何の事だか全く分からなかった、どういう意味かさえも分からなかった」

俺が大切な友人のことを忘れるわけがない。

当たり前の事を言わないでくれと思っていた。

……けれど、その一言に込められた意味はそんな物じゃなかった。あいつは、もうあの時……いや、それよりも前に。下手をしたら、生まれた時から……自分の死を自覚していたのかもしれない。

それなのに俺は、手を差し伸べてやる事が出来なかった。

「俺は、ずっとお前の苦痛を、お前の悲鳴を聞いていたはずだろ……！ それなのに俺は何もしてやれなかった！ お前にも、何一つささえもだ！」

崩れたまま。

その亡骸を抱えて叫んだ。

己の無力さを。

自分の懺悔を。

「俺は、お前を、アイツを……助けてやれなかった！俺が一番、お前達を守ってやれるはずだったのに……！」

人形の命を預かる者としての恥。

何よりも、友人として救えなかつたことが、深く心に傷をつけた。今でさえ、刺され
ては抜かれ、何度も殺されているような感覚だ。

「……40は、私に言ったの」

あたいは戦術人形。

たとえ死ぬことが決まっていようと、

戦術人形らしく、

最期は戦つて死にたい。

「……馬鹿が……お前はいつつも俺と同じで馬鹿やる奴だと思つてたよ！だからつてよ
……そんな死ぬ事に格好付けるんじゃないやねえよ……！」

抱えた、友人だった“それ”を強く抱き締めて涙を零した。

俺に言つても無駄だつたと思われてしまった。

実際にそうだった。

だからと言って、恐れも知らずに……

別れも告げずに、逝かないでくれと嘆いた。

零れた雫が、壊れた体に落ちる。

ひとつ、ふたつ。

どれほど受け止めようと、何も答えない。

何が理由だ。

最初から埋め込まれていたプログラムか？

それとも国家安全局に入ってから入れられたプログラムか？

どれだ。誰だ。

彼女らの運命を狂わせたのは。

——見つけ出す。

——見つけ出して。

——殺す。

セーフティが外れた感覚がした。

「……手前か……？」

死にかけの人間が1人。

よろよるとそこに現れる。

きつとそれは、命からがら生き延びた安全局の一員だろうか……

……俺にはもう、まともな思考はできない。

「答えるよ、クズ野郎！手前か！手前らが、アイツを殺したのか！」

何も答えない。

足蹴にして踏みつけても。

銃口を突きつけても。

何も答えない。

「……ああそうか、黙りかよ。じゃあそのままずっと寝てろよ……！」

何も無い場所に、ありつただけの銃弾を撃ち込んだ。

拳銃の弾倉が空になっても、ずっと引き金を引いた。

怯える45と、息絶えた人間を脇目に、ずっと引き続けた。

カチ、カチとただ空撃ちされるだけの音が響く。

絶対に、殺してやる。

俺から、鉄血の家族だけじゃない。

大切な2人の友人さえ奪い去った黒幕を……

絶対に、この手で……

「……殺してやる……絶対に、ブツ殺してやる！俺が死のうとも、何度だって這い上がっ

て殺してやる！」

狂った悲嘆の声が、ただそこに響いた。

暫くして落ち着くことが出来た。

もう一度、あいつの亡骸に向き合って……

つけていたヘアバンドを外して、彼女の弾痕に被せるようにつけら

た。本当に、よく似合っている。

とても穏やかな顔で亡くなつて。

……思えば、あの言葉を言われた時も……これを取られていた。余程お気に入りなら、せめて向こうにも持つて行つてくれと言わんばかりに、取り返すことはなかった。

もう一度、それを抱きしめる。

ごめんな、とただ小さく呟いて。

しばらくの黙祷の後、目を開く。

アイツの思いを無駄にしないために。

「お前は逃げろ、45」

「……え？なんで、リオンはどうするの？」

描いた筋書はこうだ。

俺が、45と40を破壊したという事にする。

もう既に、ロクに動ける奴も少ないだろう。

彼女らの死を利用するのはとても心が痛むが……

それでも、最期の願いを無碍には出来ない。

俺も処分は免れないだろう。

1番潰け込んでいた奴が、惨事の引き金なのだから。

きつと、そう嵌められるだけ。

……アイツが戦って死んだのなら、俺も逃げたくない。

「駄目だよ、そしたらリオンまで……！」

「お前が捕まって壊されでもしたら、アイツの死はどうなる！……逃げて、生き延びろ。それが、お前が託された願いだろうよ」

語気を強めてそう一喝。

自由になつて欲しい。

その願いを受け取つたのは俺ではなく45だ。

彼女が生き残らなくては、意味が無い。

託した意味も、死んだ意味も……

「……………死なないでね、リオン」

「約束出来ねえけど……頑張ってみる」

あんなことがあつた上だ。

自信満々で言うことは出来ない。

けれど、生きてやるという気骨は見せなくては。

絶対に45だけでも生きて帰らせる。

それさえ出来なければ、俺に価値はない。

死んだ大切な友人のためにも……

絶対に生きて、アイツを逃がす。

それが終わるまではまだ、死んでやれない。

——再生終了。

「……あたいが、45に……う」

あたいが見たあいつの記憶は、とても想像を絶するものだった。最初の方こそ、今のあたいたちの様に温かい光景だった。

出来損ないだと言われていたあたい達に手を差し伸べてくれる、とても優しい影。今でも、想像は簡単出来る。

けれど、最後の結末はとても酷い。

さらに言えば、死んでいるのはあたい自身。

あの世界のあたいは、45を自由にするために自ら望んで死んだ。わざわざ、45自身に引き金を引かせてまで。

とても、残酷な事をした。

隣の45も9も、目を伏せている。

特に45は、とても目を合わせられるような状態じゃない。

あたいを殺してしまった張本人であるわけだから。

ここにいるあたいにも、目は合わせづらだろう。

9も9で、2人に起きた結末に言葉を失っている。

あのまま何も無く終わるはずはないと思っていたけれど、その結末はとても悲しいものであることに辛さを感じているのか。

「……蝶事件。彼が恐れる本当の理由は、40の死だったんだ……錯乱して、目の前の人間を撃ち殺しそうになるほどまで」

鉄血の人形達と離れ離れにさせられた挙句、ようやく出来た大切な友人さえ殺された。

気に入って、信用出来るような人間もいない中で、唯一心を許せた人を殺された。……当たり前だ。壊れて当然だ。

あたいだって、同じような状態で45や9が死んだら、きつと壊れてしまう。気がおかしくなってしまうから。

「あの事件をきつかけに、確か鉄血の人形も……」

「……そうね、突如として人間を襲い始めたと話していたわ」

その引き金は、誰でもないあたい。

何も知らない整備士の友人が、裏切りの原因。

つまりは自身で、その片棒を担いでいたというわけだった。

何も知らなかったとはいえ……

「あの時の錯乱も理解できるね……あんなものを、目の前で見ちゃったら……また居なくなっちゃうかも、なんて考えたら普通に居れる方がおかしいよ……」

9はとても、同情するような口振りで話した。

つまりを言えば、あの襲撃の時の錯乱はフラッシュバックだった。結論としてはそうなる。

それが一番辻褄が合う結論だから。

「……暫くは、彼に細心の注意を払おう。恐らく、対処法はそれしかない。俺たちに出来るのは、限りなく自分達が怪我をするリスクを減らすことくらいだろうからね」

今まで以上にあたいたちの破損状況や、それ以上に安全を最重要視する。変わらないあり方だけれど、その大切さを改めて再確認させられることになるとは。

あたい達は替えが効く。

けれどあいつは、それでも苦しむ。

あたい達は、あたい達しか居ないと信じてるから。

記憶も何も壊れれば、それはただの別人。

それがあいつの考え方。

「……私が……原因だったの……？」

そんな風に呟く45。

でも、あたいは直ぐにそんな訳ないと否定する。

あの映像を見ていればわかる。

45が原因などではない。

アイツは、45を責めることさえしなかった。自分自身にも、そう言っていたじゃないか。

「……下手に考え込まないほうが良いかと。彼は、貴女を責める気は無いとあの心層内でも語っていましたから」

ありがたいフォローだ。

代理人がとても心に来てしまった45に優しく言葉をかけてくれた。本当は、あたいの役目の筈だけど……

今は、どう声をかけてあげればいいのか分からない。

「……今日の所は、これ以上の結論を出せそうにないと思う。原因の解明はできたけど、これ以上どうしようも出来ないことであることも確かだと分かってしまったね」

ペルシカさんからすると、実験的には良かったと言えるが本人の心情的には良かったとは言えないだろう。

映し出されたそれは、余りに残酷すぎるものだったから。

できるのは、現状維持を持ってこれ以上悪化しないようにすることだけ。とても、何も出来ないことに腹が立つ。

別の世界線から来たんだから、元からあたい達では何も出来ないということは知っていたはずなのに。

今のあたいにできることは……残念ながらない。

けれど、少しでも支えになれるのなら……

「……45、9。先に戻っててくれる？あたいは……少しだけあいつの様子を見てるから」

その言葉に何も語らず、少しだけ頷いて2人はその場を後にした。眠りの浅くなりつつあるこの男の手を優しく取る。

あんたは、色々背負いすぎー

「ごめんね、いつも、別の何処かでも、こんなに良くしてくれてたのに……気づいてあげられなかった」

あたいらしくない。

けれど、どうしても謝りたくなつた。

あたいが、あいつの傷の一因になつてたんだから。

「でも安心して。今度こそ、絶対に死なないから。あんたはあたいが守るし、あたいはあんたが守ってくれるでしょ？逃げられない運命なんて、今度はないんだから」

見ている指揮官は真剣な目で頷く。

あたいが今までで見た事がないくらいまで。

代理人やペルシカさんも。

暗いながらも、確かに真剣で。

「我々鉄血も最大限に助力しましょう。この状況と彼の仕事ぶりに免じて、ですが」

嫌々に聞こえるが、そんなことは無い。

きつと、立場上そう言わざるを得ないだけで。

必ず繰り返させないという意志を感じて。

同じ仲間を死なせない為に、人間と人形の絆の為に。

「大丈夫。彼の修復技術は誇れる。彼さえマトモであれば、そうそう壊れることは無いよ。……死にかけでも、お構い無しに直そうとすると聞いているからね、あれは」

全くもって、その通りだ。

あの姿を見て、そう思わないものはいないだろう。

だから、この基地は生存率がトップクラスで高い。

周りの基地にも知れ渡っているらしい。

あの基地には、人形専門の名医がいると。

全く笑ってしまう。

自分が一番不安定なくせに。

あたいたちも、もつと頼って欲しい。

信頼して欲しいのに。

そんなことを言っても、すぐに変わる訳でもない。

だから、ゆつくり変えていこう。
ゆつくり落ち着けていこう。

「……あたい、リオンを部屋に運ぶね。そのまま部屋に戻っちゃうから」
「分かったよ。とりあえず、ゆつくり休むことを優先にね」

あの光景とは逆。

あいつを抱えて、あたいは部屋に戻る。

……とても、眠気が……

ようやく部屋に着いた頃には、意識が持たない。

……バッテリーではないのに。

とても、眠くー

心傷潜航EX：夢想 — unknown data —

銃声が鳴り響いた後。

『45、40！無事か！無事だろうな！』

2人だけの場所に、大声で入ってくる人影。
もちろん、誰かわかっている。

見るや否や、亡骸に駆け寄る男の姿。

……来ないで欲しかった。

こんな無惨な姿は、見られたくない。

裏切ってしまった姿を、見て欲しくなかった。

あたいは、あんたにとっても迷惑をかけてしまったから。

だから、あたいや45を心配してきてしまうと知っていたはずなのに。あたいはそのことを失念してた。

ずっと前から変なやつだと思ってた。

放っておいて欲しいと言っておきながら……

何れ使い捨てられると知っていながら、あんたの優しさに甘えてた。本当なら、そこで突っぱねておくべきだった。

あんたのーリーオンのためにも。

情を持てば、最後の別れがとも辛くなる。

あたいも、あいつも。

だから、関わるべきじゃなかったはずなのに。

優しい人間だと気づいた時から、離れておくべきだった。

周りのヤツなんて、あたい達を道具としか思っていない。

だから、なんとも思わなかった。

イライラするだけで、ただそれだけ。

自分の存在意義に疑問を持つことはある。

だけど、あんな奴らと離れられるのなら……

そんな風に思ったこともあった。

でも、あいっだけは違った。

馬鹿みたいに夢見がちだけど、理にかなったことは言えるし、しっかりとした理由もつけてあたい達を庇ってくれた。

理由を聞けばいつも、前向きな言葉ばかり。

あたい達を、人間と勘違いしてた。

でも、あたい達はそれが嬉しかった。

おびただしく流れる人工の血液。

1度撃ち抜かれた傷は、本当なら直せる。

あたい達は、道具だから。

あたい達は、機械だから。

『……嘘だろ、40……待ってる、今治してやる……!なあ、おい頼む、返事をしてくれよ……!』

本当ならそのはずだった。

でも、あたいに換えはない。

残されるのは、あたいが失敗した時の保険だけ。

あたいの大切な、たった1人の妹だけ。

あの子はあたいの保険だって分かったた。

あたいが任務を達成できなければ……

あいつらは代わりに彼女を使う。

そうだったら、あたいの計画がばれてしまう。

だから、2人を騙してまであたいは任務を達成した。

彼女の運命まで、あいつらに弄ばせるわけにはいかない。

もう物も言えないあたいを抱えて、必死に叫ぶ。

そんなことをしたって無駄なのに。

あたいはもう治らないって分からないやつじゃない。

それなのに、ずっと治療しようと必死になってる。

諦めが悪いんだ。

それこそ、あたいが知っているはずじゃないか。

どんな状態になるうが、あたい達に諦めないように語っていたのはあいつだ。そんな

やつが、簡単にやめるはずがない。

『うああああああああ……ッ!!』

響く悲鳴。

あいつのこんな声、あたいは初めて聞いた。

いつも何もなさげに笑って、腹が立つくらい平然として。
どんな苦痛だろうが、何も言わなかったあいつが。

初めて、あたい達の前で泣いた。

情けない声を上げてまで。

そこまで、あまりに残酷なことだったんだろう。

あいつにとって、あたい達はそれほど大切にされてたんだ。

『何でだ、何でだよ45！教えてくれ、何で撃つちまったんだ……！あいつを撃つなんてそれほどの理由があるんだろ？なあ、願むよ……教えてくれ……何で、あいつが死ななきゃならなかったんだよ……』

思い切り45を揺さぶるリオン。

そんなに襲い掛かるような気迫を出さないであげてと言いたかったけど、この口はもう動かない。

あいつの言葉と気持ちは分からなくもない。

いいや、あたいが死ななければならなかった理由はあたい自身が聞きたい。

でも、それだけの理由はあった。

あたいが、その理由だから。

あたいが死ねば、45は自由になる。

あたいが死ねば、45の指揮権限を移すことは出来ないから。

あたいの死とともに、自由を渡せた。

自分を自由にすることはできなかつたけど……

少なくとも、妹のことは自由にしてやれた。

その代わり、大切な妹に深い心の傷を負わせてしまった。

あたいの独善だつてわかつてる。

けど、何も出来ないまま死ぬよりはマシ。

残酷なことをしてしまつたと未だに思う。

だけど、後悔はしてない。

……本当に、予想外だつた。

あたいのような人形にさえ、あそこまで取り乱すなんて。

嬉しい反面、とても辛かつた。

そんな人を裏切つて、あたいは妹まで傷つけた。

後悔してないって自分に言い聞かせても、未だに。

『裏切り者は、私達。……私達のどちらかが死ななければ、両方とも死ぬだけ。良いよう

に使われて、そのまま棄てられる……だから、40は私に選択を迫ったの……40を、殺すことを』

そう。

あたいが死ななければ、45も利用されて棄てられるだけ。だから、あたいのやった事は間違いないんじゃない。

45のやった事も、間違いなどではない。

けれど、今でも苦しさは残っている。

大切な妹に、あたいを撃たせてしまった事を。

とても、残酷な事をした。

けれど、そうでもしなければ救えなかった。

あたいは、あたいなりの方法で助けたかったから。

あたいの導き出した答えは、そういうこと。

大切な妹を利用されるくらいなら、死んだ方がいい。

それが姉の気持ち。

『私も、言われてようやく知ったの……私が、代わりになるはずだった人形だって……自由になれて、40が……！』

そうよ。

45を自由にする為に、あたいは死んだ。

それがあたいの願いだったから。

あたいの代わりに大切な妹を使わせて、結局どちらも捨てるなんて胸糞悪すぎる。だから、あたいからのささやかな反抗。

45の純粋さは、いつか自分を死に至らしめてしまう。

それを恐れたあたいは、嘘をついてしまった。

45を決心させるため……

あたいたちのどちらか一人が助かるなんて嘘。

最初からいなくなるのはあたいだって決まっていた。
そう、あたいだけ。

それが、この真相。

UMP40という戦術人形が死んだことの真実。

あいつには教えなかった。

教えてしまえば、全て水の泡。

教えれば、もしかしたら助かったかもしれないけど……

教える前に、あたいは死んだから。

あたいには、分の悪い賭けをする勇氣はなかった。

だから、黙ったまま。

より確実に45を自由にできる手を取った。

きつと、もしもまたあたいが目の前に現れたら、あいつは怒るんだろうな。

なんで教えてくれなかったって。

なんで助けを求めなかったんだって。

あいつはそういう奴だって学んだから。

でも、少し学ぶのが遅かった。

誰も頼れないという意識が根付いて、最後まで言えなかった。

あいつは、頼らなきやすぐに怒るから。

人の苦悩も考えないで……

『……俺は……気づいてやれなかった……』

『……え……？』

小声であいつは呟いた。

勿論、訳の分からない45は当然の反応をする。

あいつは後悔するように、懺悔するように呟いた。

『あたいを忘れないで、って、アイツは……最後の日に俺に言ったんだ……何の事だか全く分からなかった、どういう意味かさえも分からなかった』

あたいが、つい口にしてしまった言葉。

弱音を吐いちやいけないと知っていながら、最後の最後にようやく口にする勇気が出たからと言って……

あたいは、中途半端な言葉を出したんだ。

助けて欲しいという懇願じゃなくて。

放つて置いて欲しいという嘘の拒絶でもない。

忘れないで欲しいという、ほんの少しの願望だけしか口に出来なかった。

あたいはもう、諦めていた。

死の運命を避けることなどできないって。

でも、最後の最後であたいは日和った。

死にたくない。

2人と一緒にまだ生きたいって。

でも、助かることは無い。

でも、助かりたい。

だから、中途半端になったのかもしれない。

その一言が、あいつの心に穴を開けるなんて思わなかった。

『俺は、ずっとお前の苦痛を、お前の悲鳴を聞いていたはずだろ……！それなのに俺は何もしてやれなかった！お前にも、何一つさえもだ！』

違う。

あんたは、あたいにも45にも、色々してくれた。

面倒だつて見てくれた。

庇つてもくれた。

暇だと騒いだら一緒に遊んでくれた。

悩んでいる時は一緒に悩んでくれた。

あたい達は、人間じゃないのに。

あんたはまるであたい達と友達のように接してくれた。

それにはどれだけの苦労があるかも、あたい達は知らないのに。ずっとあんたは笑つ

てばかりだった。

怒られることはあつたけど、苦しい顔をしたことは無かつた。全部、あたい達のため

について笑つてた。

そのどどこが”何も出来なかつた”なのよ。

返しきれないほどの恩を、あたい達にくれてるじゃない。

本当は気づかれていたのかもしれない。

辛くて、その一言一言に淡い希望を込めていたことが。でも、気づけなくても当たり

前。

あたいは何も言わなかったから。

何もなしで気付けなんて言う方が無茶だ。

たくさんものを貰っておいて、そこまで文句を言うほどあたいは腐ってない。

『俺は、お前を、アイツを……助けてやれなかった！俺が1番、お前達を守ってやれるはずだったのに……！』

違う。

あんたは何も悪くない。

悪いのは、あたい。

助けてって言えなかったあたい。

最後まで、信じてあげられなかったあたい。

もしかしたら。

奇跡を起こせるのかもしれない。

何人もの人形を、戦場で生きて返して……

様々な人形を助けてきたあんななら。

奇跡を起こせるのかもしれないと信じきれなかったから。

あんたは元々鉄血だったし、それに……

秘密をそんなに軽々口にする様なやつでもないと知ってた。

なのに、あたいは信じきれなかった。

最後まで、心の何処かに諦観があった。

だから……あたいは、最後まで助けを乞えなかった。

あたいは、あんに謝りたかった。

最後に一言さえ言えなかったから。

最後まで、全てを黙ったままで。

あんなへの裏切りだけは、ずっと謝りたかった。

あんなに良くしてくれて、あんなに友人だと言ってきて。

初めて、唯一の人間の友人。

だから、それだけはあたいの良心が痛んできた。
でも、結局最後まで謝れなかった。

ごめんね。

でも、あたいは……

『……40は、私に言ったの』

あたいは戦術人形。

たとえ死ぬことが決まっていようと、
戦術人形らしく、

最期は戦って死にたい。

あたいが、最後に45に言った言葉。

何も出来ないまま死ぬのだけは嫌だ。

使い潰されて捨てられるなんて……あんたも嫌だろうから。

『……馬鹿が……お前はいつも俺と同じで馬鹿やる奴だと思つてたよ！だからつてよ……そんな死ぬ事に格好付けるんじゃないよ……！』

あたい達は、そこら辺近い存在だったのかもしれない。

あいつは、今命の危険を冒してまで助けに来てくれた。

あたいは、命を賭して45を自由にした。

お互い、自らが願うものの為なら危険も厭わない。

でも、違いはある。

あいつは覚悟をした上で、最も良い可能性に賭ける。

あたいは覚悟をした上で、確実な手を取る。

そう、その違いだけがあたいの命を分けたのかもしれない。

あたいの描いた結末は二つに一つ。

けれどどちらにせよ、あたいの結末はあなたにとって辛いもの。そのまま捨てられても、殺されても。

もうそれは、決定したことだったから。

最後にあたいが、せめてもの救いがあるようにと足掻いた結果。自業自得だといえはその通り。

なんとも言って欲しい。

助けられる可能性に、賭けなかったから。

……だから、ああ言って怒ってくれることが、とても嬉しかった。

あたいは、あなたを信じてよかったんだって思えるから。

もちろん、後悔も掘り出される。

だけどそれ以上に……

あなたにとって、あたいは大切にされてたって思えるから。

あたいは、こんなにも幸せものだったんだって。

人形だって、自分のために生きることが許されてもいいって思えた。他人じゃなく、自分のために……ね。

肩身の狭い思いをしようと、周りから唾を吐きかけられようと、生きてさえいれば無意味じゃない。

それは、あんた達が教えてくれた事。

1人の妹と、1人の親友が教えてくれた大切な事。

2人が生きてくれてこそ、あたいが存在したことに意味が生まれるんだ。

あたいはあんた達に嘘ばっか言った。

自分の本心を、嘘で塗り固めて。

最後まで知られないようにしながら、隠しきれなかった。

本当に、ごめん。

来ないで欲しかったなんて言うのも嘘。

本当は、来て欲しかった。

最後まで、あたいを信じていて欲しかった。

だから……とても安心した。

ここまで嘘を吐いておいて、信用して貰えないだろうけど……

あの時の言葉は嘘じゃないから。

最後のあの言葉だけは、本当。

信じて貰えなくても仕方ない。

もうこの言葉が届くこともないけど……

さよなら、45、リオン。

2人があたいを覚えていてくれたら……

それだけで、あたいは幸せだよ……

——あたいは、いつでもすぐそばに居るから。

心傷潜航V：奇跡

| m e m o r y r e c o v e r y

| — あたいを、忘れないでね。

| — — あたいはいつでも、すぐそばに居るから。

「……………あ……………」

あの強制的な眠りの後。

数日間の強制的な休暇を取らされた。

クラウドは特に忙しくないと言っておきながら、今まで以上の量の書類をこなしていた。

手持ち無沙汰だと代理人の所などに行っても仕事は無いと言う。その割には、とても基地内が忙しなく見えてた。

普段は表立った仕事をしない404小隊の皆も、何故か最近基地の中を右往左往。

そう、なんだかとても落ち着かなかった。

いつもと違う、少し暗めな雰囲気。

……理由は分かっている。

彼らは、俺の記憶を覗き見た。

あれほど拒否した筈なのに、指揮官権限で強制的な開示をさせられたようだ。

名目上はペルシカの技術応用試験。

本命は、俺の“蝶事件”に関する記憶。

あれ程見るな、と言ったが結局知られてしまった。

皆、後悔していかない方がいいが。

俺の記憶はいつも悪夢として出てくるほど酷いものだ。

そんな物を見せないようにはしていたが、結果として見せざるを得ないような状況に
してしまったのは俺だ。

正直、謝りづらい。

申し訳ないという気持ちはあるが……

しかし、良いこともあった。

不思議な声と、陽の光に照らされて目が覚める。

いつもの悪夢じゃない。

同じ夢の筈なのに、目覚めは悪くない。
同じ悪夢が、変わったような気がした。

いつも、あいつの遺言が最後に来る。

忘れないでという望みが。

覚えていて欲しいという願いが。

でも、今日は違う。

夢の中のあいつは、意味ありげな言葉を呟いた。

その言葉の意味は分からない。

……でも、その言葉のおかげなのだろうか。

とても、悪夢を見たという感覚が薄い気がした。

いや、苦しんでいたのは間違いないはずだ。

涙の跡が、それを物語っている。

「……起きた？」

「なんでまたしれつと居るんだよ……」

すぐそこに、友人の姿がある。

最近、こいつはよく俺の部屋に来る。

心配しているのか、暇なのかは分からない。

あいつの顔は覗き込むように、俺の顔の真上にかかる。

その髪が、まるでカーテンみたいに見えてしまう。

新手的イタズラみたいで、なんだか笑ってしまった。

「なんだか今日は寝起きが良さそうね？」

「……不思議とな。変なモーニングコールのお陰で、誤魔化しが聞いてるよ」

俺でも、こんな軽口が叩けるまでに戻ったのかと驚いた。

最近はこのことを言おうという思考さえ無くなっていたのに。……それ程、俺も回復傾向にあるということか。

でも、あいつはそれが気に入らなかったらしい。

む、と顔をふくらませてそっぽを向いてしまった。

「せっかく人が心配してるのに」

「悪い悪い……なかなかモーニングコールなんて受けたことないもんだからな」

ずっと、起こされるよりも前に悪夢で起きてしまっていた。

誰かに起こされるなんて何時ぶりだろうか。

ついつい、むず痒くて笑ってしまう。

昔でも無かったような光景に、幸せも覚えて。

なんだか、本当に古い友人のような感覚だ。

間違いではないような気もするが、でも不思議な。

それこそ、以前のあいつと話していた時と同じような気がした。

「あつ、そうだ！忘れるところだった！」

そう言うとき40はごそごそと何かを近くにある袋から取り出した。大して大きくもない、手頃な箱。

しかし、丁寧に包装されたプレゼント。

大きなものでないことはわかる。

何を渡そうとしているのかは全く分からない。

「これ、リオンに渡そうと思って」

ありがとう、と受け取る。

なんだか、丁寧にラッピングされていると剥がしづらい。

持ってみれば大きさほどの重量はない。

けれど、開けてと急かす40に押されて、渋々その箱を開ける。

その蓋を取ってみれば……

「…………お前、これを何処で……………」

その贈り物の中に入っていたのは懐かしいもの。

蝶事件の当時、俺が付けていたヘアバンド。

タイプもデザインも、何もかも同じだ。

あの時から、何も変わっていない。

だが、ここにも同じものがあつたとは思わなかつた。

だつてあれは、だいぶ前に買ったものだ。

俺が鉄血工造に入る前のものだったはず。

とても懐かしい。

しばらく見たくないと思つてはいたが……

見ることになるのが、まさか死んだ友人と全く同じ様な相手からだとは思わなかつた。

まるで、偶然とは思えない。

「これ、なかなか見つからないから探すの大変だったのよ……でも、喜んでくれてるみたいで何よりね！」

わざわざ遠くまで探しに行っていたらしい。

そもそも、記憶で俺の姿を見たとはいえここまで全く同じものを直ぐに特定できるものなのだろうか……

40の行動力には脱帽した。

お礼を言おうと、口を開こうとした時だ。

「……あたい、不思議なことがあったんだ」

ポツリ、ポツリと口を開き始める。

いつもの元気で活発な声とは全く違う。

とても穏やかで、とても静かに語る。

「戦術人形であるはずのあたいが……夢を見たんだ。誰かに撃たれて、誰かに泣き付かれて……あたいと瓜二つの人と、一緒にその光景を他人事のように見てた」

本来、戦術人形は夢を見ない。

人間に近い思考であり、それがほぼほぼ差異の無いものだったとしても……結局は、0と1の組み合わせ。

信号が全て0になれば、無意識というのもシャットダウンされる。けれど、あいつはその無意識に入れた。

おかしい話だ。

その夢の内容もよく分からない。

瓜二つの人物と、凄惨な光景を他人事のように見ていた。

彼女が言うには、手を出そうとしても出せなかったらしい。

まるで、スクリーンに映し出されたものを見ているようだったとも語っている。

……とても、混乱しそうな話だ。

40は続けて話す。

「……これは、その人が返しそびれたものなんだって。何となく、その持ち主の察しがつ

いた。だから今のうちに返そうと思ったの」

「変わってんな。夢の中の借りまで返そうだなんて」

でも、悪い気はしなかった。

とても不思議な気分だ。

今目の前にいるのは別の人形の筈なのに、いなくなった友人から貸していたものを返されたような気分だ。

ほとんど本人と言っても差し支えないが、過去に共に過ごしたUMP40は、既にあの時死んだ。

死んだものが、再び蘇るなどありえないのだから。

付けて付けて、とまた40が急かしてくる。

渋々、そのヘアバンドを自分の頭につける。

……偶然だろうか。

髪の高さに気を使ったことは無いが、不思議とあの時と同じような髪型になってい

る。

それよりも、少し伸びているかもしれないが。

「なんだか、見てると懐かしい気分ね……その姿、1度も見た事がないはずなのに……なんだか不思議。すごい似合ってる。本当に、1度現実で見たような感覚がする……」

なんだか、とても擦ったい。

懐かしい、その言葉に揺さぶられた。

ここの40は、そんな姿を1度も見た事がない。

そう、記憶の中で無ければ。

なのに、なぜ……

違う。

きつと、自分でも予想はついているはずだ。

でも、有り得ない。

有り得るわけがない。

あたいを、忘れないでね。

あたいはいつでも、すぐそこにいるから。

欠片の言葉が繋がって、漸く分かった。

その言葉を意味を分かった。

あいつはいつだって、すぐそこで見てくれてた。

死んだって、ずっと傍にいた。

しかも、不思議なことに……

本当に、すぐ近くに姿を現してまで。

知っている。

知っている筈だ。

死んだ者は、二度と帰って来ないなど。

自分で何度も、何度も。

忘れないように語りかけていたはずだ。

「……分かつてる。お前が俺の知っているUMP40じゃないってことぐらい……」

でも、それでも。

奇跡があるのなら。

信じさせて欲しい。

「お久しぶり……なーんてね。あたいは、過去にいなかった人じゃないから」

「……この野郎……冗談みたいに人の心を弄びやがって……！存分にいじり回してからその頭ん中見てやる！」

「わ。ぷっ……ちよ、ちよつと！乱暴だよ！待って、頭くしゃくしゃになっちゃう！」

言葉とは裏腹に笑って、いつもの様に構ってやる。

あの時のように、今ののように。

文句が飛んできているが、そんなこと関係ない。

引き寄せて頭をがしがしとする。

それは家族と言うより、悪友と呼べるような接し方で。

こうでもしないと、本気で泣いてしまう。

俺は案外、涙脆いのかもしれない。

強がつてばかりで、本当はきつと弱い。

1番頼っていたのは、間違いなく俺だろう。

だから……本当に、戻ってきてくれたことが、これほどないまでの救いだ。

「本当にお前って奴は……！もしもあの時の記憶がまるまる入ってやがったら説教してやるからな……！本当に……！」

最後まで言葉が出ない。

せめて、戻ってきたならしつかりとしたところを見せようと思ったのに。

どうしてかそんな文句も途切れた。

何も言えない。

何も出てこない。

やっぱり、耐えられない。

こんなの、無理だ。

気づけば、あいつに縋った。

容量を超えたカップから水が溢れるように……

1度緩んだ涙腺からは涙が止まらなかつた。

「……俺も一回死んで、知らない場所に来て。そんな所にまで、死んだはずの友人が追ってくるなんて。普通じゃありえないだろ……？……でも、何故か……何でか、帰ってきてたような感覚がするんだよ……」

メンタルもメモリも、全部跡形なく消えた筈なのに。

何故か、目の前にいるやつは全てを覚えてる。

寸分変わらず、姿も同じで。

そんな零した言葉に、あいつは返した。

「あたいは変わりになれないと思うけどさ……でも、夢の中で教えて貰ったの。もしかしたら、このあたいても同じ結末を巡ったのかもしれない。……だから、生き残れなかった”あたひ”の代わりに、伝えて欲しいって」

おかしい。

信じられなくて当然だ。

でも……目の前にあるのは、事実だけ。

「”あたひ”を忘れないでくれてありがとう、リオン。これからも、”あたひ”はあなたの側に居る。あなたの友達であり続けるよ……わざわざ、あたひなんかのために泣いてくれたあなたに、もっと報いたいから……帰って来ればしなかつたけどね、それでもあなたは、きつと信じてくれてたんでしょ……？なら、あたひはそれで十分だよ……」

その言葉が、押しとどめていた理性にトドメを刺した。

「馬鹿！馬鹿野郎！ほんツとうに馬鹿がよオ！何が忘れないでくれてありがとうだよ！忘れられる訳あるかよ！いつつもいつも楽しかった時間を寄越しやがったのは何処のどいつだ！忘れられない程平和だった時間を作ったのは何処の誰だ……！答えてみろよ……忘れるわけ、無いだろ……いくら死んだってわかつてても……帰ってきて欲しいってどこかで思ってるに決まってるだろうが……」

溢れ出す言葉は止まらない。

責めるようにも聞こえる強い語気。

当たり前だ。

忘れさせないようにしたのは何処の誰だ。

覚えていて欲しいと言ったのは誰だ。

全部お前だ。

お前が、忘れないでと言ったんだろうが。

だからしつかり覚えてた。

いつかきつとあの時のまま帰ってきてくれると馬鹿みたいに幼い心で信じ続けていた。

いつかお前を治すために、ずっと探し続けた。

この役目をずっと続けた。

いつか帰って来れるように。

いつか帰ってきた時、忘れてないぞと言うために。

……諦めておくべきはずだったのに。

どうしてお前は、それを後悔させてくれないんだ。

死んで尚、どうして俺に希望を持たせてしまうんだ。

「……本当に、お前に振り回されてばかりだよ……」

そんな震えた声が、ただ響いた。

静かに、その顔を見られないようにしながら。

こんな場所じゃ、雨が降ってるだけなんて言い訳は通らない。

室内に雨なんて降らないんだから。

いい誤魔化し方が分からない。

目薬をしれつと差した？

そんな隙はなかった。

欠伸をした？

こんな話をしていてそんな余裕はない。

唾が飛んだ？

無理がありすぎる。

どうやったって、顔を見られればわかってしまう。

だから、せめて伏せさせて欲しい。

コイツの前では、せめてしつかりとしていたい。

あの時は、助けられなかったから。

今はもう、強くなったと伝えたいから。

……でも、やっぱりダメそうだ。

その後、UMP40の臨時メンテナンスが入った。

UMP40のプロトコルに、鉄血製人形にしか搭載されていないオーガスプロトコルの存在が確認された。

ペルシカに連絡したり、技術班に聞いたりしてみたが、この世界の40には元々搭載されていないかつたと言う。

……これもまた、不思議な話だ。

しかし、この世界線では悪用されることがない。
安心はしている。

これが何を意味しているのか、俺には分からない。

……でも、ほんの少しだけ感覚で理解出来た気がする。

そして……

記憶媒体の中に、確かに見覚えのないデータ。

その内容は、俺たちしか知らない。

俺達しか証明出来ない、大切なもの。

あの奥底の記憶に残るデータ。

死の真相、傷の元凶。

けれど、俺の中に確かに残る、幸せな記憶。

忘れてしまいたかったけれど、忘れては行けない。

そんな記憶が仕舞い込まれたファイル。

削除もロックもせず、そのまま。

何よりも、UMP40がそれを望んだから。

何時か、何処かで辿った同じ自分の記憶。

それを忘れないために。

次こそ、同じ結末を迎えないために。

UMP40と、リオン・アッシュフィールドの話。
今度は平和に終わらせると心に誓って。

「ねえねえ、全てを思い出した新生UMP40のお祝いってことでなんかちようだい！」

「なんかってなんだよ、またこれでもくれてやろうか？」

「それは昔にひっpegがしてとったでしょ！それに返したものを突き返すの？」
「冗談だよ」

「ありがとな、40」